魔法少女リリカルなのは　～欠陥者の示す道～

逆流王子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　～欠陥者の示す道～

【Ｎコード】
Ｎ７０６６Ｍ

【作者名】
逆流王子

【あらすじ】
心にも、体にも欠陥を持った主人公が紡ぐ新しき『なのは』の物語
彼は少女達にどのような生き様を見せるのか？
そして少女達はそれに触れ、何を思うのか？
魔法の使えない彼は、『魔導師』ではなく『戦士』として生きる

第四部　学生編

欠陥者は未だ走り続けていた。
目的なんて無い。ただ、懸命に生きる。それだけだ。

周りに潜む闇を感じながら、欠陥者は転生者に、出会う。

そこから、新しい歯車が、廻り始める……

一話　始まりは突然、それは終わりが突然と言う意味（前書き）

この小説はフロム脳の作者が書く、妄想、自己満、自己設定満載の小説です。
更に、クロスオーバーはしていませんが、ＡＣなどから名前などを持ってきたりなど、結構好き勝手にしています。
それでもよいという人だけよろしくお願いします。
所々、至らない点があると思いますが、一人でも多くの方が楽しんでくれればな、と思っています。
それでは『欠陥者の示す道』　始まります。

一話　始まりは突然、それは終わりが突然と言う意味

並行世界

それは、どこか似ていて、まったく異なる世界

イフ

それは、どの世界にもありえたかもしれないお話

これはもしかしたらありえたかも知れないお話。

……一人の欠陥者が、存在したお話。

場所は、ミッドチルダという魔法の名を借りた科学が発達した世界で物語は始まる。
更に細かく場所を特定するならば、ミッドチルダ時空管理局。

カタカタと細やかなタイピングの音が響く個室。
ここはある人物の執務室。

「ん～。」

ある人物とは、とてつもない仏頂面でモニタを睨みつける男。
誰が見ても青年とわかる見た目、しかし幾度もの修羅場を潜り抜けて来たかのような落ち着きをその身に纏う。
それは熟練者がみれば感嘆し、素人が見れば畏怖しかねないオーラを作り出していた。
その男が目を瞑り、幾度か黙考した後、閃いたかのようにまたタイピングを始める。

「よし……今度は上手くいったな。」

今度は満足げな表情に変わり、タイピングを続けている。
ここは執務室。
どんな表情であれ、画面に向かい思考しながらのタイピングは、見てくれは紛うことなき『執務』であるが。

突然、首に提げられ、胸ポケットにしまい込まれたネックレスが震える。

『いい加減止めたらどうだ。』

そのペンダントから発せられた声は、コンソールを叩く青年とそう変わらない年齢であろう男性の声。

ペンダントからの発問に、男は特別驚くようなそぶりも見せず、少し鬱陶しさを含むように顔を苦くしただけだった。

「今日の仕事はもう終わった。」
『だからと言ってオンラインゲームをして良い時間ではないぞ。』
「むぅ、五月蝿いな。お前は。……まぁ、良いか。丁度飽き始めと思っていたところだし。」

男はモニタを閉じ、一度イスに身を深く預ける。
他の音源がない空間に、ギシ、というイスが軋む音だけが響いた。

「あ～、暇だ。」
『ゲーム以外にする事が無いのか？』
「……無いな。」
『無いのか』
「……ある？」
『なんで疑問だ。』

仕事も無く、唯一の娯楽も失われた。
そうすれば自然と意味の無い会話しか口から漏れない。

暇だ……と男が呟いた直後、閉じたはずのモニタが再び開いた。
そのモニタには、先程のオンラインゲームの画面ではなく、一人の管理局指定制服の女性が立っていた。

「エルンスト執務官。」

「ん？どうしましたか？」

エルンストと呼ばれた男は、イスに身を沈めただらしない姿のまま返事をして、目の前に現れた女性を見上げる。

「こんにちは。リンディです。」

「ああ、どうも提督。今回はどういった用件で？」

「ええ、三提督からの特務報告が来ました。海鳴市に行き、ロストロギアの回収を頼みたいと。」

エルンストはそれを聞いた途端、顔を呆れたように歪ませる。

「……。あの方達は私を便利屋か何かと勘違いしているようですね。執務官としての仕事の傍ら、我等の特命をうけろとは……。」

「それほどに、貴方があのお方達に信頼されて言うことですよ。」

リンディは憮然とした態度のエルンストに苦笑を返す。

エルンストがブツブツと忙しい忙しいと何度も呟いているが、その全てに彼のネックレスが嘘つけ嘘つけとツッコミを入れている。

「……はぁ……まぁ、今の俺があるのも彼らのおかげですからね。依頼内容は後で纏めた物を、私のデバイスにメールとして送ってください。」

青年は諦めたように言い放つと、すぐに席を立つ。

「ええ、わかりました。早速出るのですか？」

「凄く暇なん……じゃ無くて、忙しいんですけど面倒なものから先に片付けようかと思いましてね。」

「ふふ……。相変わらずですね。」

勿論リンディは彼が忙しくない事など知っているし、さっきの彼とそのネックレスとの会話を聞いていた。
更に、『自分が暇で無かった事を知られている』と知っていて嘘をつくエルンストを知っている。

ややこしい話だが、その全てをひっくるめて彼女は彼の事を相変わらず、と言ったのだ。

「俺はまだ子供ですからね。レオハルト、頼む。」

エルンストは上着掛けにかけてあった制服を着込み、目の前のモニターの中から消えた。
きっと部屋から出て行ったのだろう。

「１９はもう十分に大人だとは思いますけどねぇ……。法律的にも大人ですし。」

リンディは笑顔で事実を呟くが、誰もそれを聞く者は居なかった……。

エルンストはただ真っ直ぐに前を見つめたまま、廊下を歩く。
度々局員とすれ違うが、男女関係無しに、敬礼を返し、ささやかに道を譲っていく。
別に彼がそれほどに高官な訳ではなく、純粋に彼に憧れている者や、彼の雰囲気に呑まれた局員が大げさに振舞っているだけだ。
だから自分も「よぉ。」などと気軽な返事を返すだけで、一々敬礼を返したりなどしない。

これから向かう目的地まではもう少し歩かなければならず、後何回かは、この繰り返しが続きそうな気配である。

『面倒なものだな、わざわざ転移させてくれる施設を借りると言うのも。』
「なんだ、嫌味のつもりか？」
『いや、自らの不足に対する歯がゆさ、だよ。』
「それなら大丈夫だ。」

口の端をゆがめるようにして小さく笑う。

「もうじきそのバックアップも組み上がる。そうしたらお前にインストール。バージョンアップですぐさま使えるようになるさ。」
『もう、何度目かな、そのバージョンアップと言うのも。』
「さて、二桁いったような気もするし、後少しで二桁突入だったかな？」

肩をすくめ、歩き続ける。
その様子は本当に興味のない事柄のようだった。

「そういえば、リンディさんからのメールでも何でも連絡は届いてるのか？」
『ああ』
「だったら早く言え。」

エルンストはまるでひったくるように、胸ポケットからネックレスを取り出してそれを振り回す。

『やばい、目が回る。タスケテ』
「だったら早くそのメール画面を出しなさい。」
『了……解。オウェ！！』
「なんも出ねぇだろ。馬鹿。」

やっとこさ出て来たメール内容を確認し、吐きたくなったような表情で睨みつける。

「ロストロギア『ジュエルシード』の回収……か。なんじゃこりゃ。めちゃくちゃ時間掛かるじゃねぇか。……御丁寧に宿泊先まで用意してやがる。」

エルンストはメールを見ながら嘆息する。

「しばらくゲームはお預けか…。」

これからの仕事に、若干の不満を募らせつつ、エルンストは目的地へと歩を進め始める。

「ほら、そろそろ着くぞ。お前に組み込む事になるんだ。自分なりに情報を集めとけよ。」
『……了解』
ペンダントの返事が発せられるときには、エルンストはすれ違った局員の大げさな挨拶に対応していた。

いざ目的地の海鳴市についてみても、特別感慨が浮かんだりはしなかった。
ざっと町並みを見渡し、技術の発達や人々の様子を観察し、世界全体の雰囲気を把握する。
任務で異世界に来た時は、必ずと言っていいほどの準備運動だ。

……細々した所に差異はあれど、そうミッドとかけ離れるほどの文明でもないのだな。
似通った点も数多くある。

そう言えば、地球にもミッドチルダに移住して、働いている者たちがいるのだったな。

そう自分なりに状況とこの世界を判断し、いざ仕事に移行する。
なに、数は多けれども、やり方次第でそう時間が掛かる物でもある無いだろう。
時間が掛からない『やり方』を実行可能な代物もあるわけだし。

「このあたりか……。レオハルト、反応は？」

自らのネックレスに話しかける。
端から見れば変人にしか見えないが、彼のネックレスは列記としたインテリジェントデバイスである。
それに、周りに誰かがいる所で話しかけるほど抜けてなどいない。

『西に５０ｍ。その付近に最も、魔力の残滓を感じる。』

「りょ～かい。本当に探知とかそこらへんは特化してるよな。」
『何を今更……。誰が作ったんだ。』
「無論、俺。」

そうして行き着いた所は、何の変哲もない砂場。
しかも公園だ。
「これだな。……ていうか結構無造作に落ちているものなのね。」

『封印、できるぞ。』
「手際がよくて助かる。頼む。」
『了解。』

さて、これで一つ目は完了。
次は……。

「ま、いいや。」
『エル？』
「今日はこれまでだ。土地勘を養うために、後の時間は散歩するぞ。」
『こちらに来てからまだ一時間と経っていないぞ。それにそのほとんどは街を遠巻きで見渡していただけだろう。』
「いいじゃないか。人間働きづめは体に毒だぞ？過ぎたるは及ばざるが如し。」
『過ぎるほど働いていないんだが……。』

レオハルトのツッコミに、チッチッと指先を振るう。

「まず戦場に立ったとき、現状を確かめた後、次に大切な事は自らの地盤を固める事。よって、この判断は間違ってなどいない。」
『……そうか。』
「とりあえず、地盤を固めるのに大切な事は、この世界の娯楽がそれほど発達しているかこの目で確かめるべきだと思うんだ。」
『つ、つまり…』
「金はあるんだ、ゲームを買いに行くぞ！！」
『やっぱり判断間違ってるよ。』

見るからに顔が緩むエルンスト。
そして、呆れた声を出すデバイス。

『はぁ、好きにしろ……。』

説得する事、仕事に従事させることを諦めたデバイス。
長い付き合いだからこそ、こうなっては止められないことを知っている。

ＡＩ名レオハルト
デバイス正式名称『ノブリス・オブリージュ』

エルンストの為だけに、エルンストの手によって作られた彼は、この後、自分がエルンストの買い物を制止できなかったことを大いに悔いる事となるのだった。

一話　始まりは突然、それは終わりが突然と言う意味（後書き）

２月１２日　修正

随時、二話から八話まで修正予定

まったくの不定期

二話　未来の星　邂逅（前書き）

書き溜めていた分までは、できるだけ毎日投稿できたらなぁ、とか思っていたり。

二話　未来の星　邂逅

『……エル』
「ん～？」
エルはゲームをしながら応える。
『仕事はいいのか？』
「あ～、九時にはここを出るつもりだったんだけどな～。もう十時だしな～。今日はあきらめるかぁ」
『いいわけ無いだろう！！』
突然部屋に響く、若々しい男性の声。
率直に言おう
エルは仕事をほっぽってゲームをしていた。
蛇足かもしれないが、エルというのはエルンストの愛称である。

「～～っ！！耳いてぇ！！やめろ！！」
『そう思うならお前が今すぐゲームを止めろ！！』

「待った！！近所迷惑！！ストップ、ストップ！！止めるから。」

エルは渋々電源を押して、ゲームを停止する。

「ああ、俺の三時間の結晶が……。」
『大丈夫だ、このゲームはオートセーブだ。「なにげ説明書読んでるのな」う、うるさい！！さぁ、早速仕事に移ろう。予定よりも一時間オーバーだ……っ！！』

ネックレスが急に赤く発光する。

「!?魔力反応……大きい!!」
『ここからならばすぐにいけるぞ。』

「よし。面倒だが、関係ない人たちを巻き込むわけにはいかないからな。……ノーブリス・オブリージュ、セットアップ。」

『ｙｅｓ．ｍｙ，ｓｉｒ』

全身に純白のバリアジャケットを着込み、窓から飛び降りた。

エルが現場に着くと、そこには小さい女の子が変体したジュエルシードと戦っていた。

「だれだ?民間人か?」
『そのようだ、管理局のどの魔導師データとも照合されない』
槍になったレオハルトから声が出る。

「あんな小さな女の子に戦わせるわけには……行かないでしょ!!」

エルは自らの足、ふくらはぎのみに身体強化の魔法を低効果で使用し、大きくジャンプした。

私はなんとかユーノ君の指示に従って、敵の攻撃を避けているけど、これ以上はよけられそうにないの……。

私の魔法じゃ全然効かないし……。どうすればいいの？

「なのは！？危ない！！」

「え？」

ほかの事を考えていると、敵の攻撃が目の前にまで迫っていた。

ああ、ここで死ぬんだな……そう、思っちゃった。

ガキン

響くのは、低い、弾く音。

「大丈夫だな。」

私は恐怖から目をつぶっていた。

けど、痛みは来る事は無くて、そのかわりに男の人の声がした。

「あ……。」

目を開けると、男の人がプロテクションを張って、庇ってくれている姿があった。

「大丈夫だな。」
（なんとか間に合ったな、いや、そうなるように計算したな？）
（当たり前だろう、俺がそうバンバンと魔法使えないって。）

少女の無事を確認し、俺は変体したジュエルシードに向き直る。

「ん？あれは動物と融合してるのか？」
『正確にはすこし違うが、捉え方は間違っていない。気をつけろ、さっきの動きを見る限り、速いぞ。』

俺はレオハルトを構え、不敵な笑みを漏らす。
胸にあるのは絶対の自信。

「安心しろよ。速さだけで負けねぇよ！！」

一気に懐に飛びつき、レオハルトを横なぎに払う。
でかい犬みたいな敵は、それを跳んで避ける。

「レイ！！」
『了解』

展開していたブレードを消し、今度はディスペンサーから収束したレーザーを放つ。
敵の着地地点を計測した射撃に、敵は着地と同時に命中した。

辺りに着弾による砂煙が舞う。

「ダガー！！」

『了解』

今度はブレードのような長く、太い刀身と違い、刀身を短く厚くする。

そうして空に一気に飛翔する。

敵は射撃と、土埃によってこちらを見失ったのだろう。

いったん距離をとり、あたりを見回している。

「敵を貫け！！」

『わが名に賭けて！！』

さらに、エルの回りに三つの空間の歪みが発生した。

これはエルが組み上げた、追随式誘導魔力弾である。

常に術者の回りを漂い、術者の任意のタイミングで射出される。

「レーザー！！」

こちらに気づいた敵に、誘導性のレーザーが歪みから放たれる。

しかし、それは全弾当たらなかった、いや当てなかった。

敵が跳ぼうとしていた予測地点に三つはそれぞれに着弾する。

避ける必要は無いが、動くことは出来ない。

つまり敵はそこに釘付けになった。

「ふっ！！！」

そこに、降下の勢いと体重を乗せた、エルのダガーが突き刺さった場所は急所。数分違わぬ脳天へと突き刺さっていた。

幾度かビクビクと痙攣してから、敵は消えていき、犬とジュエルシードが残された。

『非殺傷で無ければ、取り付かれた犬まで死ぬところだったぞ。いや、たとえ非殺傷でも加減によっては死んでいた。』

「わかってたさ、それくらい。お前が加減してくれたんだろ?そこは信頼するデバイスだからな。……封印」

『いつでもいける。』

手際よくジュエルシードを封印し、俺は少女に向き直る。

「はい、片付いたよ。悪いな、こんな事に巻き込んじまって。立てるか?」

「あ……立てます。」

「ところで君は管理局の魔導師じゃないね。この街の子かい?」

「あ……はい。高町なのはっていいます。しょ、小学三年です……。」

「魔導師だった?」

「いえ、今日から魔法少女、始めました……。」

なにその冷やし中華のノリ

「じゃぁ、なんでこんなことに?」

「そ、それはボクのせいです!!」

なのはという女の子の肩に乗っていたフェレットが急に喋りだす。

「うわっ！使い魔か？…びっくりした。」
『いや、スキャンの結果、元は人間だ。魔力で姿を作っている形跡がある。』
「高性能だなお前、ほんとに。」
『誰が作ったんだ。というかお前の性能が低すぎるんだ。』
「……そうだよ！そんなの魔法で調べる余裕が無いくらい俺の魔力値は貧弱だよ！！」

「あの、話を…」
『ああ、説明が聞きたい。続けてくれ。』

いまだにエルはブーブーとむくれているが……気にしない。
レオハルトはわかっているのだ。
エルはそう言いながらも、それほど深く自らの境遇を嘆いていないことを。

そこでフェレットから話を聞くことになったのだった。

「と、言うわけだそうだ。」

自室で、リンディ提督に通信を送っていた。
伝えた事は、ジュエルシードの数、ユーノとなのはのこと、その他現在状況だ。

「あら、それでは早急にこちらでそれなりの対応をしなければなりませんね。」
「ええ、あの二人は現状にあまりに無知です。そして無謀だ。説明と手助けをする必要があります。それをお願いしたい。」
「貴方からは……説明しないのですか？」
「嫌だよ、面倒くさい。」
『いえ、私達の命令はあくまでジュエルシードの回収。それ以外の事柄に関してはほかの部署に回す権限があります。今回はそれを行使し、お手数ですがリンディ提督にお任せいただきたいのです。』

エルの本音にかぶせるように、レオハルトがもっともな言い訳をする。

「ふふっ。ほんとに良いパートナーですね。」
「まったくだ。」
『それはありません』

正反対の事しか言わないエル達に、更にリンディは笑い出す。
その笑顔に、エルンストが彼女の実年齢を疑った事は、決しておかしくはないだろう。

「ごほん！提督……。」

「おお、クロノ」

リンディを窘めようとモニターに映ったクロノに、エルは話しかけ

る。

「お久しぶりです、先輩。」
「おう、そういうわけだから、近々お前にはこっちに来てもらう事になるからな。説明するのは、主にお前だ。」
「うぅ、先輩がそういうのなら……。」
「悪いな。こっちにきたら、模擬戦に付き合ってやるよ。」
「あ、ありがとうございます！！」

「あら、そのときはクロノ執務官をよろしくお願いします。エルンスト執務官。」
「ええ、任されました。それでは仕事に戻ります。」

そう言ってモニターを切る。

『本音をそのままいうのは感心しない。毎回フォローする身になって見ろ！』
モニターが無くなった途端に、つっかかってくるレオハルト
「だって、面倒くさいのはしょうがない。」
『はぁ、わかった。お前はいつもそうだ。……ところで、ユーノという少年を手伝うのか？』

「手伝う？俺は命令を守るだけだ。結果的に手伝うことになるかもな。ユーノとの交渉次第でな。」
『もちろん交渉するのはクロノたちな訳だな？』
「当たり前。」

そういってポケットから二つのジュエルシードを取り出す。

「まだまだ数はある。あっちがあっちで集めるならば、こっちはこっちで集めたほうが十分に効率的だよ。」

あくまで任務を果たすだけだ、と付け足す。

『彼女達が怪我をするかもしれないぞ?』

「大丈夫さ……、魔導師としてのポテンシャルはあの子の方が高かっただろ?」

『……ああ、圧倒的に。悪いがお前は、あのフェレットにも数段以上劣る。』

グサリ、と音が聞こえた気がした。

「なら、おれなんかと一緒に居ちゃいけないよ。俺の闘い方は『魔導師』ではなく『戦士』だからな、そんなものを見ていても、成長も何もしないよ。」

『では、彼女達になにかあっても関与しないと?』

「自分から回収すると言い出したんだ。自分の尻は自分で拭けってことだよ。」

やれやれと言ったふうに、言い放つ。

(たかが9歳の少年少女達に……か?)

「責任に年は関係無いよ。悪い事をしたら、自分から謝る。自分が物を壊したら、自分でケジメをつける。親が最初に教えることだろ?」

レオハルトはそれきり黙ってしまった。

エルは電気を消して、布団に横になる。

「まぁ、心配じゃないって言えば嘘になるけどな……。それでも、自分で乗り越えなきゃ、本当の意味で強くはなれない。」

そうレオハルトに聞かすわけでもなく、エルは呟き、眠りに就いた……。

なのはは風呂から上がり、パジャマに着替え、レイジングハートを机の上におく。

ベッドの上に座って、やっと一息つく。

「今日はいろいろなことがあったよ～。」

「うん、そうだね。ごめん……なのは。巻き込んじゃって……。」

「気にしなくていいよユーノくん。私が自分で決めたことだもん。それに、あのお兄さんも言ってたでしょ？」

「ああ……うん。」

『俺はそれを集めるように言われてきたんだ。だから、君達は安心

していいよ。』
エルがユーノから説明を受けたときに、言われた言葉だ。

「あの人……とっても強かったね。」
「うん……、僕達を庇った一撃以外、攻撃させる暇を与えさせなかった……。」
まさに封殺。
（けど、すごいのはそれだけじゃない。彼はCランク以上の魔法は一つとして使ってない。どれも基本さえ知れば、誰でも組み上げられる魔法だった。）

言うなれば、強いと言うよりも『巧い』
的確に敵の急所のみを突き、必要最小限のみの行動で組み立てる。
故に隙など無く、魔法とは関係ない戦闘の実力差を見せ付けていた。

「とにかく！！あんな強い人が協力してくれるんだから、きっとすぐに集まるよ！頑張ろう、ユーノくん！」

「う、うん。そうだね。ありがとう、なのは。」
そう言いつつも、ユーノの顔は晴れない。
それは一つの不安がしこりのように、残っているからだ。

『俺はそれを集めるように言われてきたんだ。だから、君達は安心していいよ。』

確かに台詞を見れば、頼もしく感じるが……

（ボクだけなのだろうか、この言葉……協力するという意味ではなく感じてしまうのは…。）

三話　才能の形　才能の質（前書き）

合宿やらなにやらで、忙しくなる前に出せるだけ出しとこうという魂胆。

三話　才能の形　才能の質

エルンストは絶望的なまでに魔力値が少ない。
それは管理局内での共通の見解である。

魔力値が低い事、それは必然的に『魔法においては役立たず』と烙印を押されることである。
魔法において役立たずと烙印を押されることは、管理局内では使い物にならないとされることもある。
魔法至上主義であるミッドならばなおさらだ。

しかし、エルンスト。かれは、魔力Ｄという低ランクで、執務官に現役で活躍し、魔導師ランクＳ－という管理局を代表する魔導師にまで上り詰めた。

そこには数え切れぬ挫折と、血の滲む様な努力、そしてどんな佳境でも立ち上がる克己心が隠されているのだ。

大衆魔導師内　『今日の魔導師』より引用

彼が管理局に所属したのは六歳の時である。
彼は至上最年少で、無限書庫司書資格を取り、四年間、その書庫で補佐を務めた。
当時、内向的で無口な少年であったと言う。

そのときの世間の印象は、いわば『知識を詰め込むことに特化した天才』であった。

そうして、無限書庫の勤務により、さらに知識は膨大化、深化し、その知識に並び立つものは無いとされていた。
事実、彼はデバイスマイスターや教導官など、数々の資格を取得していた。
その数は、両の手の指では足りないほどである。
しかし、１０歳のときに突然の管理局魔導師への転向。
一部の者は、驚き。また一部は嘲ったという。

この時、なにかしら彼を動かす事件が起こったと言われているが、真実は定かではない。

しかし、魔導師としてなって初めて、彼の決定的な欠点が見つかった。
リンカーコアの非発達性である。
リンカーコアが、肉体の成長に合わせた進化が行われないことが判明したのだ。
生まれた時のままリンカーコアは変わらないのだ。
コアが大きくならないこととは、蓄えられる魔力が変わらない、ということになる。

つまり、彼は生まれつき、魔導師として死んでいたのだ……。

「さて、この辺りだな？」
『ああ、……！！反応来るぞ！？』

目の前には巨大な蟹のような影が現れる。
その胸に当たる部分には輝く宝石が見える。

「あれだな。番号なんて問題ない。片っ端から行くぞ！！」
『了解。無茶はするなよ。……にして大雑把だな。それでも執務官か？』

――――しかし、約十年たった今でも、彼は魔導師であり続けている。

蟹が口から泡のような球を吹き出す。

『高魔力検知。危険だ。』
「あっぶね！！」

咄嗟に横跳びに逃げる。
前転で巧く体勢を整え、その勢いのままに駆け出す。

――――――――知恵しか詰め込めないのなら

今度はその巨大な爪を振りかぶり、振り下ろす。

「サポート任せた！！」

『了解』

自らに身体強化魔法をエンチャントし、先ほどとは比べ物にならないほどに速く、接近する。

――――――――――それのみを極限にまで詰め込めばいい

――――――――――それだけしかできないなら、それを極めろ

ズズン！！

振り下ろされた爪、しかしその爪は、標的を惜しくも捉えることは無く。

紙一重でその攻撃をかわしたエルが居た。

バリアジャケットを切り裂くほどに紙一重、しかし彼の眼にはなんの驚きも怯みも無かった。

――――――――――魔術師として死んでいるのなら

――――――――――戦士として生きればいい

「弱点はもうわかってんだよ！！」

『ブレード展開　ディレイ、ダガー』

一気に足の下にまで入り込み、蟹のふんどしと言える場所をXに切りつける。

「とどめぇ！！」

収束してダガータイプになっていたレオハルトを、Xの交点に深く、深く突き入れる。

この間、二秒足らず。
瞬殺ここに極まれり。
まるで舞踊を舞っているかのような手際のよさ。

この映像を見るものがいたら、敵が弱いと言うだろうか。
いや違う、エルという男が強すぎるのだ。

――――――――――ハードウェアで劣るならば、ソフトウェアで勝負をしろ

――――――――――それのみを極めた『凡人』の戦い方だ

――――――――――相手が天才だろうと関係ない

――――――――――『凡人』の戦いにおいて、『天才』の力をみせてやれ

――――――――――――そうすれば負けは無い

――――――――――――現に『俺』は数多の天才を退け、ここに立っている

「三つ目ゲットー」

『封印完了、ペースが良いぞ。』

「にしてもあっちは大丈夫かねぇ？」

『あっちはあっちで一つ、順調に手に入れたらしい。』

「ん？なんでわかる。」

『レイジングハートとは定期的に連絡を取り合っている。個人的にな』

「個人的言うな！！！そういうのは、主の俺に言え！！」

「プライバシーの権利を行使する。」

「デバイスが人権振りかざすなっての！！」

ガシンガシン！！

『ちょｗｗｗおまｗｗｗｗ痛いから、マジでグーは勘弁ｗｗｗｗ』

「痛覚なんて無いくせに！！ないくせに！！」

ガシンガシン！！

「リア充が！死すべし！！死すべし！！」

『それは俺のあずかり知る所じゃない！！』

不出来な天才は今日も戦う。
一つ一つ、彼の人生を紡いでいく。

そして、ジュエルシードを回収に近づく人物が、二人。

「そのジュエルシードをこちらに渡してください。そうすれば暴力は振るいません」
「……あぁ？」

ここに彼の歴史にまた一つ、大切な出会いが生まれる……。

三話　才能の形　才能の質（後書き）

エル「なぁなぁ」

うん？

エル「俺の容姿ってどんな感じなんだ？」

ああ、それね。うん、しっかりと考えてあるし、イメージを固めるために絵も書いたよ。

エル「そこまでやったのか。バカだな。」

うっせ。絵描いてると小説の創作意識が高まるんだよ。

エル「悪かったって。それでどんな容姿なんだよ？」

あえて明言しない方向で。
読者がそれぞれイメージして読んでください。
貴方が考えた主人公。それが貴方のフォーアンサー。

エル「フロム脳爆発かよ……。ほらほら、フロム脳がわからない人のためにも早く締めちゃおうぜ。」

あいあい。それではみなさん、また次回！！

エル「お会いしましょう～ノシ」

フロム脳がわからない？ググレカス。

エル「読者さんにそんなこと言っちゃらめぇぇぇ！！」

四話　天才と凡才（前書き）

前回にあった通り、主人公は魔法がからっきし使えません。
知識としては知っているが、それを使うポテンシャルが届いてない、てな感じですね。

ファイガを覚えたがそれをつかうＭＰが足りない！！
そういうとわかりやすいかな？

四話　天才と凡才

「……誰だ？」

金色の髪を持つ少女が、目の前で浮いている。
その隣には、犬耳（のようなもの）を生やした女性。

「まぁ、見たところ、魔導師とその使い魔といったところだろうが……。」

『データベース、不一致。管理局所属ではない。』

だろうな。もし応援があるのだとしたら、俺にも情報があるはずだ。
そうでないなら……。

「イレギュラー……か。」

そういえば、どこかでジュエルシードを回収している魔導師がいると、聞いた気がする。
どこかって言ったって、リンディさんとこしかないけどな。

「もう一度言います。ジュエルシードをこちらに渡してください。抵抗しないならば、暴力は振るいません。」

「やいやい！さっさとだしな！！そんなショボイ魔力じゃ、私達には勝てないよ！！」

……む。

「断る。こちとら任務で来ているんだ。はい、そうですか。と渡せるか。」
「……わかりました。ならば実力で奪わせてもらいます。」
金髪の少女が、手に持つデバイスを構える。

「こらこら、そんな小さい子がそういう言葉は言うもんじゃないぞ？せっかくの可愛い容姿が台無しだ……それに。」

待機状態にあったレオハルトを起動して構える。

「才能だけじゃ俺には『絶対』に勝てない。」

俺は少女に自信満々に言い放った。

確かに、少女の魔力量はすばらしい。
まるで才能の塊だ。最近会った、なのはという少女にも匹敵するかもしれない。
だがな、すこし凡人の妬心を知るべきだ。
才能の壁を越えようともがく執念ってやつをな。

「バルディッシュ！！」「レオハルト！！」

『『ｙｅｓ．　ｍｙ　ｓｉｒ．』』

天才と凡人の戦闘が始まる。

アースラ

ブリッジではメインクルー達が通常勤務をこなしているが、その中で執務官クロノはどこか上の空のような顔で、ブリッジ内を行ったり来たりを繰り返していた。

「あら、クロノ執務官？やけにそわそわしているけど？」

「えっ！？そう見えますか？そんなことはないと思いますが。」

「ふふふ、尊敬する先輩と一緒に仕事に就けるのだから、それは待ち遠しいわよね～。」

「て、提督！！そんなことは……。」

「だって、暇があればエルさんとの模擬戦の事考えてるじゃない。」

「エ、エイミィ…！」

クロノがあわてて否定しようとするが、エイミィの追い討ちによって遮られた。

「やっぱり、エルさんは強い？」

恥ずかしそうにエイミィに弁解していたクロノだったが、その答えには、自信を持ってハッキリと応える。

「はい、とてつもなく。彼と戦えば、魔導師としての自信をいつも揺るがされます。

彼には魔導師以前に、戦士として敵わない。もちろん人としても。」

そう応えるクロノの顔はすこし、誇らしげで、笑顔であった。

リンディは思う。

あの事故があってからは、クロノは笑わなくなった。

しかし、エルと共にいるうちに笑顔をみせるようになって来ているのだ。

エルの人となりが、少年としてのクロノを呼び戻しているのだ。

（本当に感謝ですね……エル執務官）

彼女は心の内で、若い執務官に感謝の念を抱き、いつかはそのお礼を返さなければと考えていた。

（やはり……ゲームかしら？でも、何を買えばいいのかしら？それとも、エルさんの周りには女の気がないから、デートというのも……。）

感謝の形には些かの問題があったが。

しかし悲しいかな、エルに女っ気がないのは事実であり、もしリンディにデートに誘われればホイホイついて行くことだろう。

だれもエルを責める事は出来ない。

なんせ、リンディは実年齢を加味した上でも、万人をうならせる美人であるのだから。

そして場面は、天才と凡人へと戻る。
「なんだよコイツ……なんなんだよ！！」
使い魔のアルフは叫ぶ。
目の前の現実から逃避するかのように。

戦闘開始からそう時は経っていない。
十分か、五分か……いやはや、実は一分しか経っていないのかもしれない。
少なくともアルフはそう錯覚している。

目の前の青年は、どう贔屓目に見ても魔力量はDがいいとこだ。
事実、彼が用いる魔法はどれも基礎ばかり。
威力も低く、一度に放たれる数も少ない。
それを巧妙に組み立てただけに過ぎない。
取るに足らない相手……の、筈なのだが。

「プラズマ、ランサー！！」
「甘い甘い！！レーザー！！」
「くっ！！」

目の前には、彼とはもはや桁違いの魔法素質を持つ少女を相手に、互角……いや、圧倒している戦闘が展開されている。
アルフという使い魔は、それに恐怖していた。
生物全ては、未知なる物を恐怖する習性がある。
それには使い魔も魔導師も関係はない。

目の前の青年は、今まで見てきた魔導師の中でも、特に異質であり、圧倒的であり、理解不能であった。

故に恐怖する。

なんらおかしい事ではない。

「考え事していていいのか？」

「っ！！」

咄嗟に身を翻す。と同時にプロテクションも展開する。

ガキン

ガラスが何かを弾くような音。

エルの、刀身が厚く短く形成された槍をプロテクションが受け止めた音だ。

「そんな、攻撃じゃ！！」

プロテクションで強引に押し返そうとするアルフ。

そう、どんなに戦闘が巧くても、彼の魔力ではプロテクションを貫通する事は出来ない。

「そこで、捻じる！！」

突然、エルが自らのデバイスを手で、捻らせながら押し返してくる。

「うそだろっ！！」

ぴき、とプロテクションに罅が入る。

新たに加えられた圧力により、プロテクションとダガーの魔力が拮

抗し、打ち消しあう。
こうなると、たとえ魔力量で劣っていようとも、刀身が厚い分エルのブレードが、ガラス状のプロテクションを突破できる。
罅は、エルが押し返すたびに大きく、広がっていく。

「アルフッ!!さがって!!!」

エルの背後にザンバーを展開した、フェイトが突撃する。
それはエルは予測していたのか、顔色一つ、更には一瞥すらくれずに、槍の柄で受け止める。
どうやら、槍の柄の端には、小さく棘のような魔力刃が付いているようだ。
それで、レオハルトとバルディッシュの柄と柄、魔力刃と魔力刃を絡ませていた。

それに、アルフ、フェイト共々驚愕した。
背後からの攻撃に反応するだけでなく、高度な技量を必要とするこの行動を、瞬時に行うその実力に。

アルフとフェイトでエルを挟み込んでいる。が、二人は、目の前の男に勝てる気がしていない。
彼は今も、顔色一つ変えず、二人の前後からの攻撃を受け止めている。
魔力で肉体強化している二人の体当たりを受けていても、だ。

「……む、なるほど。悪いが相談がある。」
そんな今の状態など、気にも留めない様子で、彼は突然の会話を提案する。
「っ!なんですか?」

決して力を抜く事なんてしない。
そうすれば次の瞬間に敗北しているのは自分だ。
それほどの威圧感がこの男にはある。

「ああ、俺のデバイスから直接連絡があった。どうやら、俺の知り合いがジュエルシードに襲われてしまったらしい。俺はこれからその知り合いを助けに行きたいんだが。」
「そんなこと、許すとおもってるのかい！！」
「二つ返事では無理だろう。しかし、状況を考えてほしい。この勝負はお互いに決定打に欠ける戦いだ。君達では俺を殺しきれないし、君達を倒すには、俺は手札が足りない。これでは決着など遠い。それならば、ここは俺のジュエルシードを諦めて他にあたった方が良いのでは？」

エルの説明に、アルフは若干の迷いを見せる。
「いいえ……貴方はここで倒しておかないと、結局多くのジュエルシードが貴方に取られてしまう。」
しかし、フェイトはそれをはっきりと否定する。

「ほう、どうして？」
「貴方なら、私達が一つを手に入れる間に、より多くのジュエルシードを手に入れられるだろうから……。」

エルは少し、感心したような顔をした。

「ふむ。その幼さにしてはなかなか賢いな。……しかしな、」

その瞬間、二人は凍りついた。

魔法をかけられたわけでは無い。
ただ、かけられたかのように、彼に毘れを抱いてしまっただけ。
彼の表情はこの局面で薄く笑っていた。
大量の殺気を放ちながら。

「彼我の実力差をしっかりと判断しろよ?でないと無駄に命を捨てるだけだ。」

直後、二人は弾き飛ばされ、地面に激突した。
エルが強引に槍を振り回し、筋力のみで彼女達を吹き飛ばしたのだ。
どうやら気絶はしていないようだが、相当なダメージを負っただろう。

「お前らに俺達を倒すなんて『今』は不可能だ。第一矛盾しているんだ。勝てないと分かっているのに、どうしてここで倒そうとする?まさか二対一だから押し切れるとでも思ったか?」

無表情に、彼は槍を突きつけ、言い放った。
完全に気圧されたようで、エルを睨み返すばかりで、何も出来ていない。

「せっかく、離脱の機会を与えてやったのにな。……ふん。ここで逮捕してやってもいいが……まぁ、いい。仲間の命が

最優先だ。」

彼の足元に半透明の魔法陣が展開される。
それはとても存在が希薄で、彼の威厳とは裏腹に、とても弱弱しく感じる。

「ああ、それと。」

「っ！！」
跳ぶと思っていたエルからの声に、二人は自然と構えてしまう。

「ジュエルシードは、わかっていると思うが危険な品物だ。怪我とかには十分に気をつけるように。」

二人の様子を気にするでも無く、そうエルは言い放つ。

「……え？」

二人はそんな彼の発言に、混乱する。

混乱している間に、彼はもう消えていた……。

「なんだったんだい。アイツ。」
「うん。なんだか不思議で……とっても恐い人だった。」
そういうフェイトの瞳には、未だ畏れの念が消えていない。
彼の殺気にあてられているのだろう。

「フェイト……今日はもう帰ろうよ？疲れたし、恐かったろ？」
「うん……。ごめんね、アルフ。」
「何言ってんだい。そんなのフェイトのせいじゃないよ。」

アルフが励ましても、フェイトの顔は暗いまま。
今日の出来事は二人とも、相当な恐怖だったらしい。

『うまく言って逃げてきたものだな。』
「は、そう言うな。あのままだったら逮捕するしかなかったさ。あの子達の逮捕は俺の管轄外だ。」
『とことん面倒を嫌うのだな。あの二人を捕まえたとあったら、それなりの功績だろうに。』
「いや、それもそうだが、それだけでもない。すこし思うところが

あってな。」
レオハルトの発言に、少し疲れたように返す。
エルの脳裏には先の少女。
（……あの少女、どこかで……？）
エルは自分の知能と記憶力に、絶対の自信を持っている。
そうでなければ、今まで生き残ってきていない。
それでも思い出せないとは、果たしてどうでもよい事柄ゆえに忘れたか……。
それともどこか知っている事実との違和感によって、脳内の記憶と一致していないのか。
「調べて見るか。」
そう言いつつ、彼は自宅付近の中古屋の店の扉を開ける。
本人は大真面目だが、エルの発言は、レオハルトにはお目当てのゲームを探すようにしか聞こえていなかった。

四話　天才と凡才（後書き）

人が強い理由とは、それぞれに色々あるものです。

それが好きで、鍛錬をし続けた、とか
それができなければ、生きていけなかったとか
勿論、最初から才能で強かったってのもあります

けど、エルは最初は本当に凡人だったんです。
特別な才能なんて無い、普通の子供だったんです。

五話　バカになれよ（前書き）

無印では、主人公はあまり大きな介入はしません。

これは、やはり無印が、なのはとフェイトの物語だと私が思っているからです。

裏方と言うか、ご意見番というか…。

そんな微妙な立場なんですｗｗｗ

五話　バカになれよ

「そうか、クロノはもう来れるのか。」
『はい、あと三日もすれば確実に。』
俺は自室でクロノと通信をしている。
まぁ、お互いの都合を確認する事務連絡と言うことだ。

「悪いな、お前だって忙しいだろう？」
『いえ、ほとんどは先輩の後塵を排する程度の仕事ばかりです。』
こういった世間話も入ってしまうんだがな。

『先輩は仕事の方は順調ですか？』
「まぁな。このまま何も無ければいいんだがな。」
『その通りですね。』

「よし、今日はこれくらいにしとこう。あの二人の幼い魔導師に関しては頼んだぞ？」
『はい』

そういって、ひとしきりクロノとの他愛の無い話の後、通信を切る。
『いいのか？彼女達の情報を出して。逮捕したくは無かったのではないのか？』
「俺が報告しなくとも、管理局が感知したさ。遅かれ早かれな。」

この前の少女と使い魔の遭遇からもう一週間程度が経ちつつある。
俺は他の管理世界に赴いたり、独自で情報を集めたりしていた。が、その間にどうやら、なのはと少女の、二人の間でド派手な戦闘を起

こしたらしい。

そうして、なのはが負けた。
彼女は今、どういう心境だろうか？
魔導師になって間もない。ましてや、まだ9歳の女の子だ。
戦闘だけじゃない。環境の変化に付いて行けず、相当な負担になっているだろう。

事実、レオハルトとレイジングハートとの情報のやり取りを利用して、なのはの状況を聞いてみても、良い報告は帰ってこない。
どうやら、友達とも喧嘩をしてしまったらしい。

だが、俺が助ける事は出来ない。
結局、精神的な克服など、自分で成し遂げるしかないのだ。
誰かに後ろから押されて、手に入れた克服など、所詮は自己満足でしかない。
他の誰かによって容易く崩れる。
故に、彼女には自分で乗り越えてほしい。
より強い意志を持って、空を駆けて欲しい。そう思う。

俺はなのはへの不安と期待を織り交ぜたまま、仕事に努める。

そうして、また二人が再会したのだった。

場所は海鳴市。

俺はその報告をレオハルトから聞き、現場に急行した。
飛行魔法なんて使えないから、勿論走ってだ。

ああ、どうしてこんなに悲しいんだろう……。

「話には聞いていたけどな……まさかこんなにも魔法の扱いが上達していたとはね。」

俺は海鳴市のはるか上空から、二人の戦闘を眺める。
レオハルトに、斥力生成による足場を作り出してもらい、その上に胡坐をかいている。
上空に居るのは、彼女達の邪魔をしないためである。
そして、この高さにまで、足場を作って登って来るのは相当大変だった。

手には手作りの望遠鏡。手作りと侮る無かれ。俺が知る全てを応用して作られたワンオフだ。
サーモ、暗視、ついには万華鏡まで完備している。
暇なときは、万華鏡で時間を過ごす事も出来る。

エルンスト専用望遠鏡。専用って響きはいいね。
赤くて、角があれば完璧だな……。
望遠鏡……というのが少し情けないが。

『なにか、吹っ切れているとは思わないか？』
「……そうだな。確かに、迷いが無くなったように見える……。」

しかし、本当にそうだろうか？
どうにも安心しきれない。話を聞く限り、彼女は無理をする子だから。

『ジュエルシードはあのまま放置していていいのか？』
「確かに危険だが……いいや。」

あの二人の決闘を邪魔する気は起こらない。
それに、この戦いはお互いの成長にとって重要な事だ。
才能も、伸びしろもない俺が邪魔をしては、無駄ってモノだ。

『ふ…、まるで兄だな。いや、ロリコンか？』
「安心しろ、後者は絶対に無いから。」

妹……か。

ズキリ、と俺の心が痛む。

『!?おい、ジュエルシードから……!!』

「ま、ずい!!」

レオハルトには珍しい焦った声に現実に引き戻されると、ジュエルシードから膨大な魔力反応が検出されていた。

「サポート頼む!!」

『任せろ!!』

俺は自らに肉体強化魔法を、調整なしでエンチャントして、斥力で生み出した足場を思いきり蹴り、全力で飛び降りた。

私は激しい戦闘と、ジュエルシードの魔力によって、コアにまで傷ついたバルディッシュを待機状態のプレートに戻す。

……ごめんね、バルディッシュ。

前方には、暴走状態のジュエルシード。

あれを……止めないと!!

全力で地を蹴り、ジュエルシードに駆け寄り、手のひらでそれを包む。

「フェイト！！」

暴走する魔力によって、手のひらが傷ついていくのを感じるが、アルフ共々無視する。
だって、ここで頑張らないと……母さんが。
私が、私が頑張らないと！！

「俺は忠告したよな？怪我には気をつけろって。」

そう言って、私の手を包む大きな手のひら。
ハッと顔を上げると、つい先日の青年の顔があった。
しかしその表情は呆れたような、悲しそうな顔をしていて、この前あったときよりも全然恐くない。
むしろ、優しいお兄さんに感じた。
私にお兄さんなんていないけれど、いたとしたらこんな感じなのかな？

彼の足元に半透明の魔法陣が展開される。
そうすると、見る見るうちに、ジュエルシードの暴走と手のひらに出来たはずの傷がふさがっていく。

『封印終わったぞ。』
「ああ、わかった。」

彼はそれを聞いたら、安心したかのように一つ大きな溜息。
次に私を見て、

「今度こんな無茶したら許さんぞ？次は他を頼れ。」
そういい残して踵を返した。

「え、ちょっとアンタ！！」

アルフが彼に叫ぶ。

「なにが目的だ！！？」
「今回は余計な被害が広がらないためだ。……それと、そのジュエルシードは君達のものだ。その子の思い切りと覚悟に負けたって事で。」

そういって微笑む彼に、アルフは言葉を失う。

「……貴方の、名前は？」
「え？」

その笑顔に惹かれたのか、私は知らず名前を問う。

「ああ、名前か。そういえばまだお互い名前も知らなかったな。俺はエルンスト・アルカトラス。長いならエルって呼べばいい。」
「私は……フェイト。この子がアルフ。」
「ちょっと！フェイト！！」

アルフの抗議を手で制す。

「大丈夫だよ。アルフ。」
「なんでそんなに、笑顔なんだよ……。そんな顔じゃ何も言えないよ……。」

私達のやり取りを、エルさんは笑顔のまま見つめ、
「早く帰ったほうがいい。いくら傷が塞がったとはいえ、無理は出来ないんだ。ゆっくり休むといい。」
「はい、ありがとうございます。」
私の傷の心配をしてくれた。

私はお辞儀をして、アルフと共に空へと飛んだ。
その時、きっと今までに無いくらいに、私の気分は晴れやかだったと思う。

あそこまでしてやる必要などあっただろうか。いやナイ。反語。
レオハルトの妹発言に踊らされた訳ではないが、まさかこれほどのおせっかいをしてしまうとはな。
しかも自らの身を削ってまで。
本当に、俺は甘いな。

「ぐっ！！！」

口から、大量の血を吐き出す。

「エルさん！！」

驚いて駆け寄ってるなのはを手で制し、俺は心配させまいと精一杯の笑顔で返す。

「大丈夫だよ。少し、無理をしちゃっただけだよ。」
「そんな……。少しって無理じゃ…。」
「君は、こんなになるまで無茶しちゃ駄目だぞ。」
「！！」

俺は驚くなのはを見つめ、口に溜まった血など気にせず続ける。

「今、俺を心配してくれただろ？その気持ちは本当に嬉しい。けどな、君がそうして怪我をしたときに、心配する人が君にもたくさんいるんだ。いや、きっと俺よりもたくさんの人が悲しむだろう。俺は家族もいないし、恨まれる仕事ばかりしてきた。けど君はそうじゃない。みんなに愛されて育った、ただの一般人。普通の女の子だ。大人でも苦しい無理をしちゃ駄目だ。そんなの、小学三年生のなのはが耐えられる訳がない。」

それは、身も心も。

俺は一息に、喋る。
一度とめたら、その瞬間に口からまた吐血しそうだったから。

「つらいときは誰かに甘えれば良い。わがままだって言っていいんだ。子供にはその特権がある。甘えられない人がいないなら、俺を頼れ。俺が傍にいてやるから。……いや、それが必要がないくらいにお前の傍には大切な仲間がいるはずだ。」

「で、でも」
「でもじゃない。自分はダメだとか、みんなに迷惑をかけてしまうとか、思ってるのか？、それは違う。もっとバカになっていいんだ。」
「バカ…に？」

なのはの瞳に薄く涙が浮かぶ。

「ああ。悩んでるんだろ？無理に乗り越えようとしてるの、バレバレだぞ？
誰にも言わない。今日くらいは、悩みや苦しみも一緒に、吐き出しちまえ。」

「……ぅぅう。う、うあああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

なのはが胸に飛び込んでくる。
俺は、彼女のきれいなバリアジャケットを血で汚さないように、注意を払いながら、優しく抱きしめた。
そうさ、どんなに大人びていようとも、中身は年相応の女の子だ。
耐えられるわけが無いんだ。こんな重圧。

「ああ、もうひとり。とんでもない重圧を背負ってる子がいたな。」

俺はなのはを撫でながら、一人呟いた。
金色の綺麗な髪を持つ、『二人』の少女を思い描きながら。
呟きは、空の闇に吸い込まれ、誰にも届くことは無かった……。

五話　バカになれよ（後書き）

主人公が大暴れするとしたら、勿論Ａ'ｓからになるでしょうね。

戦闘の見せ場はやっぱりここでしょうｗｗｗｗ

まぁ、理解不能な各々は、それへの伏線ってことにしといてください。

六話　胸糞悪い（前書き）

主人公がもしフラグ一級建築士だとしても、建てっぱなし、造りっぱなしです。

立てても、回収はしない子なんです。

ぱなしは無しって話です。

六話　胸糞悪い

「たったの……よっつ……！！」
「う、ぅぅ。ごめんなさい。お母さん。」

そこにあるのは紛う事無き虐待である。
女性は、手に持ったムチで、少女の幼い体をいたぶり続ける。

ああ、なんとも胸糞の悪い。

こんな光景も、それを覗き見る俺も、これを見て何も出来ない俺も、全て……。

「アリシア……待っててね。」
先ほどまで、自分の娘に暴力を振るっていた女性、プレシア・テス

タロッサはカプセルに浮かぶ少女を愛でる。

「本当に……ひどいな。久しぶりに殺意が沸いたよ。」

「誰！？」

驚き、振り返ると、そこには一人の青年が私服で立っていた。

「久しぶりです。……覚えていますか？」

「あなた……エルンストね？」

「はい……。」

「まさか、ここにこうも簡単にたどり着けるとは思わなかったわ。どうする？執務官らしく逮捕する？」

プレシアには余裕があるようで、執務官が目の前にいると言うのに、狂気を孕んだ微笑を崩さない。

「ここは第二のふるさとの様な物ですよ。それに、服を見てください。俺はここに一個人として来ました。」

エルは自分の服をヒラヒラと翻す。

ジーンズに、Ｙシャツ。

そして首にはデバイスであろうネックレス。

シンプルな出で立ちだが、彼の素材のよさを前面に押し出しているとも見れる。

「そう。そういうことね。いいわ、歓迎するわ。」

「ありがとうございます。」

二人は用意されたテーブルに座る。

エルが紅茶を沸かし、プレシアに振舞う。

「……貴方の紅茶は久しぶりだけど、更に上達してるわね。」

「何年前だと思っているんですか。そりゃある程度は上達もしますよ。」

二人の雰囲気を見る限り、敵対関係にはまるで見えない。

先ほどまで、狂気を孕んだ笑顔をしていたプレシアも、いまは穏やかな笑顔をしている。

「フェイトは……アリシアのクローン……ですね？」

一息つくと、エルは何の躊躇も無く、踏み込む。

「ええ。本当に役に立たない人形として生まれてしまったけれどね。」

「……もう一つ聞きたい。ジュエルシードを集めているのも、『そこ』に到達するためですか？」

「ええ。アリシアを甦らせるには必要なことよ。」

明確な言明を避けたエルの発言にも、プレシアは理解して、返答をする。

プレシアの瞳は、何も迷ってはいない。

たとえ、身を滅ぼそうとも、わが子を蘇らせうるだろ。

感じるのは狂気と、愛情。

ああ、とエルは心の中で嘆く。

母とは、こんなにも強く、脆い存在なのかと。

エルは立ち上がり、アリシアのカプセルの、目の前にまで歩み出る。
大切な割れ物に触れるように、エルの手はカプセルをなぞる。

「初めて、フェイトと会ったとき、どこかに引っ掛かりがあった。
見たことがある少女。しかし、どうしても俺の中で、アリシアとは
結びつかなかった。こんなにも同じなのに……。そりゃそうだ。
アリシアはアリシア。フェイトはフェイトなのだから。」

「ええ。フェイトはアリシアにはなれないのよ!!本当に役立たず。
」

エルが振り返り、プレシアを見つめる。
そこには強い確信が感じられた。

「嘘だ。」

「な、なにを……。」

「確かに、フェイトではアリシアにはなれない。そして、アリシア
でもフェイトにはなれないんだよ。二人は別人。クローンだから、
姿かたちが同じだけ。それは貴女が一番わかっている筈だ。」

二人の間に静寂が生まれる。

「事実、貴女はフェイトを愛している。今、アリシアへの想いのあ
まり、少々暴走してしまっていますが……。」

エルはプレシアをまっすぐに見据える。
彼女の中に潜む真相を暴くかのごとく。

「もし、彼女を愛してしまったら、アリシアはどうなるの？」

プレシアは質問をしていた。
まるで救いを求めるように……。
自らよりも大きく年下の青年に。

「アリシアならきっと許してくれますよ。むしろ、そのほうが喜ぶと思います。
だって、彼女が大好きな母親の、笑顔が見られるのだから。」

「ふふ……。貴女が一時期でも、彼女の兄代わりになっていて本当によかったわ。」

「私はあんな可愛らしい妹が『また』持てて幸せでしたよ。それと貴女のような母親とも出会えて……。」

プレシアはエルの言葉を聞いて笑顔になる。
その笑顔は本当に優しい、母親の顔であった。

「……だからこそ、プレシアはまた甦らなきゃいけないの。」

「…！！そこまで、貴女の気持ちは……。」

「あのころの家族を、取り戻したいのよ。」

プレシアの言葉に、エルは驚愕する。
そのエルの表情を見て、申し訳なさそうに、プレシアは言う。

「ごめんなさいね。貴女のその言葉、本当に嬉しかったわ。帰りなさい。執務官としてでは無く、エルンスト・テスタロッサとして見送るわ。」

そういって、彼女は席を立つ。
そこにあるのは、明確な拒絶。

「……わかり、ました。」

エルも席を立つと、足元に転移魔法が展開される。
プレシアが展開したものだ。

「今度会うときは、敵同士ね。」
「そう……なりますね。けど、もう会うこともなくなるかもしれない。」

お互いが、お互いにどのような行動に出るかわかっているからこそ、何も言えない。
どのような最期を迎えるのかまで想像が付いてしまう。
それほどに親密なお互いの関係を、エルは少し恨んだ。

「最期に、約束してください。」
「何を……？」
エルは、正面からプレシアを睨む。
これにプレシアは若干圧される。

「もうフェイトにあんな仕打ちをしないって。いくらあなたの中で失敗作だからって、あんまりだ。あの子だって、クローンだけど自

分の人生を精一杯に生きてるんだ。それを台無しにしないでくれ。」
「……善処するわ。」
「お願いだから!!頼む!!」

遂には、エルは目じりに薄く涙を浮かべて、訴えている。

「……わかったわ。フェイトにはもう、あんな仕打ちはしないわ。」
「ありがとう!!ありがとう……。」

本当にこの子は優しいな。
大きくなっても、それは変わらない。
プレシアは今一度、かつての息子を見つめる。
「ありがとう。久しぶりに会えて楽しかったわ。……さようなら、愛しい息子。」
「僕もです。……さようなら、母さん。」

二人は、悲しい笑顔のまま、別れた。

七話　決断（前書き）

今日は二話投稿。

実はコレを含めて、後二話で無印は終わるっていうｗｗｗ

いまだかつて、これほど短期間で無印が終わった小説があろうか？

いやない。反語

書いていて思った、主人公、および私はどれだけＮＥＥＴなのかと

七話　決断

エルンストは、数ヶ月間のみテスタロッサ家に居た時がある。
馴れ初めは偶然だ。

全てを失っていた彼の前に、最初に現れたのが、彼女達だっただけだ。

彼が人としての感情を取り戻すことが出来たのも、彼らのおかげ。
新しい家族が、彼を救ったのだ。

しかし現実は厳しく、彼は家族が崩壊していく様子を、ただ目の前で見ることしか出来ないのだった。

「ちくしょう……。」

俺はもうあんなのゴメンだ。

どうして、守りたい物が、目の前で壊れていくのか。
壊れなければいけないのか？
いや、彼女達には何の非もない。
人並みの家族の幸せ、望んだってなにも悪くなかった筈だ。

ならばどうして壊れた
どうして……

「ち、くしょう！！」

壁にこぶしを打ちつける。
壁は一箇所、小さくへこんだだけだ。
まるで彼の怒りと悔しさを滞留させんとしているかのようだった。

「俺は…また守れないのか。」

その呟きを聞くのは、デバイスであるレオハルトのみ。
しかし、そのレオハルトも口をつむいでいる。

そうして、長く響く静寂。
それは永遠に続くかと思われたが……。

「……よし！！」

エルの一言によって打ち消された。
その声は、今さっきまで悩んでいたものとは到底思えない、明るく、
自信を持った一声だった。

「レオハルト、悪いな。気を遣わせちまって。きっとメール、また

は連絡が来ているだろう?リンディさん辺りかな?」
『……ああ。その通りだ。』

レオハルトには、リンディからの通信要請が来ている。
しかし、レオハルトがエルの気を遣い、拒否していたのだ。

「今すぐ繋いでくれ、次元震についてだろうからな。」
『ああ。わかった。』

レオハルトはアースラへと信号を送る。

『エル。いいのか?』
「ああ。ウダウダしていて状況が好転するわけじゃないからな。だったら一つでも自分がするべき事があるはずだ。そんなのは誰だって出来る。」
『それを思った通りにできること自体が特別だよ。』

エルはレオハルトの言葉に、自嘲的な笑みを浮かべて告げる。

「良い事か悪い事か、目の前で壊れていくのを見るのは慣れちまったからな……。嫌な経験だよ。」

『……そういうことにしておこう。アースラと繋がるぞ。』

「ああ。」

エルンストは思う、もう彼女を止められるのは、彼女の『娘達』しかいないと。
全てが解決したら、笑って、大切な『家族』達を迎えよう。

それで彼女達が一人じゃなかった、待っている人がいるんだと、思えたら……。
それが俺の幸せである。

いつでも、真に前向きになる事。
それは誰にでも出来る事ではない。
やせ我慢でもなく、自暴自棄でもないそれを、エルはこうも簡単に成し遂げる。
そういう意味では、彼は本当の「天才」であった。

あるいは、本当の地獄を知っている故の、余裕か……。

「実は今日の夜、冷蔵庫を開けて気づいた。食料がないと。」
『そうか。』
「この世界での金を持っているのは良いが、いかんせん勝手がわからん。」

『そうだな』
「どこで食料を調達すればいいのか。どこに店があるのか。わかりません。」
『ゲームは買えるくせにな』
「じゃぁかしい。そういうわけだから、これからの俺はどうすれば良いのか、行く場所なんかを提示してくれると助かる。」
『ググレカス』

そうふたりで言い争い（？）ながら、近くのスーパーに移動する。
理由は前述の通りである。

「俺としては、チラシから、最も手軽で栄養価、値段共に申し分ないメニューをお前に考案して欲しいんだよな。」
『お前は私に何を望んで私を造ったんだよ！』

無論レオハルトには不可能ではない。
しかし、エルが、自らの戦闘能力を最大限に引き出すために作り出したデバイスが、食事メニュー考案機に成り下がるのは、あまりにもお粗末である。

「そりゃ……ん？」

エルの眼に映ったのは、車椅子の少女。
別にそれ自体は、特筆して注目するほどではないのだが、一人ぼっちである事と、客の喧騒に呑まれ、立ち往生しているのが気になった。

『ん？ロリコン発動か？』
「人助けしようって気分で、それ言われると、かなりやる気無くす

のはよくわかった。」

エルは首に提げていたレオハルトを取り、人目の付かない高いところにある取っ手に、ぶら下げる。

『ちょっｗｗｗおまｗｗｗｗ』

「お前はそこで反省していなさい。」

そして放置。

『絶対失くすぞ?絶対私を失くすからな!?』

「うるせい。反省のない奴はおしおきじゃ、ボケェ。」

そうしてエルは、目的の車椅子の少女へと向かうのだった。

「あの、困ってるのかい?」

「え?」

タイムセールの人混みで、何も出来ずにいた私は、一人の男の人に声をかけられたんや。

最初は不審者か、俗に言うロリコンてな感じの人かと思うたんやけど、その人の困った表情と、すこし心配そうな表情を見て、下心をかんじなかったんや。

純粋に、私の心配をしてくれてると、思うたんや。

「いや、あの……人混みがひどくて、買い物ができへんなぁ……て。」
「ああ、俺ですらすこし尻込みするのに、車椅子だもんな。……まさか一人？」
「うん。うち一人や。」

それを聞いて、男の人はあからさまに困ったような、怒ったような顔をした。

「車椅子の子に買い物なんて……、家族は何してるんだ。」
「いや！その……うち一人なんや。家族はいないんや……。」

今度は驚いた顔を作る。表情がコロコロ変わって、少し…面白い。

「……わかった。じゃあ、俺も買い物に来たし、買うものを言ってくれ。自分の物ついでに買ってくるよ。」
「ほんま！？おおきに！！」

「ああ、ちょっと待っててくれよ。」

私が買ってきてほしい物を言うと、
今度は笑顔を作り、店へと入っていく。

（あかん……今思ったら、結構なイケメンやん。）

今更ながら、彼の美形を意識する私やった……。

「はい、これでいいか？」
「はい！ほんまにありがとうな！！」
「気にするなよ。……うーむ、一人でコレ持てるのか？」
そういって、米袋を指差す。
確かに、私が運ぶには大変やけど……。

「でも、これ以上迷惑かける訳には……。」
「迷惑なんかじゃないさ。最後まで手伝うよ。」

軽々と、米袋を肩に担ぐ。
やっぱり、大人の男の人って力持ちやなぁ。

「どうしても嫌だったら、諦めるけど……。」
「いや、構わへんよ！それに、今日のお礼もしたいんよ。」

「あ、その前に、お互い自己紹介してないな。俺の名前はエルンスト・アルカトラス。」
「あ、うちは八神はやてです。よろしく。」

エルンスト……外人さんやろか？確かに、日本人離れした美形やけど、どこか和風みたいな顔してるしなぁ。アジアスター？みたいな感じ？

「それと、ちょっと待っててくれ。」
「え、はい。」

エルンストさんは、小走りで店の表にある、看板のすぐ傍に備え付

けられた取っ手を睨む。
いや、取っ手だけやない。キーホルダー？見たいなもんを睨んだ後、それを取って帰ってくる。

「じゃ、行こうか。」
「あの、何してたん？」
「いや？俺が邪魔だったから、ちょっとあそこに置いといただけだよ」
「はぁ。」

なんか、変わった人やなぁ。

（おいレオハルト）
（はい、何でしょうマイマスター）
（俺はロリコンか？）
（いえ、断じてありません。あなたは困った人を放って置けない心優しき御仁です。）
（よし、従順すぎてすこし気持ち悪いが、いいだろう。）
（……ありがとうございます。カラスにつっつかれる前に助けていただきありがとうございます。）

こんな会話があったのは、誰にも秘密である。

七話　決断（後書き）

まぁ、無印全て使ってプロローグをしたと思ってください。

いまさらですが、ご意見ご感想、お待ちしております。

エル「本当にいまさら過ぎるだろ……」

八話　次世代の芽（前書き）

全て投げっぱなしで終わっている気がする…が、まぁいいだろう。

選んで終わらすのがそんなに上等かね？

エル「なにその態度。ねぇ、なにその態度。」

八話　次世代の芽

「おいしかったよ。とても。」
「いや～、それならよかった。うちもエルさんと一緒にご飯食べられて、楽しかったわ。」

本当に嬉しそうな笑顔。
この笑顔は否が応にも一人の少女を思い出して…。

「あ……、あの。」
「うん？」

「ご迷惑や無かったら、また遊びに来てほしいんや。」
「いいのか？」

不安そうに、車椅子の上で不自由な体をよじらせる。
どうやら恥ずかしいようだった。

「うん。うち、いままで誰かと一緒に食事するなんて滅多に無かったから。」

そういう彼女の声は、本当に寂しそうであった。
そんな彼女をみて、どうしても守りたくなって。
かつての妹と被って見えてしまって。

「ああ、また必ず来る。」

無意識に返事していた。

「ホンマ！？ありがとう！！」

先ほどとは打って変わって、花のような笑顔を見せる。
この笑顔が見れただけで、こう答えてよかったと思う。

「次来るときは、電話するよ。毎日来れるかもわからないけど、来れる日は絶対に来る。それまで楽しみに待っててくれ。」

「うん！！！」

あぁ、なんだか新しい妹が出来たみたいだった。

この感情はきっと嘘じゃない。嘘では無いけれど……。

「大変な子もいたもんだ。」

『ああ、その通りだな』

俺達は、物をはやての家にまで届けた後、お礼として夕食を振舞われた。
想像以上の出来栄えだった。

そのときに聞いたのは、彼女の身の上。
触れてはいけないことと思い、聞く事は無かったが、彼女から言ってくれた。

「なぜ、一人なんだよ。」

どこも家族として引き取ってくれたりはしないのか……。
俺はそんな社会に怒りを覚えるが……、怒りの矛先が大きすぎる。
どうしようもない。

「あの年頃は、家族のふれあいが何より大切な時期だろうに。」
『そうだな。』

家族と触れ合う事が出来なかった俺だからこそ言える。
一人ほど、子供につらいものはない。

『ならば、いっていた通り、また会いに行けばいいだろう。』
「ああ、当然だ。」

「これから暇があったら会いに行くんだ。俺みたいな大人じゃ、何がしてやれるものでも無いが、それでも話し相手ぐらいにはなってやりたい。」
『ああ、それでいいさ』

俺は一つの決意を胸に秘める。

たとえ小さな願いでも、俺は全力でぶつかる。
いつか、彼女が自信を持って、過去を振り返られるように。
楽しい思い出があったと、たった一人の人生ではなかったと言えるように。

「ああ、クロノか？」
『はい、先輩どうしたんですか？』

俺はクロノと通信をつなぐ。
ある事を報告するためである。

「一つ報告がある。今から、俺はジュエルシード収集任務から外れる事になる。」
「は！？」
「もう三提督からも了承を受けている。前回の次元震も含め、引継ぎはお前だ。」

俺の言葉に、クロノは驚愕の表情を浮かべる。

「なぜ……突然？」
「俺にもこれからすこしやる事が出来てな。今度はそっちの任務に就かなければならない。
俺が封印したジュエシードはもう本局に受け渡しをしたから、そう難しい事ではないよ。」
「そう……ですか。残念です。一緒に働く事が出来ると思って

いたので。」

クロノは悲しそうな顔で俯く。まったく、こいつは……。

「そんな顔はするな。お前はもう立派に一人前だ。俺が教える事はもう何も無いし、むしろ教え、導く立場だと思ってる。」

「たとえそうだとしても！！ボクは貴方にもっと教えてほしかった。」

「なぁ？俺、一生お前と会えなくなるわけじゃないぞ？」

「それはそうですが……。」

何を言っても、クロノの表情は晴れない。

まったく……。

「また会ったら、手合わせもしてやる。今度また一緒に旨い物でも食いに行こう。」

「は、はい！！」

やっぱりまだまだ子供だな。

嬉しいのか、瞳が潤んでるぞ。

「じゃあな。心配な子供が二人いるが、遠慮も容赦も無く指導してやれ。」

「お元気で…」

そういって通信を終える。

「さて、次の任務の場所に移動するか…。」

『本当にいいのか？』

今回の異動を申請したのは俺自身からだ。
それに対して、問いているのだろう。

「いいんだよ。この世界のゲームは楽しかったがなぁ……。しかし、便利にもこの世界には『携帯ゲーム』というのがあってだな。」
そういってポケットからＰ○Ｐを出す。

『はぁ……、見抜かれるとわかっていて隠すのだからなお前は。』
「悪いな。堂々と打ち明けられるほど、俺の神経は図太くない。」
『お前の神経が図太くなかったとしたら、他の皆の神経は、くもの糸ほどの細さだよ。』
「はは……。くもの糸か……、なかなか上手い表現をするな」

くもの糸。一本一本は弱く、脆いが、多くが寄りあうと、釣り糸にも凧糸にも使える強度を持っている。

俺が教えられる事は教えたつもりだし、これから先はあいつらが自分で解決することだ。
そうして、人間は成長していくんだ。
自信過剰と言われるかもしれないが、俺がこの事件に介入すれば、一日で事件は終わる。
プレシアを逮捕して、ジュエルシードをフェイトから力ずくで奪い、封印。
世は全て事なきで、平穏は保たれる。

それじゃ意味がない。

次世代の芽を摘んでしまうことだけは、俺には許されない。
俺はもう長くない。

十年、二十年と時代を担うほどの時間は残されていない。

クロノは俺が育てた。
管理局の表も裏も見せ、その上での存在価値を教えた。
クロノは辛くとも、その真実を受け入れ、共に戦うと言ってくれた。
それで十分だ。

なんの後悔も無く、俺はアイツに後を任せられる。

けど、一人では駄目なのだ。
いつか俺のようになってしまうかもしれないのだから。
だから、共に背中を預けあう仲間が必要なのだ。

それこそ、くもの糸のような。

それが、なのは達。
彼女達がどんな選択をするかは知らないが、あれほどの逸材を管理局が放っておくわけが無い。

きっと管理局に将来的には入局するだろうな。
あとは、クロノ次第だ。

「そう、なのかもしれないな。」
『そうまでして、お前ははやての傍にいたいのか？』
「なのは、フェイト、クロノ。あいつらの傍には誰かがいる。支えてくれる誰かが。
彼女はどうだ？誰も居ない。いつも一人ぼっちだ。学校にも行けてないんだぞ？」

『守ってやりたい訳か？』

「別に四六時中傍にいるわけでもない。出来るだけ傍にいたいだけだ。」

レオハルトにまで嘘を付くしかない。それも見抜かれるとわかっていて。

はっきり言ってしまえばどんなに楽か、

自分の命は長く無い。

だから次世代を担う事になるだろう彼女達に、強くなってほしいから、あえて手助けをしない。

それによって、いかな被害が出ようとも、彼女達が強くなればそれで構わない。

護りたいものだってある。はやてや、かつての家族達。

しかし、それも捨てなければいけない時が、きっと、来る。

――――――――――自分のような、狂人を生み出さないために。

それを言い訳にするためのはやてだと。

ああ、俺は本当に最悪な人間だ。

だが、今更この生き方は止められない。

あの時、大切な妹を失った時に決めたんだ。

（本当に、不器用だね。お兄ちゃん。）

懐かしい声が聞こえた気がする。
ああ、お兄ちゃんは変わって無いんだよ。
笑うかい？

『では、一つだけ聞かせてくれ。お前は何を望む？』
「レオハルト……。」
『私はどんな答えであろうとも、お前の力で在り続ける。だから、教えてくれ。』

けっ。デバイス風情が、人情でも持ったつもりか。
だが、……今はそれがとてつもなく嬉しい。
俺は一人じゃないと、思っていられるから。

「俺の目的は……。」

――――――――――――――――――――この汚れきった管理局を

――――――――――――――――――――妹を殺した管理局を

「浄化することだ。」

俺が狂っているのはわかりきっている。
しかし、それでも俺は、この短い人生で、何かを遺してみせる。
何かはわからない。
けど、わからないほうが面白い。

俺は飛べない翼を羽ばたかせる。
たとえ途中で堕ちてしまうとしても、この身を地面に横たえる其の時までは
空を仰いで飛んでいたい……

それが、俺の生き方だ

八話　次世代の芽（後書き）

はい、コレにて無印編完結となります。
これなら、事実上の不介入ですね。
でも、それでいいんです。

なのは達はほとんど原作どおりに物語を進め、このＰＴ事件は完結します。
主人公はその間、他の任務とはやての家を行ったり来たり～。

所詮はプロローグです。
ここからエルの物語は始まるって言っても過言ではありません。
次は、エルの過去を語る時です。

頑張るんで、みなさん応援、感想よろしくお願いします。
読んでもらってるんだと思うと、作者のモチベーションが半端無くなりますので。

さて、
ここでお知らせです。
作者の諸事情で、これから五日間、投稿が止まります。

決して書き溜め分が終わったわけではなく、完全な予定ミスです。
さっきあんなこと言っておいてすいません。

戻ってきたら、二話か三話、一気に投稿します。

次回は３１日です。

エル「ん？それだけか？八月の初めにも投稿できない期間があるんじゃなかったっけ？」

う

その時がきたらまた謝るよ！！

それでは読者の皆さん、また次回！！

九話　幸福の記憶　（前書き）

みなさん、お待たせいたしました。
今日から更新を再開いたします。

しかし、三日からまた投稿できなくなるという……（汗）

その間、更新頑張るぜ！！

九話　幸福の記憶

これは、欠陥者が高町なのは達と出会う、ずっと前。
彼にとって忘れがたき、幸福の記憶。

場面は管理局に存在する、無限書庫である。
多くの司書が、自らの役割を果たさんとせわしなく働いている。
その中で、一人とても幼い少年が、魔法で本を手繰り寄せ、書物整理している姿が見受けられた。

手繰り寄せられる本の数は、他の司書に比べると明らかに少数であるが、少年の表情は一生懸命である。

「エルンスト君。頼んでいた分は終わったかい？」
「あ、はい！頼まれた分はすっかり。今、担当者がいなかったトコを整理中です！」
「おお、そうかい。じゃぁ、それが終わったら今日は終わりにしよう。残り、がんばってくれ。」
「はい！！」

話しかけたのは、この書庫の現司書長である。
いつも表情は穏やかで、子供が大好きな好々爺である。
そんな老人が、少年も大好きだった。

それから数時間、少年は自らの仕事を終え、帰路についていた。
たとえ、6歳で司書官になった天才と言えども、幼い子供。
必ず誰かが家まで送り迎えをしてくれていた。

しかし、自分も今年で十だ。

いい加減、過保護もいい所だと思う。
と、少年は背伸びした事を思いながら我が家の玄関を開ける。

だが、大人から見ては、六歳も十歳も変わらない。
危なっかしくて、世間知らずのお子様なのだ。
ただでさえそれが、大人の職場で過ごしているのだ。
過保護になったとしてもなんら異常ではない。

むしろ、真っ当な大人であれば、当然の感情である。

たとえ、どんなに賢くとも、大人の気持ちがわからないのだから、
まだまだ子供なのだ。

「ただいま～！！」
「お帰りなさい！！お兄ちゃん！」

彼を出迎えたのは、彼の実の妹である、フィオラ。今年で七歳である。
兄と似て、綺麗な黒髪を持つ可愛らしい妹だった。

兄、エルもまた、親譲りの１０とは思えない整った顔立ちと、綺麗な黒髪を持っている。
その容姿は、管理局内でも人気である。

ただし本人は少し恥ずかしく、あまり騒ぎを大きくして欲しくないようだ。

「どうだった？寂しくなかったか？」
「うん！！友達がいるから大丈夫！！」
「はは、よかった。」

フィオラはミッドの幼児教育施設に通っている。
小学校とも、幼稚園とも言えるだろう。

そのお金を払っているのは、ほかならぬ兄。エルンストであった。

「じゃあ晩御飯にしよう？一緒に作る？」
「うん！」

この家に、家族は二人だけである……。

エルンスト、フィオラ。

二人は幼くして、二人の両親を失った。
幼かったので、あまり詳しく覚えていないが、厳しくも優しく教育してくれたのは覚えている。
両親は、どちらも管理局で働いていた魔導師であった。
どちらも仕事の失敗で命を落とした。

それ自体は何も珍しくない。
それはわかっていても、これほどに幼い二人が残されたのは、不憫と言うほか無い。

幼いながらも、賢かったエルは、どうやって生き残るのかを必死に考えた。
いや、賢すぎたのだ。
現実に絶望する前に、現実を客観的に認識した。
そうしなければ生き残れるはずが無かったのだ。

それこそ血を吐くような努力を重ね、知識を蓄えた。
彼は幼い。それで大人達に認められるには、力よりも知識を選択したのは当然の判断であった。

そうして彼は文字通り、実力で管理局に入局し、たった一人の家族を養っている。

周りを彼を『天才』と呼ぶ。

何を言っているのだ。と、エルは周りを辟易していた。

あなた達とは違う。
こちらは生き残りが掛かっている。
出来なければ、惨めに死ぬだけだ。
出世だとか、給料だとか、そんな簡単なことしか考えていない人達とは違う。

エルはどんなに天才と呼ばれようとも、自分より、他人を褒め、羨む彼らのほうが幸せだということを知っていた。

自分達に、普通の家族の幸せは望めない。
それはわかっている。
さらに言うなれば、天才でもない。
幸せに、無邪気に過ごす幼年期を全て学習に費やしただけだ。
けれど、

「おいしいね♪お兄ちゃん。」
「ああ、今日のは自信作なんだ。」

妹とのささやかな幸せがある。
それがあれば、また明日から頑張れる。
それで、いいさ。

大金持ちにならなくたっていい。
高い位に就かなくたって良い。

妹の笑顔の前では、そんな欲望など、こうも簡単に霞む。

彼女がまた、すばらしい明日を照らしてくれるだろう。

だから、自分を照らしてくれる、唯一無二の太陽を、守って行けば良い。

それだけの力が今の自分にはある。

そう、幼心に信じきっていた。

あの時が、来るまでは……。

十話　拡散する狂気（前書き）

過去編も、無印と同じくらいの話数で終わるかな？

今日は三話投稿予定。

十話　拡散する狂気

いつも通りの朝。

妹を見送って、出勤して、お昼休みに司書長とお話をして、先輩にお見送りしてもらって。

なにも、変わらない。何も悪い事もしていない。

なのに、なのに、どうして!!

「フィ……オラ？」

「お、兄ちゃん……。」

帰ってきて最初に見たのは、本のような物に、彼女が呑み込まれている姿だった。

その体の左半分はすでに呑み込まれ、右半分だけが、残っている。

しかし、その右半分も少しずつ、少しずつ引きずり込まれているのがわかる。

「あ、あぁ！フィオラァァァ!!」

エルは必死に、妹の腕を引っ張るが、意味を成さない。

「お兄ちゃん……ゴメンネ。」

「どうして謝るんだよ!!どうして!!どうしてぇぇ!!」

それを最後に、一息に本に呑み込まれた。

残ったのは、一人の少年と本。

「なんなんだよ！！これは！！！フィオラを返せぇぇ！！」

喉がつぶれんばかりに、叫ぶ。

返ってきたのは、無機質な女性の声。

『媒体の捕獲に成功。』

「なにを言ってんだよ！！」

『これより、憎しみの蒐集を開始する。』

かえってくるのはこちらを無視した、活動報告。

「おい、てめぇぇぇ！！」

本に手を伸ばそうとするが、本に触れたとたん、弾き飛ばされ、部屋の壁に叩きつけられる。

「が、はっ！！」

『目的は達成。この次元を離脱。』

「ま……て。」

本は、辺りに暗い気を充満させたかと思えば、次の瞬間には掻き消えた気と共に、消えた。

うそだ。
何があった。
こんな事起こるはずがない。
だって…………あまりにも理不尽じゃないか…………。
だってだってだってだってだって、うそだうそだうそだうそだうそだ
俺が守るって、決めたのに。
いやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ
その力があるって信じてたのに、

「う、うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああああ！！！」

狂気の叫び声が部屋に響く。
エルという人間が、人間として壊れた瞬間でもある。

次にエルが思ったことは実に単純であった。
奪われたのなら、取り返せば良い。
それには、肉体的に強くなる必要がある。
しかし、こちらの体はなんの特別な力も無い、十歳の少年の体。
運動なんてここ数年はからっきしだったから、体力はそこらの子供にも負けるだろう。

……このままではいけない。

彼は早速、体を鍛え始めた。
それに飽き足らず、魔導師として管理局で働く事を決めた。

結局、彼は感情と知識が隔離されていた。
それは職業軍人の如く、やること成すことを、割り切る。

賢すぎたのだ。エルは。

彼の心はすでに決壊していた。
それでも、日常生活を過ごせるのは、妹への念と、生き残りを賭けた防衛本能。

そのまま部屋で塞ぎこむのがどんなに楽か。

しかし、幼い時に染み付いた、「自分が働かなければ死ぬ」という強迫観念が体を無理やりにでも稼働させる。

エルは、働くの止めたら死んでしまうだろう。
それはまるで生き急ぐ蛍のようでもあった。

「はぁはぁはぁ……はっ、はぁ……」
息も絶え絶え、足もふらふらに立っているのは、エル。
体を防護するバリアジャケットも、煤だらけである。
それでも、その眼光だけは一切の衰えを見せていない。

「……ふん。」
「がはっ！！」

教官が放った誘導魔法に、反応するが、体が追いつかずに命中する。
吹き飛ばされ、訓練場の壁に叩きつけられた。

「今日はここまで、まだまだ魔法の組み立てが甘い。以上だ。」
「……はい。ありがとうございました。」

最近ずっと、訓練後に言うことはいつも一緒だ。
いい加減、成長しない自分に辟易しているのだろう。　と、火照った体とは裏腹に、冷静な思考でエルは判断する。
教官は、エルに興味のない一瞥をくれると、入り口に向かっていく。
それと入れ替わるように、入ってくる年上の同期達。

「ハハハ。今日もボコされたのか。よくがんばるねぇ。」
「それにしたって成長しないな？ん？天才。」
「やめとけって。ガリ勉に戦闘は無理って事だよ。」
「違いねぇ！！ハハハハハ！！！」

年上たちの心無い言葉。
しかし、リンカーコアが発達しない自分には、新しい魔法は使えない。

つまり、エルの魔法は成長しない
だから、彼らの言うことは正しく。

「すいません。……みなさん。」

反論も何も出来ず、謝るしかなかった。

少しでも、戦闘で優位になるためにどうすべきか、
それを考えたエルは、今まですることの無かった、デバイス製作にも取り組んだ。

ただ、就職先を広げるためにと取っていた資格「デバイスマイスター」
がこんな形で役に立つとは思っていなかった。

自らの絶望的な魔力差。
それを念頭において、製作した最初のデバイス名を「オーギル」
後に、ノブリスオブリージュへと繋がる、原型。

初めて出来た相棒と共に、彼は不毛な日常を過ごし始めたのだった。

すべては、妹と復讐のため……。

十話　拡散する狂気（後書き）

デバイス解説&考察

オーギル

エルが最初に製作したストレージデバイス。

ノブリスには二基、マジックジェネレーターが設置されているのに対して、
こちらは一基。

穂先の変形機構も採用されておらず、使用できるのは、レイとブレードのみ。

（ノブリスにはダガーと、ブラスターが増設されている。）

長さも、当時のエルの身長にあわせた、短槍になっている。

なのは（１９）「へ～、最初はストレージデバイスだったんだ～」
エル（２０）「この美人さん……誰だ？」

あぁ、そろそろゲストが欲しいだろうと思ってね。ちょっと未来から来ていただいた。

エル「なのは？！十九歳！？一個下かよ。てかすげぇ美人になってんだな～。」

な「び、美人……ポッ」

同年代同年代五月蝿いから、つれてきてやったお。（誤字にあらず）

エル「うん。俺が若いままなのが更にハラショォォォォ！！作者、たまには良い仕事するではないか。」

うむうむ。さて、話が纏まった所で、解説お願いしますよ。

エル「うむ。俺が幼いころに使っていたからな。機能も発想も未熟な作品だ。他の魔法の触媒としても使えないしな。」

な「それって、レイとブレード以外は自分だけで魔法を組み立てるって事でしょ？ちょっと使い辛いんじゃ…。」

エ「いいんだよ。その頃は、今以上に魔法なんて使えなかったし、できてもレーザー一発がいいとこだ。」

な「ふ～ん。あ！質問なの！」

はい、高町さん。

な「ずっと気になってたんだけど、このマジックジェネレーターって？」

エ「ああ、それね。なのははＳＬＢとか使うとき、辺りの魔力を収束するだろ？これは、自発的に、更には継続的に辺りの魔力を収束して貯蔵する機関だ。溜め込んどいて、いざ使うときに貯金から引

き出すって事だ。俺じゃその工程ができないからな。」

な「へぇ～。もっと大きくすればもっと魔法使えるんじゃ？」

エ「そうだな。大きくしたのは、実際に戦艦なんかに使われているぞ。メインエンジンとは言い切れないけどな。しかし、大きすぎると戦闘の邪魔だし、もし攻撃を喰らったときの誘爆にも繋がらないとも限らない。それを踏まえた上では、このくらいの大きさでしか積載できないって事だ。」

な「ふ～ん」

その点では、レイジングハートの安全性に関しては完璧です。日ごろのメンテのおかげも在るでしょうが、デバイス剛性が高いから成せる業ですね。

エル「他に質問は？」

な「ありませ～ん。」

じゃ、今日のデバイス講習はここまで。

みなさん、また次回！！

エ&な「さよ～なら～！！」

十一話　二つの魔本（前書き）

いやいや、お気に入り登録してくれてありがとう、みなさん。

こんな作品をねぇ？もう、なんと言っていいやら。

誰かが読んでくれていると思うと、やる気が俄然出てくるものです。

十一話　二つの魔本

「……ちっ、これも違う。」

エルは一人で、この無限書庫に入り浸っていた。
過去に勤務していたこともあって、部屋を貸してもらうことは容易であった。
ただ、妹を失う前のエルを知っている局員は、一様に彼の変化に驚き、悲痛な表情を作った。
顔は頬がこけ、眼の下にはクマができている。
幼い体とは不釣合いなほどに引き締まった肉体は、違和感と痛々しさを見せ付ける。
優しい色をしていた眼も、明るい色を失い、ギラギラと獲物を狙う鋭い眼光に成り果てている。

彼は今年で１２歳。
二年という歳月は、少年を変貌させるには十分な時間だったということか……。

ただ読書に来たわけではない。
調べるのは、二年前に妹を奪った、本。
彼は日ごろから、この本について調べ続けていた。

しかし、個人では調べられる深さには限度がある。
ある程度の全体像をエルは掴み、この無限書庫で確定するべく来たのだ。

似たようなロストロギアで、該当は二件。

一つは『夜天の書』
魔法を書き留め、持ち主の力とする魔導書。
しかしこれは、あるものによって『闇の書』として破壊の兵器に書き換えられたとか。
たしかに、あの姿は『闇の書』に足る存在だ。

そして、もう一つは『煉獄の書』
これは管理局が呼称を決めた、勝手な名前だが、
（管理局が観測したロストロギアは大抵がそうであるが）
夜天が魔法を貯蔵するのに対し、こちらは人々の記憶と想いを貯蔵し、後世にその時の感情を、後世に伝える物だったらしい。
しかし、記憶を集めると、魔力が発生するという点を悪用した者によって、『憎しみ』を蒐集するようにプログラムされた。
人間の感情で、最も激しいのは、うらみつらみだ。
それに比例して、獲得できる魔力にも差が現れる。
それを利用したって事なのだろう。

俺は覚えている。

（憎しみの蒐集を開始）

ああ、あんな事を言っていた。
ならば、どちらが当たりかはほぼ確実だ。

「煉獄の書……。待ってろよ。」

一人、あの本への憎しみを再確認する。

おれは……絶対に、アイツをぶっ壊してやる。
俺の人生を壊してくれたんだ。こちらも壊し返さないと、気が済まん！！

『媒体の生命力、著しく低下。』

『媒体の親族と判断』

『媒体資質、あり』

『よって』

『次の媒体を、確定』

『現媒体の、生命活動の停止を確認。残存魔力による稼動可能時間、約２３００時間。』

『了承。これより、媒体の捕獲を開始する。』

『強大な反応を感知。』

『憎しみの目標、すなわち我。』

『我との接近により、憎しみの膨大を予想』

「！！？」

無限書庫に、突然広がる時空の歪み。
エルは無意識の内に、体を大きく跳ねらせ、机に身を隠す。

「何が起こった！？」

現状確認に、努めようと歪みと思われるほうを、机の端から覗き見る。
直後、心臓が大きく跳ねた。

ドクン

「あれは……。」

歪から姿を現したのは、忘れもしない二年前と、何一つ変わらない魔本。

血が頭に上っていくのが、わかる。
心は熱く、頭は冷静に。

わかっていたって、できない。
だって、目の前に妹を奪った敵そのものがいるのだから！！

「あ、あああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

デバイス「オーギル」を即座に起動し、高速の刺突を繰り出す。
しかし、それは本に張られたプロテクションに阻まれる。

『捕獲、開始』

その言葉を聞いた途端、本が項を開け、二つの触手が飛び出す。

「ちっ！！」

短槍を振り回し、なんとか二つの触手を払いのけ、一度距離を取る。

「レーザー！！」

魔法の術式を起動し、彼の頭上に一つの歪みが発生する。
そして、再度突撃。

迎撃するように触手が飛び出すが、それを紙一重で身をかがめる事で回避する。
本は目の前、この槍を突き出せば、届く位置……だが、
更に、本から二本の触手が不意打ちのように飛び出す。

「っ！！う、おぉぉぉぉぉぉ！！」

大きく、上へと跳躍して、なんとか触手を回避し、無理やり体勢を整える。
空中では、次の回避行動が極端に困難になる。
褒められた行為ではないが、今に限っては別である。

（レーザー射出！！）

エルがそう念じるだけで、彼に追随していた歪みは、魔力の帯を射出させる。
さらに、追い討ちとしてデバイスを向け、

「レイ！！」

デバイスの砲撃魔法も打ち出す。

必勝の連撃ではあったが、その全てが、本の項に吸い込まれた。

「なっ！！」

エルの驚きを合図にするかのように、目標を逃した触手たちが、空中のエルに殺到する。
しかし、このまま只で終わるわけにはいかない。
今までの恨みは、こんなものではない。

「うおおおおぉぉぉ！！」

槍を下に向け、全体重を乗せて魔本へと落下する。

四つの触手が体にへばりついてきたが、気に止めない。

しかし、エルの渾身の一撃が届く事は無かった。
本が巨大な獣の口のように、項を更に大きく広げ、エルを丸ごと呑み込んだからだ。

驚愕する頃には、すでに本の中。
全身を巨大なプリンに圧迫されているかのような感覚。
どうしようもなかった。

（畜生、畜生！！フィオラ……ごめんよ）

混濁する意識の中、エルは頭の中で愛する妹へ謝り続けていた……
……。

そして、意識は間もなく、途絶えた。

十二話　絶望

『媒体の捕獲を確認。』

『これより、「憎しみ」の蒐集を開始する。』

辺りは何も無く、果てのない闇が包んでいる。
その中で、エルは意識を覚醒させた。

「は……俺は、呑みこれちまったんだがな。」

どうやら生きているらしい。
そう言おうとしたが、口を紡ぐ。

生きていると錯覚させられているだけかもしれないし、全てが幻想なのかもしれないと思ったからだ。

立ち上がり、辺りを見回すが、何も無い。
闇だけが立ちこめ、異常な孤独感と不安感を心に生み出す。

（こんなとこに、フィオラが……頼む！！生きていてくれ！！）

フィオラを探すため、足に力を入れたところで、背後から声が掛かる。

「その願望は無意味です」

「誰だ！！」

心を読むかの如くに、背後からかけられた声に怒号を返し、振り返る。

そこには、１８、９に見える銀髪のショートカットの女性がいた。
深紅のような赤い眼が、こちらをじっと見据えている。
その表情はどこまでも無表情で、人間らしさをかけらも感じる事は無かった。

「これより、あなたの憎しみを蒐集します。」

「何を……言ってやがる。」

質問に答えない女性に、苛立ちを募らせ睨むが、

「怒るのならどうぞ。それがこの本にとって、最高の土壌となりますから。」

気にした風も無く、さらりと受け流される。

内心、エルは毒づく。

ここが本の内側なのだとしたら、俺では手の出しようがない。
最優先目的は……妹の救出。

「ちっ。俺は妹を救いに来ただけだ。それが終わったら、早々に帰る方法を見つけて出て行くさ。」
「不可能です。あなたがここにいると言うことは、魂ごとこの本に結び付けられたと言うことです。本が媒体を開放するか、内側から本を破壊するかの二つだけですが、前者はまずありえません。後者は更にありえません。……たとえ話で表現しましょうか。そうですね。たとえ、体内に入ったとしても蟻では象を殺せない。つまりはそういうことです。」

それに、と女性はある一点を指差す。

「あなたの妹は『アレ』でしょう?」

「え?」

目を向けた先には、もはや人とは思えない、皮と骨の集まり。
肌は干からびて、全身の血と言う血を抜かれたような、まるでミイラ。
コレが妹などと信じたくは無い。信じるものか。

「あ、……あぁぁ……。」

しかし、気づいてしまったのだ。
ミイラが着ている服が、離れ離れになる直前に、来ていたものと同

一だということに……。
今でも思い出す。
彼女のお気に入りの服だった。

俺が送った、誕生日プレゼントでもあった服でもあった。

（おにいちゃん、晩御飯は？）

（おにいちゃん、コレおいしい！！）

（すっごく可愛い服！ありがとう、お兄ちゃん！！）

（おにいちゃん……ごめんね）

いつの間にか、エルの周りには無数の影が現れていた。

どうして考え付かなかったのだろう。
いや、考えたくなかったんだ。
普通、二年も経てば、救出なんて絶望的だ。
そんなの常識だと言うのに。

闇で、姿が見えない中、その殺意のこもった目だけは爛々と獲物を狙っている。

妹の死という真実を直視するのが嫌で、逃げ続けていたのに。
目の前に、真実が形をもって存在している。

妹は、死んだのだ……。

影が、獲物に飛び掛らんと身構える。

「あ、ああ、あああ！！！！！！！！！！！！！」

人ならざる声を上げ、エルは飛び掛ってくる影に、ぶつかるように飛び掛った。

向かってくる全てを自らのデバイスでなぎ払う。
右と左から来たのなら、二匹とも一振りで両断する。
さきに向かってきた敵を、後ろの敵へと蹴り飛ばし、二匹とも串刺しにする。

ありとあらゆる殺戮技術を駆使した。
ただ、憎しみの赴くままに。

これが、永遠と続く憎しみの蒐集。
憎しみは更なる憎しみを呼び、混沌の渦へと呑み込まれていく。
それは新たな闇となり、眼前に覆いかぶさる。

誰かが言った。

『明けない夜はない』

しかし、この世界の闇は……永遠に晴れない……。

十三話　地獄

目の前では、未だに少年が大勢の影を相手に槍を振り回している。
最初は、新品同様な輝きを持っていた槍も、まるで廃棄寸前の鉄パイプのようなみすぼらしさに変貌している。
それでも、その槍は主人の力になろうとしているのか、懸命に魔力刃を形成し続けている。

「本当に、強いのね。心も体も。あなたのお兄さんは。」

銀髪の少女は、物言わぬ骸に語りかける。
もちろん返事はない。
それでも少女は語り続ける。
その声は、まるで親友にでも話しかけているようでもあった。

「ここは時空の狭間でもある。ここで何時間、何日、何年過ごそうとも、外からは一秒も経っては居ない。死ぬまで彼の、想い、憎しみ、悲しみを蒐集して、死んだらまた次の媒介の元へと向かう。」

少女はそこで一度、独白を止め、表情を曇らせる。
それはエルに見せていた人形のような表情ではなく、年相応の少女の顔だった。

「あなたが想い続けた全ては、混沌の流れに呑み込まれ、あなたは死んでしまった……。」

「あなたは本当に強い子だった。こんな境遇を嘆くこともせず、た

だ兄の助けを待った。それだけに飽き足らず、この本の管制人格でもある私を『友達』と呼んでくれた……。」

彼女の瞳に、うっすらと涙が生まれる。

「体感時間五年。それが貴方がここにいた時間。それで、あなたの憎しみも、苦しみも、喜びもすべて搾り尽された。……五年なんて、どうしてそこまで耐えられたのか、想像もつかないわ。」

でも、と付け足す。

「あなたのお兄さんはすでに十年は経ったわ。あんな風に、ずっと戦い続けてね……。

この世界での死は、感情を亡くす事。十年を過ぎても、彼の感情に衰えは感じられない。

尋常じゃないほどの憎しみを今も発し続けて、ね。」

今一度、群がる影の中を躍る少年を注視する。

「あぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁ！！」

エルはもう人と認識できる声は発していない。

ただ殺戮を繰り返す、災害と成り果てている。

彼は文字通り、休みなしでこの十年を戦い続けていた。

怨嗟の断末を上げ続けながら……。

しゃべる事は勿論。彼にはもはや時間の感覚も、生きている感覚すらない。

残っているのは、効率的に敵を殺す殺戮技巧のみ。
この世界に、物質的な死は無い。
腹も空かないし、傷を負う事も無い。

しかし、食事とは日常の楽しみでもある。
それが摂れないと、当然ストレスも溜まる。
体に穴が開いたりしたり、体の一部が無くなったりと認識すれば、
当然気持ちが悪い。

つまり、そういう削り方なのだ。
それが積もり続け、精神的に『死』が訪れたとき、媒介は死ぬ。
それこそ、この少女のように痩せ細り、絶望して死んでいくのだ。

だが、少年にはそれが見られない。

完全に感情を失い、ただの殺人鬼になり果てているのなら既に消えている筈。
それが無い、ということは、彼は今も明確な感情を持って戦っている事になる。

それが、本当に強い理由。

捨ててしまえばどんなに楽か。どのみち、最後は誰も同じだと言うのに……。

少女は、その救われない未来に、一人涙した……。

クルシイクルシイクルシイクルシイ
タスケテタスケテ
コンナカンジョウナンテステテシマイタイ

五月蝿い。黙れ。

ステテオマエモシンデシマエ
シンデシマエ
シンデシマエ！！

黙れ！！！

苦しいさ、苦しくないわけ無いだろう。
でもな、フィオラはきっと、もっと苦しかった。
俺を、こんな地獄でずっと待っていたんだ。きっと！！

フィオラをこんな目に遭わせた奴らがとてつもなく憎い。
それは、彼女を助けられなかった俺も入っている。

憎い！！

こんな目に遭わせた奴らを、皆殺しにしないと気が済まん！！

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

怨敵への恨みは、敵へと奔らせる刃と変わり、自らへの憎しみは、震える体を突き動かす邪悪な活力へと。
それは、きっとこの世で最も効率的、最高の循環機関。
しかしそれと同時に、この世で最も邪悪で危険な感情でもあるだろう。

彼が、ここに来る前、確かにフィオラはここにいた。
彼女は兄への想いを糧に、ここで耐え続けた。

今でも覚えている。
ひたすら闇の中、手を合わせ祈りをささげているような姿を。
それは十にも満たない少女の姿ではなかった。

多くの媒介を見てきたからわかる。

ここに来たものの殆どが、

最初に憤怒し、次に号泣し、最後に狂って死ぬ。

しかし彼女は怒りもしない、泣きもしなかった。

そんな彼女に驚愕すると共に、少し興味が湧いてしまった。

今思えば、ここで興味を持たなければ、いまのこの胸の苦しみは無かったのではないかと思う。

何に、憎んでいるの？

耐え切れず、問いた。

少女はゆっくりと瞳を開けると、可愛らしい幼い少女特有の高い声で応えた。

「憎む相手なんていないよ。だって、私はお兄ちゃんにしか興味がないもの。」

彼女の大人びた発言に少々驚いたが、少し違和感を感じた。

興味がない？知らないのではなくて？

「うん。私の友達はとってもいい子達ばかり。でもね、必死じゃないんだ。どうしてこんなにもお気楽に生きてるんだろうって思って。」

友達と言うことは、当然同年代ということだ。
十にも満たない子供達はみな、無邪気だ。
お気楽とはすこしニュアンスが違うと思うが……うん、確かにお気楽だろう。

「それに比べて、お兄ちゃんは常に必死。全てに全力で。同じ十歳でも、お兄ちゃんのほうが断然大人。……その差って何？」

なんだこの少女は？
本当に六歳の少女なのか？

「ううん。知ってるんだ。お兄ちゃんが私のために必死に働いてること。お父さん、お母さんが死んでから、遊びを忘れてお勉強してたのを知ってる。私はそれをずっと見てきたんだもん。だから私もお兄ちゃんを見習わなきゃなって……。」

兄と同じで、彼女も人並みはずれて賢かった……ということだろう。
彼女の語りは、万民に聖なる教えを説く聖職者と会話しているのかと、錯覚させる。

「今はお兄ちゃんには勝てないけど……私もお勉強してるんだ。お兄ちゃんと二人で働くために。でも、お兄ちゃんは私に『無邪気な妹』で居て欲しいみたい。だから私は無邪気でいるの。ううん、無邪気で居られる。」

少女が兄の事が大好きであるのはよくわかった。

しかし、ここにこうしていられるのはどういうことか？
あくまでこの本は、人間の憎しみ、及びそれに準ずる悪の感情しか収集できない。

つまり、悪の感情を発せない限りは、管理元から切り捨てられるのだ。
ここに存在することは、憎しみを発していることだ。

それを証明するように、この本に『憎しみ』が蒐集されているのを今も感じている。

彼女の話では、誰も憎んで居ない。なのにどうして？

「憎む相手は……そういえば居たな。」

なに？
だって先ほどは……

「ずっと前から、いっつも思っていたから、当たり前になっちゃってたのかな？さっきの話は無しね。私には憎む相手が居る。」

それは……。

「お兄ちゃんをこんな目に合わせて、自分達だけ居なくなった、両親かな？」

彼女の表情を窺うが、そこには先ほどと変わらない無表情。

当たり前すぎて、今更口にしても、特別感情は生まれないのだろうか。

「だって、あの二人が居なくならなければ、お兄ちゃんはこんな目に遭う事も無かった。
両親が居たら、きっと今も笑って、お気楽な友達みたいに遊んでた……私もそう。」

「お兄ちゃんにだけ、苦しませて居なくなったあの二人が許せない！！」

突如、彼女の感情が爆発した。
いままで溜まっていたものが噴き出したのだろう。

ああ、そうだった。
どんなに大人げな会話をしていても、いまだ彼女は六歳なのだ。
堪えろというほうが酷であろう。

なんだか、彼女の内面は随分とチグハグだと感じた。

「うぅ…ひぐっ、おにいちゃん…会いたいよぅ…うぅ。」

だが、それも仕方ないだろう、感情が不安定であるのも、子供の証だ。

「え？」

知らず、抱きしめていた。
こんなことをするべきではない。
結局は死んでしまう人だ。

それでも、こうしなければいけない気がした。
私も……変わったな。

そう、他人事のように思う。

十三話　地獄（後書き）

六日まで、更新止まります。

投稿もできないし、書き溜めとく事も出来ないし、本当に厳しいなぁ

そろそろ書き溜め分も終わるので、それが終わったら、更新は少し遅くなります。

十四話　奇跡の軌跡（前書き）

書き溜め分はもう終わります

これから、周一か、週二程度の更新ペースになるかもです

十四話　奇跡の軌跡

「■■■■■■■■■■■■■■■■■！！！」

エルは何かしら叫んでいる。
しかしそれは言語ではないし、勿論人の声ですらない。
彼の顔はすでに死人のように白く、それを強調するかのように深い
深い隈が眼の下にできている。
だと言うのに、目は充血し、爛々と獲物を捉える。
感情などないと言うのに、エルの敵役を演じる影は、睨みつかれる
と、一瞬恐怖したかのようにたじろぐ。
その顔は、獣…………いや、まるで邪神だ。
もう人の顔ですらなかった。

もう限界だ。
そう幾度と無く思ってきた。
もしかしたら、今回で本当に終わりが来るかもしれない。
しかし、まだ続くかもしれない。

いや、止めよう。

そんなこと無意味だ。

そうやって無駄な事をして百年過ごしてきたのだ。私も、彼も。

結局終わりは同じ……そう思っていた。

けど

『警告。警告。警告。』

『過度の魔力蒐集。自壊の危険性あり。』

聞くだけで忌々しい、『本体』の声がさっきから響いている。

ムダが積もり積もって、新たな結果を生み出し始めていた。

彼の異常な、もはや人間を超越した精神が、奇跡を起こし始めていた。

もしかしたら、彼は生き残るかもしれない。

この本の管制人格であるはずなのに、私はこれから起きるかもしれない消滅を待ちわびていた。

『危険。危険。』

『媒介からの魔力蒐集をカット。』

『空間内、憎しみにより充満。カットは不可能』

『防護。防護。消去。消去。』

『了承。これより、最大個体により脅威の消滅に移行』

『了承。排除、開始』

人間を搾取し続けた魔本が、一人の人間を『脅威』とした。

突然消えた影。

エルは周囲を人ならざる目で見回す。

無論、仇敵を求めて。

彼の手に握られている相棒は、すでに機能停止している。

半ばからポッキリと折れた相棒を、撥のように両手に持っている。

もはや光沢らしい光沢は無く、ただの鉄の棒とすら認識が出来ない。

それでも大事な相棒なのだと、確かめるようにもう一度強く握りなおした。

「流石。彼女のお兄ちゃん。まさかここまで来るなんてね。」

標的を見つけた。
忘れもしない。妹の仇。
そういえば殺していなかったと、本能が叫ぶ。
もはや理性で思考する機能すらない。

「私をころしたいならどうぞ？けれど、あなたの後ろの『仇』のほうが優先でしょうね。」

そう言われて、後ろを振り向く。

そこには、形容できない巨大な化け物。
人の認識を超えた化け物である。

腕はカマキリに見えるかもしれないし、蟹にも見えるかもしれない。
足は蜘蛛のように見えるかもしれないが、百足のようにも見えるかもしれない。
頭は鯨のように見えるかもしれないし、いや人の顔だと言う者もいるかもしれない。

そんな理解不能は存在が、そこにいた。

明らかに質が違う。

明確な殺意がこちらに向けられている気がする。

「今までのような蒐集目的とは違う。あなたを殺しに来ている。こ

こに長く存在したあなたは、本とすでに癒着してしまっている。それを強引に引き離すためには殺すしかない。」

つまり、人間では理解不能なまでの死に方をすればいいだけ。
そうすれば、いかに感情が残っていようが、体そのものが存続を拒絶する。

これは本当の殺し合い。

化け物は、大きく腕を振りかぶる。エルは当然回避しようとする。

「邪念縛」

しかし化け物は、爪先に突然現れた凶悪な盾に、腕が引っかかり、攻撃を断念する。
それは、本の辺りを纏っていた闇。闇は溢れ、怪物の全身にまとわりつき、行動を制限している。
詠唱したのは、銀髪の少女。
エルは不審に思い、彼女を睨む。

少女は悲しそうな笑顔を作り、

「手伝うわ」

とだけ言った。

短いが、それ故に明確な応え。

エルも、忘れかけていた言語を思い出し、

「アレをコロしたら、ツギはオマエだ。」

チグハグな発音でそうとだけ応えた。
そして化け物に向き直る。

「私は行動しか止められない。止めはあなたがして。」

もしかしたら、彼は私を救ってくれるかもしれない。
死と言う手段を以って。

淡い希望、しかし明確な願望が詰まった感情を抱きながら、彼女は詠唱を唱え始める。
彼女の妹の願い、『友達』の願い実現させるために。

最初に駆けたのはエル。
駆け抜けるスピードももはや尋常ではない。
エルは試しに、そこらの皮膚らしきものを叩いてみても、効果はまるでない。
それは最初からわかっていたことだ。

なら、弱点を突いていくしかない。

頭部をみる。

無数の目が生えているのを確認した。
それを見て、不敵にエルは笑った。

どうやら、敵の体の自由は、あの少女が押さえているらしい。
それならば好機と、掴めそうなところを探して、よじ登る。
つかめそうなところがない時は、手に持った撥を突き刺して、一時の手摺とした。

上下左右から、彼を止めんと無数の触手やら爪やらが飛び出すが、驚異的な状況判断と行動予測で回避しきる。
手すり、手すりを踊るように飛び跳ねて避けるその姿は、オランウータンやサルを髣髴とさせた。

そうして頭部までよじ登ると、不敵な笑みを邪悪な笑顔に変え、頭部の眼球を一つ一つ、丹念に撥で突き刺し、潰していく。

「■■■■■■■■■■■■■■■■■!!!!!」

眼球を潰されるたびに、化け物は身を捩らせ痛みでのた打ち回ろうとするが、動けない。
口から巨大な咆哮を搾り出すだけだ。

眼球をあらかた潰しまわると、今度は潰した眼球に更に深く突き刺し、撥を掻き混ぜる。
眼球があった窪みが、いつの間にかゼリーの受け皿のようになってしまっている。

もはや人間の精神では実行不可能の思考に、少女は軽く恐怖する。

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■！！！！！！！！！」

しかし、化け物には相当なダメージなのは確かなようだ。
それを幾度も幾度も続ける。
まるで今まで自分がうけた絶望を返却するかのごとく。

こうして、対峙してみて、再確認した。
百年という永遠に近い時間は、彼の精神を悪魔に、彼の戦闘技術を神業の域にまで成長させたと。

それは果たして成長と呼ぶのか。もはやそんなことはどうでもよかった。

人間では理解不能な化け物を、真っ当な人の身で蹂躙している事実のみが、真実だった。

遂に耐え切れられなくなり、怪物は身を倒す。

ズズン！！
確かな質量をもって、巨体を地面に横たえた。

怪物の体は、その後砂のようにサラサラと粒子となり消えていく。

そこでしばしの静寂

「!?」
「始まったわね。」

体が、まるでノイズの入った３Ｄ映像のように歪む。
体の実感が消えていく。

「あなたの憎しみ……魔力がここを満たし、膨れ上がっているのよ。もはや本の許容量を超えた魔力は、自らを破壊し始めているわ。このままではあなたは、本と共に消える。」

少女の口から明かされた真実。
しかし、少年の表情は変わらない。
生き残る気は無い……ということか。

「ここで、管制人格である私を殺せば、魔力をここに留める力も無くなる。そうすれば魔力は外に逃げていくわ。……どうする？」

「フィオラは、モドラナイ。」

少年はそれだけを呟いた。

やはりそうか。ここで死ぬ気か。
彼にとっての人生は、妹のためにあった。ということだろう。
しかし、

「あなたは妹さんの気持ちを無駄にするのね。」

死なせるわけにはいかない。それが私の友達の願いなのだから！！

「ここで彼女は、あなただけを待ち続けたわ。あなたの助けと無事を祈りながら。そんな彼女の気持ちをわかっている？」

「ダマレ…」

「最後まで文句も不満も、言わなかった！もう彼女を助けることは叶わないわ。だったら彼女のもう一つの願いを叶えてあげなさい。」

「だまれ！」

「最後にいった言葉を言いましょうか？あなたも見たでしょう？あのような姿になっても最後は……」

「だまれぇぇぇ！！！」

ズンという低い音。

少女の胸に撥が突き刺さる音。

少女はその場に崩れ落ちる。

「最後は……ゴフッ！……お兄ちゃん、頑張ってって！！」

口から血が吹き出す。

それでもしゃべりを止めない。

どうしても伝えなければいけないことが在る。

「だから……頑張りぬいた貴方は生きなければ……ならない！！

生きて、幸せに、彼女の、願い……。」

下も回らなくなってきた。
そろそろ終わりが来る。

「さぁ、最後よ。……魔力は抜けても、憎しみは抜けない……。貴方に受け止めきれる？」

まわりに充満していた、今までの記憶。
その全ての『闇』が一人の少年に憑依する。

「う、うあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！」

少年は頭を掻き乱し、地面に崩れる。
ここで果てた人達の怨念が勝つか。それとも妹想いの一人の男が勝つか。

「それを……耐えたとき、終わりが……闇が晴れる。」

少女はそう呟き、目を閉じた。結末まで、生き長らえるために。
一分も経っただろうか。少年の絶叫は消え。
静寂が訪れる。

少年……エルは地面に仰向けで倒れていた。
目はもう何も写していない。
しかし、それでも……生きていた。
感情が無くなっていようとも、彼の精神は貪欲に生を求め、しがみついたのだ。

完全なる、エルの勝利である。

それを見届けたのはたった一人。

「はは……強い子だ強い子だと、思っていたけど……これじゃ、規格外だったな……。」

晴れていく闇。

今まで無限の深淵として君臨していた闇が、少しづつ晴れていく。

晴れていく……とは、すこし正確ではない。

抜けていくというのが正しい答え。

少女の胸には大きな穴。

そこから存在もしていない血が大量に吹き出している。

今まで見ることの無かった光。

それが美しくて、痛みを忘れる。

もう、数瞬後にはこの体が完全に消滅するだろう。

ほら、もう足は無くなってきている。

「フィオラ……見てる？あなたのお兄ちゃんは、幸せになれるかも……よ？」

これが彼女の最後の言葉となった。

消えゆく体。

しかし彼女の表情はどこまでも穏やかだった……。

ああ、何を考えていたんだっけ？

だれか、心の中にいた気がする……

まぁ、どうでもいいか

もう眠い……

なにも考えたくない……

ここはどこか、なんて瑣末な問題

多くの憎しみが駆け巡った。
もうだめだ。
そんなに悪く言わないで。
俺は悪くない。
何をしたっていうんだ。俺も、妹も
ただ……妹と……ん？

『イモウト』って誰だっけ？

そうだ、誰かが、居た。
波に呑み込まれそうだったとき、誰かが守ってくれたんだ。
そう、だれかの、記憶。
とても懐かしい、香り。

彼女に……救われた気がする……。

もう……考えても無駄か……寝よう……。

「ねぇ、そこのお兄ちゃん……大丈夫？」

「……ア？」

そこには、子と母の親子。

コレが、エルとテスタロッサとの出会い。
全てを失った欠陥者と、全てを失うことになる家族であった。

十四話　奇跡の軌跡（後書き）

過去編は一応このへんで区切り。

一部、ありえねぇぇとか思っている人も居るでしょう。

そこは未熟な私を罵りください。

十五話　終わりの始まり　前編（前書き）

ａ-ｓ編突入です。
ここから、主人公は積極的に介入しますよ。うん。
やっと見せ場だな、エル。

十五話　終わりの始まり　前編

エルは、ベッドから身を起こす。
その顔は、悲痛な表情に歪んでいた。

「嫌な夢を……久し振りに見ちまったな。」

いい加減、時が傷を癒し始めていたというのに、また傷をえぐるような今回の夢。
見たのは、未熟で、頼りない自らの過去。

「最悪だ。」

そう吐き捨て、エルは私服に着替え、自室を出た

二階の自室を降り、居間に着く。

「あ、おはよう。エルさん。」
「ああ、おはよう。はやて。朝が早いんだな。」
「エルさんが遅すぎるだけとちゃう？」
「そうかな？」
「時間みてみぃ。」

はやては人差し指で、壁に掛けてある時計を指差す。
それは八時半を指していた。
別にそんなに遅くは無いと思うが……やはり成年男性から見た感覚だからだろうか？
どうやらはやてにとっては、遅すぎるらしい。

「う～ん、そうか。ごめんな？朝飯も冷えちまって。というか、起こしてくれてもよかったんだぞ？」
「そうしようと、おもったんやけど……。毎日疲れて帰ってくるし、起こすのもあかんかなぁって……。」

俺は一度優しく微笑むと、はやての頭をなでる。
はやての優しさが本当に、嬉しかった。

「ありがとう。本当に……。」
「あ…、ううん。そないなこと、大したこと、ちゃうやん…。」

はやては赤く頬を染めながら、笑顔で答えてくれた。
ああ、断言しよう。

今は本当に幸せだ。
この幸せを失いたくない。

（だから、絶対に生きて帰ってくるから。）

ＰＴ事件解決から。一週間が経った。
最後の方は、俺はもはや別の任務に就いていたし、完全にクロノ達の活躍のおかげだ。
俺はというと、三提督からの依頼を受けて、ロストロギアの回収に回っていた。
と、いうかあの三人からは、特別難易度が高く、生存率が低いなどのそういった類の仕事しか回ってこない。
他の人物なら殉職の可能性が在るとか無いとか。
なら俺は殉職してもいいのかと聞いても、貴方が一番生存率が高い……なんてのたまいやがった。
それと、貴方が今の管理局を背負う魔導師である。とも。

俺がこうして執務官に就けたのも、魔力に依らない俺の実力を見抜いてくれた彼らのお陰だが、こういった過度の期待は正直苦しい。

俺だって最強でも、不死身でもない。
頭が吹き飛べば、そりゃ死ぬし、腹に穴が空いても、当然死ぬ。
死にたくはない。……けど、やっぱりそうも言ってられないだろう。
管理局の慢性的な人手不足。
平均就職年齢の異常な低さ。

俺がやらなければ、誰がやる？
その誰かがやって、生き残れるか？

管理局はできれば最小の被害で、効率よく仕事をこないしたんだろう。

俺一人がボロボロで帰ってくるのと、機動中隊の半数を失って帰還するのとでは、どちらを選択するべきかは歴然だ。

それが理解できてしまうから、俺も任務を拒む事なんてしない。できない。

だから、精一杯の覚悟で任務に臨む。

そう、俺には俺の帰りを待っている子がいるのだから。

ところ変わって

俺は、プレシア・テスタロッサの病室で、林檎を剥いていた。

なぜか病人の見舞いには、林檎チョイスが多いよな。

「よかった。フェイトとは仲直りできたんだ。」

「ええ。みんなのお陰……。彼女達がいなかったら。私はもっと大きな間違いを犯していた。」

こうして、二人で穏やかな時間を過ごす。

昔に戻ったみたいで、心が人知れず躍る。

「ねぇ……聞いてくれる？」

「……はい。」

プレシアさんが穏やかな、しかし諦めたような表情を作る。

それに察しがついてしまう自分の洞察力が恨めしい。本気でそう思っていた。

「私は……もう長く無いわ。」

「……やっぱり。そうですか。」

予感していたことだから別段驚くことでもない。ただ、やっぱりか、と諦めの念が自分に襲いかかる。

「私がいなくなったら……フェイトを」

「いや、それは辞退させてもらいます。」

「……どうして？」

「俺じゃ、たった一人じゃ、家族にはなれない。俺という部外者は、母さん、貴女という柱が無ければ立ち入れない。俺とアリシアならともかく、彼女はフェイトだ。俺とはなんの接点も無い……ね。」

「そう……ね。」

悲しいことだが、俺とフェイトは赤の他人だ。

アリシアはアリシア。フェイトはフェイトなのだから。

「大丈夫ですよ。彼女と一緒に居てくれる人はきっと居ます。それにはなんの心配も及びませんよ。」

「そう……そうね。エルはいつも、不安なとき、安心させてくれるわね。」

俺はそれに笑顔で応える。

安心してくれたなら、それでいい。

「私は……あなたに本当に感謝してるわ。」

「え？俺はなにも……。」

「あなたの言葉があったから、フェイトの手を、想いを受け取ることができた。そうして大事な娘を失わずに済んだ。きっと……エルの言葉がなかったら、きっと死んでいたわ。」

なら、俺の行動も、そう無駄じゃなかったってことか。

うん、それなら、本当によかった……。

「俺は、待ってます。二人が、幸せに暮らす時が来るのを。たとえ、その時間が短くとも……。」

「ありがとう。……ふふっ、大人になって、本当に良い男になったわね。」

「う？そ、そうですか？」

「ええ、一時の母であった私でさえ、あなたに惚れそうだもの。」

あの、えと……。

いろいろと問題発言はあったが、そう言ってくれるのは、純粋に男として嬉しいな。

プレシアさんみたいな美人なら……っとあぶない！！出て行け雑念！！

俺が欲望と戦闘していると、コンコンと控えめにドアがノックされ

た。

「失礼します、お母さん。……え？」

入ってきたのは、フェイトだった。

俺という、繋がりの無い人物が居て、不思議に思ったのだろう。

「それじゃプレシアさん……また来ます。」

気まずくなる前に、逃げようと、病室のドアに手を伸ばす。

エルは逃げ出した！！

「待ちなさい。」

しかし、まわりこまれてしまった！！

「プレシアさん？……呼び方が違うんじゃないかしら？」

飛び切りの笑顔で言われた。

なんだろう。綺麗な筈なのに、とてつもなく恐いんですけど。

「ど、どう？」

「おまえと母さんのどちらかね。」

「失礼しますっ！！」

色々とやばい！これは逃げるしかない！！

なにかしら狙われている！！

なんて言えばいいかわからんが、ここにいてはいけない。

本能が俺に訴えている！！
俺は、今世紀最大の素早さで病室から逃げ出した。

「あの……あの人？母さんって？」

フェイトは状況が掴めていない。
当然だろう。
そのフェイトに、プレシアは母親の笑顔で答える。

「ふふ…、フェイト、彼を『お兄ちゃん』と『お父さん』、どっちで呼びたい？」
「え……？」

結局、最後まで状況を理解する事は、フェイトには出来なかった。

十五話　終わりの始まり　前編（後書き）

なんで、プレシアとフラグが立ってるのかって？

なんか、年上受けしそうじゃない？

それとな～く、リンディさんとのデート云々の話が出てきたのはその影響。

エル「クロノが子供ってやだなぁ…」

十六話　終わりの始まり　後編

「ほらほらクロノ！どうする！？」
「ぐっ！ぅあ！！」

管理局で、後輩のクロノとの演習をしている。
ＰＴ事件で結構手柄を立てたらしいからな。
偶然に、俺の仕事も無いから、模擬戦に付き合っている。

「くっ！」

クロノは距離を取るために、魔力弾を俺に射出する。
左右から迫り来るそれを、首をずらすのと、右足を開くことで回避する。

パターン化を防ぐために、ランダムターゲットで射出したんだろう。
確かに不規則な射撃のほうがはるかに回避しづらいが、残念ながら見切れる程度の速度だ。

クロノを追いかけるように接近する。
明らかな速度差、あと数瞬で槍先が届くという所で……。

「かかった！！」

俺の周囲にかなりの数の、魔力のひずみが発生する。ざっと１０は数えられるか。
ずりぃ、それ俺が編み出したホーミングレーザーだぞ。
そうか、コレを狙っていたわけか……駄菓子菓子。

「口に出しちゃ……ばれんだろうがぁ！！」

バリアジャケットの装備を解除。
さらに接近する。
俺にとっては、バリアジャケットの分の魔力も貴重だ。
バリアジャケットの維持にかかっていた魔力を、攻撃に変換する。

俺の全魔力を、バリアのような形状で、自らに展開する。
そのバリアが、自らを中心にして、弾けた。

半透明の弱弱しい魔力の奔流は、明確な破壊の意思を持って、周囲に四散する。
強烈な光を伴って。
周りを覆って、今にも発射されんとしていたレーザーは、そのすべてがかき消される。

クロノは突然の爆発と、強いフラッシュに驚き、眼をつむる。
その隙だけで十分だ。

「えっ！」

一気にクロノの背後まで近づき、バリアジャケットの首襟を掴んで地面に投げ飛ばす。

「ぐぁっ！！」

叩き付けられ、顔が歪む。
そのクロノを踏みつけにして着地し、首筋にデバイスを突き立てる。
これで勝負ありだな。

「……参りました。」
「よろしい。」
悪いな、まだまだ負ける気がしねぇ。

「あんな魔法使えたんですか？」
模擬戦を終了し、汗の始末をしている時に、クロノが話しかけてきた。
きっと、今日使った自爆よろしくな魔法の事だろう。

「使えたって言うか、知っていたというか……使ってみるのは今日が初めてだ。」
「は？」
「あの状況を打破するのは、確かに色々な手段があったんだが、どれも受身だ。次の攻勢に転じるために最適な行動はなにか考えたら、さっきのが思いついた。」
「それって、あの一瞬で魔法を編み出したって事ですか？」
「編み出したってのとは違うな。あれの理論そのものは組みあがっていたし、実践したってほうがしっくり来る。それが一番良い行動だったからな。他に代用できる魔法があったなら使ったが。」

実際に、他に代用できる魔法としたら、もっと魔力が必要になる大掛かりな魔法ばかりだ。
それを使う条件を、俺は満たしていないのだから、自分で作るしかない。

それに、さっき使ったのだって、若干魔力不足気味だった。
十分な魔力で使えれば、クロノにだってダメージを通らせることが出来た筈。
更に、使った後は、もう魔力は空っぽになっちまうしな。

「流石ですね……。ボクが敵わない筈だ。」
「それぐらいできるようでないと、俺はとっくに死んでるわ。」

クロノの頭を軽く小突く。
それを受けて、クロノは苦笑した。

またまた場面は変わるが、俺の日常は、管理局だけではない。

俺だって最初は、はやての晩御飯をご馳走になっていたり、遊び相手になっていたりしていたんだが。

「今日は病院だろう?送っていくよ。」
「ありがとう。エルさん。」

一度、はやての厚意に甘えて、はやての家で一泊した。
わざわざ家に帰るのも面倒だったし、なによりはやての甘える声に

負けたのだ。
しかし、それがまずかった。

「それじゃ、適当に時間潰して待ってるから。しっかり診てもらってこい。」
「うん。」

それから毎日のように入り浸って、今では半ば家族の一員になってしまった。
はやての笑顔が見られるから、俺としては一向に構わないのだが、赤の他人の男性である俺が入り浸っているのは、世間体とか戸籍上の問題とか色々引っかからないか心配だ。

そう思考しながら、俺は自動販売機で買った炭酸飲料を喉に流し込む。
さわやかな甘味と、鋭い炭酸が俺の喉を刺激する。

雨ばかりの時期を越え、少し熱く感じるようになってきた季節。

「これから熱くなってくるぞぅ……。」

誰に言うでもなく、そう呟いた。

その後、時間までぼんやりして過ごした俺は、はやてを迎えに行き、そのはやてからの希望で図書館へと立ち寄った。

俺も付き添って、本を探すのを手伝ったり、自分が読む本を探して、二人で一緒に読んだりした。
こっそり、隣で読書に没頭するはやてを見ると、眼が規則的に上下にクリクリ動いて実に愛らしい。
他にも一緒に一つの本を読んだりしたが、お互い気分が高まってしまい、注意された。
とにかく、久し振りの穏やかな日常に、俺はとてつもなく満足していたのである。

しかし、その穏やかな日常が、影を差す。

夜、俺は食事の後片付けをしていた。
ご飯をつくるのがはやてなら、俺は後片付け、その逆も然りだ。
はやては居間でゲームをしている。
俺が自室からもって来たゲームで、趣旨としては、
主人公は巨大ロボットを扱う一人の傭兵となり、企業の依頼を受けてミッションを成功させるというものだ。
このゲームの一番の魅力は、ロボットを自分でカスタマイズできるところで、自分だけの機体を作る事が出来る。

そのゲームの様子をＢＧＭとして、俺は皿洗いを続けている。

『進化の現実って奴を教えてやる。』
『チッ、メインブースタが完全に逝ってやがる』

『テストの汎用性は高くなりました。いい傾向です。』
『プランD所謂…』
『ＡＭＳから、光が逆流する！！ギャァァァァァァ！！』

……音だけで結構状況がつかめるもんだな。
はやて、うまくなってる。
最後のほう、セリフが展開についていけてないもん。

「はやて、随分うまくなったな～。」
「へへん。うちの目標は打倒！！エルさんや。」
「まだまだ若造には負けんよ。」

などと会話していると、片付けも終わり、そろそろよい子は寝る時間となった。

「よし。今日はもうお開きだ。部屋まで運ぼうか？」
「あ……うん。おおきに。」

はやてを所謂お姫様抱っこで二階の部屋にまで運ぶ。

「エルさんの腕の中は、本当に落ち着くなぁ……。」
その途中、はやては俺の胸に擦り寄る。
「どうした？」
「なにもせぇへんよ。ねぇ……お兄ちゃんってよんでええ？」
「ぅえぇ？！」

しまった、驚いて凄い声を上げてしまった。

「そんなにおかしいこと、うち言った？」

「うん。赤の他人の成人男性にその発言はおかしい。相手が相手なら襲われてるかも知れない。」

ただでさえ、こんなかぁいいおにゃのこにゃのら。襲われたって不思議じゃにゃい。

言葉がおかしいのは、動揺のせいでは……にゃい！！

「やっぱ、ダメか……。ゴメンな、変な事言うて。」

「ふふ……いいよ、呼んでも。」

「え？」

「確かに言った事は変だけど、俺は嬉しかったぞ？だから気にせず呼んでくれ。俺もはやてのこと妹だと思っているから。」

「ホンマ！？ホンマにホンマ？！もう駄目って言ったってアカンからね！！」

はやては先ほどより強く、俺の胸に顔を押し当てる。

ちょちょ、バランスを崩しちゃう。

「ああ。そっちこそ取り消したってもう遅いからな。」

「うん！」

まさか、三人目の妹ができるなんて、ね。

「じゃ、おにいちゃんに、私の宝物みせたるわ！」

「宝物？」

「うん、部屋にあるんや。」

そうして部屋に着き、ベッドにやさしく降ろすと、はやてはベッドの横の引き出しを開け、一冊の本を取り出す。

「じゃじゃ～ん。どう？すごそうなほんやろ～？」
「あ……ぁ」

本を眼にした瞬間、心臓が止まった。
いや、止まってはいない。そう錯覚するほどに驚いただけ。
目の前の現実に、脳髄の思考が追いつかない。
あの、本と似すぎていて、どこがどう違うのか判断できない。
いや、それはどこも違いなんて無い。
だってそれは、紛うことなき『同型』……！！！

「……どうしたん？おにいちゃん？」
「……いや、いい、本だな。それは。少し、びっくりしただけだよ……。」

妹を喰らうカウントダウンが本から鳴った気がした。

十六話　終わりの始まり　後編（後書き）

やってしまった感がある今回

それはさておき
多くの作者さんが言っている通り、戦闘描写が難しい。
疾走感とか、ほしいよね。

十七話　偽者の意地（前書き）

作者がメダロットＤＳにはまったようです。
メダロット……懐かしい。

エル「作品紹介をしろよ」

十七話　偽者の意地

あの本を見せてもらってから、数日も経たぬ六月三日。
はやてはとてもテンションが上がっていた。
なぜなら……。

「誕生日？」
「うん！明日はうちの誕生日や！！今年はお兄ちゃんもいるし、楽しくなるで～。」

そうか、誕生日か。
たしかにそれは盛大に祝ってあげなきゃな。
もちろん兄として。

「よぅし！！だったら俺も、明日は大盤振る舞いだ！！楽しみにしてろよ～。」
「うん！！」

俺達は、その日はそのままのテンションのままゲームをした。
周りからは相当うるさかっただろう。
だが、今日明日くらいは許してくれ、大切な妹の誕生日なのだから。

深夜、俺ははやてを寝かした後、レオハルトを使い、無限書庫の情報を集めていた。
何を集めているかはわかるだろう。
夜天の書についてだ。

確かな確証があるわけでもない。思い違いかもしれない。
ただ表紙だけが似ているということもありえる。

しかし、あの本を見てから、なんとも言いようのない、不安が俺の中を駆け巡っている。
共鳴……しているとでも言うのだろうか。
俺の中で、何かが蠢いている気がする。
気のせいで、あって欲しい。本当に。

ふと、時計を見ると、調度深夜0時を指そうとしていた。
この世界には、深夜0時と同時に誕生日メールを送る人がいるらしいが、こちらも調度0時にはやてに、ハッピーバースデーと言いに行こうか。
などと考えながら、秒針を見つめる。
3、2、1、0

直後、巨大な違和感。

「なんだ?!」

はやての小さな叫び声が聞こえ、巨大な存在感を感じる。
それはこの家。……はやての部屋から!?

「ちっ!! レオハルト、いつでもやれるようにしておけ。」
『我が名に賭けて!!』

なんだ、何かが起こったってのか?
『闇の書』に!

部屋に入って一番に目に入ったのは、倒れているはやて。
「はやて！！」
はやての安否のために駆け寄ろうとするが……。
「待て」
白銀の刃が俺の行く手を阻んだ。
「主から離れろ」
また言葉を発したのは、剣を持つ、ポニーテールの女性。
その目には、ありありと殺意が浮かんでいる。
「主……だと？」
「そう。八神はやては我らの主。我々、ヴォルケンリッターは主をあらゆる危機から護る使命がある。」
と、言うことははやての命に関しては心配はいらないと言うことか……、だが。
「貴様は何者だ……答えなければ、斬る。」
ポニーテールの女性は、更に殺気を鋭く尖らせ、俺に問う。

「はやての、兄だ。」

「信じられるものか。それに、主はやてに血縁の兄弟は存在しない。」

悔しいが、その通りだ。はやてに実の兄は存在しない。
だからって彼女との今までの触れ合いを、断ち切ってよい物ではないはずだ。

「消えろ、偽者。如何な目的で主に近づいたかは知らんが、これ以上主にまとわりつくと言うのならば、ここで完膚なきまでに、叩きのめす。」

偽者……だと？
なにをもって言うのか。お前らがはやての何を知って言うのか。
彼女を食い潰すだけの貴様らが……！！

お前らが、お前らさえいなければ！！

「おい、待て。お前らは、はやての『障害』となる全てのものと言ったな。」
「ん？」
「それは、主をやがて侵食し、死に至らしめるお前達は含まれてるのか？」
「な！？」

四人全員に動揺が走る。

「それがある限り、俺ははやてを護る事を譲らない。」

静かに、しかし明確な殺気を相手に返しながら、レオハルトを起動する。
武器を出した事、それと殺気を受けて、騎士達は俺を敵と認識した。
ああ、少し大人気ない話だが、俺はキレてるらしい。

「別にお前らを全否定するつもりはねぇよ。だがな、こっちにだって譲れないものがあるんだよ。それを踏みにじったのが気に食わない。」

はやては俺の妹だ。
護るのは、俺の役目だ!!

『結界、座標軸固定』
「後始末は俺がとる。管理局と三提督に許可もらっとけ!!」
『了解』

レオハルトの返事をまるで合図にするかのように、五人は窓から飛び出す。

残ったのは、気絶し、静かな寝息を立てているはやてのみとなった。

「四人で掛かってこい。全員相手してやる。」

「ふっ、随分と舐められたものだな。我々も。」

「我が名は烈火の将シグナム！消え往く命で、その名を遺してやろう。」

それぞれが武器を構えるのに対し、エルだけは構えず、薄く笑う。

「黙れ、明確な自らの意思も持たない幻影。与えられた記号〝コード〟を反復することしかできない人形が、自らの足で立っている俺に敵うはずがあるか。」

「んだ、てめぇ。言ってくれるじゃねぇか。」

今まで黙っていた、小さな少女が顔を歪ませながら前に出る。
手には、少女の華奢な体には似つかわしくない、鉄槌。

「なんだ。キレたのか？……そりゃ良かった。」

それで言葉を切ると、エルは顔を伏せる。
何をしているのか怪訝に思っていると。

「俺はとっくにキレてんだよ！！」

そう叫びながら、怒りで歪んだその表情を上げる。
今までのなでつけるような殺気と違い、肌に突き刺さるかのような殺気を感じる。

今までの殺気が、お遊びのように感じる。

騎士達全てが直感した。この者を生かしておいては必ず障害になると。
なぜならこの殺気は、人間が発する事の出来る類のものではないからだ。

その殺気に、騎士達は、一瞬。そう、ほんの一瞬。
確かに恐怖した。

その隙を逃すエルではない。

ありえないほどの歩幅で、かつ迅速に、エルは接近しレオハルトを突き刺した。
それをシグナムと名乗った女性は、剣で受ける。

それが戦闘のゴングとなった。

最初は、受け止めたシグナムとエルの接近戦になった。
エルがレオハルトのリーチを生かして、穂先でシグナムを切り裂くように右に左に斬りかかる。
それをシグナムはなんとか剣で受け流し、弾き、攻め手を凌ぐ。

一見、エルの一方的な戦闘にも見えるだろう。
しかし、そうではない。

エルは懐に入り込まれれば、相手の攻撃を捌き切れない。
シグナムはリーチ差によって、懐に入り込むのが困難である。

つまり押し切るか、懐に入るか。

一瞬でどちらにも勝利が転がる可能性があるのであれば、それはワンサイドゲームではないのだ。正しく、互角だ。

しかし、それは一対一の場合である。

「シグナム、どけぇ！！」

鉄槌の少女から、四つの砲丸が打ち出される。

エルはそれを視界に収めることなく察知し、斬りあいを中断、体を捩らせながら後方へ大きく跳躍する。

四つの砲丸は、捩る体の寸前を抜け、目標を失う。

エルは少し体勢を崩しながら着地する。

表情を少し歪ませ、

「かすって、これか。」

自らのわき腹をさすった。

その箇所は、バリアジャケットが破け、皮膚が露出していた。

その露出している肌も、皮がいくらか裂け、肉からうっすらと血が滲んでいる。

つまり直撃は、御法度。

エル自身のバリアジャケットは、決して防護力は高くない。

それを編む魔力が枯渇しているからだ。

たとえそうであっても、このダメージは深刻である。

「こりゃ、手加減なんてできそうにないな。」

確かめるようにレオハルトを握りなおし、もう一度接近する。

「我らベルカの騎士に、自ら格闘戦を仕掛けるか！」

「上等だぜ！！」

どうやら敵を応じるようだ。

どうやらこの剣と鉄槌の二人が相手のようだ。

残りの二名は、いざと言うときの為か、二人に戦闘を任せ、警戒に専念するようだ。

別に間違った判断ではない。

エルがどんな手を有しているかわからない以上、警戒は必要だ。

斬りあいが開始され、幾度も剣戟と衝撃が交錯する。

二対一になり、若干エルの戦い方にも変化が起こる。

相手の攻撃を回避する事に専念し、その合間に、急所を狙った致命傷を狙う。

シグナムが右から切りかかり、それを受ける。

確かにこの剣筋は余裕を持って見えるが、威力と衝撃が少々凄まじい。

しっかり受けきっても、エルは後ろに弾き飛ばされる。

そうして弾き飛ばされた地点に、鉄槌の少女がいる。

「うおぉりゃ！！」

受けきるのは無理と判断し、衝撃を受け流す要領で、体を１８０度回転させ、右に咄嗟に跳ぶ。
さっき回転して所に、強烈な一撃が地面に突き刺さり、地面そのものに罅が入る。
なんという威力。しかし、それゆえにそうそうに当たらない。

「ちっ、よけんじゃねーよ！！」
「避けなきゃ死ぬわ！！」
一応エルは非殺傷設定にはしている。
それが相手もどうかは判断できない。
しかし実際に受ける余裕などあるわけがない。

「はぁぁぁぁぁ！！！！」

目の前には次の剣閃。
これでは息つく暇もない。
レオハルトをダガー形態に変形させ、ダガーの刀身で受ける。
バチバチと火花が散り、膠着する。

大した威力ではある。これ以上、堪え切れそうにもないが……。

（力だけで、勝負するのが戦いじゃねぇ！！）

エルは、手首だけで、レオハルトを回転させる。
それはまるでドリルに針を突き立てたかのように、今まで膠着していた力が弾け、シグナムの剣が上へと弾かれる。

「しまった！！」
「とった。」
この瞬間では、鉄槌の攻撃は間に合わない。
エルは勝利を確信し、レオハルトを突き出すが……
「やらせん！！！」
先ほどまで警戒していた、褐色の肌の男の攻撃によって、中断された。
「ごっ……はぁ！！！」
メリメリと、体が軋む音がする。
きっと、観戦していた所から疾駆してきたのだろう。
全体重と、勢いを掛けた蹴りが、自らの腹部に突き刺さっている。
そう認識したときには、もう視界は流れ、近くのビルに激突した。
それだけに飽き足らず、ビルを貫通し、次のビルの壁にまでめり込んだ。
痛いなんてもんじゃない。痛すぎて逆に、何も感じないくらいの痛み……！！
「痛ってぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」
だったらどれだけ良かっただろうか。
体中の痛覚は正常に作動し、脳髄も健気にそれを信号として受け取るものだから、耐え切れないほどの鈍痛が、体に奔る。
バリアジャケットのおかげか、そう大きな怪我はないが、自らの魔

力によって、痛みそのものをカットできるほどの強度は無いらしい。

『身体機能……低下無し。化け物かオマエは。』

「蹴りを放った敵に言うセリフだろうそれは。ビル貫いたんだぞ。」

なんとかビルのめり込みから脱出して、手を膝につき、肩で息をする。

「これめちゃくちゃ痛い……。痛い」

『肉体のダメージは無かったんだ。運がいいと思え。……だが、』

「ああ、いい線行ってたんだけどなぁ～。まさかあの位置から助けに入ってくるとはねぇ。」

このままでは、いずれは敗れる。

生き残るのが目的であるのならば、継戦は可能だ。

しかし、この戦いは、勝つ事が目的だ。

エルには、それを決定させる『手段』が不足している。

いわゆる手札が足りない。

パスは無限にできるが、手札に3しかない大富豪と同じだ。

それに比べて、相手はキングやらクイーンやらの絵柄をバンバン出してくるのだから、勝ちようが無い。

「アレを……使うしかないのか。」

『……オマエにとって、はやてとはその力を使ってまで守るものなのか？』

レオハルトは理解できないと言った口調で聞く。

「ああ。ゆらぎなく。」

それを俺は絶対の自信で返す。

「俺は信頼を信頼で返す性質だ。」

更にそう付け足す。

兄だと慕って、信頼して傍にいたんだ。

それに全力で応えてやら無いと、その関係は偽者だ。

たしかに血縁から見れば、俺は偽者だ。

だが、この感情に関しては、偽者だと言わせはしない。

「それじゃ、行こうか。」

『ああ。……死ぬなよ。』

エルは体を上げる。

その目は覚悟を持って、前を見据える。

彼にとって、全力全開の戦いはここから始まる……。

十七話　偽者の意地（後書き）

メダロットは自分が最初にしたロボゲーです。
ポケモン派よりメダロット派です。

メダロットと言ってわかる人、友達になろう！！（笑）

エル「だから作品紹介をしろよ！！」

十八話　希少技能（前書き）

休みが多いのは良い事だ。

あんまり執筆して無いけどな！！（キラッ）

十八話　希少技能

シグナムは、エルが蹴り飛ばされた方向を、静かに睨みつけていた。

「大丈夫か？」

そのシグナムに声を掛ける、褐色の男性。
つい先ほど、シグナムの危機を救った男だ。

「ああ、なんともない。助かった。」
「そうか。」

簡単に礼を述べる。が、睨みつけるのを止める事は無い。

（たしかにザフィーラの一撃は直撃だった。……しかし。）

シグナムはそれであの男がやられるわけが無いと、確信していた。
それは、他の三人も同様のようだ。

シグナムの無事を確認後、全員が警戒する。

「あの男……只者ではない。」
「ああ、あたし達二人の攻撃を凌ぎきりやがった。……むかつくぜ。」
「それに、あそこでザフィーラが割り込まなければ、私は深手を負っていた。」

それが一番の驚くべき事実。
高度なベルカ騎士である、シグナムとヴィータ。その猛攻を凌ぎな

がらも、正確無比な一撃を狙ってくる技術。
決して油断できる敵ではない。

彼女達はどこかで油断していたのだ。
あの男がインテリジェントデバイスを持った時点で、魔導師であるのを判断していた。
それなのに、攻撃らしき魔法は一つも撃ってこないこと。
飛行さえままならぬ、拙い魔法であること。

魔導師としては下の下。
それが油断の要因だ。

しかし騎士達はここで再確認する。

あの男は、『それ』を補って、あまりある『戦士』としてのスキルを有している。

故に窮地に陥ったのだと。

「もう、油断などしない。こちらも全力で打ち込むぞ。」
「ああ、最初からそのつもりだぜ。」

彼は魔法が使えない。
ならば、接近戦に付き合わず、魔法で仕掛ければいい。

「……ふふっ」
「どうしたのシグナム？」
「いや、……シャマル。こんな戦い、初めてではないか？」

「え……？」
「私達は今、ベルカの特化である、接近戦を自ら捨てたのだ。」
そのシグナムの言葉に、全員が何かに気づいた。
「私達は、あの男に『決闘』では勝てないということだ。まったく、こんな敵は、本当に初めてだ。」
シグナムはいまだかつて無い戦闘を予感し、不敵に笑った。

『わかった。……死ぬなよ。』
「さぁ、わからんな。」

俺には、ただひとつ、レアスキルがある。
誰にも使われる事は無く、知られる事も無いスキル。

「箇所指定……肝臓、胃。変換……開始。」

途端、今までとは違う力が、俺の体を満たす。満たす。満たす！！
それは、俺に欠けていた物。魔力。

そのスキル、名をつけるとするならば、『生命力変換資質「魔力」』

文字通り、肉体の生命力を糧にして魔力を生成する資質。

俺が……長寿できぬ理由の、一つ。

何かが喉の……いや、もっと奥から逆流してくる感覚、

「がはぁ！！」

堪えきれず、何かを吐き出す。

地面にビシャリと、音を立てる。

それは、俺の奥底からせり上がってきた、血液。

これが……代償。

俺の体そのものが、悲鳴をあげている。

だが、これで俺は『魔導師』になれる。

「マジックジェネレーター！！フルドライブ！！」

今の俺は誰にも負けない。

何だって掛かってこい、その全てを返り討ちにしてやる。

「きたぞ……いや、待て……。」
「この魔力量、本当に、さっきの彼？」
金髪の女性、シャマルが驚愕の声をあげる。
ビル越しだってわかるほどの、強大な魔力。
「力を……隠していたと言うことか……。」
ザフィーラは静かにそう呟く。
「魔法無しであの実力。……どうやら、全力で往かねばならないようだな。」
「へっ、おもしれぇ！！」
そうヴィータが呟いた直後、ゆったりとした歩調で、ビルの穴から敵が出てきた。
「悪いな。待たせた。」
魔力の滾りが、男の周りで渦を巻いているのがわかる。
ランク付けする事自体が、礼に失するほどの濃密な魔力。
しかし、この男の魔力は今までのどの魔力とも、質が違った。
今まで見た、どの魔導師の魔力よりも、綿密で、痛々しく、生々しい。
もはや別物と思ってよいのかもしれない。

量で判断して良いレベルではないのだ、魔力のカテゴリが違うのだから、判断も計測もつけようが無いのだ。

しかし……それでも、

「ベルカの騎士は……退かぬ！！」

「そうか。」

男は、自らのデバイスを構え、淡々と言い放つ。
その顔は紛れも無く、覚悟を決闘者の面構えであるのに……
どこか、幽鬼を彷彿とさせる顔だった。

「レーザー！！展開！！！」

俺の周りには六つの歪みが展開される。
今までは、三つが限界だった。
しかし、今はその制限も無い、持てる全てを尽くす事が出来るのだ。

「ボルテッカー、セット！！」

今度は、俺の頭上にサッカーボール程度の光球が設置される。
俺の周りには、七つの魔法。

『クイックムーブ、スタンバイ』
「……アサルト！！」

高速移動魔法、クイックムーブを使用し、一気に距離を詰める。
クイックムーブ、魔力の瞬間的な爆発によって、驚異的な瞬発力を得る事ができる魔法。
最高速度よりも、瞬間的な加速を重視した結果、断続かつ連続的に使用する事で、最高速度以上の敏捷性を発揮する。

それに、小回りが利くから、こういった大勢との敵とは相性がいい。

「ふん！！」
「ちっ！！！」

剣の騎士、シグナムと得物ぶつかり合う。
真っ向勝負、しかしそれならば！

『マジックジェネレーター、フルドライブ』
「ハルバァァド！！」

レオハルトのブレードディスペンサーが唸りを上げ、これまで以上に長く、太い刀身が形成される。
刀身の直径は約一メートル。長さは十もあるだろうか。
この間合いで撃たれた者は、まるで砲撃を受けたものと勘違いするのかもしれない。

「ぐうぅぅぅ！！！」

剣で何とか受け止めているが、もう刀身に呑み込まれそうなほどだ。
あと少しで押し切れる……が、

「シグナム！」

当然、援護も入るわけだ。
しかし、させやしない。そのための手札もある！！

「ファランクス！！！」

左手を三人の密集する地点に向け、放つ。

針のような魔力弾が、無数に三人の騎士に向けて降り注ぐ。

「くっ、下がれ！！」
「ちっ！」
「きゃ！！」

ザフィーラがファランクスを、庇うようにプロテクションを張って防ぐ。
まあ、プロテクションを抜けるほどの威力はないさ。
だがジャケットの類に関しての貫通力はあるから、そうして防ぐしかない。

あくまで牽制、しかしこの現状では決定的な時間取りになる。

「うおぉぉぉぉぉ！！！」
「っ！」

ガシャンという、何かが排莢される音。
シグナムの剣から、爆発的な魔力が生み出される。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

もはや魔力の渦に呑みこまようとしていたと言うのに、その剣で一瞬ハルバードと剣が拮抗する、その瞬間に軌道をずらし、離脱する。ハルバードが抵抗する力が無くなったことにより、地面を豪快に叩く。

……敵を逃がしてしまった。
牽制の為に左手を放していたこと。
そして、敵のあのシステムの見落としが原因だ。

「……あれがカートリッジシステムか。」

あの爆発力。確かに便利なものだ。
しかし、敵に回るとこんなにも厄介なものだったとはな。

「ちっ、立て直す暇を……与えん！！」

長引けばこちらが不利。
俺はもう一度、クイックムーブを使い、騎士達に肉薄する。

「レーザー！！」

今度の手始めの牽制はレーザー。
六発の内、二発を発射。
それで敵を分断する事ができればよかったのだが、どちらもあっさり迎撃された。

それでも、足を止めた事には変わらない！！
できるだけ多くを斬りつけるように、ハルバードを振るう。
先ほどの威力を知ってか、さすがに回避する。
しかしまだ分断にはほど遠い。
ソニックムーブで、更に細かく周りを飛び交い、ハルバードを振るう。

「ちっ！速すぎる！！！」
「くっそ、これに捕まりやがれ！！シュワルベフリーゲン！！！」
先ほども飛んできた、鉄球がこちらに飛んでくる。
この速度を捉えるのは見事……だが！！

「ガントレット」

魔力を拳に乗せ、圧縮。左手を振り上げ、拳を鉄球に向けて振り下ろす。
それはまるで達人の拳圧の様に飛び、鉄球にぶつかると、まるでバットでボールを打ち返したかのように跳ね返る。
殺傷能力あまり無いが、その衝撃力は折り紙つきだ。
その衝撃力で敵を吹き飛ばすのが目的の魔法だ。

「な、んだとぉぉ！！」

打ち返した鉄球は避けられ、打ち出したヴィータの背後を飛んでいく。
しかし、これで分断は決定的になった。

それぞれが、四方に散る形になったのだ。
ならば誰を狙うか……そんなもの決まりきっている。

「ダブルアクセル！！！」
『Ｙｅｓ　ｓｉｒ』

今までに無いほどのG。クイックムーブの重ねがけともいえるダブルアクセル。
負担は大きいが、速度はもはや音速を超える。
文字通り音速で、標的の目前へと跳ぶ。

「え？」
「悪いね。安心しな、殺しは……しない。ボルテッカー！！」

この騎士達の中の、援護役にして回復役であろう、金髪の女性に遠慮なく鳩尾に魔法を叩きこむ。
ずっと自らについてきていた光球は、電撃となって空間を奔り、鳩尾に突き刺さる、
女性をいたぶるのは趣味ではないが、この瞬間は我慢してもらおう。

気絶し、倒れる女性を受け止め、地面に静かに横たえる。
直後、悪寒が走った。

「ふん！！！」

風を切る強烈な蹴り、忘れる筈も無い。
あのビルを突き破った蹴りだ。

あんなものはもうノウサンキューだ。

「もうそれは、きかねぇ。ガントレットォ！！！」

ガントレットは唱え、拳圧を飛ばす。
力と拮抗する位置ではなく、それよりも若干上の位置。

「がはっ！！」

見事に蹴りの軌道をずらされ、ガントレットの衝撃は上へ、蹴りの勢いは下へとずれる。
つまりは地面に叩き付けられた。

「レーザー！！」

そこに四発のレーザーの追い討ち。

叩き付けられた直後に命中するように放ったから、回避は不可能だ。
追随設置式射撃魔法とは、こういう風に扱うものだ。

「見事だ。しかし、これで終わりだ。」

上空からの声に、驚き仰ぐ。
それは弓のようなものに矢を番うシグナムの姿が。

あれをくらったら、マズイ！！

本能は叫ぶ。
咄嗟に魔力を引き出そうとするが……。

『魔力不足だ。これ以上の使用は更に命を削る。』

「だから……なんだぁ！！！腸も持ってけぇぇぇぇ！！！」

変換箇所を指定し、腸を殺す。
その生命力を魔力に変える。

待たず、その魔力をレオハルトに注ぎ込む。

「レオハルト……バーストモード移行！！」
『Ｙｅｓ　ｓｉｒ』

マジックジェネレーターを暴走させ、一時的に規格外の火力を得る事が出来る。
それがバーストモード。

あれに対抗できるのはこれしかない。

体の奥からせり上がってくる、二度目の感覚。
当然の如く吐血し、純白のバリアジャケットを汚す。

しかし、そんなもの気にせず、ありったけの魔力を注ぎ込み、凝縮させる。
俺が放つのは、自らの魔力で、極限まで圧縮し、射出する、星光とは対を成す砲撃魔法！！！

ハルバードの比ではないほどの魔力を秘めた刀身を生成する。
魔法陣が、足元とレオハルトの穂先に、刀身の延長をせき止めるよ

うに現れる。
いや、事実せき止めている。
デコピンというものは、親指に掛かる力が大きければ大きいほど、
人差し指により威力は増す。それと同じだ。
力を力で止め、それを弾いて撃ちだす。
故に射出。

「闇より静かに道を照らす、それが月光の輝き！！」

「翔けよ、隼！！」
シグナムより、矢が放たれる。
それは必殺の一撃。
しかし、

「ムーンライトォォ……」
こちらは必滅の一撃！！

「ブレイカァァァァァァァァァァ！！！！！」
魔法陣が刀身により二つに裂け、射出される。
それはまっすぐ、刀身が伸びるように目標に飛び出していく。

二つの巨大な魔力の塊が、ぶつかった。

十八話　希少技能（後書き）

いきなり転生主人公もビックリの強さに。

どれほどに魔力不足が、足を引っ張っているのかがわかると思います。

十九話　心（前書き）

いつのまにか十九話ですか。早いもんです。

十九話　心

「すまない、なのは。あの結界には近づかないようにしてくれ。」
クロノは、申し訳ない表情でモニターの向こうの少女に話す。
その表情はすこし頬を膨らませ、困ったような顔で答える。
「いきなり結界ができるからビックリしたの。でも、あそこで何が起こってるの？私も手伝いに……。」
「いや、その必要は無いよ。エル先輩がデバイスに関して、大規模な実験をしているだけらしいから。」
クロノの台詞を聞き、なのはが急に身を乗り出し、モニターに迫った。
クロノのモニターからは、画面いっぱいのなのはの顔。
思わず身を引く。
「エルさんってまだこの街にいるの！？」
そう言うなのはの顔は、喜色満面である。
そういえば、ＰＴ事件の折り、エルが事件解決のメンバーから抜けた事を告げた時は、目に見えて落ち込んでいた気がする。
「う、うん。そういえば言って無かったっけ。」
「言って無いよ～！！……ねぇ、クロノくん。」
「駄目だ。」
「ま、まだなにも言って無いよ～。」
「想像はつくさ。『見に行かせてくれ。』……違うかい？」
「ぅ……。」

完全に見抜かれ、なのははたじろぐ。

「それに行っても、中に入らない限り何も見えないぞ？エル先輩の結界は、大抵秘密保持のための視覚遮断結界を使っているから。」

「え～！！」

「わかったら、家でおとなしくして居てくれ。」

「う～、お願い！！近くに行くだけでも！！」

「だ、駄目だって！！なのははそんなに我侭だったか？！」

「だってエルさんが馬鹿になれって言ってくれたもん！！私は馬鹿になってあの人の背中を追い続けるの！！！」

「なのは、キャラが違う！あ、あの人は何を言っているんだ！！？」

それから約三十分近く、二人は言い争う。

どちらも譲らず、二人が落ち着くのは結界も消滅し、全てが終わった後だ。

なのはの我侭。

これも、エルという男が生み出した、小さな変化。

「はぁ、はぁぁ、ごぶぅはぁ！！」

大量の血を口から吐き出しながら、エルは前を睨みつける。

前方に見えるのは、空から落ちてくる隼の射手。
何の受身も取らず落ちてくる事から、エルは彼女が気絶していると判断。

僅かな魔力をかき集め、小さくクイックムーブを行い、彼女の下に飛びあがり、受け止める。
彼女の体は、先程までの全力の戦闘を疑うほど、軽く感じた。
彼女を支える右手が、彼女の二の腕を支えている。
その腕は、紛れも無い細く、綺麗な女性の腕。

「こんな腕から……どこからそんな力が出るんだよ。」

地面に軟着地し、シグナムを横たえる。

「おいおい、あたしを忘れてねーか？」
「ちっ……。」

問答無用の鉄槌の一撃。
エルは反応しきれずに、直撃し、大きく吹き飛ばされる。

「ぐふっ……。」

地面を転がりながら衝撃を受け流し、その回転を利用して無理やり立ち上がる。
そうでもしないと、もう立ち上がる事が出来ない事を本能的にも感じている。

「まさか、シグナムのシュツルムファルケンに打ち勝つなんてな。
……なんだ、そんな幽霊みたいな顔しやがって……。」

「確かにそんな顔してるかもな。……いくらか血を失いすぎた。」

「お前のその力……対価持ちだろ。しかも相当な。……ザフィーラの蹴りだけでそんなになる訳がねぇ。」

「ああ、命そのものを引っ張ってくる最悪の呪術だよ。」

エルは自嘲をするように苦笑する。
その表情に生気は感じられない。

「……どうしてそこまでしやがる。もう死にそうじゃねーか。」

ヴィータは鉄槌を担ぎながら、真剣な表情で訊く。
エルの行動がとても不可解で、その理由が知りたいからだ。

「さっき言っただろうが、ボケ。俺ははやての兄貴だ。妹は俺の手で護ってやる。」

「まさか、本当にそれだけの理由かよ!!」

「当たり前だ!! 血は繋がって居なくとも家族だ!!! お前らにそんな存在はいねぇのか!!!」

エルの言葉が、ヴィータの心に突き刺さる。

エルは突然声を荒げ、その反動によりまた吐血する。
エルは今、内臓はボロボロの状態だ。
つい先程まで、胃、肝臓、腸はまさしく『死んでいた』のだ。
ささいな行動でも、内臓に響く。

そんな状態にあって尚、エルの目は確かな意思を持って、眼前のヴィータを見据える。
その眼には、ただ同じ工程を繰り返すヴィータ達には無い光がある。

それをヴィータは感じ取った。
だから、必要以上に彼の言葉が胸に響く。

「あ、あたし達は……。」
「居ないだろうな。これは予測だが、お前達、あの本の防衛プログラムか何かだろ？」

一度で、自分達の正体を言いあてられ、ヴィータの体が震える。

「同じ工程を何度も何度も繰り返し、失敗しても、また次の工程が始まる。人として扱われる事も無く、ただひたすらに主人の道具に……。」

ヴィータは言い返せない。
エルが行っている事が全て間違っていないから。

「人間として見られることも無く……。そんなの悲しすぎるだろ。」

「え？」

「だから！！俺が一番許せないのは！！それを受け入れちまった、お前達の心だ！！」

エルは今一度、デバイスを構える。

「お前らが忘れた、人間の心、見せてやるよ。」

ヴィータは感じた、僅かな魔力の煌き。

「お、お前まさか……。」

「さぁ、お前の最高の一撃、ぶち込んでこい。すべて受け止め、押し返してやる。」

そんな力が無い事は、誰の眼から見ても明白。
しかし、それでもこの男はそれを成し遂げるだろう。
妹を護るのと、自分達のような人殺しに、『人間の心』を思い返させるために。
……命を散らしてでも。

「ぐっ、そんな事をしては死ぬ……ぞ。」
「それに、私達はただの人殺し。助ける価値も無いのだぞ!!」
「今ならまだ回復魔法が間に合うわ。だから……。」

「お、お前達……。」

いつの間にか、ここに騎士達が全員集まっていた。
話はどこから聞いていたのか。シグナムの目を覚まし、上体を上げている。

「鉄槌の少女、得物を取れ。」

「わ、私は……。」

今、彼は何かを私達に何かを伝えようとしている。
それはわかるが、ヴィータはそれが何を伝えようとしているのかが、わからなかった。
それでも、彼の決死の覚悟に応えようという気持ちは……ある。

ゆっくりと鉄槌を構える。
カートリッジが装填される。

「ヴィータ！！」
「うるせぇ、黙ってろ！！！これが、こいつなりの覚悟なんだよ！！！」

それを聞いて、目の前の男が……小さく、小さく……笑った。

「変換……、」
「だめぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

この中の誰とも違う声が響いた。

「……はやて、起きちまったか。」
エルが首で背後を振り向くと、車椅子で必死に駆けつけたのか、汗だくのはやて。

「全部……見てたし、聞いてた！！あかん、あかんよ。私はそんな命まで張って護って欲しくない……。傍にずっとおって欲しいだけや！！！」

少女の悲痛な叫びが響く。

「確かに血も繋がってないし、一緒におった時間もまだ短い。けど、お兄ちゃんの言った通り、私達は家族や！！つらい事は、一緒に手を取り合うもんちゃうの？……あっ。」

はやてが言い終わるとほとんど丁度。
はやての足元の瓦礫が崩れ、はやてが車椅子から投げ出される。

「はやて！！」

エルは誰よりも早く動いた。
誰よりも傷ついた体で。

はやてを抱きとめ、胸の内に包みながら、地面に倒れる。

「……ごめん、おにいちゃん。またうちのせいで傷ついた。」
「いや、これは怪我の内の入らないよ。……そうだな、この温もりを捨てるのは本当にもったいない。これじゃ、死に時なんて当分先だな。」

目の前の二人は、本当の兄妹であった。
そんな二人を疑った自分達が恥ずかしい。

いや、愚かしい。

意思の無い、自分達プログラムが介入する余地など、はじめから無かったのだ。

「……すまない。お前は、偽者などではない。真の兄だ。」

シグナムは謝罪する。
彼に言った、偽者という最低の侮辱。
そんな自分が偽者だったと確認された気分だった。

「なんだよ、真の兄って。」

そういって、はやてを抱えて向き直った彼の表情は、晴れやかに笑っていた。
シグナムの言った言葉がそれほどに可笑しかったのか、小さな笑いを堪えていた。

「少しは『人間の心』って奴が、わかったか?」
「ああ、痛いほどにな。」

「じゃ、これから同じ家族だ。」

「え?……」

騎士達四人が、呆然とする。

「はやてを……護ってくれるんだろ?俺の力は見ての通り歪だ。その至らないところを、どうか助けて欲しい。……それに、今まで人間らしい生き方が出来なかった分、人間らしく、女性らしく生きてみろ。」

彼、エルンストは、何の気負いもなく。何の傲慢も無く、ただそれだけを告げた。
『人間として生きろ』
プログラムでしかない騎士達にそういっているのだ。

人として見られること、女性として見られること、家族と想ってくれる事。
その全てがとてつもなく嬉しかった。

「……ありがとう。」

「ん、気にするな。俺の名前はエルンスト・アルカトラス。長いからエルってみんな呼ぶ。」

そういって手を差し出す。
騎士達は、自らの名前を告げながら、その大きな手を握り返す。
握手の感想は、それぞれ違いがあるだろうが、一つだけ共通する感情が浮かぶ。

エルの手のひらは、とても温かかった。

十九話　心（後書き）

次は二十話ですか。早いもんです。

二十話　平和っていいな（前書き）

レオハルト「安西先生……、出番が欲しいです。」

エル「デバイスが出番を欲しがりますか。」

二十話　平和っていいな

あの夜の戦闘から、八神家には家族が一気に四人増えた。
随分と賑やかになったし、家事も楽になった。
人数が増えたから料理に関しては、すこし手間が掛かるようになったが、皆が笑って食事する事ができて、本当に嬉しい。

思えば、幼いころから俺は妹と二人きりの生活が多かった。
フィオラともそうだし、プレシアさんが忙しかったあの頃もアリシアと二人の時が多かった。そして最近は、はやてと。

これほどの家族に囲まれると言うことも、本当に久し振りだ。
幼いころだから、それを懐かしいと感じる事も無く、新鮮で穏やかな日々が、俺はとても好きになった。

闇の書に関しては、ヴォルケンズとはやての間で話し合っていた。
俺はそれを静観していたが、大体は想定どおりに決まった。

魔力蒐集はせず、穏やかに暮らしたい。それがはやての願い。
俺ははやての願いに殉じるし、それが俺の願いでもあった。

戦いに明け暮れた騎士達は、ここいらで少し休憩だ。

それから、一週間。
ヴォルケンズもここでの生活に慣れ、穏やかな日々が続く。

「お洗濯物、干し終わりましたよ～。」
「おう、ありがとう。シャマル。こっちの掃除はもう終わるぜ。」

今は昼前、シャマルと二人で家事中である。
シグナム、ヴィータははやてと買い物である。

「おら、ザフィーラ邪魔だ。掃除機で吸い込んでやる。」

犬形態のザフィーラに掃除機を向けるが、あっさりとかわされる。
ちっ、避けられた。まぁ、どいてくれたから良しとするか……
ん？犬じゃなくて狼だって？そんなことは知らん。

「これで、よしっと！！」

掃除機を手早く片付け、部屋のフローリングに寝そべる。

「疲れたー！！！」
「ふふっ、ご苦労様。」

俺はごろんと寝返りをうち、テーブルで一息ついているシャマルに話しかける。

「そうだ、シャマル。みんなが居ない内に、診察してくれ。」
「そ、そうですね……。」

なぜか頬を赤く染めるシャマル。

……不可解だ。

シャマルには定期的に、体の診察をお願いしている。
診察と言っても、そう大した事が出来るわけじゃないが、しないよりはマシ……ということで。

「回復魔法は毎日かけているのに、治りきっていない……。いや、治りきっていないというよりは、これで完治……？」

シャマルは俺の体についてボツボツと独り言を言っている。
それを聞くだけで、俺の容態はなんとなく予想がつく。

そうか、治りきらないか。
そろそろ、細胞、遺伝子自体が俺の体を忘れ始めたらしい。
そりゃ、何度も死んだり蘇ったりしてれば、記憶も失うわな。

いつかはこうなるだろうとわかっていたことだ。
驚く事も無い。

それにしても、性格といい、料理を除く家事といい、シャマルは本当にいい女だ。
料理さえクリアすれば、最高のお母さんになると思う。
ほら、今も献身的に俺の体を診てくれて……。

「それにしても本当に良い体……。こんなに絞られた筋肉が美しかったなんて……ハァハァ。クンカクンカ」

欲望むき出しだった！！

「返せ！！俺のシャマルへの感謝の気持ちを返せぇぇ！！」

「いきなりどうしたの!?私は貴方の体を舐め回す様に堪能していただけよ!!」
「堂々言い切りやがったよコイツ!!あと堪能ってやめろ、生々しいわ!」

「ただいま~!」

玄関から響く、はやての声。
こんなに、はやての声が天使の様に聞こえた事は無い。

「ほ、ほら、みんなも帰ってきたし。飯だ!飯を作ろう。」
「う~。」

なんとかシャマルの危ない視線から逃げ出した。
なんかあのままだったら、なにかしら問題が起こっていた気がする。
キャラ崩壊的な意味で。

「そうだはやて、今日の午後は病院だったな?」
「うん。それから図書館に行こうかなっておもうてるんやけど……。」
「そうか、今日はちょっとやる事があるから、ついてくことは出来ないから……。シグナム、シャマル。頼む。」

「うむ、任された。」

「ねぇ、お兄ちゃん。そのやることって、管理局のお仕事?」

管理局
その単語が出た途端、俺達の間――――、特にヴォルケンズに緊張

が生まれる。

「いや、それとは別件だよ。おれ自身の探し物と……趣味？」

その場の空気を和らげる為に、わざと少しふざけ気味に話す。

「趣味ぃ？」

「そう、趣味。」

それで話を打ち切り、昼食を作り始める。

「シャマル、ザフィーラ。主を頼む。」

「シグナム……わかったわ。」

皿を用意して、いざ材料を切り始める中、二人の会話が耳の片隅で聞こえた。

そして午後、自室でバリアジャケットを展開し、体の各部のサポーターや手甲を取り付けていた。

バリアジャケットの防護力を少しでも補助する、俺なりの工夫だ。

こんなことするのは、管理局広し言えども、俺ぐらいのものだろう。

「バリアジャケット展開といって、ほんとにジャケットしか出てこないんだもんなぁ。」

ヴォルケンズみたいに、鎧も展開されるみたいになりたいもんだ。

「本当に難儀だなぁ。そう思わないか？二人とも。」

ドアの向こう側に声を掛ける。

「居るんだろ？入ってこい。」

「ああ……。」

「ちっ、邪魔するぜ。」

「管理局の仕事だろう？」

「……ああ。」

より、二人の眼光が鋭くなる。

「お前らの心配は尤もだ。だがな、俺は家族は売らない。絶対にな。」

俺も負けじと二人を睨み返す。

「……その言葉が聞けただけで十分だ。」

「ああ、いまさらお前を疑ったりしねーよ。」

「あ？」

「私達が懸念しているのは他の点だ。……エルの任務とその難

易度についてだ。」

どうやら、最初から俺の事は信用してくれていたらしい――――――が、
それだけは聞いて欲しくなかった。
今更、嘘なんてつけるかよ……。

「ロストロギアの……封印及び回収。」

「やっぱりかよ……、予想していた中で最悪の答えが出やがった。」
「それがどれほど危険な任務かわかっているのか？」

「ああ、勿論だ。いつ死んでも可笑しくない。思いのほか簡単なときもあれば、命を削るようなギリギリの時もある。」

そのムラがとてつもなく恐ろしい。
まさに一瞬の油断が命取りだ。

シグナム達は、悲痛の表情で、顔を伏せている。

「お前達は、この家と、はやてを護ってくれ。これはお前達が悩む問題でもない。ましてや手助けなんて望んじゃ居ない。これは管理局所属のエルンストの問題だ。」

そういって、レオハルトを起動。

『座標軸を固定開始。転移準備。』

足元に薄っすらと魔法陣が現れる。

「それじゃ、行って来る。もしかしたら、帰るのが遅くなるかも知れない。はやてには適当にごまかしておいてくれ。ま、はやてはすぐに気付くだろうけどな。」

「お前は、死にたがってんのか？」

突然のヴィータの問い、それに思わず呆然とする。

「死にたがってる？」

「ああ、あたし達と戦った時もそうだ。お前は自分の命だって簡単に捨てやがる。……いや、違う。捨てると言うよりは、自分の命が物事の勘定の中にはいって無いんだ。あの時だって、自分が死ぬ事であたし達に『人間の心』を思い出させようとしてたんじゃねーのかよ！！」

ああ、そういわれればそうかもしれない。

死ぬつもりだったのかもしれない。

だが、なんとなくだが、俺には無いものがお前達にはあって、それがはやてを救う力になるかも知れない……そう感じた。

なんとなくで俺は死のうとしたってことか。ははっ、馬鹿らしい。

だが、同時にそれほど大切なものだと、感じたんだ。

「死にたがるなんて事は無い。命より大切なものが在るだけだ。」

『転移準備完了。魔力充填完了。転移開始。』

残される二人……。

ヴィータは苛立ったような表情で呟く。

「命がフツーは一番なんだよ。……馬鹿ヤロウ。」

そんな彼女の呟きは、最も伝えるべき人物に伝わる事は無かった。

二十話　平和っていいな（後書き）

ザフィーラ「安西先生……、セリフが欲しいです。」

エル「いや、お前は……ほら。セリフ無くてなんぼのキャラじゃん？」

ザフィーラ「……。」

エル「なんか言ってよ。恐い。」

二十一話　前兆がたくさん（前書き）

いつの間にか、アクセス数が三万超え。

ありがとうみんな！！！俺のテンションがマッハだぜ！

二十一話　前兆がたくさん

どこの管理世界か、それとも管理外世界か。
それは些末な問題。

ここに一人の男がいて、心を落ち着かせる程度に平和な草原は、生物とは判断できない『何か』によって埋め尽くされていることが、最も重要な問題。

「まさか、自立兵器の類だったとはな。」
『魔力群体、尚も増殖中。』

今回、回収するべきは、ただの魔力貯蔵具だという話だった。
元より正体見確認の代物ゆえに、それを鵜呑みすることなど無かったのだが……。

「所有者への敵意を察知。貯蔵した魔力で、防衛機構が作動する仕掛け……。それで出てくるのが魔力生体の群れとは、確かに効果的だ。」

確かに理に適っている。
これでは目標に近づくことは出来ないし、命すら危うい。
所有者はその間に逃げるなり対策を立てるなりすればいいからな。

とんでもないロストロギアが来ちまった。

『それに、お前との相性は最悪と来たものだ』

一対一の決闘ならば、いかようにも勝ちを手繰り寄せられる。
しかし、こうも数が多ければ、殺しきれない。

相手が、常時兵力を増強させているならなおさらだ。

「だが、まぁなんとかなるんじゃないか？……何もはじめての経験でもない。生き残るだけなら、何とかなる。」

そう言って、握り締めた拳を、前に突き出す。

「殺しきるなら……手札を増やせばいいだけだ。あまり使いたくないがな。」

『……了解。』

「変換……開始。」

「ばぁ～～、今日も疲れた。」

執務室の前の廊下を歩きながら、人ならざる声を出す。

『疲れた――――――、本当にその程度ならば何も言うことは無いのだがな』

「そう言うなって。五体満足で帰ってこれた。それでいいじゃないか。」

軽く微笑を含ませながら、レオハルトに返答を返す。

レオハルトは知っている。今、笑顔を作りながらも、変換に指定した箇所からの激痛に苛まされていることを。

命を削って、命を保つ。

その矛盾と異常性が、レオハルトは気に入らない。

しかし、そうしなければ立ち往かない彼の人生は、巨大すぎる危うさを孕ませている。

彼の人生の全容を知った者は、どのような感情を得るだろうか……。

「ん？あれ、あの人は……。」

エルの向かいの廊下から歩いてくる人物が一人。

「お久し振りです。ギル・グレアム顧問官。」

エルは背筋を伸ばし、恭しく敬礼をする。

敬礼をされた人物は、特に驚くこともせず、やんわりと敬礼を返す。

「ああ、久し振りだね。エル執務官。」

「クロノの研修の時はお世話になりました。あれ以来ですかね？」

「そう、なるかな。いやいや、補佐官であった君の教導のおかげで随分と楽をさせてもらったよ。」

エルはこういった年上、及び上官との会話について苦労した事は無い。

歴戦の勇士や、現場叩き上げとなれば尚更馬が合う。

もともとそういう気質なのか、それとも精神年齢がそれほど老け込んでいるのか。

どちらにしろ、社交的な面では大きなプラスであることは確かだ。

「アリアとロッテも君に合いたがっていたよ。今度会いに来ればいい。」

「はは、それは楽しみだ。余暇があれば、必ず。」

そこでグレアムは、口を閉じ。表情を少しこわばらせる。

「最近……地球の方に住んで居るようだね？」

「あれ、知っていたんですか？どこからそれを……いや、そんな事よりも、それがどうかしましたか？」

「いや、君ほどの優秀な執務官が、そんな所からの勤務からでは大変ではないかな……とね。私もそこの出身だが、魔法とはなんの関係も無い世界だ。いっそ、本局にでも住み込んでみたらどうかね？」

「いやいや、本局なんてあんな堅苦しいところは、自分には合いませんよ。それに、地球は魔法とは無縁である故、心地が良い。」

「君ならそう言うだろうと思ったよ。……一つだけ言っておこう。闇の書には関わらないほうがいい。煉獄の書で妹を失った君ならばわかるだろう。」

「な……。」

グレアムは、身を近づけ、エルの耳元でそう呟くと、何も無かったかのように通り過ぎて行く。
しばし、唖然とするエルだが、何かに気づいたかのようにグレアムの方を振り返る。

「年寄りのお節介のような物だ。あまり気にするなよ。」

左手を上げ、そう言いながら遠ざかっていった。

「何が、どうなってるんだ?」

『さて』

エルは表情を厳しくしながら、その背中を見送った。

久し振りの自らの執務室。
持っているゲームはほとんどはやての家に移動させたから、あまりゲームは残って居ない。

消えたゲーム。
それに反比例するように、部屋の殺風景感が増していた。

「あ～、こういうときに、俺がゲーム人間なんだなって痛感するわ。切実に。」
『ゲーム脳乙ですｗｗｗ』

とりあえずレオハルトを部屋の壁に投げつけておいた。

「早く家に帰ってやりたいのは山々だが……。」

グレアムさんとの、あの一件によって、言いようのない不安が俺の胸中に生まれた。
これを取り除くためにも、早く家に帰って安心したいのだが……。

「今のうちにやるべき事がある。」

それは、俺の戦闘の手札について。
レオハルトは良いパートナーではあるが、汎用性を重視した結果、

些か突破力に欠ける面があった。
その結果が今回と、ヴォルケンズとの戦闘によって、如実に示された。

シグナムとの時の話だ、俺はブレードを使っていたが、明らかに火力不足だった。
魔力不足とも言うが、ブレードの形成魔力があの剣『レヴァンティン』に大きく劣っていた。ダガー形態にして競り合った時ですら、半歩劣っていた。
これが実体剣か、非実体剣の火力差だ。

リーチに関しては申し分無いのは確かなのだが……。

「これに対する、新しいデバイスを……作るか。」
『む、浮気か？』

壁に意匠の鋭角部が、突き刺さったレオハルトが話し掛けてくる。
とりあえず無視無視。

さらに、もう一つ見せられた、ベルカ式の最大の特徴
『カートリッジシステム』

これが一番に目をつけている代物だ。
ハルバードをあの局面で弾き返してみせた、あの爆発力もさることながら、使用者の魔力値に依らない魔力充填が重要だ。

あれがあれば、変換を使わず一時的に、高度な魔法も使用可能になるかも知れない。

これに関しては、レオハルトを元に改良しようと考えている。
改良の下地として、レオハルトほどの良い素材はそうそう見つからない。

壁に突き刺さったレオハルトを見つめる。

『主人公が機体を、中盤で乗り換えるフラグですね。わかります。』
「うわ、なんか作る気失せて来た……。」

しかし、ここでそうしなければ、確実に後になって後悔する。
だからここはグッと堪えて……。

『マークツーからZ然り、ダンバインからビルバイン然り、ユウブレンからネリーブレン然りですね。わかります。』

「そんな知識、どこで覚えてきたの！！？」

壁に突き刺さったレオハルトを蹴り上げる。
今度は天井に突き刺さった。

『親父にも蹴られた事ないのに！！』
「俺が父親なんだけどな！？」

やっぱ我慢が出来そうにないよ。
フィオラ……お兄ちゃん、もうゴールしてもいいよね？

その後、色々と右往左往して、想像以上に時間を喰いつつも、デバイスの構想資料を製作完了した。

あくまで構想が練られただけだ。今日から製作を始めたって、相当な時間が掛かるだろう。
早くて……半年か、それくらいだな。

「これを理由にして……少し休めないかな？」

そう、ありえない希望を胸に秘めておく。
こんど報告しにいくときにでも、ちょっと話してみようか。

そう考えながら、荷物を纏め、転移魔法で帰路に着こうとし……。

「うっ！！ぐふっ！！」

軽く咳き込み、咄嗟に左手で口を覆う。
押さえた手のひらを見ると…赤黒い血糊がべったりと付着していた。

「いやいやいや。これは無い。」

俺は早速洗面所に向かい、左手の血を洗いに向かうのだった。

初めてだったんだ。変換を使用してもいないのに、こんな形で吐血したのは……。

「ただいま～！！！」
「おかえり、お兄ちゃん！！！」

はやての声に出向かれる。
はやての声を聞いて、心底安心する。
この家は、もう俺の故郷と言ってもいいのかもしれない。

最初、『お邪魔します』だった一言は、いつの間にか自然と『ただいま』と言うようになっていた。

「おかえり、エル。帰りが遅くなって心配したぞ。」

シグナムの声につられて時計を見ると、夕飯にちょうどよい時間だ。

「悪い。心配掛けたな。そのお詫びとして、今日はご馳走を作ろうと思って、こんなに買って来た！！！」

右手に提げていた、袋いっぱいの食材の数々を見せる。
「おおぅ」と目を輝かせる、はやてとヴィータ。
その二人を見て、微笑む俺、シグナム、シャマル。
ザフィーラは寝ている。
一応起きては居るんだろうが、完全に八神家のペットの犬と化している。
特に、細々とした振る舞いから。

「じゃ、早速作るから、みんな待っててくれ。」
「あ、私も手伝いますね。」
「だったら、居間で静かに大人しくして居てくれ。それが最高のお手伝いだよ、シャマル。」
「う……うぅ……ひどい……。」

俺はシグナムの横を通り過ぎ、台所へと向かう。
今夜は本当に楽しくなりそうだ。

とりあえず、生きて帰ってきたおれ自身に、乾杯？

シグナムは、はしゃぐはやて達を見て微笑んでいたが、エルが傍を

通り過ぎた瞬間、表情を曇らせ、台所に入っていったエルの方を見つめる。

「血の……匂い。」

自然と険しくなった表情で、それだけを呟いた。

二十一話　前兆がたくさん（後書き）

グレアムのキャラが掴みきれて居ない…。
なんか口調がおかしかったり、呼び方が変だったりしても、堪忍してください。

二十二話　長期休暇（前書き）

エル「今回、かなり時間掛かったんじゃないのか？オイ、コラ」

本当にすいません。言い訳はいたしません。

エル「何か色々いっても、所詮は言い訳だからな。これからの態度で、反省を示すように。」

ぜ、善処します。

（今日のエル、なんか恐い）

エル「作品に時間をかけるのは別に構わない。でも、時間の割りにいつもと同程度とはけしからん。」

いや、忙しい合間に書いたから、さらに劣悪かもしれない

エル「お前死ねよ」

二十二話　長期休暇

「エルンスト・アルカトラス執務官。入ります。」

ここはきっと、どの管理局員でも緊張するだろうパワースポット。
どのような理由であれ、進んでこの場所に入りたくは無いだろう。

その理由は目の前の、時空管理局黎明期の功労者として伝説になっている
三人の老人。

レオーネ・フィルス
ラルゴ・キール
ミゼット・クローベル　である。

「どうぞ、定刻通りですね。」

ミゼットからの返事に無言で応え、一つだけ空いた席に座る。

ここに今、先代の管理局の象徴と、当代の象徴が一堂に会した事になる。

エル本人が預かり知るところではないが、エルが管理局を代表する最強の魔導師であると囁かれている。
理由は多々あるが、その資格実績と、実戦の成果による所が最も大きい。
ゲームオタクという点を除けば、勤務態度も真面目。

後輩や部下の面倒見もよいなど、完璧超人と言っても過言ではないのかもしれない。

それでも女の気が、彼の周りに皆無なのは、ひとえに多忙のせいである。
更に、見つけた僅かな時間でゲームに没頭してしまえば、女性との触れ合いも根絶する。

救えない事に、それがエル自身、自分が女性に人気が無い、と錯覚していることだ。
故に自分から誰かにアプローチすることも無い。

それを見た、管理局の女性陣はエルが女性に興味がないか、多忙故のどちらかと決めつけ、遠目に憧れるだけになる。

最悪の悪循環であるのは言うまでも無い。
このエルの青春デフレスパイラルはまだまだ続きそうである。

閑話休題。

「今回のロストロギアは、これだ。」

エルは一緒にもって来た、〇ヴァ〇ゲリオ〇という汎用人型決戦兵

器が描かれたバックから、先日封印したロストロギアを取り出す。
まるで同年代の友達かのような振る舞いと口調である。

しかし、それに三人が機嫌を損ねる事も無い。
つまり、これが彼らのいつも通りなのだ。

「確かに。」

それをラルゴが、値踏みするような目で見回した後、そう告げた。

「ありがとうございました。エル執務官、それでは次回、適宜連絡します。」

「それについてだが。」

「はい。」

「今回の任務で、自分の力不足を実感したんだが、レオハルトもかれこれ七年……八年かな？まぁ、細かい事は良いか。それくらい前に作られたデバイスだ。命がけの戦いで、デバイスの性能差は生存率にも大きく影響が現れる。」

「だから、長期休暇が欲しい……そういうことですね？」

エルを遮るように、しかし台詞の僅かな隙間に綺麗に割り込んできたミゼットの言葉に、エルの表情は若干の苦笑を形作る。

「まぁ、そういうことだ。半年……は欲しいな。完全なデバイスを製作するためにも。」

「いいですよ。」

「ですよね。そんな簡単に休みなんてもらえるわけが無いですよね。」

エルはわかっていたかのように肩をすくめ、足を部屋のドアに向ける。

「いや、だから。」

「いいんです、いいんです。俺が一人居るだけで、ロストロギア関連の事件の八割は解決ですもんね。管理局全体としてみても、そりゃ譲れぬ事柄でしょう。それではまた次回お会いしましょう。」

エルは部屋を出て行く。

……。

……。

……。

……。

……。

「な、なんだってーーーーーー！！！！！！！」

部屋のドアをそれはもう超高速と言えるスピードで開ける。
明らかにドアが壊れそうな勢いだと言うのに、ぶつかる音がしなかったのが……不気味だ。

「本当ですよ。半年の間、その傷ついた体を、存分に休めてください。……私達は貴方に無理をさせすぎましたからね。」

申し訳ないと小さく呟きながら、ミゼットは目線を下げる。

「いや、まさかこれが通るとは思わなくて驚いた。だって、休暇が得られると気づく頃には食堂で食券買おうとしてたもん。」

『なにそれ恐い』

エルと三提督の反応の違いはまったくの正反対。まるで水と油。
また、ジェネレーションギャップとも言う。

しかし、エルがここまでふざけた態度を取るのも、理由がある。
単純に、心配をされたくないだけだ。
体は例えボロボロであっても、それを隠しとおすために、笑顔の仮面を被る。

それが読み取れるから、三提督も余計気に病んでしまう。

それが顕著に現れた様子とも言えるだろう。

ちなみにここから食堂まで、徒歩三分の距離である。蛇足。

何はともあれ、エルは念願の長期休暇を手に入れた。

その後、八神家に帰り、俺は高らかに宣言する。
「今日から約半年間、俺は休暇を取る事が出来ました！！」

「なんやて！？じゃ、お兄ちゃん、これからずっと家におるの？！
やった！！！」

素直に喜んでくれるマイシスタ。
俺もこれからの事を考えると嬉しくて、はやての頭をわしゃわしゃと撫でる。

「おう、これから一緒にたくさん遊ぼうな！！」
「うん！」

二人でそのまま台所に移動し、一緒に夕食を作り始める。
これからの事を想像してか、俺達の会話も弾む。
それに追いつくように、ヴィータとシャマルが会話に参加した。

そんな楽しい空間の中、シグナムとザフィーラに気が、どこか張り詰めていたように感じた。

「シグナム、醤油取ってくれ。」
「む。これだな。」
「ああ、ありがとう。」

醤油渡される時、めっちゃ睨まれた……。
気のせいだよきっと……うん。気のせいであってくれ。

「しかも、これソースじゃん。」

豆腐の皿にかけた後、気付いた。

さて、食事の後片付けも終わり、自室で待望のデバイス製作タイム。

「ねぇ、無抵抗で体を弄りまわされる気分ってどう？どんなかんじ？？ねぇねぇ、なんか言ってよ」

完全に機能停止しているレオハルトに語りかける。
反応は返ってこないが、インテリジェントコアは生きているので、反応できないだけで俺が何を言っているかはしっかりと聞こえているはずだ。

「さて、マジックジェネレーターは……改良の余地があるのはずっと感じていたしな。」

問題は山積みだ。

半年なんて長期の休暇は初めてなのだ。
いつもはメンテナンスだけで済ませるのだが、半年もあれば一から見直していっても、お釣りがくる。

「カートリッジシステムは……、うぅむ。実物を見てみない限りはなんとも。」

「エル、邪魔するぞ。」

俺が一人でブツブツ呟いていると、シグナムとザフィーラが俺の部屋に入ってくる。
下の居間からは、はやて達の笑い声が響いている。

「ドアを閉めろ。そんな顔で話しているのを見られたら、みんなが心配する。」

俺は二人に一瞥し、そう告げる。
珍しく人型のザフィーラを含め、二人の表情は固い。

「エル、お前はまた『あのスキル』を使ったのか？」
「生命力変換のことか？使っていないが、どうした。」

「ならばその左手から漂う血の匂いは何だ。」

ザフィーラがいつになく目を細める。

驚いて、デバイス製造のためのコンソールを叩いていた指が、止まる。
こちらも目を細め、二人を見つめる。

「いつ気付いた。」
「私は、昨日お前が私とすれ違ったときだ。」
ちっ、そうか、あの時シグナムの左側を通ったからな、それのせいかも知れない。
油断した……そう言ってしまえばそれまでだ。
いつ気付いたのか、ザフィーラに問いてみると……、
「私は始めからだ。」
だそうだ。
そうだな、狼形態だったのならば、隠し通せる訳が無いか。
「この事を……はやては？」
「さて、気付いてないのかもしれないが……怪しいところだな。あの夜、エル、お前は夕食をほとんど口にしなかっただろう？」
「頼む。この事は言わないでくれ。ヴィータにも、シャマルにも。」
さっき言ったが、これから半年間、任務とは無関係な日が過ごせるのだ。
その喜びを、無用に壊したくない。
「ああ、約束しよう。我々はエルのお陰で今のような暖かい生活が出来ている。だから、なにか力になれる事があったら、我々を頼ってくれ。」
突然、シグナムが頭を下げる。
声も、後半になるにつれて懇願するような声になっていた。

俺は、それが泣きそうな声にも聞こえてしまった。
それはきっと気のせいだと思う。
だって、泣きそうになる理由なんてどこにも……無い。

「あぁ、なんてったって俺達は家族だからな。早速俺の力になってくれ。」

「え？」

「デバイスを作る。生き残る為……、はやてを護る為に。」

困惑している二人に、手を突き出す。
何かを掴まんとする、逞しい手。

「お前達の力を、俺に貸してくれ。」

これで俺は、もっと強くなる。

二十二話　長期休暇（後書き）

どうでもよすぎるオマケ

エ「使う用途は定まっていても、どうも決まらないなぁ。どんな武器にするのか。」

レ「そんな時は、自分が好きな物から持ってくると良いだろう。そういう憧れの感情は、方向性を持たすよい刺激だぞ？」

エ「おお！！それはいい。ちょっと下からゲームとって来るわ。」

レ「やっぱりゲームが一番に出てくるのね。」

エ「やっぱり、インパクトが大事だよね。何をするにしても。」

レ「大きい事はいいことだ！！って事で、これこれ。」

エ「ん？なんだこのデータ。」

レ「実体剣が欲しいんだろ？だったらこれだろう。ダイゼンガーは、俺の夢。」

エ「夢にすな。『斬艦刀』って…、バカ、もしこれ作ったら、フェイトの色違いのジェッｔ

フェイト「ナニ？」

エ「さぁ、次に行こうか。」

レ（フェイトマジ恐いお）

エ「なぁなぁ、これみてくれよ。」

レ「む、『サガ〇ロンティア』か、随分と懐かしい物が出てきたな。」

エ「このラスボス見てくれよ。」

レ「なになに？……『ジェノサイドハート』？」

エ「なんか誰かのデｂ

な「ナニ？」

エ「さ、次行こうか。」

レ（魔王さん、マジパネェっす）

エ「そ、しょれでその作品中に出てきゅる技だけど。」

レ「動揺はよっくわかるから、落ち着いて話そうか。」

エ「この、わじゃめい（技名）見てくれ！！シュターライトシャワー」

レ「要所要所で噛むのやめて。ただしくは、スターライトシャワーな。」

……。

エ・レ「「使えるね～（魔法的な意味で）」」

エ「ＳＬＢのさらに広域攻撃型的な感じで……。」

な「三度目は、ないよ？」

エ「すいませんしたー！！！」

エ「なんであの二人怒ってんの？ねぇ、なんか俺、気を損ねるような事言った？」

さぁ？

エ「ツッコミにしては早すぎるし、恐すぎる！！言いたい事の半分も言えなかったぞぉ！！良く考えろ、何か悪い事したか？いや、怒らせる以前に俺達はそうそう会う機会も無いわけで、つまり怒らせるような事柄が発生自体しない訳で……。」

あれ？あの魔力光は…？

エ「げぇっ、魔王と死神！！」

フ「ヒロインの私達に……！！」

な「出番をよこせぇぇぇぇぇぇ！！！」

エ「それだったかぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

ズガァァァァァァァァァァァァァァァァァン！！！！！！！

エ「て、か……、作者に、言え。ひでぶ。」

エル、君の犠牲は忘れない。

あえて言おう、コメディィは苦手であると！！

二十三話　三度目の正直（前書き）

はぁ、はぁ、今回は前回の遅れを取り戻すために頑張ったぜ。
（勿論速度的な意味で）

エル「早いだけで、内容が糞だったら、それこそお前、糞なんだぜ。覚えとけ。」

お前、ちょっと頭冷やそうか？

二十三話　三度目の正直

俺は、気が付くと闇の中にいた。
一切の光を拒絶した、深淵の世界。
眼前に広がる黒以外は、何も視界に映るものはなく、自分自身が闇に変貌したかのような錯覚を覚える。

そう、俺はこの孤独を知っている……。

この感覚は八年前のあの時の……。

「どうして、ここに来たのです？」

声が聞こえる。
女性の声だ。
とても暗く、沈んだ声。

「ああ、貴方の中にも『闇』在るのでしたね。」

その通りだ。俺の胸の中にはいつも、ドス黒い闇が蠢いている。
そうして、俺にいつも囁くのだ。

「全てを、殺せと。」

正直、悪い夢だと思う。
その声のせいで、俺はいつも憎悪と隣合わせだ。
はやて達と楽しく過ごしていても、クロノ達と厳しい訓練をしていても、俺の心のどこかには無差別の『殺意』が潜んでいる。

「それでも貴方は今も正気のまま……。私は貴方が羨ましい。」

……どうして？

「あなたは、殺さない。けれど、私は殺す。私は笑わない。けれど貴方は……笑える。」

それが心からの笑顔とは言い切れないけどな。

「例えそうでも、私には、笑顔を向ける相手もいない。」

だったら、俺に向けて笑えよ。

「え？」

俺達は、今こうして話してる。だから、笑顔を作る機会はあるはずだ。

「……残念です。どうやら今日はここまでのよう。」

そのようだな。俺の意識が薄れていく。
徐々に、しかし強制的に俺の意識は眠りに就いていく。

……また、話せるか？

「私達の『闇』が近づけば……また、話せるでしょう。」

じゃ、その時までに笑顔の練習しておけよ？

「また貴方に出会えたら、考えましょう。」

すこし戸惑いながら、そう応えた声は、どこか可笑しかった。
明るい声で話したら、とてつもなく綺麗で可愛いんだろうな。

そういうどうでもよい事を思考しながら、俺の意識は完全に沈んだ。

１０月２７日

俺は毎日の日課のジョギングをしていた。

長期休暇をもらってから、既に四ヶ月が過ぎていた。
ゆっくりと体を休める事ができて、遺伝子情報を失った箇所以外は、体調は完全に持ち直した。

遺伝子情報を失ったと言っても、さして重大な問題でもなく、俺は日常生活に支障なく過ごしている。
その理由は、代替可能な箇所を選んで変換していたことによる。
胃を変換箇所に指定する事が多いのはそのためだ。

肝臓の再生能力は凄まじいというが、変換は生命力そのものを失うため、再生機能すら失ってしまう危険性があるので却下した。

肝臓は無くなっても、代わりがそうそう無いのだ。

そう考えて、急に可笑しくなる。
なんだが俺の体は消耗品みたいだ。
俺自身がそう認識して居るのが、一番可笑しい。

日課のジョギングについてだが、これは休暇を取り始めてからの日

課だ。
休み始めて一週間、さして運動もせず生活していて、さすがに焦り始めた俺は、体力の維持を目的として始めた。
最近は簡単な組み手もシグナムと始めた。

シグナム達、プログラムという完成された個体は違って、人間はどこまでも未完成だ。
シグナム達は体力が衰えることはないし、老いる事も無い。
それが幸せかどうか考えるのは人それぞれだが、体力が衰えないのは流石に羨ましいと言わざるを得ない。

それに、仕事復帰してから、体力不足で追い詰められ、死にました。
なんてのはゴメンだ。
そういう視点から見ても、体力を維持するのも、デバイスの製作に告ぐ最重要課題だ。

「もうすこし遠くまで走ってみるか。」

幸い、いつもよりすこし早起きしたせいで時間はある。
すこし遠出しても罰は当たらないだろうさ。

そう思い、俺はいつもとは違う場所で曲がり、ジョギングの延長を開始した。

『むむ、我が妻、レイジングハートの匂いがするぞ。』

それはジョギング途中に突然呟いた、脳みそまでカビた我がデバイスの一言だった。

「デバイスにオスメス無いし。てかいつの間に夫婦の中になってんの気持ち悪い。」

一応そうツッコミを入れつつ、俺は待機状態のレオハルトを通り過ぎる電柱にひとつずつぶつけていく。

『イタッ!!イタイ!!!でも気持ちイイッ!!』

ハァハァ言い出して、これ以上続けても喜ぶだけなので、レオハルトを胸ポケットに仕舞う。

最近、本格的に気持ち悪い。

これがエルの最近の大きな悩みだ。

『だが、レイたんが近くに居るのは事実だぞ?その所有者も含めてな。』

所有者……なのはか。

「どの辺だ？」
『少し上……そうだ、あそこの公園だ。』
レオハルトがガイドマーカーで指し示した所は、ほとんど山中にある、小さな公園だった。
あんなところで何を？
『本当に微量だが、魔力も検知できる。』
あぁ、なるほど。把握。
じゃ、その地点に言ってみますか。
ジュエルシード事件以来、なんだかんだで一度も会っていない。
彼女の成長を見てみますか。
私はレイジングハートと朝の魔法の練習中。
あんまり大きな魔法とかは使えないけど、基礎がまだダメダメな私にとって、基礎をしっかりと固める良い機会になったの。
小さな魔法の球を作り出して、それを操ったり、レイジングハートのサポート無しで魔法を詠唱したり……。

これが結構疲れるの。

学校では眠くなっちゃうし、最近先生に指摘される回数が増えてきている気がするんだ。

でも、やっぱり魔法の練習をやめる事は出来ないの。

勿論、フェイトちゃん達との繋がりがあるっていうのもひとつの理由。

けれど一番の理由は、いつか……。

「熱心に練習してるみたいだな。感心感心。」

え？この声って……。

驚いてこちらを振り向くなのはに、よぉ、と手を上げて返す。

「久し振り。」

「エルさん！！」

なのはが駆け寄って来る。

「ずっと会いたかったんだよ！！私を助けてくれて以来、一度も会えなくなっちゃって……。」

「悪かったな。こっちも仕事で最後まで面倒見きれなかったんだ。……うん、どうやら毎日しっかり魔法の練習してるみたいだな。」

「え？どうしてわかるの？」

「わかるもんはわかるんだ。なのはは頑張ってるよな、レイジングハート？」

『ｙｅｓ．』

俺が会ったのは、約六ヶ月前と、今日の二回だけだ。

毎日会っているなら、変化にも気付きにくいが、半年の間でたったの二回ならば、違いがよっくわかる。

体の魔力の流れも、前見た時よりも格段に安定しているし、レオハルトに計測してもらった結果を見ても、成長が感じられる。

これは是非とも、一度演習をしてみたくなった。

「そうそう、聞いてエルさん！！フェイトちゃんが執務官試験を受けたんだよ！！」

あ

「そう！！！その事についてだ！！」

他に言う人がいないから、別に気にしていなかったが思い出した。

実は俺、今回の執務官試験の監査官をしていた。

休暇でも、これくらいはやれと、管理局から回ってきた仕事だった。

主な仕事は、面接、試験問題の配布、答案用紙の丸付けである。

面接はともかく、後の二つは別に人力で無くてもいいんじゃないかと思ったが、これも『執務』の一環だと、無理やり自分を納得させた。

回答合わせ中に、フェイトの名前が出てきて驚いたのを、覚えている。

「俺、フェイトの答案の丸つけと、面接官をしたんだよ!!フェイトの名前を見た時はビックリしたなぁ。」

「えぇ!?そうだったの?それでフェイトちゃんはどうだった?!」

俺はわざと苦しい表情を作り、俯く。

身長差があるから、なのはからはバッチリ俺の表情が見える。

「……何も聞くな。」

「……うん、なの。」

答案は、うん。近年稀に見る悲惨さだった気がする。

面接も頑張っていた……けど、頑張りだけじゃ駄目なんだな。

フェイト、結果はまだだろうけど、ドンマイ。

諦めるなよ……。

それから、なのはと訓練についてや、最近の様子について軽く話し込み、その後お互い帰路に就いた。

なのはは良い子だ。
機会があれば、はやてと会わせるのも悪くない。いやむしろ良い。
はやてには同年代の友達も少ないだろうしな。

俺が家につくと、

「遅い！！」
「遅いわ！！」

朝食当番をすっかり忘れていた俺は、腹を空かせたはやてとヴィータの叱咤を受けた。

これだけで、なんの変わりも無く一日が終わればどんなに良かっただろうか。

異変は午前中の病院で起こった。

いや、異変自体はもっと前から、起きていたのだ。

それを俺達が眼を瞑っていただけなのだ。

「麻痺が……進んでる？」

俺ははやての主治医の石田先生と話している。

俺の後ろには、付き添いとしてシグナムが立ち、控えている。

その誰もが、表情は暗い。

「ええ、このままでは麻痺は下半身に留まらず、上半身にまで及び……いつかは心臓が。」

「……。」

俺は何も言えなくなる。

それはシグナムも同様であるようだ。

理由が思い当たるから、実に苦しい。

麻痺の理由の一端であるシグナムはどのような気持ちだろうか？

俺達は、石田先生にお礼を言い、病院を出た。

何も知らないはやてを伴って……。

その夜、はやてが眠りに就いた頃、俺とヴォルケンリッターは居間

に集まった。
しっかりと、俺（正確にはレオハルト）とシャマルとで防音の結界も張り、はやてに聞かれないようにする。
それで、今日あった事をみんなに話す。

「闇の書を、一刻も完成させないと、闇が主の体を完全に蝕んでしまう。」
そう話すシグナム。
「それはつまり……魔力の蒐集をはじめるって事かよ。」
「そうだ。どのような手を使ってでも、魔力を集めなければ……。」
そこで、シグナム達はハッと気付き、今まで沈黙を保っていた俺を見る。

ここにいるのは管理局の執務官。
魔力を蒐集する、それは他人や魔力を持つ物を襲う事を意味する。
それを許容する管理局ではない。
目の前のはやての兄も、管理局員なのだ。

「本当ならば、お前達を闇の書諸共に破壊して、はやてを救うべきなのだと思う。……管理局員としても、はやての兄としても。」

自分達がはやてを殺す一因であるのは紛れも無い事実。
その俺の言葉に、騎士達は表情を沈める。

「だが、そんなことが出来るほど、俺は凄い人間じゃないし、お前達はもう大切な家族だ。お前達を見捨てるなんて考えはもう起きないよ。」

「エル……。」

「みんな。俺はやるぞ。管理局に背く事になろうが、犯罪者の烙印を押されることになろうが、俺ははやてを救う。お前達もそれで一緒に救ってみせる。」

俺から出た管理局に背くと言う宣言に、騎士達は動揺が走る。

シャマルは慌てたように、話し始める。

「でも、それじゃ、もし貴方が私達を助けたとしても、その後の貴方の生きる術が無くなってしまうかも知れない!!それに、私達ははやてちゃんの騎士。最悪、私達を見捨てても構わないわ!!」

それに俺はまっすぐにシャマルを見つめなおす。

「あの時言ったろ。兄貴は妹をどうしたって助けなきゃいけないんだ。時には全てを捨てて助ける時だってある。それが今なんだ。……それに、お前達は俺に初めて出来た妹以外の『家族』なんだ。親の顔も記憶も忘れきっちまった俺にとっては、最初の家族なんだ。妹も含めて、家族が失われるのはもうウンザリだ!!!」

二度ある事は三度あるという。

ああ、それは間違っちゃいない。
事実、これが三度目だよ。

だが、今言うのはその言葉じゃない。

俺は今度こそ妹を護り通してみせる。どのような手を使ってもだ。
その気持ちは昔からずっと変わらない。
しかし、今までの二人の大切な妹は護れなかった。だから……
…。

「三度目の正直だ」

俺は収集を決意して、拳を握り締めた。

二十三話　三度目の正直（後書き）

エルの髪の色は、最初は黒でした。

でも今は半ば脱色した黒です。

過去のあの事件がきっかけに、すこし髪の色が抜けました。

エル「今更ナニ？」

いや、過去編とかで書いたかな～、と思っていたら、書いてなかったから覚えてるうちに補足ってことで。　あと、その箇所を時間が出来たら加筆しときます。

エル「そういう事はね？もっと徹底しようね。読者さんも大変だろ。」

あ、でもしっかり読み直したわけじゃないから、どっかにぼそっと書いているかも。

あ、あと感想やアドバイスなども随時待ってます。

コメ返で、作品内で書ききれなかった事なんかを、書いていけるかもしれないんで。

結構そういうの楽しいんだ。

エル「そういうわけだから、このダメ作者にできたら、感想をあげてやってください。誤字脱字報告も待ってます。そうするとね～、この子は喜ぶんですよ～」

ム〇ゴロウさん……！！

二十四話　蒐集（前書き）

テスト期間に入りつつあるので、更新が遅くなります。
申し訳ありません。
出来るだけ頑張りますので、応援よろしく。

二十四話　蒐集

はやてを助ける為、俺達は魔力の蒐集を決意した。
その翌日、既に俺とシャマルは、管理局の目が届かない管理外世界に赴き、魔力の元になるものを貪欲に搾取していた。

「この世界の生物は、ほとんどが魔力素を体内の器官に有している。こいつらを狩っていけば、魔力は集まるという事だ。」
「なんだかその生き物が可哀相ですね……。」
これから俺達がする事を悟ってか、目を伏せるシャマル。
「……どう思おうが、俺ははやての為に、殺す。」
「……。」
その点は誤魔化したって、良い事なんか無い。
俺は自分の自信と誇りを持って、命を奪う。
沈黙するシャマルと共に、ジャングルが如き道を歩く。

「あ、そこの草も魔力を持ってるんだ。ちなみに食えるぞ。」
「やけにこの世界について詳しいんですね。」
それは、ロストロギアの収集に、世界……いや時空各地を訪れているからだ。
一日で見つかる簡単な物ではなかったので、何日もサバイバルな仕事だったが、あの激務がこんな形で得をするとは思っていもいなか

った。

「けっこう綺麗な花だろ？この花粉に一番魔力が凝縮してるんだ。」
「わぁ……綺麗。」

おもむろに、見せていた花をシャマルに手渡し、目を瞑るエル。

「ようやくお目当てのが来たか。」
「え？」

エルはある茂みの一点を指す。
そこには爛々と輝く赤い目が。

「群れを作って、魔力を捕食する生物がこの世界にはいる。俺なんかの魔力じゃ集まらないが、シャマルの魔力なら集まったわけだ。」

二つの赤い点に呼応するように、次々と赤い点が浮かび上がる。
それはエルとシャマルを中心とするように、ぐるりと円を作る。

「囲まれている！？」
「心配するな、俺が護る。シャマルは蒐集にだけ専念してくれれば良い。」

デバイス、レオハルトを起動して、何百何千と繰り返してきた同一の構えを取る。

しかし、違う点もある。それはレオハルト自身。

穂先の手前、刀身と平行に並び立つように左右に三つずつ、筒のよ

うな、板のような長方形の物体が取り付けられていた。
それがあたかも天使の羽のように、緩い円を描きながら展開されている。

「実戦はこれが初めてだ。ちょっと本気出して行け。」

『イエス、マイサー』

エルにとって長年の相棒の、聞きなれた声が響く。

「マジックドライブ、フルブースト！！」
『ドライバーインストール』

エルの足元に、今までとは違い、明瞭な白光を放つ魔法陣が展開される。
さらに、エルの周辺に、五つの歪みが生み出される。

『レーザー展開。ドライブ良好。』
「うん、俺もお前も調子が良い！！アサルト！！！」
『イエス、マイサー！！』

エルの号令で、五つのレーザーがそれぞれの敵を貫き、戦端が切って落とされた。

魔力の蒐集は、まだまだ始まったばかりである。

12月1日

いつもの三提督との会談場所の一室。
俺は今日から長期休暇を終え、三提督からの特務を受け付ける事となっている。

その最初の任務は、予想しつつも、聞きたくは無かった内容である。

「海鳴市に存在するであろうロストロギアの、発見及び封印をお願いします。」

俺はゆっくりと、テーブルを見つめていた視線を上げ、ミゼットと目を合わせる。

「最近、地球の海鳴市でロストロギア反応が度々発見されています。煉獄の書との、波紋パターン比較より、闇の書と仮決定し、最善の行動をお願いします。」

「あぁ、わかった。」

俺はそうとだけ答えて、席を立つ。
こんな形で依頼されると、むしろ好都合だ。
これなら他の誰にも目が付くことなく、蒐集を続けられるかもしれない。

「あともう一点。これは本来貴方にのみ課せられる依頼だったので

すが、闇の書となると、危険視する部署も数多く、他の部署から多数の捜査官が派遣されることになるでしょう。」

「な……。」

俺はミゼット達三人に向き直る。

「今すぐそいつらを止めさせろ。もし闇の書だった場合、余計な被害を被る事になるぞ。」

「闇の書について思うところがあるのは、貴方だけではありません。私達であってもそれは難しいでしょう。」

こいつ……それは妹の事か。

「それに、貴方は既に闇の書について何か知っているのでは？」

「根拠は？」

「何も。ただ、貴方は生存にかけて、どこまでも合理的であるのは知っています。」

「今の俺の判断が、合理的でないと？」

「ええ、そう見えます。」

……糞が。俺の事はお見通しとでも言うつもりか。

「では一つ、合理的に判断して、提案を一つ。」

俺はレオハルトを起動し、ミゼットの眼前に槍を突きつける。

「俺に絶対優先権をよこせ。他の部署が俺の邪魔が出来ないようにな。」

ミゼット達三提督は、それぞれ表情を変えることなく、こちらを見据える。

「嫌とは言わせねぇ。確かに俺はあんた達に恩がある。『執務官』としての俺が今ここにあるのも、魔法だけにとらわれず実力を見てくれたあんた達のお陰だ。その恩と、秩序を護りたいという気概が感じられたから、俺は命を張り続けた。」

それは少し昔の話。

俺がテスタロッサ達と生活を始め、様々な感情を取り戻し始めた頃だ。

もはや記憶には無い暖かい家族の、新しい母と妹との生活に、俺は大きな安心と幸福、感謝を持ちつつも、申し訳なさも感じていた。

所詮は、俺は余所者であることを、過ごす内に感じていたからだ。

今思えば、なんてバカな事を考えていたのだと思う。

二人は、俺との触れ合う距離がわからなかっただけなのに。

それを俺は、拒絶受け取っていた。

そんな気持ちに従うように、必死に自立しようとしていた時期もあった。

俺は一人で立てるんだと。

俺は一人で戦っていけると。

しかし、現実はもっと厳しく、不平等だった。

待っていたのは露骨な差別。
魔法が使えない、というだけで様々な試験に落とされた。

執務官試験もその内の一つだ。
学科では首席。実科ですら合格ラインの数段上に到達していても、
問答無用に切り捨てられた。

その時、面接を担当した執務官の放った一言と、あの侮蔑するような表情は忘れない。

（魔法が使えない奴が出しゃばるな、役立たず。）

そいつは、執務官になってから逆に、問答無用で訓練で叩きのめしてやったが、今はそんな話はどうでもいいか。

とにかく、俺は絶望していた。
このミッドチルダに、世界全体に。

そんな中、三提督達は俺の実力そのものを見て、俺を執務官として推薦してくれた。
三提督からの推薦とあっては、誰も文句も言えず、俺は執務官になった。
更には魔力ランクが低ランクであるにも拘らず、魔導師ランクをSランクに認定してくれた。
……自分で言うのも気が引けるが、それくらいの実力はあったと思う。
魔導師ランクＡＡと訓練しても、そう苦戦する事も無かったからだ。
一対一なら、尚更勝率は上がった。

それだけで終われば、管理局の長い歴史の中の立志伝で終わっただろう。

だが、今の地位と引き換えに言い渡されたのは、三提督の死地に赴くも同然の特務を受ける事。

なんだ、そういう裏があったのか。と腹を立てる事は無かった。

なぜなら、ちょうどその頃、俺は第二の家族達を全て失っていたのだから。
そんな、過去。

これからすることは、脅迫。
この事が知られれば、俺は犯罪者として捕らえられる事になるかも知れない。

だが構うものか、もう既に後戻りなどできない。
魔力の蒐集のために、俺は多くの生物の命を搾取し過ぎた。

「だがな、言っておくが俺が今まで受け続けた依頼のほとんどは、その時代のあんた達がケジメをつけるものなんだよ！！それこそ命を掛けてでもな。しかし、命を掛けてでも達成する事叶わない老人になってしまったお前達に替わって、俺が尻拭いを続けてきた事を忘れるな！！！」

俺は突きつけたレオハルトをさらに首筋に近づけていく。

「それでも断るのであれば、俺がもうここにいる執務官として存在

する理由は無い。既に命を奪った俺は時空犯罪者として生きるさ。
ここでお前らを殺してでもな。百の命を奪うのと、百三の命を奪うのはそう変わらないから。」

レオハルトのブレードは最初から殺傷設定にしてある。
ふわりとミゼットの首筋に刃が触れると、その箇所から細い紅の筋が走る。

「わかり…ました。貴方の任務内容に優先権を付与します。もし貴方の任務の障害になる場合、他の部署への立ち退きを強制できるように。」

ミゼットは諦めたように、そう言い捨てる。

「まだ足りない。立ち退きに応じなかった場合、いかなる手段を以って、立ち退きを強制できるようにしろ。」

俺の言葉に、三提督達は流石に、表情を強張らせる。

「文句があるなら、俺をねじ伏せてみろ。お前達は確かに強い。年老いた今でもな。しかし、目の前にいる魔導師は、その老いた体で相手取るには、些か厄介である事を忘れるな。」

三提督の実力は、そこらの並みの魔導師ではとても太刀打ちできる物ではないだろう。
だが、エルは並みの魔導師ではない。
最新の技術をふんだんに使用した最新のデバイスを持ったエルは、管理局の象徴のエースだ。

「どうして……そこまで。」

「これに関しては、他の何者にも譲り気は無い。妹を護るのは、この俺だ！！！」

闇の書の闇が、はやてを喰らうなら、俺の胸に宿る闇で、その宿命を呑み込んでやる。
宿命の前には、管理局も魔導師も些末な存在。
邪魔ならば、闇の濁流で呑み込んでしまえ。

俺の鼓動がドクンと、一拍高鳴った。

俺はなのはが朝、魔法の練習をしていた公園で俺は高台から、人口の電気の明かりで美しく彩られた町並みを眺望していた。

時間は深夜。

犯罪を心中で肯定した事で、今更ながら、あの暖かい家庭に帰られなくなった。
きっと、あいつらは俺の帰りを待ち続けてる。

俺が帰れば、すぐに笑顔を見せてくれるだろう。

だが、今の俺には、その笑顔だけで辛い。

作りきれる自信の無い笑顔を返すわけにはいかない。

だから、仕事と言って、ここでぼんやりとしている。

この様子は、リストラを家族に隠すサラリーマンもかくやといった所だろうか。

「おい、ここで何してんだよ。」

突然背後から聞こえた少女の声。

そう、この声は……。

「ヴィータ。どうしてここに?」

「バカ、そりゃこっちの台詞ってんだよ。お前の魔力は小さくて弱々しいけど、特徴があるから、すぐわかったんだよ。心配掛けやがって……。」

「特徴って?」

「え、いや、なんていうか……し、知らねーよ!!お前を見つけたのだって、蒐集が今日はあたしが担当なだけだったからだからな!!」

「あ、そう言えばそうだったっけか。」

気の抜けた声でそう答えると、ヴィータは呆れたように溜息をつく。

「お前…どうしたんだよ?いつもみたいな元気がねーぞ。」

「そうか。」

「おい、本当に大丈夫かよ……？」

心配そうにこちらを覗き込んでくる。

ヴィータは、いつも乱暴な言葉を使うが、決して乱暴者ではなく、ヴォルケンリッターの中で一番の人格者であると俺は感じている。きっと、素直じゃないだけだ。行動の節々を見ていても、根が優しい女の子である。

「ヴィータは、優しいな。」

そんなヴィータの気遣いが嬉しくて、俺は覗き込んできたヴィータの頬に触れる。

「なっ、ナニ触ってんだよ、この！！」

殴られた。グーで。

けど、当てるだけのパンチで痛くはなかった。

「なんだよ、思った事を口にしただけなのに。」

「変な事言ってんじゃねーよ！！」

口ではこう言っているが、耳まで真っ赤な様子を見ると、満更でもないらしい。

「そ、そうだ、お前が変な事言うから忘れてた。今日は蒐集の相手を変えるぜ。」

「ん？それは構わないが……どれを相手に？」

「あそこらへんに、魔力を感じるんだよ。ずっと前から。それも徐

々に大きくなってきてる気がしやがる。」

街を指差すが、暗いため細かいところまではわからないが、この街に存在する魔導師としたら、なのはの確立が大きくなる。

なのは……。

「人間の魔力を蒐集したら、そいつは死ぬのか？」

「ん？いや、死なねーよ。あたし達が狩ってた奴らは体内器官に魔力が癒着していたから出来なかったけど、人間にはリンカーコアっていう魔力を司る器官が存在してるからな。」

「そうか。」

だったら……。

「俺も手伝おう。家に帰ってもすることないしな。」

なのは……お前の魔力、頂くぜ。

二十四話　蒐集（後書き）

レオハルトのデザインは……わかる人はわかる、あの機体をイメージしてます。

てかそのまんま。

知らない人は、レオハルトの本来のデバイス名で画像検索すると、ロボットが出てくるかも?!

二十五話　弱い者いじめ（前書き）

エル「別になのはは弱くない。俺が強すぎるだけだ。」

なのは「すこし、頭冷やそうか？」

エル「あぁん！？」

なのは「ごめんなさいなの！！」

フェイト＆はやて「魔王が負けた？！」

二十五話　弱い者いじめ

シャマルを呼び寄せ、俺達は獲物を結界に入れる準備を着々と進める。

今は最後の打ち合わせと言った所か。

「俺がなのはと戦闘する。二人は隙を見て蒐集を頼む。」

簡潔に言い放ち、俺はバリアジャケットを展開する。

俺が持つ優先権はあくまで、強制介入に対する実力行使による立ち退き。

こちらから攻撃を仕掛ける事は、許可されていない。

どちらにしたってなのはの魔力を蒐集することには変わりは無いが、余計な問題を起こすには、まだ段階が早すぎる。

そのための変装。そのための今回のバリアジャケットだ。

ジャケットと言うが、今の姿は、ピッチリと体にフィットして、肩を露出する黒いベストとダブダブの白いズボンと言った姿だ。

さらに、まるで皿を被っているのかと想像させる、のっぺりとした無装飾の仮面。

仮面には、他人の自然な地声への変声機能まで完備している。

我ながら完璧な変装であると思う。

皆は知らないだろうが、俺は結構な細マッチョだと自負している。
なのはは少なくとも、厚着をした俺の姿しか見た事が無いだろうから、余計判別が利かなくなるだろう。

「お前、そんなにマッチョだったんだな。」
「私はいつも診察してましたから、既に知ってましたよ。」

ここにも、俺の細マッチョを知らなかった人が一名。

意外と言うか、ちょっと引いた感じで呟くヴィータと、それにフフンと自慢げに答えるシャマル。

シャマルはともかく、半年一緒に住んでて今更そんな感想かよ、ヴィータ。

「い、いや、お前は痩せてる印象が強いからな。そうか、普段のあの馬鹿力はその肉体能力のお陰だったのかよ。てっきりわざわざ肉体強化させてるのかと……。」

「いや、戦闘中には局所的に使うけど、基本俺は魔法に頼れない人だから。」

つまり、
シグナム達と力で拮抗した時、俺はスーパーナチュラルパワーで戦うわけだ。
純粋な筋力。

それに対し、向こうは魔法による肉体強化。うん、泣けて来るね。
今に始まった不便じゃないが、それでももし、それが使えたら……
と思ってしまう。

「とにかく!!蒐集のタイミングは任せたぞ。管理局側からの援護にも気をつけておけ。
きっと、何にも邪魔されずに戦える時間はそう長くないだろう。」

俺が見積もっても、約二分。
その間になのはを無力化し、蒐集を完遂させた上に、俺達は完全に離脱しなければならない。

「大丈夫ですか?話を聞く限り、手ごわそうな相手みたいですけど……。」

「大丈夫だよ。例えなのはであっても、初見の俺は止められない。」

そう、今回の戦いで最大の武器は、お互いに初見の戦いであること。
そうなれば、俺が付け入る隙は、ゴミのようにある。
そう、ゴミのようにだ。

ま、正面から戦っても負ける気はさらさらしないが。

「それでは……結界を張ります。」

「ああ、頼む。」

地面を蹴り上げ、俺は飛び立つ。
因縁渦巻く、漆黒の夜天へと……。

『なのはが反応。こちらに向かってくるぞ。』
「ああ、接敵後、直ちに交戦に移る。お前は俺のナビゲートと飛行魔法に専念しろ。」
『了解』

俺はペンダントとして、胸に飾ってある待機状態のレオハルトにそう告げる。
姿をどんなに変えても、デバイスが同じでは変装の意味が無い。
今回は、レオハルトには出番を控えてもらう。
そして、この半年の間に作った、新しいデバイスを使う。

「ジャン。お前の初めての出番だ、くれぐれも圧縮率には注意するように。お前にその辺りは全て任せるぞ。」
『……承知』

新しい相棒の声をしっかりと確かめ、前方に現れた星を仮面越しに見据える。

「来たな……魔導師。」
「こんな大きな結界を張って……誰？」
なのはは、明らかに不審な姿の俺に警戒を強める。
間合いは三間。距離にして約三十メートル。
明らかになのはの間合いだ。偶然この位置に留まったか、それともそれを計算してか……おそらく後者であろう。
「言葉は不要。……魔力を頂く。」
俺の口から出てきた声は、俺よりも年上の野太い声。
「ジャン、セットアップ！！」
『承知……展刃！！』
新しき相棒の名前を唱え、手に現れたのは、黄金の柄。
その柄が、淡いクリアブルーの西洋剣の刀身を形成する。
その姿は、まるで月を映す聖剣。
ジャンを正眼に構え、一つ大きく息を吸うと、それを吐き出す勢いで一気に飛び出す。
「往くぞ！！！」
「っ！！…ディバイン、シューター！！」
『ａｌｌ，ｒｉｇｈｔ．』

なのはから飛び出すのは三つの光球。
それぞれが違う軌道を描き、こちらに向かってくる。

「よいしょ。」

俺はそれを身を捩らせながら、空中をヘッドスライディングのような格好で飛び込む事で、その全てを寸前で回避する。激突する地面も無いので、魚が泳ぐかのような流れで空中を駆ける。

完全な軌道予測と速度計算ができての芸当だ。と、自分で言ってみる。

これでも二人の間合いは、まだ十メートル。
剣の間合いにはまだ遠い。

標的を見失っても、しつこく俺を追いすがってくるディバインシューターが背後から迫る。
それを気にもせず、更になのはとの間合いを詰めるべく、前へと飛ぶ。

「っ！！」

なのはは、一度距離を取ろうと、後方へと移動しながらバインドを俺へと仕掛ける。

俺の眼前に、魔力の縄が広がる。

前をバインド、後ろを魔力弾に挟まれた。
これは避けようがない。横に逃げれば、その二つが襲ってくる、ならば……。

「すべて切り伏せれば良い。」

その二つを十分に引きつけ、なのはですら俺を捕らえたと確信した瞬間、大きくしかし鋭く回転切りを放ち、吹き飛ばす。

魔力弾もバインドも魔力の剣圧にさらされ、役目を果たすことなく消失する。

しかし、なのはは驚愕しつつもしっかりと距離を離すことを徹底し、二人の距離は振り出しに戻った。

「ハハハ！！本当に不便だな、近接縛りというのも！」

俺はもう一度ジャンを構えなおし、なのはを睨みつける。
経過時間は約三十秒。残り、九十。

ああ、この不便さがたまらなく愛おしい。
まるで俺の人生を現しているかのようだ。
だが、これだけは言える。俺は確実に、

「お前を捕まえるぜ？」

そして、そのときがお前の敗北だ。
あと九十秒逃げ切ればなのはの勝ち。
ジャンの間合いになのはが入れば俺の勝ち。

俺はもう一度、なのはを捕まえるべく、前に飛行する。

私は目の前の正体不明の敵に、困惑と言い様のない苛立ちを感じていた。
それと、僅かな恐怖。

仮面の人は、何度もこちらに接近してくる。
私はそれに応戦するけど、どのような手を凝らしても、あと一歩で避けられる。

それが苛立ちの一因。

このまま続けても、いずれは私が捕まえてこっちの勝利。
それがわかっていても、こちらの手を完全に回避し、執拗に張り付いてくる攻めが恐かった。

私が三度目のディバインシューターを放ち、また距離が開く。

練習の成果を見せるためにも、弾一つ一つを違った動きで撃ちだすけど、やっぱり簡単に避けられる。

男の人は、また剣を構え、突撃してくる。

これで四度目なの。

（レイジングハート、なんとかして大きなのを一発当てるから。力を貸して。）

『ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ．』

私は、密かに魔力を、ディバインバスターの為に収束させ始めていた。

（これで、四度目。あと三十秒も無いな。）

内心そう呟くが、焦りは一つとして無い。

なのはの癖、レイジングハートの性能、その他諸々完全に把握した。

そして、お前が密かに何をしようとしているのかもな。

布石も十分。この突撃で、終わらせる。

なのはが成長しているというのは、良くわかった。

撃ち出されていた魔力弾も、それぞれに工夫がなされていて、実に素晴らしい。
とても九歳の実力とは思えない。まるで才能の塊だ。
が、経験を舐めんな。

「さぁ、ここで終わらせるぞ。アレ、使うぞ？」
『装弾……。』
「カートリッジは使用しない。するほどの相手ではないからな。」
『承知』

今までと同じように、俺はなのはに向けて突撃する。
今までと同じように、魔力誘導弾が射出される。
今までと同じように、俺は回避する。

違うのは、ここからだ！！

「ディバイン…バスター！！！」

やはり、撃ち出された砲撃魔法。

（レオハルト！）

心でレオハルトに念じ、斥力発生システムを起動。
誘導弾を回避した体勢で、足元に斥力で足場を作り出しそれを大きく蹴り上げ、砲撃を回避する。

「なっ！！？」

飛び上がった結果、体の上下は空中で反対になり、下に頭、上に足が来ている。

「ジャン！！魔法剣……！」

ジャンの刀身が一際強く、光を放つ。

『光波！！！』

その体勢で体を捻り、剣をなのはに向けて思い切り薙ぐ。

剣であるので、刀身は勿論届かない……が、刀身に流し込んでいた魔力が、刃となってなのはへと襲いかかる。

「うっ！？」

巻き起こる、爆音と閃光。

バリアジャケットを貫通する事は無く、なのはは完全に無傷だ。

だが、そのような事はもはや関係ない。

なのはが強い光によって、眼を瞑り、足を止めたときには、既に背後に密着しているのだから。

砲撃魔導師が、その足を止めたとき、すなわち敗北。

『ｍａｓｔｅｒ！！』

「えっ、レイジングハート！？」

まるで主人を護るかのように、いや真実護ったのだろう、レイジングハートがなのはの体を護るかのように持ち上がる。俺の剣の一撃を受け止める為に。

『終止』

「ああ、終わりだ。」

俺はそれをしっかりと見届け、剣を振り下ろす。

まっすぐに振り下ろされた剣は、レイジングハートと拮抗する事も無く、一撃で二つに分断する。

「俺の剣が、物を斬ったのは今が初めてだよ。」

「レイジングハート！！！」

なのはが、二つに分かれたレイジングハートを悲鳴に近い声で呼びかける。

俺はなのはの横から、首に向けて手刀を放ち、意識を刈り取る。

「がっ！」

崩れ落ちるなのはを抱きとめ、地面に降ろす。

「さぁ、早くしろ。」

俺がそう呟くと、シャマルによる魔力の蒐集が始まった……。

その数分後、クロノ達によって気絶し、レイジングハートを二つに斬られたなのはが発見された。

手がかりは……皆無。

二十五話　弱い者いじめ（後書き）

デバイス紹介と、解説……したいけど、忙しいからゴメン！！
次の前書きか後書きで書くよ！！

デバイス設定とかは、特に独自解釈やら設定やらが多くなるだろうから、そう言うのが無理な人は、そのまま本文読んでいただいて結構ですよ？

自分なりに、理屈は付けているつもりなので、それほど不自然ではないとだろうけどね！　キリッ

二十六話　影、虚像、邂逅（前書き）

ああ、忙しい忙しい。

テスト期間とか死ねば良いのに。

エル「よし、わかった。オブラートに包もうか。」

二十六話　影、虚像、邂逅

八神家の居間には、エルとはやてを除く全員が集まっていた。
時刻は二十三時。はやては今、深い眠りに就いている頃であろう。
この居間を支配する空気は、とてつもなく重い。
なのはの魔力を蒐集し、項が多く埋まったというのに、誰一人として表情の明るい者はいない。

「エルは？」
「自室に篭ったよ。しばらく一人にして欲しいってさ。」

シグナムはその重い空気の中、口を開き、エルの身を心配する。
それにヴィータは視線を合わせることなく、中空をぼんやりと見つめながら、言葉を返す。
ヴィータの言葉を確かめたシグナムは、次に居間のテーブルの上に無造作に置かれた、ペンダントとブレスレットに視線を移す。

「自らのデバイスすらここに残してか。」
『察してやってくれ。私達のような話し相手が存在する時点で、アイツには苦痛なのだ。』

ペンダントから、若い男性の声。レオハルトだ。

「話し相手って……デバイスですよ？それに、貴方達は彼が作ったんでしょう？」
『アイツは誰であろうと、弱った姿を見せたくないんだよ。それこそ有機無機関わらず。』

それは幼き過去から続く、エルという男の習性。

親を失ったその時より、彼の周りには何も無い。
頼るべき人も、助けてくれる存在も何も。

その中で、エルは自らの力のみで、立ち上がってきた。

子供の身でありながら、大人の実力社会の中に飛び込んできたのだ。
それで弱みを見せろ、という方が無理な話だ。
幼きときより、その生活を常に続けてきたエルには、その習性がしこりとなって今も根強く残っている。

『アイツはきっと、明日変わらない笑顔で言うだろう。おはよう、と。……そんな誰にも本当の表情を見せてやれない俺達の『父親』に……どうか優しくしてやってくれ。』

レオハルトの懇願に、即答する者はいない。

いままでで、薄々感づいて置きながら、目を逸らしていた事実を突き付けられたからだ。

常に前向きで、戦場に立てば頼れる仲間として一緒に過ごしてきた。
いままで駒として扱われ続けた騎士達を、人間として傍に置いてくれた家族。

エルが、はやてもヴォルケンズも救うと言ってくれたからこそ、騎士達は闇の書の宿命に抗う事が出来るのだ

そんな彼の強い心と力に、支えられて、勇気付けられて騎士達は過ごしてきた。
彼が笑えば、皆の心が穏やかになった。

彼が悲しめば、皆が悲しくなった。

騎士達の中で、いつしかエルという存在はとても大きく、かけがえの無い存在となっていたのだ。

だが、やはりエルも人間だった。

戦場では無類の強さのエルでも、彼の心は折れ始めている。

そう気付いた途端、暗雲が自らの頭上に立ちこめたかのように不安になった。

これから、雨が降る。

エルという大木が折れてしまったら、私達はどこで雨宿りすればよいのだろうか？

それが、騎士達の総意。

『笑止』

「なに？」

ブレスレットからの重厚な声に、シグナムは眉を顰める。

『不安になるのはわかるが、そう考えすぎるなって事だよ。』

笑止とはどういう意味だと、シグナムが机に詰め寄るとレオハルトからの補足が入る。

『エルがお前達を護るのは、家族だからだ。家族は、つらい時や嫌な時は一緒に手をとりあって乗り越える存在なのだろう？ならばお前達も同じ事を、エルにしてやれば良い。』

「そう……だったな。私達は、少しエルに甘えすぎたのかもしれないな。」

シグナムはレオハルトの言葉を噛み締めるように目を閉じ、反省する。

他の三人も、シグナム同様静かに、深く、反省していた。

また静寂が訪れるが、今度の静寂は朝まで続くことになった……。

自分の感情を抑えるのも、呑み込むのも、もう自由自在だと思っていた。

妹達を失ったその時から、もう悲しむ機能など失ったものだと思っていた。

なんという勘違い、なんという自惚れ。

はやての為だと奪ったなのはの魔力。
それは上質な魔力であった。
かなりの数の項が埋まっただろう。

結果から言えば、完遂。文句の付けようがない。

それで終わりならば良かった。俺が戦闘マシーンであればどんなに楽なことか。

なのはを手に掛けた瞬間から、雪崩のように押し迫る罪悪感。
今まで狩ってきた生物達の時とは、比べ物にならない。

確かに生きている。なのは死んではいないが、俺達の都合で彼女を駆逐した事実は変わらない。

はやてという一人の少女を救うために、だ。

なのはには何の罪も無い。
非は全てこちらにある。

「俺は、悪役にも成りきれないのか。…屑以下だな。」

俺は、戦闘マシーンにはなれなかった。

（嘘を、つくなよ）

声が、聞こえた。

俺と同一の声。いや、俺そのものの声だ。

ベッドに座り、項垂れていた頭を上げる、するとそこにはまったく同じ姿をした俺がいた。

如何な魔法か、それとも闇が作り出した虚像か。

このさいどちらでも良い。

俺は俺を見下ろしながら、嘲笑の表情でただ見つめる。

声は、俺の頭の中に直接響きだす。

（お前はそんな事で罪悪感なんて、欠片も感じちゃいないはずだ。）

「それ以外で、感じることなど……無い。」

（だから嘘をつくなって。俺はお前だぞ？お前の事はなんだって知ってる。お前はなのはを陵辱した事などに、欠片も心を痛めちゃいない。）

「そんなわけがあるか。」

俺は立ち上がって、正面から睨みつける。

俺の視線と同じ高さに、俺と同じ眼があった。

（むしろその逆。お前は心のどこかで、なのはを陵辱した感覚を『快感』と思っているんだ！！！ハハハハハ！！！！そうだろう？！その事実が、嫌で嫌で邪魔くさい理性が悲しんでるだけだよ～！ま、最後の良心って奴だぁぁ！！！）

俺を見下す表情はそのままで、狂った戯言だけが脳髄に響く。
忌々しい。この声は、とてつもなく俺を苛立たせる。

（図星だからって怒るなよ！！認めろよ、お前は……）

「黙れ！！！」

俺は叫び、目の前の人形の額に指を指す。

「これ以上、虚像の分際でほざくな。自分の器も存在しない偽者は消えろ！！」

そう言い放つと、目の前の人形は腹部からまるで煙のように弾け、薄れていく。

（ありゃ、やはり精神だけではこの程度か。まぁいいか。お前の闇も感じることも出来たしな。俺が自分の器を手に入れて、次会うときはその闇、受け入れろよ。）

「受け入れねぇよ。さっさと消えろ。」

（はは、つれないねぇ……。本当につれない……。）

その言葉を最後に、幻想も幻聴も掻き消えた。
込みあがってくるのは安堵ではない、怒り。
いや、もはや憤怒。

「っ！！！糞、野郎がぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

思い切り胸を自分の拳で叩く。何度も何度も。
心臓が揺れ、呼吸困難になっても、尚続ける。

「がっ、はぁっ！！おぇ！！」

やがて酸素が欠乏し、腕も上がらなくなり、打撃が中断される。
だらしなく舌を垂れながら、貪欲に酸素を供給する。

（俺は、そんな事思っちゃいない！！思っていて堪るか！！！）

この想いが最後の優しさだと！？快感だと！？
ふざけるな、俺は……俺は……

「愉しんでなんか……いない……ぁ。」

部屋の鏡を見て、驚愕し、俺は恐る恐る手を口に触れる。
信じられず、何度も何度も口に触れるが、結果は変わらない。
俺の口は、まるで悦楽に浸っているかのように、確かに嗤っていた
……。

汚れらしい汚れが見られない、清潔な病室。
静謐な印象を受けるその白のベッドの上には、なのはが一定の静かな寝息を立てながら眠っている。
その様子は穏やかで、彼女の身には大事無い事を物語っていた。が、やはり異常は見られたのだった。

なのはを心配そうに見守るのは、クロノ、フェイト、リンディ、エイミィの四人。

特にフェイトは、心ここにあらずといった様子で、視線があちこちに向かっている。

「なのは……。」
「大丈夫よ、フェイト。数日間しっかりと休養を取れば、すぐに良くなるから。」

リンディがフェイトの様子を見るに見かねて、慰める。

フェイトはそのリンディの言葉に、心配そうに頷くだけであった。

「まさか、なのはがこんなにも簡単に負けるなんて……。」

一通り見舞いを済ませたクロノは、今回の一件について考察を始める。

レイジングハートからの救難信号を受けたのは昨日の夜。

同時に強力な結界の反応も検知され、なのは以外の魔導師が事件に絡んでいる事は明白。

その救難信号から、遅れて五分。

一番行動が身軽なクロノが、考えられる最速の時間で救助に駆けつけた。

しかし、現場に到着すると既に、気絶しているなのはが発見されたのだ。

たった五分。

その間に、高町なのはは完膚無き敗北を喫した。

ＰＴ事件を共に乗り越えたクロノだからこそわかる。

なのはの実力は決して低くない。むしろ、異常なほど高い。九歳にして管理局でも有数の魔導師として名乗りを挙げられるだろう程の実力だ。

クロノはベッドの脇に置かれた、レイジングハートに視線を移す。

真っ二つに割られた赤いガラス玉。それが今のレイジングハートの姿であった。

それほどの実力を持っていても、この敗北だ。

本来自動修復機能によって、破壊されることが少ないデバイスですら破壊されているこの事実。

デバイスコアに関しては無傷であろうとの報告だが、それでもこの破壊のされ方は異常というほか無い。

相手は相当の実力者か、それとも奇襲で受けてのか……。

（現段階では、奇襲の方が可能性が高い…な。）

クロノはそう判断する。

なのはの実力と人格を知っているからの判断だ。

目の前で眠るこの少女は、どこか抜けている部分が存在する。

その隙を突かれたか……。

更に異常と言えば、なのはの現在の容態についてだ。

彼女がこうして休んでいるのも、体の魔力が欠乏しているからだ。

それにより、リンカーコアが極限にまで縮小してしまっている。

どうしてそのような事をするのか、その目的と意義。
謎は多く、それを解決する手がかりについての情報がまったく無い。

（どちらにしても、意識が戻ったら話を聞く必要があるな。）

そうしなければ、情報があまりに少なすぎるからだ。
なのはの証言が無ければ、それはほぼ皆無のままだと言って良いだろう。

（ただですら闇の書発生の兆しで、忙しいと言うのに……！！）

クロノは心の中でそう悪態をつく。
闇の書について、因縁があるクロノにとっては、一刻もはやく今回の事件を解明し、来るべき災厄に備えたい所だろう。

彼の師であるエルンストも、現在は闇の書の捜索に赴いていて、最近は連絡を取る事も無い。

心からの無事を願っているし、自分も早く彼の任務を手伝いたいと思っている。

しかし、クロノも含めて誰も気付いていない。
今回の一件は、闇の書に連なる事件の発端に過ぎない事を。

その日の夜は、今まで何の不安も無く過ごしてきた夜とは明らかに異質だった。
まったく同じ姿で、異常な内面をまざまざと見せつける俺自身。
不吉に釣りあがる、自らの口角。

寝るのが怖い。
自分ではない何かが、動き出してしまう気がして。

出来る事なら、シグナム達に俺を縛り付けて見張っていて欲しいくらいだ。

されど律儀に睡魔は襲いかかる。
恐怖が勝つか、睡魔が勝つか。
しかし、起き続けて……どうなる？
結局、人間は生理的欲求にはどうやっても抗う事は出来ないわけで。

「怖い……怖いよ、フィオラ……。」

エルという個人は、多大な不安を持って睡魔に身を任せ、眠りに落ちたのであった。

そして近づく、闇と闇。

「また、ここなのか。」

もはや見慣れ始めた、闇の中。
取りあえず、自我を持って夢を見られる事に喜ぶべきなのか。
今、俺の体が勝手に動き出して好き勝手していないことを祈る。
背後に、人の気配。

そう、俺達は少し近づきすぎたのかもしれない。

「よう、闇の書の……管制人格さん？」
「こんばんは、煉獄の住処。」

振り返ると、銀の長髪の女性。
どこかで見た事のある、雰囲気、容姿。

若干の懐かしさが胸に去来する。
そう、俺は似たような経験を、した事がある。

それは、いつ、どこであったか……。

それは、忘却の彼方に追いやった、過去の……惨劇。

二十六話　影、虚像、邂逅（後書き）

うん、忙しいけど、デバイス紹介しようか。
今回はこの子。

『我』

ジャン

アームドデバイス　形状は一般的な西洋剣
エネルギー刃では対抗しづらい実体兵器に対応するためのデバイス。
刀身は圧縮された魔力により形成され、実体を作り出す。
魔力についてはレオハルト、エル両名から供給され、ジャン自身には圧縮操作機構が積載されている。

性格は寡黙で、古風なサムライ
西洋剣なのにサムライ
古風なのに、名前はジャン。

ジャンだって良いジャン。

それがエルクオリティ。

フェ「はい、質問です。」

今回のゲストは、フェイト・T・ハラオウン（19）さんにお越し頂いております。

エル「わかってるじゃねぇか。作者。」

それでは質問をどうぞ。

フェ「魔力で実体を形成って出来るんですか？」

これについてはエルとデバイス両方について説明をしなきゃいけない。
と、いうことで。

エル「あい、わかった。まず俺の魔導師の実力については、知っての通り底辺を絶賛飛行中だ。もう魔法に関しては残念すぎる出来です。」

ＡＣＥ：Ｒの蚤気楼並みの出来栄え。

エル「そこ、余計な茶々入れない。でもね、一つだけ、俺にも魔導師として優れている所がある。それが魔力の圧縮について。」

フェ「そういえば、レーザーもレイも圧縮型魔法だったね。」

エ「もともと魔力が無いから、少量で一定の魔力を確保するための工夫なんだがな。それ故、人より何倍も圧縮を利用し、試行錯誤を積んでいったら、他の魔導師の一線を画す実力になってたわけ。」

フェ「それで圧縮で実体が作れるって事？」

エ「う～ん、端的に言えばそう。反対の例としては、なのはのスターライトブレイカーが該当するな。なのはは集束と放出に関しては最高峰だろう？だからこそなせる業がある。魔力素や自らの魔力をまた自分の魔力として集束するのは、錬度の高い魔導師ならば大抵は使いこなせる。　けど、そこらに漂っている魔力そのものを、自分の魔力として取り入れるには、かなり高度な技術が必要なわけ。　それがなのはを砲撃魔導師たらしめている最大の理由。」

フェ「ガクガクブルブル」

エ「オーライ。トラウマスイッチを押しちまったみたいだ。とにかく、それとほとんど同じ理由だよ。圧縮なんぞ、どのデバイスでもどの魔法でも扱う調味料みたいなもんだが、俺の場合はそれを突き詰めた結果、メインディッシュの物質変換みたいな域に達したという訳。」

フェ「なるほどなるほど～。」

エ「正確にいうなら、俺のは圧縮と言うより、凝縮の方が正しいのかも知れないがな。ただ…。」

フェ「ただ？」

エ「凝縮型魔法って、なんか格好つかないジャン。」

ジャン「？？」

フェ「あぁ……、そうだね。」

それでは疑問も解けた所で、本日はこれまで。次回も出来るだけ早め、高品質をお届けしようと頑張るので、よろしく。

フェ「最後に、エルさんはどんな種類の魔導師に属する事になるの？」

エ「やめて、魔導師としては聞かないで！！！魔導師としては種類別にすらされない落ちこぼれなんです！！」

二十七話　混沌の闇（前書き）

いつの間にかＰＶアクセスが五万飛んで六万突破。

みんな、本当にありがとう～！！

二十七話　混沌の闇

エルは、目の前の銀髪の女を、なんの感情も見られない表情で見据える。

感情が見られない、というのみで、決して無表情というわけではない。

その表情は薄く笑みを浮かべているようでいて、目は笑っていない。

見方を変えれば、憂いを帯びている表情…と見る事も出来るか。

どちらにしろ、感情が読み切れない。

彼が今、心の内でどのような感情を女に向けているかが、まったくわからなかった。

銀の女は一瞬の困惑を覚える。

このままではいけない。何かしらの会話が無ければなにも進む事も無い。

何から話すべきか。いや、そもそも話題などあるものなのだろうか。

こちらからエルという男を、この空間に呼び込んだわけでもなし、

こうして出会えた事はまったくの偶然。

話題など、考えておいてあるわけなど無く、そもそも二人はそういった事をする関係では無い事は明白だ。

開口することすら覚束無い。そんな状況が続くかと思い始めた頃。

「ひとつ、わかった事がある。」

以外にも、エルが自ら話題を提供する。表情はそのままで。

「ここは、ただの夢なんかじゃない。俺達、二人の闇が作り出した時間とは隔絶された、虚数領域。目覚めれば全てが消えて無くなる夢とは、違う。」

青年は一本、人差し指を立てながらそう説明する。
彼の言は決して間違っていない。
むしろ確信に近い。

「そうですね。ここで起こった事は、確かに消える事は無い。少なくとも、以前に出会った記憶は今も私の中に残っています。」

「だがしかし、当事者以外にそれを知るものはいない。」

エルが付け足すように告げる。
その後、一度目蓋を閉じ大きく息を吸い、ゆっくりと吐き出す。

まるで気持ちを整理するように。

「それでは夢と大して変わらない。俺達の中に確かな形をもって残っていたとしても、それを外の者が見て判断すれば、どちらも夢と言うだろう。そう、自らに観測できないのであれば、それは存在しないのと同じなのだから。」

まるで生徒に教えを言い聞かせるように、少しづつ少しづつ近づいてくる。

彼は何も発してはいない。
気負いも、殺意も、威圧も。

しかし、圧される。
自らには無い、絶対的な何かをこの男は持っている。
そう考えなければ理解不能だ。

「どうして、形の無い俺達『闇』が、人を殺せるっていうんだ。」

気がつけば、首に手が掛かっていた。
彼の左手が、やんわりと首を包んでいる。

「どうして形無いものが、形ある人間の人生をぶち壊せるっていうんだ。」

語気には明らかに怒りが篭っている。並々ならぬ。
しかし、それでもエルの表情は変わらない。

それがとてつもなく…恐怖だった。

「俺はお前が大っ嫌いだ。闇の管制人格。たったお前らと波長が合ったってだけで、普通の少女として過ごせなくなり人生を壊され若くして死んでいく。全部、お前らのせい！！！」

お前『ら』とは、どういうことか。
考えてみても思い当たらない。

私は元々孤独だ。
他に存在する者など……。

「ああ、なるほど。私の姉妹機……と、言う事ですね。」

その言葉に、表情は反応しない。
まるで機械のように口が開き、僅かに首を包む手に力が入るだけだ。

「ああ、その通り。煉獄の闇は、俺達家族を壊し、妹を喰らい、今度は俺を胸の内から徐々に食い潰している。」

今度は明確に手に力が篭っていく。
それにあわせてこちらも徐々に息苦しくなってくる。

だが、エルの表情に今浮かんできたものは、怒りだけではない。
あれは……悔恨？

なぜだろう?確信はないが、そう感じ取ることができた。

「いつもいつも、俺の中で俺の声で囁く。俺が思ってもいないことを。何度も何度も何度も何度も!!いつしか、それが俺の本音じゃないのかと思ってきた自分が一番……一番、許せねぇ!!!」

「エル……。」

ついに仮面が割れ、憤怒に彩られた素顔が現れる。
憤怒を向けるのは自分自身。
首を絞めていた手も、脱力するように下に垂れ、エルは自らの右手で表情を隠す。

そんな彼に、初めて私は名前を呼びかけた……。

他にもっと言葉があったのかもしれない。
しかし、こんな痛々しい彼を見ていると、他に言葉を出す事は出来なくなった。

「教えてくれ……、教えてくれよ。これは俺の本当の気持ちなのか?俺ははやてを助けたいのか?それともただ単に他人を蹂躙したいだけか、殺したいだけなのか。」

「それは……。」

煉獄の書は、人間の感情を蒐集する。
その闇を一身に受けたその心は、如何様なものか。

きっと、それは混沌。

集めた人の数だけ想いがある。

今、エルの心にはそれら全てが一緒くたになって介在している。
憎しみがあれば、憐れみがある。
怒りがあれば、安らぎがある。
喜びがあれば、悲しみがある。

どの気持ちが本当の気持ちかなど……わかるはずも無い。
その混沌が、彼自身だと言ってもよい。

しかし、その在り方は酷く歪で、極端に不安定だ。

なぜなら、人間は未知を恐れる生物だ。
それは得体の知れない幽霊などのオカルトだったり、底の知れない人間などだったり……。
人間はそれを無意識に遠ざけ、自らを護ろうとする。
それは人間の誰もが持つ生存本能であり、決して罪に咎められる物ではなく、人間が人間として生きていく上で、不可避の行動。

しかし、それすらエルには許されない。

どうやって自分自身を遠ざける事が出来るだろうか。
そう、混沌とは理解不能である事が存在の前提なのであるから。

常に得体の知れない自分と寄り添いながら今も生き続けている。
他人から理解されずに、自分ですら理解する事が出来ない。

足元が不安定…などという容易な話ではない。
足場など初めから存在などしていない。

今も彼は、現実を漂いながら生きている。

それは、この上なく危険で……孤独な人生。

そう考えると、管制人格である分こちらは役割、使命がはっきりとしている。
例えそれがどんな残酷な使命であろうとも、自分が理解できないよりも何倍もマシだ。

「私からは何も言う事はありません。私は貴方のような人生を理解する事は出来ないし、元々人生を語る事が出来る、人間という個体ですらありません。」

だから、わざと突き放したような言葉を放つ。
もう幾度と無く主殺しを続けてきた自分ですら理解できない壮絶な人生。
今の彼に何を言っても、私では励ましにも慰めにも、同情にすらなり得ない。

「……そうか。」

そうエルは小さく呟くと、右手を降ろし、素顔を晒す。
そこには先程と変わらない、仮面。

「その通りだな。俺の人生は俺だけの物だ。他人に聞いてどうにかする物ではない。俺が自分で答えを出して、自分で前に進んでいくさ。」

誰が見てもわかる、強がり。
それでもそれを押し通すしかない悲しさ。

「……それじゃ、行くわ。」

エルは振り返って、闇へと歩を進める。

「はやてを殺す奴は、俺が全部ぶっ壊す。それだけは忘れるな。」
「はい、覚えておきます。」

釘を指すようにそう告げ、更に数歩足を進めると、

「あ、それと」

思い出したかのようにこちらに半身で振り返る。

「なんですか??」
「人生を語れる人間ですらないっていったけど……、普通の人間だって人生語れる奴はそういない。……俺の持論だが、どんな器であろうとも、それに人間の…もしくはそれに準ずる感情が存在するならば、その全てに人生を語る権利はあると思う。」
「え……。」
「見てれば、お前にだって感情はある。まだ小さい揺らぎだけどな。……ヴォルケンズのみんなにだって感情はある。だから俺はあいつらも肯定するんだ。もし、命令をただこなすだけの機械だったらみんなぶっ殺してやっていたがな。」
「私にも……人間になれる機会があると?」
「お前が望めばな。いつまでもそんな仏頂面じゃ、折角の容姿が台無しだぞ。」
ニシシと笑いながら、人生を語る戦士。
混沌としていても、やはり彼はその中で芯が潰されてなどいない。
どのような苦境でも笑って進める彼の強さが、確かに存在している。
「ふ、ふふ。……ありがとう。」
「ああ、どういたしまして。なんだ笑ったらもっと美人じゃないか。」

その言葉を最後に、エルはまた前へと踏み出し、体は闇に溶けて消えて行った。
きっと、現実世界に戻ったのだろう。

「本当に、強い人……。」

何百年と続いてきた闇の輪廻に終止符を打つ。
彼ならば、もしかしたら成し遂げるかもしれない。そう思わずにはいられない。

彼は私に、人間になっても良いと言ってくれた。
そんな事、初めて言われた事だ。

胸に言いようの無い暖かさを感じる。とても静かで、けれど胸に大きく響く……。

「これが将達が感じた気持ちなのでしょうか。」

将達に、人間の心を取り戻してくれただけでも私は嬉しかったのに、それが今度は自分にも向けられるとは……。

「嬉しいとは、こういう……感情なのですね。嬉しい、嬉しい。」

確かめるように呟きながら、頬に水が流れる。

「嬉しい……けど、」

どうして、こんなにも悲しいのだろうか。
この温かみが嫌なのか、いやそんなはずが無い。

『もし、命令をただこなすだけの機械だったらみんなぶっ殺してやっていたがな。』

彼の言葉がリピートされる。
それは現実の何十倍の重さを持って、自分に圧し掛かる。

そう、そうなのだ。

「結局、私は……め、命令を、こなすだけの……機械なんだから！」

私は、彼に殺されなければ……ならない。

「おはよう～、みんな～。」

俺はいつも通りの朝の挨拶を、みんなに向ける。

全ては、みんなに心配を掛けない為。

……逆立ちで。

「その時点でいつも通りじゃねぇ！！」

「おっ、ヴィータナイスツッコミ。」

将来この二人でコンビ組めるかもしれない。

コンビ名は筋肉鉄球少女隊で。

「嫌だよ！！」

「じゃ、ガチムチゴスロリ少女隊で！！」

「もはや意味わからん！！」

もはやもなにも最初から意味不明だったろうが。

「まぁ、なんだ。おはよう、エル。」

「おはようございますっ。」

シグナムもシャマルも俺に挨拶を返してくれる。

きっとみんなは気付いてる。

俺の心境も、俺が落ち込んでいたであろう事も。

それでも俺は自分を隠すのをやめない。

だって、自分が理解不能でどんなに怖くても、弱みを見せないって行為は俺が幼い時から続けてきた存在意義だ。
これが自然と出来るってことは、まだ俺でいられているって事だ。

こうなったらとことんまで抗ってやる。意地を張り続けてやる。
恐怖が消えたわけじゃない。不安が消えたわけでもない。

でも、それでいいんだ。

だって、『人生』ってそんなものだろ？

「取りあえず、逆立ちはもう止めてくれ。」
「それを言うから、読者にバレるんでしょうがぁ！！」

言わなきゃバレなかったのに！！

二十七話　混沌の闇（後書き）

すっかり周一ペースが板についてきた、作者です。

まだまだ忙しいけど、次回も頑張るぜ。

質問、感想待ってますが、別にそれだけで無くてもいいかも。

私、ロボットとか好きですし、大抵の話はついてゆけるかと。（アニメやその他諸々）

エル「じゃ、最近はまったアニメは？」

……ザブングル？

エル「古い！？」

二十八話　ガチムチ（前書き）

さて、今日はほんのちょっと短め。

明日も投稿できるかな？

二十八話　ガチムチ

ここは、時空管理局の一室。
なのはの病室である。

そこには、なのはとクロノ、フェイトが三人集まっていた。
フェイトは純粋になのはを案じての見舞い。クロノは事情を聞く事も含めた見舞い。

なのはが襲撃されてからもう三日が過ぎている。
今はもう体調もほとんど正常に戻りつつあるが、未だリンカーコアの調子だけは戻らず、今も療養と言う形で病室に留まっている。

フェイトとなのはが、二人で仲良くおしゃべりしている様子を、クロノは穏やかに見つめる。

なのはも目覚めた当初から大分落ち着きを取り戻し、見た目にも元気に見える。
が、クロノはそれが無理をしている笑顔だと見抜いていた。

仕方が無い。信頼する相棒であるレイジングハートが破壊されたのだ。
気に病むなと言うのが無理な話であろう。

「フェイト、そろそろ良いかい？」
「あ、クロノ、くん。」

フェイトがクロノの言葉の意味する事を察し、身をベッドから引く。

「なのは、言いづらい事だろうけど、襲われたときの事……話してくれないか？」

「うん、いいよ。」

即答。

……まぁ、言ってくれない事よりも何倍もマシか。と、クロノは自分を納得させ、話を進める。

「じゃ、早速。襲った相手がどんな奴で、どんな手段で、なのはとレイジングハートを襲ったんだ？」

なのはは顎に手をあて、真剣に思い出している。

「え～と、仮面をしてたけど声からは男の人だったと思う。それで、デバイスを出して戦闘になったの。それで戦闘の中でレイジングハートが斬られて……。」

「ちょっと待ってくれ。」

クロノが話の途中で止めに入る。

「？なに？」
「もしかして、なのはは相手と真っ向からの戦闘で負けたのか？」
「え、うん。負けちゃった。……攻撃、一つも当たらなかったな。」

なんて事だ。
心の中でクロノは舌打ちする。
あの短時間で正面から。しかも一撃も攻撃を被弾することなくなのはを倒す事ができる魔導師なんて、明らかに桁違いの強さだ。
あくまでなのはの言葉を信じるのならばの話ではあるが、対抗できる魔導師としたら、エル執務官ぐらいしか思い浮かばない。
これは彼に絶対に伝えなくてはならない。

「……わかった。あと他に特徴なんかは？」
「……ガチムチ？」

ガチムチってなんだ。

クロノ、フェイト二人の共通の疑問であった。

「へぇ、なのはがそんな事を。」
『はい。ですからエル先輩、任務で多忙でしょうが、どうかお気をつけて。』
「ああ、わざわざ連絡すまないな。」
『それでは。』

通信画面が途切れる。
八神家の自室に静寂が戻ってくる。

「ガチムチ……ねぇ。」
「ガチムチか。」
「ガチムチですって。」

俺の背後にはいつの間にか女騎士達三人が立っていた。
ちなみに最初からヴィータ、シグナム、シャマルの順だ。蛇足。

「ガチムチじゃない。ガチムチ系細マッチョだ。」

そう、言い逃れをしておく。

「あぁん!?あんかけチャーハン?」

「最近だらしないな。」

「巻いて食えやプーさん!!」

「お前ら歪みねぇな!!!」

もう駄目だこいつら。はやくなんとかしないと……。

なにか惨劇が起こったような気がするが、それはきっと気のせいで、ヴィータとシャマルははやてに呼ばれてさっさと部屋から出て行った。

残ったシグナムが俺に話しかけてくる。

「それで、自分の警告を自分にされるのはどんな気分だ。」

「決して良い気持ちじゃないのは確かだよ。」

俺はテーブルを人差し指で小突きながらシグナムの質問に答える。

「あの様子を見る限り、俺だってのはバレてないみたいだしな。これからもあの姿で夜の蒐集に出かけるとしよう。」

「そうか。」

シグナムをそれだけを確かめると、踵を返し、部屋を出て行こうとする。

俺はその背中に声をかける。

「ああ、それからシグナム。」

「うん？どうした。」

テーブルを小突くのを止め、瞳を閉じながら告げる。

「なのはだけじゃない、他にもいろいろ敵が増えて……また戦うことになるからな。気持ちだけは整えとけ。」

「フッ。もとよりそのつもりだ。」

「だろうな。頼りにしてるぞ。」

シグナムは一瞬呆けたような顔をして、すぐに微笑を作り、

「ありがとう。頼ってくれて。」

そうとだけ言って出て行った。

「どうしてありがとうなんだか……？」

俺はその意味が理解出来なかったが、あのシグナムの笑顔はとても綺麗で見惚れてしまった。

なにか憑き物が落ちたような、そんな笑顔だった。

「さて……と。」

そうだボヤボヤとしていられない。

次に管理局勢と戦うときは、もっと大きく激しい戦いになる。

確信は無いが、予感はある。

できるだけ対策は立てておかないと。

「ま、次に誰が出てくるかなんて、あらかた予想が付いちまう物なんだけどな。」

レイジングハートは戻ってくる。その名に違わず。
更なる力を手に入れて。

ならばもう一度来る。
そうすればあの少女も来る。

もしかしたらあいつも来るかもしれないが……どうかな？

更に数日後、夜の蒐集に出かける前に、俺は皆を呼び止める。

「今日、やるぞ。」

短く、簡潔な言葉。

しかしそれ故に騎士達には明確に伝わった。

撒き餌は撒くだけ撒いた。これに引っかからない管理局ではない。

何かしらの対抗措置を持ってくるはず。
俺の予想通りならば……。

「今回、俺はお前達とは完全な単独行動を取る。きっとここで管理局の奴らとやりあう事になるだろうから、俺が一人で蒐集しよう。」

全員がゆっくりと頷く。

「お前達は全力で、派手に叩け。他の事は考えなくて良いからな。俺は俺で上手くやる。お前達はお前達で上手くやれ。管理局に捕まったりなんかしたら俺がぶん殴って連れ戻すからな。」

これには、騎士達も苦笑を作る。
実際にしそうだから恐いのだろう。

「さぁ行け。はやては任せろ。」

その言葉を合図に、騎士達は空へと翔けて行く。
それを見届けた後、俺ははやての部屋へと足を運ぶ。
起こさないように、静かに部屋に入るとはやてが寝息を立てて、安らかに眠っていた。

「ふ、今日はたくさん遊んだしな。朝までぐっすり寝ていてくれ。」

俺は香をはやてのベッドの傍らに置く。

安眠効果絶大の、俺の自作香だ。

このためだけに作ったのだから俺もバカなもんだ。

「おやすみ……はやて。」

はやての頭を数度撫で、名残惜しくもその手を離し、俺は外へと向かう。

玄関に出て、もう一度現在の状況を整理する。

俺の心算では、ヴォルケンズは捕まらない。

あちらの方は任せきっても大丈夫だろう。

問題はこちらの方だ。

俺が単独行動を取るのは、もちろん注意を逸らして蒐集を行う為だが、それだけは無い。

それだけではこの作戦は執らない。

効率重視で見れば、俺も参加して、相手の魔力を根こそぎ奪ったほうが良いからな。

だが、そうしない理由は…確かめたい事があるからだ。

今まで感じていた違和感。
なんの違和感なのかもわからなかったが、最近になって気付き始めた。

この感覚は……誰かに見られている。

殺気ではない。監視が目的だからか……どちらにしろ、今夜のうちにそれを確かめねばなるまい。

「さて、今も誰かが見てる見てる。」

バリアジャケットを展開。

変装用ではなく、俺自身の純白のジャケット。

手に携えるのはレオハルト。俺の最高の相棒。

「さて、どこから見てやがるのか……出てきやがれ。」

レオハルトが厳かに唸りを上げ、魔力を抽出する。

相手を炙り出す第一手。
俺は静かに魔法を唱え始めた……。

二十八話　ガチムチ（後書き）

話進まない…

えぇ、俺の遅筆と構成のせいです。はい。

二十九話　深すぎる思考力（笑）（前書き）

エル「タイトルの（笑）って何だ。」

……フフ

エル「？！！」

二十九話　深すぎる思考力（笑）

エルは何音か節を詠唱すると、足元に魔法陣が展開される。

今度の魔法陣も、明確な存在を放つ純白。
今までのような半透明の魔法陣ではない。

そうして、指先からビー玉台の大きさのオレンジの輝きを放つ魔力球が生成される。

人指し、中、薬指の三本から一つずつ生成され、都合三つが現れた事となる。

「さぁ、飛んでけ。」

エルはそれに息を吹き掛けると、風に飛ばされるようにその球は飛んでいく。

しばらく、風に身を任すような軌道を描いた後、意志を持つかのようにそれぞれが違う方向へと飛んでいく。

「視覚、タスク四分割接続。」
『回線、コネクト。』

エルの視覚がシャットダウンし、脳内で四つの視界が浮かび上がる。
その視覚情報を、絶えず処理し、エルはまだ見ぬ監視者を探す。

エルには、管理局において二つの通り名がある。

その一つは『魔法創造主』と言われるもので、これは主に、魔法研究に取り組む研究者達につけられた通り名である。
エルは魔法を使用する際、あらかじめ決められた魔法を使うときと、オリジナルの思想でその場で魔法を作り出す場合がある。

クロノとの演習で使った魔力爆発もその後者の一例である。

魔力も少なく簡単な式でしか魔法を組み上げる事が出来ないので、そう簡単に使う事など無いが、エルは一般に知られている魔法の数を軽く凌駕する数の魔法を使う事が出来る。

そのあまりの多くの魔法知識は、クリエイターと称するに相応しい。

ここで少し、フェルマーの最終定理を証明したアンドリュー・ワイ

ルズについて、話をするとしよう。
彼とエル、この事柄に限って言えば、決して無関係ではない。
彼がフェルマーの最終定理の証明を、多くの数学者達に発表した時、そのほとんどが彼の証明に度肝を抜かれた。

数多くの数学者がその場に居たにも関わらず、誰一人として理解が出来なかったのだ。
数々の公式、独自の着想、数式の構成のその全容を把握する事が出来ない。

自らの分野について理解する数学者が存在しても、その一線を越えると途端に理解が困難となる。

事実、ワイルズもその証明のごく一部を、同僚に依頼していたという。

数学のそのほとんどを把握していたワイルズだからこそ、成し遂げた偉業。

それは魔法の式に変化しても、変わる事は無い。

幼き時分より、無限書庫で知識を広く、どこまでも深く取り入れたエルだからこそ組み上げられる魔法式が存在するということだ。

その深すぎる思考力と、独自の着眼力がエルの最大の武器。

以前エルが、その研究者達に自分の魔法の一つを発表すると、研究者達はその構成に驚愕し、それ以降彼をその通り名で呼ぶようになった。

誰かが言った、彼は現代魔法の源泉だ、と。

ちなみに当の本人は、その報奨金による小遣い稼ぎのつもりだったのは当人のみの秘密だ。
理由は……言わずもがな、ゲームだ。

今回使用した魔法も、その一環で生まれた魔法。

自らの魔力と視覚野をそれぞれ接続し、より多くの視覚情報を取り入れる事が出来る補助魔法。
エルの脳内には今まさに、四人分の視界が存在しているという事になる。

それほどの情報量となると、処理するのは非常に困難だが、それでも簡単に処理してしまうのがエルという男の恐ろしさであろうか。

本人は、体を動かさないのであれば十分に使用が可能と言っている。
と同時に、もし複数の視界を持ち、戦闘行動が可能だったならば、
自分は最強だったろうなと悔やんでもいる。
それが無くとも最強の部類に入っている事に、本人は気付いていない。

「……不審者、発見。」

シグナム達の方でも戦闘が始まったのであろう。
鮮やかな魔力光が、空に煌いている。
その様子を見守る、否、監視する仮面の男が一人。

「仮面ってだけでこんなにも怪しくなるものなんだな。」

客観的に仮面の男を見る事で、先日の自分の痴態が思い起こされる。
これからあの変装止めようかな……、そう思いつつ、エルは脳内の視覚を切断する。

「マーキングは完了してるな？」
『もちろん。』

ぼんやりと戻ってくる自分の視界に少しふらつきながら確かめ、足を地面から蹴り出してエルは空へと飛び出して行った……。

今、あの男の注意はなのは達に向かっている。
出来れば気付かれずに近づきたいところだが……。

「ダブルアクセル、一回だけで良い。使えるか？」
『魔力供給により、その後一分間エナジーウイングが使用不可。』
「問題ない。魔力まわせ」

出し切れる最高速度で一気に近づいてやる。
それでどう反応するかはお楽しみって事で。

「……ダブルアクセル！！」

詠唱直後、音速を超えるGに体が包まれる。
それに歯を食いしばって耐え、足を踏ん張り、仮面の男の背後に強引に着地する。

「!?お前は……!!」

「よう、こんな所で、何してんだぁ!?」

仮面の男が驚いたように構えるが、まだ遅い。

体勢も立て直しきれない状態で、レオハルトを振るうが、それをプロテクションで防がれその後いったん距離を開けられる。

体勢が万全で無いからこの結果は当然といえば当然だ。
それに今のは威嚇で放った一撃。
これで沈んでもらってはこっちが困る。

「お前、俺達の事ずっと見てたろう?それもかなり前から。」

「……その根拠は?」

「勘。全く持って。だが、そんな変な姿の奴が変な事をしないわけが無い。」

実例がここに居ますし。うん、俺。

「……ああ、お前達を監視し続けていたのは認めよう、だが聞いて欲しい、私の目的は闇の書の、」

「話など聞かん。お前の言葉を信じることなどありえないし、このまま放置する事はもっとありえない。これも勘だが、お前は今のうちに取り除いておかないと後々厄介な毒牙になる気がしてならん。」

ピシャリと話を遮り、仮面の男の会話を中断させる。

「……ではどうすると？」

「ここでボコボコにして、捕まえる。大丈夫だ、殺しはしないよ。体に……聞くこともあるしな。」

「か、からだぁ！？」

「うん？」

今、なんかその姿に似つかわしく無い違う声が出たような……。

それに言っとくが、拘束して自白魔法的な意味合いだぞ。
決してナニがナニとかそういう話ではない。

「ぐ、ゴホン。……とにかく、話が通じないのであれば仕様が無い。ここは一度退くとしよう。」

「逃がさんよ。」

後方に一気に飛びずさる男を、俺も一気に跳躍し、追いかける。
ここから、知られざる二人の変人の、魔法チェイスが始まった……
……。

基本的に俺は追いかけて、相手の攻め手を回避することに専念している。

相手の動向を窺うが、一定以上の距離を離そうとして魔法を放ってくる。
自分から近づいてくる事は一切なし。

何らかの転移魔法を使おうとしているのは明らかだが、近くでプレッシャーを掛け続けている限り、それを使う事は無いだろう。
それに使おうとしたらその直後に叩き落してやる。

敵は空を漂い、後退を続けている。

俺はそれに追いつくため、必死に…………走っていた。

「うおおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

『世界狙えるぜ、おぃ。』

「るせぇ！は、はやく、チャージ、お、おお、終わらせろ！！」

こんな事になるなら、あの時ダブルアクセルを使うんじゃぁなかった。もしくはもう少し話を長引かせるべきだった！！

えぇ、頭の中で走りでも何とかなるだろうという油断はありましたとも！！

こんなこちらの状況に構わず、相手は魔法を使って空を飛び、迎撃してくる。

「ひぃ～！！もう死にたい！！！」

『敵、高度を上げているぞ。はやくなんとかしろ』

「ちっ、ムカツク。レーザー！！！」

レオハルトからではなく、自分の僅かな魔力からレーザーを組み上げ、敵の更に上の高度に設置する。

距離が遠くなればその分魔力も必要になるので、三発放ちたかったが、一発という悲惨な結果になった。

レーザーは緩やかな曲線を描き、高速で敵に迫るが、それは簡単に防がれ、一瞬の足止めにしかならなかった。

また、上昇をし始める。

「あと、何秒!?」
『3、2、1、完了。』
「……飛べおらぁ!!」

レオハルトの六つの羽が大きく広がり、さらに大きな魔力の羽を推進剤として発生させながらながら、俺は空へと急速に跳び上がる。

その間も、多くの迎撃がこちらに向かってくるが、それは全て起動させたジャンで切り払う。

「追いついてきたか。もうしばらくそのまま地面でのた打ち回っていても良いだろう。」
「嫌だね。……いつになく汗をかいちまった。この労働力の分の罪、重いぞ。」
『お前のせいだろう』
『自業、自得。』

デバイス二つからのツッコミに、空気が止まる。
何か言い返そうとしていた男も、そのツッコミでどうするべきか困惑していた。

その隙は、逃しませんよ。

「おりゃ！！」
「ちっ！！」

問答無用でレオハルトで突くが、これは完全に回避される。

『うわ、大人げない！！』
「ＤＡ・ＭＡ・ＲＥ！！ギャグをチャンスに変える、それが俺だ！！」

とにかく、とにかくこれで仕切りなおしだ。
ほ、ほら。何とかなっただろう？

二十九話　深すぎる思考力（笑）（後書き）

レオハルトの羽の使い道その一です。
あれは飛行魔法の代わりのシステムです。

タイプとしてはストラーダ的な感じ。

でも羽は羽で方向転換が可能だから、ストラーダよりも扱いやすい事でしょう。

三十話　違和感（前書き）

いつの間にか、小説トップのあらすじちょいと更新。

プレシア「いつの間にかと言えば、いつの間にか私、死んでいるのよ？」

エル「母さん、それは言っちゃ駄目でしょう。」

書き忘れていた訳ではありません。
でも、書かないと皆忘れていそうだから、あえてここで告知させていただきます。
黙祷。

三十話　違和感

追跡を開始して、早十分となろうか。

エルは戦闘開始から十分という時間は、魔法戦だけでなく全ての戦闘において重要な分岐点にあると考えている。

そう考えているのはエルだけかもしれないが、他にそう考え付いた者も居るかもしれない。
要は自分勝手な持論だ。

十分とは、最初の勢いも停滞し始め、双方に最初の疲労が見え始める時期である。

例えるならば、疲れにより攻撃に乱れが生じる短期決戦者や、戦闘の空気に今更ながら適応し実力を発揮し始める典型的なスロースターター。

つまり、この十分という瞬間で、形成が逆転したり、勝敗が一瞬で決まる可能性が高くなるとうこと。

しかし、この追跡劇、一向に出口が見える気がしない。

もちろんエルの気が乱れてきたわけではないし、相手が実力を発揮し始めたわけでもない。

理由は多々あるが、その一つとしてはやはりエルの絶望的な魔力ポテンシャルである。

ちなみにレオハルトは、今回の形態更新によりマジックジェネレーターが二つに増設されている。
これはエルが長年の実戦中の計測結果から、更なるマイナーチェンジを計り、携行性、出力、安全性全てにおいて旧型を凌ぐ改良型である。

エルが変換を使用せずにクイックムーブを使用する事が出来た事も、魔力翼による飛行もそれによってなせる業である。

しかし今、レオハルトの飛行システムにより空中を飛び、敵を追跡しているとは言え、エルの魔力が十全になったわけではない。

敵を捕らえる決定的な攻めてには依然欠けるし、唯一彼に魔力を供給するレオハルトが飛行に手一杯である。
ジャンに至っては、まずリーチに問題がある。

かといって相手が打開策を講じてくるというわけでもなく、最初と変わらぬ牽制を続けてくるだけ。

それが戦いの膠着の二つ目の理由。

形勢の分岐点である十分の時点で、開幕と変わらぬ現状維持は、この戦いの泥沼化を暗に示していた。

（しかし……おかしい。）

その中でエルは違和感に気付き始めていた。

おかしい。
俺が敵に近づけないのはいつものことだ。
それに関しては言う事が無い。

俺のそう言う状態からの戦い方は、大抵形が決まっている。
有り体に言えば、粘り勝ち。

しつこく張り付き、心身ともに疲れ始めた敵の隙を突く。
または、勝負がつかない状況に苛々し、無理やり勝ちを決めに来た敵へ、相応の反撃で形勢を持ってくる。

そう言う戦い方だ。
そうしなければ勝ちを持ってこれないし、それが一番体に負担を掛けなくてよい。

俺がその手段を捨てた場合、変換しか残されないからな。

だから、この状況はけして間違いではない。
相手も疲れ始めているのが見えるが……。

（近づけなくしていると言うよりは……嫌っている？）

それは些細な場の空気。

敵は依然として魔法を使用し、牽制を繰り返すが、はっきりといってお粗末様と言って良い。

攻撃手段は決まりきって、更に錬度も高くない。
魔力弾をばら撒いているだけにも見える。まるで駄々をこねる子供のように。

……コイツは、射撃戦が得意じゃない。

（ならば何故、遠距離に留まる？）

思い切って近接に打って出たほうが、まだ勝ちの目があるはずだ。
反撃こそしてこなかったが、最初の二回目の不意打ちの反応速度と防御技能は、アタッカーのそれだ。

ここまでくれば断言できる、こいつはアタッカーであるのに接近戦を嫌がっている。

得意分野での戦闘を嫌がる理由は大抵決まっている。

（実力を見せたくないって……ことか？）

使うまでも無い敵と認識したと言う点も考えられたが、この現状維持の姿勢から却下。

こうなれば、無理に近づいて相手を引き出す必要があるな。

そうしなければ、何もわからない。

（レオハルト、一度だけでいい、クイックムーブに魔力を回せないか？）

（ダブルアクセルでないのならば、可能だ。ただし、一度きりだ。）

（十分。）

今までどおりの回避行動を続け、敵も今までどおりの攻撃を続ける。

敵が嫌がっているのならば、近づいてきたときの対抗策ももちろん練っているはずだ。

そのタイミングをずらして近づかなくてはいけない。

「レーザー！！」

自分の周りに浮かぶ、三つの歪み。

その一つを最初に打ち出し、自分に命中しそうになる敵の攻撃と相殺させる。

その間も、前進は止めない。

更に二つ目、進路上の障害となる攻撃を相殺させる。

更に前進。

敵はあからさまに警戒をし始める。

三つ目、目標に向けて放ち、足止めを……。

「今！！」

『ブースト』

射出と同時に飛び出す。

今、俺はレーザーと共に並び、敵へと突撃する。

更にその途中、ジャンの刀身を形成していない柄を投げつける。

「くっ！」

敵は驚くことに、ジャンの柄は脅威ではないと瞬時に判断し、レーザーとレオハルトのブレード、その二つを両手で受け止め、苦悶の声を漏らしながら、押し返す。

「まだまだ！！」
「図に…乗るなぁ！！」

一度、レオハルトが届かないギリギリまで押し返されたが、届かないギリギリの距離を生かして敵の目前で槍先を細かく振るう。
ほんの僅かな触れ幅であるが、それが目の前ならば、十分な恐怖になる。

その怯んだ瞬間を突き、更に踏み込むが、俺の頭部を狙った回し蹴りがとてつもない早さで放たれた。

「おわっ！」
「ちっ。」

俺は大きくかがんでそれを回避したが、大きく体勢は崩れる。
追撃を恐れ、一度距離をとる。

怯んだのはブラフ。
最高のタイミングで反撃してきやがった。

更に、ジャンについての見極め。

並大抵のアタッカーではない。

瞬時の見極め、直感。この資質は、広範囲に意識をめぐらす射撃戦の魔術師ではない。

予想が確信に変わる。

「今の蹴りを避けるか。」

「あぶねぇ。接近戦の方が随分と強いんじゃないか。」

お互い毒づき、構えなおすが……。

「？！」

生存本能がアラートを立てる。

咄嗟に訳もわからず、後ろにクイックムーブを無理やりに使用する。

俺と入れ替わるように、俺の居た位置に高魔力の砲撃が打ち降ろされていた。

『無理やりすぎだ、しばらく飛行不可』

「……クソッ！！」

魔力翼を失い、少しづつ堕ちてゆきながら、光条の射手を探す。
それは俺達より遥か上に佇んでいた。

「……な」

それは、仮面の男とまったく同じ姿。
違うのは、あれほどの高度から気付かれずに、かつ正確に砲撃を打ち降ろしてくる技能。

もう一人の仮面が近づいていく。
違う仮面が転移魔法を展開する。
……仮面仮面ややこしいな。

翼を失った俺に、追いかける術はない。

二人の仮面は消え、最初と変わらぬ深遠の空が残った。

「それで！！」

俺は立っていた。青筋を立てて。
正座する騎士達の前に。

話は一つ一つ、細かく教えてもらいました。
ええ、危うい戦闘だったようですね。
それに関しては、見積もりの甘い俺のせいでしょう。
そうですとも。

だが、

「誰が、誰に……助けられたって？」

「……あの、捕まりそうになったシャマルが、仮面の変態に……。」
「仮面が変態って言うな！！」

説明したヴィータを理不尽な理由で叱責する。
いつもなら口で反撃してくるだろうヴィータも、今は大人しい。

（よりによって、アイツに助けられたのか……。）

表面上は苛立って居るように見せているが、内心ちがった意味で穏やかではない。

あいつらには借りは作って置きたくない。
絶対に後悔する。

「……そうだ。どんな手段で助けたんだ？」

「えっと、なんか坊主を蹴り飛ばしてたから、近接格闘だったぜ。」

「そうか。」

とすれば、俺が相手をした奴の可能性が高くなるな。
俺から逃れた後に助けに行ったのかもしれないし、俺が見たのは二人、もしかしたら断言は出来ないが、もっと居るのかもしれない。

「……とにかく、お前達の内一人でも居なくなったら駄目なんだからな。はやてを助けられなくなるし……家族を、もう失いたくない。」

「エル……。」

俺は居間を出て、自室に向かう。
その自分の部屋で、さっきの騎士達の戦闘の映像記録を見る。

皆のデバイスに、レオハルトが勝手に撮影を指示していたらしい。
勝手な事をしてくれるが、いい仕事をしてくれる。

「なのは、フェイト……。」

俺は画面に映る二人の少女を眺める。

二人とも新しいデバイスを振りかぶり、果敢に戦っていた。
その姿は、異様に感じられた。

なんでこんな小さな少女達が戦わなければいけないのか、大人を差し置いて。
おかしい、この管理局も、それを受け入れるなのは達も。

「俺にも、そんな時期があったのかもな。」

ま、俺は二人と違って落ちこぼれだったけどな。

「それで、ここか。」

クロノがシャマルを捕獲したところで、先程と同じ姿の仮面の男がクロノを吹き飛ばす。

「うわぁ、極まってる。あれは。」

気絶するな。こんな蹴りを喰らえば。

「……ん？」

ここでもう一つ、違和感を感じる。
それは相手の蹴り方、動き方について。

もう一度再生し、見直してみて動きが先程俺が戦った奴と、同じ動きだと感じ取る。
この戦士の動きは卓越し、一つの境地に達していると言っても過言ではない。
故に、その技能の共通点がわかりやすい。

だが、何故だろう。こいつのこの動き、見るのは初めてではない気がする。

違和感は以前にももっとある。

なぜ、俺との近接を嫌がるのか。見てみれば、俺以外とは格闘する事は問題で無いようだ。
俺だけに見せたくない、格闘戦……。

……俺が知っている格闘？

そういえば、あのブラフからの回し蹴り、俺はあの時意識ではなく、体の反射で回避していた。
あの体勢からの蹴りへの初動。筋組織の細かな収縮。
なぜかは知らないが、あの時の俺は『蹴り』が来ると無意識で感じ取っていた。
……俺は彼の蹴りを『体』で覚えている？

それはつまり……見ただけではなくて、俺はあいつと手合わせした事が……ある？

クロノ……。

「あっ！！」

俺は気付いたある事に驚愕し、いきなり椅子から立つ。
突然の起立に、イスは膝裏によって押し出され、大きな音を立てながら倒れる。
そんな事はどうでもいい。
俺ははやての部屋へと駆け出していた。

部屋に入ると、独特の香による香りが部屋に充満していた。
はやてを見てみても、どうやら熟睡しているらしい。
静かな寝息が静寂の部屋に響いている。

そって、はやての机の引き出しを開け、中にある書きかけの手紙を取り出し、読む。

「やっぱりな。……そう言うことか。」

手紙には、差出人がグレアムという名前の男だということが書かれている。

そう、これは始まりの違和感。
まだ兄、妹と呼び合う前の事である。

（なぁ、はやて。）
（何？エルさん。）
（一人の生活で、生活費とか、どうしてるんだ？）
（ああ、そのことやね。うちのおじさんがな、お金は好きにしていいって）
（え？そのおじさんと一緒には……）
（忙しくて、それに海外におるし、一緒には生活できへん。せやけど、いつも親切に世話してくれる手紙とか来るし、良い人や。）
（ふ～ん。）

そう言うことか。
今までの、全ての違和感が、この真実によってパズルのようにピッタリと符合する。

ギル・グレアムの俺に言った言葉。

二人の仮面の男。

体で覚えている、仮面の男の格闘。

そして、この家の資金の出所。

「俺はアンタの過去は良く知っているが……ちょいと用意周到すぎるんじゃないのかい？」

今の段階で気付けて良かった。

はやてを救おうとする俺には、巨大すぎる毒牙だった。

あの人は、きっとはやてを犠牲にしてでも闇の書を封印に来る。

それは俺からはやてを奪うと言うことか。

だったら

「なにがなんでも、殺してやる。」

世界がどうなろうが知った事か。

もう合理的に判断して、親しい誰かを助けるのを諦めたくない。

俺が救いたいから救う。

他人が大勢死ぬからってなんだ。

「俺ははやての兄なんだぞ」

そう呟き、俺はグレアムの消去を決意する。

「いや……殺すのはやり過ぎか。少し……お話しようか？グレアム」

訂正。

消去ではなく、お話を決意する俺だった。

三十話　違和感（後書き）

プレシアの死を書かなかったのは、エル自身の心境からです。
自分自身死に身近であることと、妹の死によって決別を深く経験しているからこそ、その死に頓着しない。

むしろその死を肯定し、より良い別れを重視する傾向にあります。

エル「つまり、残された人、後世に何を遺すかってことさ。俺が気にする事は、母さんがフェイトに何を遺したって事。しかし、それは俺が語る事ではないし、二人の問題だ。」

まぁ、けどその事で、フェイトと何かあったらしいけどそれは今は秘密。

フェ「……ポッ」

エル「なぜ赤くなる？何故頬に手をあてる？」

もう物語も中盤。
ここから乗りに乗っていくぜ。

三十一話　持ち帰る（前書き）

エル「最近、投稿ペースが早いが大丈夫か？（品質的な意味で）」

大丈夫だ問題ない。（作者の体調的な意味で）

ヴィ「若干、話が噛み合ってねぇ……。」

三十一話　持ち帰る

暗い室内。
普段は電気の明かりが部屋を照らし、このような闇を作る事など無いはずなのだが、今日このとき、ギル・グレアムは闇をかき消そうとはせず、闇のなかでただ一つ強烈に光を放つスクリーンを見つめ、コンソールを叩いている。

闇を消さない理由。
それは、このような環境的な闇など、比べもない巨大な闇が迫っている事を確信しているから。

その闇の前に、電気の明かりなど無意味。
かき消すことなど出来るはずもない。

「年寄りにこの光は辛いものだな。」

グレアムは眼をしばたたかせ、一度深くイスへと身を埋める。
しばらくし、大きな深呼吸のような溜息を吐いた後、諦めたように呟いた。

「今日は出来るかぎり、警備は厳しくしたつもりなのだがね。」
「おれ自身、結構驚いてるよ。」

グレアムの言葉を合図にするかのように、部屋の隅の闇から男が現れる。エルだ。

「スニーキングは初めてしたが、思ったよりも何とかなるもんだな。」
「君の場合は、高度なサーチアンドデストロイであると思うが。」

グレアムの言葉に、エルは若干表情を厳しくする。
それは怒りから来る表情ではなく、真実を見抜かれた悔しさからくる感情。

つまり図星。

気付かれずに意識を刈り取った警備員や局員は、ほんの僅かで、そのほかの大抵は、見つかった直後に目にも止まらぬラッシュや不意打ちで意識を沈める……というものだった。

確かに、全体としてみればエルと言う個人は見つかって居ないのだろうが、個人としてみた場合、スニーキングとしては些か……いや、かなり酷い結果だ。

「そんな事はどうでもいい。俺がここに来た理由や、俺の聞きたい事……わかるな？」

「ああ、当然だ。リーゼ達が君と遭遇した時点でこうなる事は見当がついていたよ。」

すわり心地の良さそうな高級のイスを回転させ、グレアムとエルは向かい合う。

「君の実力はよく知っているし、リーゼ達の変装が見抜かれることも知っていた。どんなに姿形を変えようと、戦い方そのものを変えることは出来ないからね。」

「それで得意な戦い方を、俺の時はしないように指示したな？……」

……まぁ、悪あがきっぽい策だったがな。」

「その通り。」

お互いクッと小さな笑いを漏らす。
その笑みが終わると、エルは眼光を鋭くし、グレアムを睨みつける。
それは視線だけで、一般人が気絶しかねないほどの殺意と恐怖が篭っていた。

「オマエ……、はやてを犠牲に闇の書を封印するつもりだろう？たとえそれが、犯罪だとしても。」
「無論。」

上官に向かってオマエという多大な無礼。
エルはいつのまにか、目上への言葉遣いを止め、明確な敵への言葉遣いへと変わっていた。

そして、その言葉に臆することなく返答するグレアム。

「当然だろう？たった一人の少女の犠牲で、これから失ってしまうであろう多くの命を救う事が出来るのだ！私はクラウドのような犠牲者をこれ以上出さぬために、どんな手段を以ってしても闇の書を止めてみせる。」

「結果、アンタは犯罪者だ。俺がこの場で逮捕してやってもいいんだぜ？今の言葉、録画もしてある。」

「ふふ、君にはできまい？同じ犯罪者だと言うのに。」

「ちっ、……どこまで知ってやがるんだ、アンタは。」

「三提督を個室で脅迫という所と、強引に特権を要求したということもかな。」

「はっ、全部じゃねぇか！！はやてもかなり前から監視し続けて居たみたいだし、俺の時もそう見たいだな。この変態が。」

「君ほどではなかろう。あれほど年の離れた少女と同棲など。……言わせて貰えば、私は君も即刻封印してやりたい気分だよ。」

お互い視線を逸らさず、言葉の応酬が続く。

「……それに、実の妹を煉獄の書で失った君だからこそ、これからの犠牲者を出さない必要性がわかるだろう？あのような思いをするのは君だけで良い。」

「バッカ。あの事件で妹を失ったからこそ、俺ははやてを護りたい

んだ。フィオラを失い、アリシアを失って、これ以上妹を失えと言うのか、アンタは!?」

「それを闇の書事件の遺族の前で同じ事が言えるか?!」

「他人など知った事か!!俺はあいつの義理であっても兄貴だ。絶対に護ってみせる!!」

「それはただの我侭だろう!!エル!!」

「ああ、我侭だとも!!大切な部下を失って自棄になってる誰かさんと同じくな!!」

「貴様……遺族であるリンディとクロノの気持ち、考えた事があるか!!」

「俺だって遺族だろうがぁ!!!俺には申し訳なくねぇのかぁ?!!結局あんたは部下を失った罪悪感を、自己犠牲で逃げてるだけだろう!!」

まったくの平行線。
二人とも、全てを掛けている。

全てをかけて、自分の目的を達成せんとしている。
故に、どちらも退かない、退けない、退くはずがない。

信念の、真っ向からのぶつかり合いである。

「……わかってはいたが、やはり分かり合えないな。」
「ああ、その通りだな。」

どれほどの間言い争っただろうか、二人は言い合うことに疲れたのか、どちらとも無くしゃべる事を止め、お互いの意思を確認する。

この言い争いでお互い知る事が出来たのは一つだけ、
この男は折れない、と。

「遺族に関してなら……考えた事はあるよ。」

呟くように囁かれたそれを、グレアムはエルの表情を確かめながら聞く。

エルは一歩下がり、バリアジャケットを展開する。
顔を俯け、搾り出すように言葉を紡ぐ。

「クロノは本当良い奴に育ったよ。真っ直ぐで、真面目で……なにより誇りがある。それはきっと親父が良い人だったからだと思う。たぶん奴は、今も理想である親父の背中を追いかけてるんだろう。……初めて会ったときは、なんて無表情で子供らしくない子供だと思ったよ。……俺は親父がどんな人だったのかも覚えて居ない。だがアイツはそれを覚えていて、その父を失った。俺なんかじゃ理解できるはずも無いから、何も口出しできなかった。」

今度は手にレオハルトが握られる。

「俺はいつも合理的に生きてきた。両親を失った時も、妹が煉獄の書に連れ去られたときも……。そりゃ合理的に判断すれば、はやてを失ってでも闇の書を止めるべきなんだろう。」

合理的思考にのっとるならば、エルは即刻で死ぬべき存在でもある。
彼の中の闇が、きっと何かしらの事件を将来的に巻き起こす。

それは十年先かもしれないし、一年先かもしれないし、明日かもしれない。
その闇は、人間なんかに収まり続ける代物ではないのだから。

エルのレオハルトを握る手が震える。
あまりに強く握ったために、手の皮が裂け、握りこぶしの間から血が滲む。

「合理的に人の死を判断するたびに、俺の心が機械のように固まっていくのが良くわかる。アンタは感じた事があるか？かなり怖いぜ。自分が自分で無くなっていくようで。……きっと俺はもう機械なのかもしれない。だから、自分が自分だと認識できるうちは、俺は俺の意思で、感情的で居たいと思ったんだ。俺の心は、直に……。」

正直に言うのなら、怖かった。
以前からずっと怖かった。
怖くて怖くてしょうがなかった。

明日目覚めたら、俺の感情はぐちゃぐちゃになっていて、知らぬ間にはやて達家族を傷つけているかもしれない。

自分の幻影が見えるようになってもっと怖くなった。

そう、良く考えれば、俺が護らなくてもいいのだ。
どこかの福祉施設に連絡すれば、相応の処置はしてくれるだろうし、はやてには石田先生も居る。
それでも、俺がはやてを護ろうとしたのは、その恐怖から逃れるため。

無意識に、はやてに救われたいと願っていたのかもしれない。

けど、そんな理由で……諦めたくない。だって、ここで俺が護る事を諦めれば……きっと……。

「壊れる。粉々に。」

いよいよレオハルトを手前に引き、衝き込む瞬間、二匹の遣い魔が闇から突如として現れ、左右から俺に襲いかかる。

「ふん」

俺が念じると同時に、彼女達が現れた場所の背後から、設置式のレーザーが射出され、それぞれの後頭部をしたたかに打ち据える。

それで一瞬とは言え意識がくらんだのだろう。

二匹の体勢がグラリと崩れる。

当然の結果だ。そうするように撃ち出したのだから。

その無防備な頭を掴み、強引に中央に引き寄せる。

右手、頭。

左手、頭。

両手を引き寄せるイコール……。

「がふっ！！！」

「きゅぅ！！」

かなり強くぶつけてやった。

後悔も反省もしていない。

二人はそれでノックダウンして、地面でピクリピクリと数度痙攣した後、動かなくなった。

「……なんというか。まぁ、君らしいな。」

「俺がこの部屋に入った時点で勝ちの目など無いって言うのに……

……。その様子を見る限り、この子達の独断みたいだな。」

「……。」

「いいねぇ、愛されてるよ。アンタ。」

俺は出していたレオハルトを待機状態に戻し、床に倒れている二人の遣い魔――――まぁ、今は人の形をしているから二人と呼んでおこう――――を担ぐ。

「……何をする気だ。」

「俺の目的は、はやてを護る事。アンタを殺すことじゃない。手段が無いならそれをするしかなかったが、アンタの手足をもいでしまえば、アンタは文字通り手出しが出来なくなる。」

「まさか……。」

「そう、この子達が居なければ、アンタの行動の幅は大きく制限される事になる。生娘でもあるまいし、ましてや人でもあるまい。知

り合いでもあるし、そう大きな問題でも無い。と言う事は、このままお持ち帰りだ。」

足元に魔法陣が展開される。
どうやらすでに決定事項らしい。

「ふ、ふはははは!!まさかそう来たか!!わかった、私の負けだよ。出鼻を完全に挫かれた。君は君の目的を果たせ。」

「最初からそのつもりさ……そうそう、俺の目的なはやてを護る事なんだがな、それははやてを殺す全ての存在から護るって意味なんだ。」

「?……つまり……。」

「闇の書も元よりなんとかする予定だったって事だ!!どこぞの爺さんが間違い起こす前にな!!」

その言葉と共に、エルはグレアムの部屋から消え去り、老人が静寂に取り残された。

老人は一際大きく息を吐き出し、身をイスへと沈め、静かに笑った。

「彼には敵わんな……本当に。争う前よりわかっていた事だが、これほど大きな差を見せ付けられると……。」

そう、可笑しくなってくる。

今回の一連の行為、全てがエルの手のひらの上だったと言うことだ。まずは語り合いで意思を確かめ、デバイスの脅しで覚悟を確かめ、遣い魔の介入で愛情を確かめた。

あぁ、全てを読みきられた。これでは完敗だ。

しばらくの間、老人の静かな笑い声だけが響いていた。

三十一話　持ち帰る（後書き）

リーゼ達のキャラ把握に不安を残しつつの、この展開。

エル「オワタｗｗｗｗ」

神は言っている……ここで終わる作品では無いと。

八万アクセス感謝回&作者からのお知らせ

みなさん、おはこんばんちわ

いつも『欠陥者の示す道』を読んでいただきありがとうございます。

エル「ん?前書き登場で無い……だと?」

いや、ここまでこれた感謝とお知らせを、是非とも読者のみなさんにしたいと思いましてね。

エル「ああ、それで。てか早く続きを書けよ。」

うん、できればＡｓ編を書き終えてからこういう機会を持とうとも思ったんだけどね。
皆さんのお陰でＰＶも八万を突破し……。

エル「中途半端だ!!せめて十万だろ」

そうなんやけどなぁ……
せやかてウチも忙しいねん！！
これからまた忙しくなるし、収束しそうになるのは十一月下旬まで……。
それに……。
「それに？」
左手の小指、軽く骨折しました。
エル「執筆的大ダメージ！！」
もう今タイピングしてるのも涙目ですよ。ヨヨヨ。
この二つの要因から、これまで以上に更新ペースが遅くなるのは必至。
だからこう言う時期に機会を持たせたの！！

エル「てかしっかりしろよ!!どう言う理由で骨折してんだよ。」

元々俺の小指は骨格が歪んでんじゃい!!
それが今更ダメージきただけじゃ!!

エル「逆切れ止めれ。」

『ダメージ』も『じゃい』も小指のタイプがつらいんだぞ!!

エル「めっちゃ小指頑張ってる!!」

いいのか?このまま執筆したらみんなの台詞から、小指担当部分が消えるぞ!?

ｎ　のｈ　「行くよ、これｇ　ｗ　ｔ　しの　えん力　えんｋ　いｓｔーｒイト、ブレイｋーーーーーーーーー!!!」

エル「ブレイｋーーーーーー！！！」

とにかく、読者の皆様、本当にごめんなさい。
俺は頑張るぜ。

私が作ったこのような駄作が、八万というたくさんのＰＶを頂けたのも、ここまで執筆を続けられたのも、ひとえにリリカルなのはという作品の人気と、読者の皆さんの応援のお陰です。
皆さんの応援をバネに、これからより精進して行きたいと思います。
ではまた次話、会いましょう。

エル「本当にごめんなさい。そしてありがとう。それにしたってツッコミ疲れた……。は！！」

うん？

エル「途中の関西弁にツッこむのを忘れたぁぁぁ！！」

ボケもツッコミもこなす男、エル。

八万アクセス感謝回&作者からのお知らせ（後書き）

なのは「ねぇねぇ、エルさん？私達のこの作品、数あるリリカル小説の中でも群を抜いて出番が無いんじゃないの？」

フェイト「私なんて……。はやてばっかり、ズルイ。」

エル「いや、俺に言われてもなぁ。自称神（作者）がどうするのかが問題だし」

なのは「私が出てくる話がアクセス数が多いと言う証拠もあるの！！」

エル「暴露発言キタコレ！！！」

なのは「だから私達をもっとたくさん登場させるべきなのだ！！」

フェイト「そうだそうだ～！！」

エル「フフ、フフフ、そう行ってくるだろうとは思っていたよ。」

な&フ「え？」

エル「高校生に、なりたい？」
（セーラー服を出しつつ）

な&フ「すごく意味深だ……！！」

Ａｓ編が終わったら、何を書くかはまだ確定はしてはいません。
ｓｔｓ編に直行かもしれませんし、高校編にいくかもしれませんし、外伝をはさめるかもしれません。
まぁそれぞれ構想は練ってあるので、皆さんの意見と作者の思惑次第ですね。

エル「ｓｔｓじゃぁ、もう三十路になるのかぁ……本格的に現実味を帯びてきたぞ。おっさん化。」

三十二話　誤解（前書き）

小指、頑張ってるよ。

三十二話　誤解

「よっと……着いたな。」

転移魔法で、自分の部屋に移動する。
両肩に二人の女を担いで。

ギシッ、という床が軋む音が静かな自室にて発する。
他に音を発する物も無いため、余計に音が大きく聞こえる。

時刻は……深夜十一時。確かにこの静寂は正しい。
他の皆も寝静まって居る頃だろう。

俺はそっと、肩に担いだ二人を自分のベッドに寝かせる。
静かな吐息が聞こえているし、直に目覚めるだろう。
だが…、担いだり転移しても目覚めないほど、強くぶつけてしまったのか、と少し反省する。
ま、使い魔だしあんまり心配していないが……。
反省はしているが、後悔はしてないってやつだ。

「……それにしたって寒いな。」

もうクリスマス直前。
暖房もつけていない俺の部屋は、身が凍るほどに寒い。
この中に二人を放置は、流石にマズイ。

「…ったく、今回だけだからな。」

ホント手の掛かる遣い魔だ。
俺は自室にある物置の戸を開ける。
確かここに、冬用の毛布の予備が……。

……あった。

物置の中を、数度手探りで掻き回した所でその感触に触れるが、自分も寒いし、なにより面倒だったので、後先を考えずに少し強引に引っ張る。

今思えば、それがいけなかったのかもしれない。

それは、間に挟まっていたので、比較的大きな衣擦れの音を立てながら引き抜け、その姿を現す。

「うん、間違いないな。」

冬用の厚い布団である事を確認し、そっと二人の上に掛けたところで……。

「エル？帰ってきているのか？」

烈火の将が現れちまった。
ドアを控えめに開けつつ、しかししっかりと部屋の中に踏み込んで。

や……。

やばい、やばい、やばい！！
何がやばいって、押し倒すならもっと良い奴らを……いやそこじゃない！！

落ち着け、お、おちちゅくんだ、俺！！（誤字にあらず）

そっ、素数を数えて落ち着こう！！

1、2、3、4、5、6、7、8、オーケイ、落ち着いた！！

そ、そうだ、言い訳！！言い訳を考えよう。

それにはまず、状況判断。
シグナムの主観で考えてみよう。
俺は無駄な高速思考を展開し、推察する。

目の前には、男と（客観的には）女二人。

女二人がベッドで眠り、それに布団を掛け、ベッドを整えている俺。
それは二人に覆いかぶさろうとしているようにも見えるわけで……
……。

言い訳……言い訳？

ポク、ポク、ポク、ポク……チ～ン。

「……オワタ。」

俺はシグナムの勘違いを先読み、これからの災難への、恐怖と絶望

を確信していた。

なんか死亡フラグが立っていたらしい。

「エル……エル。」

全てを無へと帰す、深淵の闇。

その中で、銀の女性は、男の名を繰りかえし続ける。

……特に意味は無い。と思う。

ただ、こう呼び続けていると、そのうち「よぉ」なんて言いながらひょっこり現れそうな予感がしている。

ただ、それだけだ。

別に孤独がつらい訳ではない。今までだってそうだった。

しかし、話し相手が出来る……なんてそう考えるだけで心が躍った。

……また、彼と話がしたい。

深刻な話でも、私を殺す為の会話でもいい。

今すぐ私を殺しに来たって……良い。

とにかく、あの人懐っこい声が聞きたかった。

そんなんではいけないと、心を心で諫めるが、二心で一心へと統合する事は、不可能。

結局その二つの感情の中で揺れながら、今も彼の名を呼び続ける。

もう一度言おう。

……特に意味は無い。と思う。

ふと、女の呟きが止まる。表情は強張り、徐々に薄い怒りが表情に現れる。

「……エル？」

「おぅ。」

女は低く、冷たく、先程の呟きとは打って変わった声色で同じ名を告げる。

そして、それに当然の如く答える何か。

女の背後。
距離にして十メートル。
そこに何かは居た。

「どうしてここに？」

女は振り向く。
視線には、彼女が知る『彼』とまったく同一の人物。
しかし、それは容姿のみ。

内に含む物は、彼とはまるで正反対。
憤怒と狂気と悦楽が混在している。

その混沌は、大仰に手を振り上げ、面白そうに語りだす。

「何を言ってる？俺はエルだぞ？闇の書の意思。お互いが共鳴している今、俺達が出会うことなど必然。」

「その名前で呼ばないでください。煉獄の書の意思。貴方に彼の姿を騙る資格など無いし、必要も無い。」

「おいおい、止めてくれよ。資格とか義務とか。いままで散々一方的に他人を食い殺してきた俺達には、そんなもん無駄無駄無駄！！」

混沌は心底おかしそうに手をヒラヒラと振り、笑い出す。
その様子を、ただ冷ややかに見つめていた。

……酷く腹が立つ。

大分笑いも収まったのだろう。

また混沌は騙りだす。

「考えてみろ。俺がアイツの中にある以上、俺はエルで、エルは煉獄なんだよ。なんらここに居たって可笑しくない。ここはエルと……いや、闇と煉獄の中和点だろう？」

「黙れ！！」

こんな押さえのない混沌と、それを背負いつつも真っ直ぐに生きている彼が同じと言われた。

その上、二人で語り合ったこの場所を、……こんな、こんな……。

「何を勘違いしてやがる。このメス豚。」

「！！」

「何勝手に辱めを受けたような錯覚起こしてやがる。言っただろう？同じだって。辱めはどっちも受けるだけ受けて…。」

「だ、黙れぇぇ！！！」

「……フフフ……まぁ、いい。」

混沌は歪んだ笑みを薄く見せた後、半歩下がる。

「別にこんな事を言いに来たわけじゃない。もっと建設的な話をしにきたんだ。」
「なにが、建設的……。」

「なぁに、簡単な話さ、俺の器はどうも俺の事が邪魔らしくてね。それを親切に俺がその要望に応えようってわけ。」
「！！」
「直にお邪魔させてもらうわ。そっちのほうが色々と好きな事やれそうだ。」
「そ、そんなこと…」
「出来ないとでも思うか？煉獄は意思を蒐集する遺失物。言葉と怨念の箱舟。人と人がいれば、その意思は伝播する。」

男は狂気に彩られた笑顔を更に歪める。
その顔は、エルと同一の顔だとは信じたくないほどに……醜かった。

「それを利用して、お前も目覚めさせてやるよ。『闇の書の意思』！！」
「そ…そんなこと！！」

その叫びは霞のように消える混沌と同様に薄れていき、深淵の闇が全てを吸い込んだ。

『エルの知識と人格。闇の書の魔法と魔力。その二つが揃えば、俺達最強じゃね？フ、フヒヒヒヒヒヒヒヒィィィ！！！！サァァァァァァセン！！』

「うっ、うぅ……主、エル……。」

銀の女性は項垂れる。
ただ自らの無力に絶望して。

闇は少しづつ、闇の主の背後へと近づいて行く。
手には一握りの怨嗟の言葉。
その言葉は刃となりて、少女の胸元を貫くか……。

「……それで、何か言い遺す事は？」

「では、言い訳を。」

「却下。」

却下されたよ……酷すぎる。

言い残す事すら許して無いジャン。

今、俺ははやて除く全員の前で正座させられている。

うん、前回と正反対。

ちなみに、リーゼ達も一緒。

「何であたし達が……。」

「うぅ……酷い。」

なんて言っていたが、シグナムのひと睨みで固まってしまって、もう発言は不可能のノックアウト状態。

さらにシャマルの竹串とフォークを持っての笑顔の

「刺しますよ？」

発言で、ダウンからのキャメルクラッチのような追い討ちを喰らった。

もうね、俺も死にたくなってきた。
そんなこんなで、二人は今も隣で精根尽き果てている。

……結果的には激しく誤解なんだが、なんだか何も喋らせてくれないし。
弁明の余地が無いッス。

「私はお前がそんなやつだとは思わなかったぞ？」
「ケッ、やっぱりケダモノかよ。」
「……。」
「むしろ私はゲイじゃなくて安心しましたけどね。」

もうこの際シャマルにはツッコミしないとして、言いたい放題言われまくりだ。
だが、俺にだって腑に落ちない点だってある。

「なぁ、なんでそんなに怒ってるんだ？」

「「「え？」」」

なんだか俺からその発言が出たことが、かなり不思議だったらしい。
鳩が豆鉄砲を食らったよう……とはこのことか。

「いや、だってさ。……深夜に帰ってきた事はそりゃ謝るよ。
だが、遅くなる事も伝えたし、俺だって二十歳だぞ？別に恋人の一人や二人居たって可笑しくないだろう？……あ、それともこの場所を選んだ事怒ってる？」

「「「いや、それは……。」」」
「……。」

「あぁ、この二人とは別にそんな関係じゃないよ？知り合いの使い魔で一時預かる事になっただけだから。」

「使い魔かよ！！早く言えよ！！！」
「アンタら言わせてくれなかったんでしょうがぁ！」

「そうよそうよ！！」
「そうです！！」

リーゼ達もこの機に乗じて、好き勝手に言い始め、もはやどちらが逆ギレなのか判断が不能にまで、場が混沌としてきた。

俺は正座で痺れてきた足を、手でピシリと叩いて、その場の注目を俺だけに集めさせる。

「とにかく!!何故俺が怒られているのかがわからなかったが、そう言うことだ!……それに、意味も無く連れて来たりしないよ。……二人とも、姿を変えろ。」

俺の言葉に頷き、二人は変身魔法を使用して、仮面の戦士の姿になる。

「なっ!!」
「これって、オイ!!」
「……!!」
「シャマルに電流奔る!!圧倒的衝撃!!」

……。
まぁ、四者四様に驚いたと言う事で。

「そう、この二人が場を掻き回していた犯人の二人。さっきまでここに居なかったのは、俺はこの二人の主人……簡単に言うと黒幕だな。そこに言って、話をつけてきたからさ。」

「……そうか。話はどうあれ、どんな目的でも、もうその黒幕とやらが私達を邪魔する事は無いわけだな？」

シグナムが溜息を吐きながら、呆れたように言う。

「ああ、その通りだ。」

「そうか……。ならもう何も聞かん。」

「いいのか？」

「ああ、私達はエルを信用していないが……信頼しているからな。嘘は吐いても、私達を裏切るような事はしない。そう思っている。」

「……そりゃどうも。」

俺は苦笑で返していた。

だが、悪い気分ではなかったのは事実だった。

「おい、でもこれだけは聞きてぇ。そんでこの二人をどうするんだ

？縛ってここに置いとくのか？」

「いや、俺達が動きやすいように、管理局側には余計混乱して貰う。」

ヴィータの問いに、悪戯っぽい笑顔を作りながら、リーゼ達を引き寄せる。

そして自分の仮面の姿に変身する。

「管理局は、なのはの事件も含めて、この二人の仮面の仕業だと思っているはずだ。俺の姿を直接見たのはなのはだけだしな。だが、そこで自分達の知っている仮面の戦士は二人だった！！そんな事実が判明。更にそこで、俺が現れて二人と何かしらで対立する。……お前だったらどう思う？」

俺はザフィーラをいきなり指差す。

驚いた風も無く、率直に答える。

「仮面の男の数、勢力、目的。全てが不明瞭だ。当然混乱する。」

「そうでしょうね。さらに、俺の姿をみてなのはは何かしら管理局に報告する。『私は彼に倒されましたよ～』ってね。」

「……なるほど。」

「俺達の味方を演じてきた仮面の男が、なのはを倒した仮面と対立する。どちらが敵でどちらが味方か……。取りあえず、どちらも捕まえようとするだろうな」

「そうすれば、私達と対立する数も必然的に不足する……！！」

「その通り、シグナム。ただでさえ、管理局は慢性的な人材不足。これ以上手が増える見込みも少ないだろう。」

俺が言いたい事を言い切ったところで、その場を見回す。

皆頷いたり、考え込んでいて、質問などは無いようだ。

「それじゃ、行動に移ってくれ。今までどおりに生活して、少し警戒を強めてくれるだけで良い。機が来たら、俺がＧＯサインを出す。」

「ちょっと待った！！」

俺の背後で女の声。

ロッテの声だ。

「なんで、私達がエルの手助けをしなけりゃいけないんですか～！！」

ピシッと手を上に上げての宣誓。
小学生かお前は。

「あ、そのことだけど。リーゼ達のことだからマスターの言うことしか聞かないだろうと思って、許可は貰ってきて居ます。」

「「なんだって～！！」」

今度はアリアも含めた二人で、万歳の驚きポーズ。
だから小学生かお前らは。

「うん、好きに使ってくれて良いってさ。」
「……くっ、そういうことなら…。」
「仕方ないですかね……？」

グレアムさんの言っていた事とは、若干（？）ニュアンスが違うだろうけど、まぁ大丈夫だ。問題ない。

「もう、質問は……ないな。それじゃ、もう今日は遅いし……

……？」

「……？どうした。」

「あ、いや。なんでも無い。早く寝ろよ。」

ヴィータに当たり障り無く答え、俺は胸に手を当てる。
気のせいだろうか？

一度、一度だけだが、大きく、大きく、鼓動が脈動した。

なんだが無性に……腹が立った、気がした。

三十二話　誤解（後書き）

なんか、小指は思ったより早く回復しそうです。

タイピングが良いリハビリになってるのかも。

三十三話　遺すということ（前書き）

ちょっと短め。
てかいつも短いけどね！！

三十三話　遺すということ

それは俺にとっては突然でもなく、予感していたこと。
わかりきっていた事。

それは、そう遠くない将来、そう一年と先の無い命の元母親だったり。
おそらく十年と続かないであろう俺の人生だったり。
…将来管理局を背負う事になるだろう年下の少年少女の事だったり、たくさんだ。

夏が季節の舞台から主役を降り始めた頃、俺の母親は死んだ。

簡単な出張から帰ってきた時の話だ。
いつものように、生活観の薄い執務室に到着し、堅苦しい制服の上着を、上着掛けに掛けた所で、直接回線の通信がコールされる。

「リンディさん……？」
『エルさん……実は……。』

リンディさんの沈んだような、申し訳なさそうな、苦しんでいるような表情を見て、悟った。

（母さん……逝ってしまったのか）

別段驚きは無かった。
完全に先が見えていた事でもあるし、悲しむ分は悲しんだ。
ただ、惜しむらくは、彼女の最期に立ち会えなかったこと。

今日ほど、この時の出張を恨んだ事は無い。

ただでさえ、特務も無く、危険の無い毎日を過ごしていたのに……。

「リンディさん……。」
『はい。』
「葬儀に関しては、全力で手伝わせて貰います。寂しく送らせるわけには……いきませんから。」
『……そうですね。』

だから、俺が出来るのは、その後だ。
もう過ぎた事を悔やんでもしょうがない。
俺が出来る事を、全力でやろう。

それが母さんの為になると信じているから……。

やっぱりと言うか、当然だったと言うべきか。

葬儀に集まったのは、フェイトやなのは、クロノ達と言った所謂、身内。

それ以外の人は、数えるほど。
それもあまりにそっけなく別れを告げて出て行ってしまった。

……如何な理由があれ、一時犯罪者となった女性だ。
この結果は十分に予想していた。

……だが。

「……うっ、お母さん……。」

この現実はあまりに残酷ではないか？
美しい金色の髪が、嗚咽によって小さく揺れる。
必死に涙を堪える姿が余計に痛ましい。
彼女は、他の誰に言われても、泣く事は無かった。
ある言葉を呪いの様に繰り返しながら……。

俺はその様子を、会場の外側から覗き見るように見つめていた。

「……行かないのですか？」
「リンディさん。」
「あの子達は、貴方がこの葬儀を整えた事を知りませんし、この場にいる事も知りませんよ？」

「それでいいんですよ。……プレシアさんの死を乗り越えるのはあの子達の宿題です。既に乗り越える必要もなく、何も感じない俺が行っても、助けられることなんてありませんよ。」
「……コラ。」
「いたっ。」

軽く頭を小突かれた。
毛ほども痛くなかったが、反射で痛いと口が喋っていた。

「宿題であっても、教える先生がいなきゃ、宿題は終わりませんよ？答えを書き写してあげるのは勿論ダメですけど、ヒントや解き方を教えてあげないと、いつまでも子供は分からないまま……それに、今この時、『プレシアさん』は、ダメ。」

「……そうですね。確かにそれじゃ『母さん』に失礼だ。分かりました、先生らしく説教してきます。」

「フェイトちゃんと二人で話したいでしょう？場は作ってあげるから、休憩所で待ってて。」

リンディさんは笑顔で言う。
なんか、本当に……。

「敵いませんね。ありがとうございます。」

俺もまだまだ人生という勉強の最中だったらしい。

俺は結局、休憩所ではなく、近くの自動販売機に飲み物を買いに行った。
その後に、休憩所に戻ったのだが、その場には既に彼女がいた。
イスに座って、俯いている。

……プレシアの最期を看取ったのは、フェイトだったらしい。
それだけをリンディさんから聞いた。

……それだけで良い。

「よぉ。」
「え……、あ、あなたは……。」

ゆっくりとこちらに向き直り、目を向けてお辞儀をする。
眼の下は真っ赤に腫れているし、眼には光が感じられない。

彼女と向き合える位置にイスを引っ張って来て座って、取りあえず言い放った。

「取り敢えず泣けや。」

「え？」

俺は手に持った無糖のコーヒー……ではなく、コーラの方を差し出した。

「なんで泣かない？これでお別れだぞ？もう少ししたら遺体も運ばれて、埋葬される。流石にそこまでは君を連れていけない。」

「だって……私は、もっと、強くならなくちゃ……。」

そう、これが何度も呟く呪いの言葉だ。

泣きそうになれば何度も何度も、口でも心の中でも繰り返して、崩れ落ちそうな自分の感情を奮い立たせる。

いや、奮い立たせるというより、自分を殺している。

こんなんでは、いつかどこかで彼女は壊れる。

「……強くならなきゃいけない理由、聞いて良いか？」

「……私は、自分がわからなかった。お母さんの娘でも無くて、人でもなくて、誰も助けられなくて。ただ、みんなを傷つけただけ。なのはも、クロノくんも。……そして貴方も。」

ジュエルシード事件の時の事を言っているのだろう。

確かにジュエルシードの暴走を止めるために、内臓を変換してその魔力で封印したが……それは確実にフェイトだけのせいではない。

判断を誤った俺のせいでもある。

「だから私は、私を救ってくれたなのは達の為にも、強くなって、

強くなって
自分だけの力で立っていられるようにならなきゃ……。」

「一人で立って……どうする？」

「そ、それは……。」

「人間ってのは簡単に壊れるぞ。一人で生きて往こうとしてる奴ほどな。……俺はそう言う奴らを死ぬほど見てきたし、俺もそうだ。俺は絶対に近いうちに壊れてジャンクだ。……そうなって欲しくないんだよ。」

「……。」

「大いに巻き込んでやれば良いじゃないか。というかもう遠慮して良い程度の巻き込み具合を軽く超えてるしな。こうなったらトコトンって奴だ。」

「でも……。」

「はぁ……君に取ってなのは達は何なんだ？」

「大切な……友達。」

「だったら一緒に生きて往けよ。……自分は人間じゃないとか変な境界線作って、馬鹿馬鹿しい。君は十分に、ていうか間違いなく人間だ。」

「え……？」

「泣いて、笑って、怒って、悩んで。それでどこが人間じゃないんだ？ちゃんと『自分』があるじゃないか。……泣かないのも、ただ強くなろうとするだけでなく、皆に心配掛けたくないからだろ？」

ゆっくりと、しかしはっきりと首を縦に振る。

「だから取り敢えず泣けって言ってるの。ここに心配掛けるような人はいないから。……あ、俺はたった二、三回会った事があるだけの通行人だからノーカウントな。」

それでもまだ、我慢しようとしている。

だが、後少しだ。

俺はもう、そんなつらい我慢をさせたくない。

そっと頭に触れ、撫でる。

……かつて、二人の妹に同じくしていたように。

「寂しいなら、悲しいなら……俺がいる。何も気にしない俺がいる。今だけは甘える事を……許そう。」

「うっ、ううっ、うあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

胸に飛び込んできて、やっと涙を流す。

小さい体。

俺の胸に収まるには小さすぎる。

俺はまるでワレモノを取り扱うかの様に優しく体を包んでやる。

「やっと泣きやがったか。……この頑固者が。」

泣きやむまでの長い時間、俺たちはずっとそうしていた。

フェイトは泣いて、俺はただ座っているだけ。

別に心地よいわけでもないし、悲しいわけでもなかった。
だが、このまま何も考えずに座っている、意味も価値も、確かに在ったんだ……。

しばらくして、ようやく落ち着いたのか、フェイトは泣くのを止めた。
なぜか今は俺の膝の上に居る。
俺と向かい合う形で。

「ありがとうございます。……エルさん。」

「うん？なにが？」

俺は何も無かったと言うかのような口調に、フェイトは笑った。

「……そうだ、『フェイト』」

「？」

「母さんは……なにか死ぬ前に、お前に言い遺したか？」

「え、それは……むっ！！」

喋ろうとしたフェイトの口に人差し指を当てて、塞がせる。

「いや、喋る必要は無い。その様子だと、何か言ったみたいだな。」

「…うん。」

「その言葉、大事にしろよ。母さんが、お前のためだけに宛てた最後の言葉だ。彼女の人生で、フェイトに宛てられたその言葉が、最後にこの世に残したものだ。……それを知るのはフェイトだけだ。誰も知らない、俺も知らない。」

ポンポンと、フェイトの頭を叩く。

フェイトは少し理解が出来ないようだった。

俺はお姫様抱っこでフェイトを持ち上げて、歩き出す。

「えっ！うわぁ！」

「誰かに何かを遺せるって、本当に幸せな事なんだぞ！！今は、別にわからなくていいけどな！！！」

「あ、あの！これからどこへ？！」

「母さんの所だ！！俺はまだお別れも言ってない！！この会場作るのに手一杯だったんだ。」

「え～！！そうだったの？！」

俺もフェイトも、笑顔でさよならを言いに行く。
母さん、これで良いかい？

あなたの遺したものは、きっと俺なんかより大きく成長するよ。

「あ～あ、俺も何か遺して～！！！」

これは、秋が季節の舞台の主役として躍り出し始めた頃のお話。

今となっては、もはや昔話。

三十三話　遺すということ（後書き）

作者が自分の趣味趣向に従って、好きな物を好きなように書くコーナー
作品品質、劣悪

ヴィ「お、はやて、エル。二人して何してんだ？」

エ＆は「モン○ン！！」

ヴィ「そう言えば体験版が配信中だってなぁ。トライで登場した新しい武器も今回は使えるらしいな。……てか、なんであたしはこんな情報知っているんだ？」

エ「ひゃっはー！！双剣の手数は世界一ぃぃぃぃ！！今回は双剣の回避から違うぜぇ！ドヒャドヒャ、ドヒャ！！（緊急回避しつつ）」

ヴィ「うるさっ！！もっと静かに…。」

は「ヒーハー！！スラッシュ〇クスのお通りだ～！！寄らば斬る！！！逃げても斬る！！動かなくても取り敢えず斬る！！！」

ヴィ「この兄妹五月蝿すぎっ！！！」

エ「あ！はやて、そっち行ったぞ！！」
は「ぎゃー！！武器研いでるやん！！！なんでこんなときばっかり！！」

（画面内を描写できない仕様ですので、読者の皆様で様子をご想像ください）

エ「はやてが攻撃喰らって、ふっ飛んだー！！」
は「けど、今度のハンターは一味違う！！」
エ「おぉ！！こいつ、耐えるぞ！」

は「あ」
エ「起き攻めキターーー！！」
は「ま、まだ体力はあるんや！！」
エ「はい、ピヨりましたｗｗｗｗ」
は「力尽きた～！！」
エ「乙です～ｗｗｗ」

は「う、ウチを殺した責任、取ってもらうんやからな！！」
エ「…あ、貴方は、真祖の……。」
バン！！（ドアを強引に開ける音）
シャ「私の出番の匂いがします！！」

ヴィ「……はぁ、なんかカオス。もう寝よ……。」

頑張れヴィータ！！くじけるなヴィータ！！！

八神家のボケと調和するツッコミは、君に掛かっているぞ！！

まぁ、楽しみですよね。３ｒｄ。
武器が多すぎて、楽しみきれないかも……。

三十四話　また弱い者いじめ　ポロリもあるよ！！（前書き）

エル「騙して悪いがポロリは無ぇよ。」

クロノ&ユーノ「え～！！」

エル「オーケイ、お前たちの非難も良くわかる。俺だって男だもの。が、しかし。」

な「ん？なに？」
フェ「？」
は「なんや？」
ヴィ「何見てんだよ」

エル「ポロリはやっぱり無ぇよ。」

ぎゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！

エル「い、いいか……、ただポロリすれば良いってわけじゃないんだ……、お前らは、俺みたいに……なるなよ。ガクッ。」

黒&淫「あなたは……英雄だ！！」（敬礼しながら）

三十四話　また弱い者いじめ　ポロリもあるよ！！

……俺、エル・アルカトラスは望遠鏡で、今まさに起こっている管理局と八神ファミリーとの戦闘模様を傍観しながら、昔話を思い出していた。

戦場全体を見回していながら、一人の少女に若干の注視を置いて。

「フェイトは、本当に強くなったな。魔法の質、タイミングから本人の戦術的な思考回路までなかなか様になっている。」

『そうか。』

特に興味も湧かないと言うことか、レオハルトは余計な質問もせず、熱心に魔力供給と、空中での俺の唯一の足場となる斥力を生み出している。

『自分で言った通り、この作戦は介入のタイミングが重要だ。……それを見逃すなよ。』

……

レオハルトが指摘するように言い放つ。

俺がこの作戦を説明するときに、タイミングが重要と言う話を、ヴォルケンズにもリーゼ達にも話をしている。

ただ混乱させるだけならば良いが、俺達もいい加減蒐集完了までのタイムリミットに焦燥を感じ始めていた。

ヴォルンケンズははやての容態から。
俺は、自分の心拍から。

故に、急遽作戦を変更し、混乱させつつの相手方魔導師のリンカーコアを蒐集する様に方針を変換した。

…それがまたとても厳しい。

俺達は管理局との戦闘において、圧倒的な不利の展開を余儀なくされている。

今までのような、辻斬りよろしくで近くの管理局を襲うのであれば、失敗など無いが、こうした真っ向からの戦闘になれば、人手、設備、事情の関係が如実に現れる。

現に、騎士達のデバイスも、自己修復機能に頼りきりで、しっかりとしたメンテナンスはしてやれて居ない。
今はそう問題は起きて居ないが、ふとした拍子で故障や欠陥が表面化してしまえば、どうしようもない。

俺に至っては、その立ち位置上、本来のスタイルで戦闘を行うことすら出来ない。

それに対し、向こうは一人二人欠員が出ても、それを補う程度の人員の余力はある。

だが、俺たちにはそれが無い。

一人一人が自分だけが持ちうる役割を担い、円滑に全ての行動に従事するが、…代わりなど居ない。

ただ一人として欠員など許されない状況だ。

……これで戦闘は三度目。

向こうだって脳無しではない。
何かしら手を打ってくるし、戦闘を重ねるたびにこちらの手の内はどんどんと開かれていく。

これからもっと厳しい戦いになるだろう。

……元よりその負担を少しでも減らすための作戦だったのだが。

「ここでムリしなきゃ駄目なんだろうな……。やっぱり。」

俺は自らの左の手のひらに視線を移す。

そこには、小さくとも止まらずに震え続ける手があった。

『エル……？』

「ん、何でもない。あいつらにはああ言ったが、タイミングはどうにでもなるさ。たとえ代わりが利かないとは言え、この局面をひっくり返すほどの爆発力が俺たちにはある。」

誰が聞いても判る気休めを言い、俺は立ち上がる。

望遠鏡を転移させ、しまう。

その替わりに今度はジャンを起動し、その柄を握る。

「……よし、三十秒後、戦場の中心地に出来るだけ近く転移させろ。座標軸コード入力。」

『イエス、マイサー。』

「さて、今度は誰が犠牲になってしまうのやら……。」

転移が完了するまでの三十秒間、俺は戦場の流れの先を予測しなが

ら、そう呟いた。

「……！！」

シグナムは、フェイトと幾重にも刃と刃を交えながら、戦場の僅かな空気の流れの変化を嗅ぎ分ける。

「やぁっ！！」

「ふん！！」

これで何度目であろうか、今一度バルディッシュの刃とレヴァンテインの刃とが拮抗する。

「っ！！やぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「ちっ！！」

フェイトは全力を込め、バルディッシュを振り抜く。

それにシグナムは押し負け、後方に吹き飛ばされる。……ように仕向けた。

フェイトが更に追撃しようとするその間に、今度はロッテ扮する仮面の戦士が割り込み、フェイトの攻撃を受け止める。

「っ……また……！！」

フェイトは心底苛立った様子で、距離を取る。

先程から、仮面の戦士は攻守の分岐点や格好の機会に割り込み、騎

士達の危機を度々救っている。

そういうアピールだ。

あくまで仮面の戦士は騎士達の味方なのだと、感じさせるための。

「……借りにはしないぞ。『私たち』は『お前達』を信用していない。」

「ふん、そういうな。『今は』仲間だ。」

シグナムとロッテは、かろうじてフェイトに聞こえる声で、そう呟く。

これは、こういった小芝居も忘れるなとのエルからの指示である。

こういった小さな呟きから、余計に敵が推測して、余計に場を混乱させると言う。

事実、フェイトの頭の中では、この二人の間の複雑な因果関係を図らずとも予測していた。

シグナムは、気付かれないように、他の皆に気を配る。

ヴィータはなのはと。

クロノというエルの後輩は、ザフィーラとシャマル二人で相手をしている。

そしてアリアはその二組を、自慢の遠距離魔法で支援する、といった形になっていた。

それぞれがそれぞれで、一応は協力しつつも、状況ゆえに止む無し……といった雰囲気を見せているようだった。

一番演技について心配していたヴィータであったが、もはや素で仮面の戦士を嫌っていた。

……そのように『演技している』のだと、信じたい。

我々はこんなにも嘘が巧かったであろうか？
と、シグナムは心の中で苦笑する。

巧くなったのであれば、それは確実に一人の人間の影響だな、とも感じていた。

……何はともあれ、今は眼前の敵だ。

「さて、仕切りなおしだな。」
「……。」

「お前はもう邪魔するなよ。」
「……それは、すまなかった。」

ロッテに釘を刺し、ロッテはそれに応え、しぶしぶといった様子で後方に下がる。

フェイトも無言でデバイスを構えなおした所で……。

（……来た！！）

明確な気配を、魔力の収縮を、感じた。

場所はそう遠くなく、むしろ近い。

気配の出所は……。

（後方！！）

第三の仮面の戦士が現れた箇所は、シグナムの後方、ロッテの背後。

今までの演技はつまりウォーミングアップ。

ここからが本番、かつ山場！！！

「なっ！！」
「ふん。」

驚いて咄嗟に振り返ろうとするロッテの頭部を鷲掴みにして、その手を右、左と揺らして体勢の崩れたところで、思い切り下に投げつけた。

地面が、文字通り割れるような音を立てて叩きつけられる。

それをろくに確認することもなく、今度はこちらに高速で向かってくる。

「き、きさま！！」

こちらも驚き、剣を振りかぶるが、振りかぶった腕と入れ替わるように高速の蹴りが腹に飛び込んできた。

「がっ、はぁっ！！」

腹から何かが逆流してきそうな感覚を、無理やりに押し込める。
これは演技ではない。
…繰り返す、これは演技などではない。

更に無慈悲にも、その蹴りの流れのまま足を振り上げ、かかと下ろしを追撃として見舞われる。

抵抗する気も、間もなくて、先程のロッテと同じように地面に突き刺さる。

……あぁ、確かにこれならば向こうも混乱する。

ここまで容赦なくやられると、実は彼が敵だったのではないかと思ってしまう。

私たちでさえそうなのだ。……ならば向こうは確実に混乱する。

いや、してくれないと不公平だ。
エルが現れてから、もはや演技は何一つしていない。
ただ蹴られ、叩き付けられた。

私は、作戦の成功を確信しながら、無念にも自らの意識を手放した。
……それと、ほんの僅かなエルへの、恨み。

突然現れて、今まで互角に戦っていた、二人の魔導師を一瞬のうちに倒した仮面の男。

これは……だれ？

私たちの……味方？

仮面の男がゆっくりとこちらに顔を向ける。
無装飾の白い仮面が、こちらに向けられる。

表情も感じられないし、この仮面にはそもそも『顔』が無い。
視界を通す穴もなければ、息をする空気孔も無い。

まさに、この仮面は無表情そのものであった。

なんの感慨も気負いもなく、事も無げに二人を倒した。

……なんだが、とても、怖くなった。

怖い視線を受けているわけでもない。
ただ、無表情で立っているだけ、それがこんなにも怖い。

足が震える、視界がぐらつく。

今すぐにでもここから逃げ出したいと、本能が告げている。
が、それを理性で無理やりに押し込める。

そうだ、彼はただ立っているだけだ、私もただ立っているだけで良い。
だって、あの二人を倒したのだ、もしかしたら彼は私たちの……。
……。

（フェイトちゃん！！気をつけてっ！！！）
（な……なのは？）

念話で、突然叫ぶような声でなのはに告げられる。
それには恐怖がありありと浮かんでいた。

（その人が……私を襲った人だよ！！）

なのはを……襲った？

頭の中が、真っ白になる。

なのはを襲ったと言う事は、なのはとレイジングハートをあんな風にした、人？

今までとは異質の震えが体を奔り始める。

今まで包むように、辛うじて握っていたバルディッシュを強く握りなおす。

「あなたが……なのはを！！」

（だめっ！！逃げて！！）

（フェイト、戦っちゃダメだ！！なのはが言う事が本当だとしたら……。）

なのはとクロノくんが制止の声を掛けるが、まともに耳に入らない。

あの二人だって今も戦っているんだ。

どうして私だけ、逃げられるっていうの？

怖い……それは変わらない。

今でも逃げ出したい。

けれど、なのはを……大切な友達を傷つけたこの人が……
……それ以上に許せない！！！

「貴方を……逮捕します！！」
「……。」

無防備に立っている仮面の男に、ソニックムーブで一気に近づき、
バルディッシュを振るう。

その攻撃はただ身を逸らすだけで避けられる。
とても機械的で、正確な回避。

実力差は歴然なのかもしれない。
負けはやる前から決まっているのかもしれない。

だけど、このままじゃ終わらない！！

「プラズマ、ランサー！！」

『ｙｅｓ，ｍｙ　ｓｅｒ』

連続して更に三発追い討ちを掛ける。

その全てを大した牽制にもならず、簡単に回避されるが、

「ターン！！」

ここで遠隔操作を使用して、もう一度プラズマランサーを向ける。

これには少し驚いたのか、体勢を下に崩しながら、回避する。

それでも、攻撃が向かってきた背後には一度も視線を向けて居なかったのが、今度はこちらを驚かせた。

だけど、隙は隙。

今の隙に、十分に近づいた……だったら！！

「やぁぁぁぁぁ！！！」

体勢の未だ崩れている敵に、ハーケンセイバーを使用する。

速度は決して速くないが、追跡に関しては自信がある。

変則的な軌道を描きながら、ハーケンセイバーは仮面の男へと迫る。
きっと、この人はこの攻撃も避けるだろう。
でなければなのはは負けない。

体勢が下に崩れていたが、その足元に、確かな足場が作り出され、
その足場をしっかりと踏みしめる事で体勢を取り戻し、ハーケンセイバーを手に持った剣で受け止める。

激しく火花を散らしながらしばらく拮抗した後、完全に切り払われ、
ハーケンセイバーは完全に消滅する。

しかし、それで十分。

武器を振るった隙に、準備は出来ている。

「フォトンランサー、ファランクスシフト。撃ち砕け、ファイヤァァァァ！！！」

お願い！！倒れて！！！

三十八基のフォトンスフィアから、毎秒七発の斉射の四秒間。

都合１０６４発の攻撃が、一人の少女を襲った男を襲った……。

「はぁ……はぁ、はぁ……んっ、はぁぁ……。」

急速な魔力の消費と、集中し続けたから、息が乱れてしまった……、けど……。

やった、今のは完全に倒したはずだ。

あれほどの攻撃を喰らって、立って居られるなんて……それこそなのはだけの筈だ……。

「……あ、あぁ……。」

ゆらりと、揺れる影。

そうだ、そうだった。

この攻撃を受けきったのは、いままでなのはだけ。

しかし、なのはの言葉が正しかったのなら。

目の前の男は、『攻撃を耐え切ったなのはよりも、抜群に強い』のだった。

「し、信じ、たくない……。信じたくない！！」

先ほどと変わらない位置で、バリアジャケットに多少の傷がついているが本人にはまったくの無傷で、男は立っていた。

またしても、あの無表情。

なにも読み取れぬ顔で、ただこちらを見据えている。

「……さて、次の手は？」

この時、私の心は完全に折れた。
私に……この人は倒せない……。

三十四話　また弱い者いじめ　ポロリもあるよ！！（後書き）

前後書きでキャラを壊していく方針に、作者は決定したようです。

三十五話　最悪の男の護りたいもの

「……さて、次の手は…？」

フェイトに聞き返す。
彼女はただ唖然としてこちらを見据えるのみ。

そうか……終わりか。

少し残念に思っている俺が居る。

「……。」

何も言わず、地を蹴り、フェイトに肉薄する。
斥力を次々と発生させ、階段のような要領で駆け上る。

「うっ！！」

フェイトは即座に反応。
俺から距離を取るように下降する。

ふむ、こちらが斥力で駆け上ってきているのを判断してそう行動したならば、評価できる物だ。

が、しかし、その下降は本能的恐怖から逃れるそれだった。
もう逃げることしか見えて居ない。
ならばもう次の回避には繋がらない。

俺はフェイト目掛けて、斥力の足場から飛び降りた。

「ふんっ！！」
「きゃっ！！！」

フェイトはあくまで下降。しかし俺は落下だ。
重力に従い落下する俺はフェイトにすぐに追いつき、その小さき肩を掴み、固定しながら地面に激突する。

無論フェイトが下、俺が上だ。

「ぐっ、こほっ！」
「ふん……。」

背中を強打したせいだろう。
バリアジャケット越しでも、呼吸困難に陥るフェイト。

咳き込む彼女の首に手を回し、首を絞める。
殺す気などないが、落ちてもらおう。

（シャマル……この子のリンカーコアを頼む。）
（わかり、ました……。）

シャマルの返答を合図に、より絞める力を増す。

「ぐぅぅ！！！！」

目の前で苦しむ、大切な少女。
母親から遺された、女の子。

彼女を苦しめているのは、他でも無い自分自身。

「……フェイト。」

「？！！」

呼吸困難の苦しみに必死に抗いながら、こちらを驚愕のまなざしで見つめる。

なにか喋ろうと口を動かすが、ただパクパクと唇が上下運動を始めるだけで、音を発する事は無い。

「ごめん。俺は、結局奪うことしかできない。」

「あ、あなた……は……。」

搾り出すように出された小さな声。

遺してあげたかった。

出来る事ならば……護りたい。

俺も何かを遺してあげたい……。

だが、今の俺には何も出来ない。

何も遺せない。

言わずにはいられなかった。
確かにこの一言で俺の正体がばれてしまうのかも知れない。
だけど、俺は耐えられなかった。

「……くっ。」

最後に声を上げたのは俺。
もうフェイトの方を見られずに、一思いに頚動脈を完全に極める。

すぐに気絶し、ピクリとも動かなくなった。

そしてその体を弄ぶかのように、リンカーコアの蒐集が始まった。

「ああ、俺は最悪さ。」

確かめるように呟く。
そうしなければ、俺の心が今にも叫びだしそうだった。

（各自、撤退。俺がクロノに仕掛ける。その隙にシグナム達を連れて逃げるように演じろ。）

（（……了解））

それぞれから了承の返事が来る。

……何も考えなくて良い。

今は、すべき事がある。

俺はクロノ目掛けて駆け出していた……。

「……シグナム、ロッテ。大丈夫か？」

「だ、大丈夫だけどさ……。」

「あ、ああ。私たちは問題は無いのだが……。」

まずエルが帰ってきてからした事は、二人の手当てだった。

未だ気絶する二人を大切にベッドまで運び、傷の手当を手際よくこなしていた。

その表情は本当に申し訳なさそうで、とても悲しんでいるようで。

起きて文句の一つや二つ言おうと誓っていたロッテですら、その雰囲気に呑まれ、逆にエルに気を使うほどであった。

シグナムを含め、その理由は騎士達は良くわかっている。

こんな時、なんて言って彼を励まして良いのかわからない自分が、シグナムは悔しくてたまらない。

そもそもエルがこれほどに苦しむ理由を作ったのは、自分達自身。
その自分達がのけのけと何を言えるというのだ。

「作戦は成功だったのだろう？となれば、項が完全に埋まるのも、もう目前ではないのか？」
「ああ……そうだな。」

だから、話を逸らした。
帰ってきたのは、やはり沈んだ声。

「そうだな……そろそろ完成か。みんな、後少し頑張ろう。今日は俺も皆も疲れただろう？爆睡して俺は明日寝坊する予定だからそこんとこヨロシク～。」

一拍、静寂が生まれたかと思うと、エルが明るく言い放ちながら立ち上がり、そのまま二階の自室にあがっていった。

「……なんて、わかりやすい、強がり。」

……それは誰が言った言葉だったか。

「ん……お兄ちゃん？」

「あ、起こしちゃったか、はやて。」

時刻はすっかり深夜、はやてが眼を覚まし、俺を呼ぶ声で意識が覚醒する。

俺はいつの間にか、はやての部屋に居たらしい。

いや、逃げた……と言ったほうが正しい、か。

無意識に体が、癒しを求めてはやてに向かったのだろうか？
どうしたって、……俺らしくない。

（はっ、……俺らしいって、なんだよ。）

俺は心の中で自嘲する。

「お兄ちゃん、うちの部屋でなにしてるん？」
「ただ、はやての事が気になったからだよ。だから見に来た。」
「ふうん。」

眠い目を擦りながら喋るはやては、今にも眠ってしまいそう。
別に無理をさせることもないし、

「ほら、眠いだろ。俺の事は気にせずもう寝れ。」
「う～ん、いやや。」
「……？どうして。」
「折角お兄ちゃんと二人きりになれたんや。……いつもは出来ないお話、もっとしたい。
だって、最近はお兄ちゃんは忙しくて家に居ない事も多いしな……
……確かにシグナム達がおるから、寂しくは無い。せやけど、うち、もっと……。」
睡魔と必死に戦いながら、か弱い声で訴えるはやて。
そんな様子がとても愛おしく思えた。

「そうだな、俺も仕事が始まってはやてと前より一緒に居られないもんな。……じゃ、俺にどうして欲しい？なんでも言う事聞くから言ってごらん？お喋りでもゲームでも、なんでもだ。」

だから、そんな事を口走っていた。

「ん？ん～、せやったら、一緒に……寝よ？」

なんか体に稲妻のような衝撃が奔った気がした。
確実に気のせいだし、はやての言っている意味もキチンと曲解なく理解している。

それでも、意識していないとは、言えなかった。

なんか、ここで一緒に寝てしまえば、俺の中の何かが壊れてしまう気がする。
……こう、ガラスのように。
しかし、はやてには何でもと言ってしまった。

男に二言は無い、などと古風な事を言うつもりなど無いが、はやてに嘘はつきたくない。

倫理と義理がせめぎ合う。
その狭間に立たされる俺。

「……やっぱり、ダメ？」
上目遣いの、悲しそうな一言。
たった一言、されど一言。

その一言に俺の倫理はガラスのように砕け散った。

「いや、大丈夫だよ。今日は一緒に寝よう。」

俺ははやてのベッドに入り込んでいく。
俺の言葉を聞き、はやては嬉しそうにまた横になり、俺の腕の隙間に入ってくる。

「こ、こら。」
「むふ～、ええやん。兄妹なんやし！」

いや、兄妹だから余計問題と言うこともあるんだよな。

そう俺の倫理が説くが、俺の倫理は既に完全に壊され、機能していないのだ。

だから、ちょうど腕と胸の隙間を埋めるはやての感触が、心地よい

と思っていた。

……本格的に末期だ。

「お兄ちゃんの胸、本当にあったかいなぁ。シグナムのおっぱいよりあったかい……。」

「……何触ってるんだよ。う…。」

べ、別に羨ましいと言いかけた訳じゃないぞ。

シグナムからはやてにセクハラされるという様な話を聞いていたが、まさかこんな事になっているとはな……。

「お兄ちゃんも触らせてもらったらどうや？きっとシグナムもＯＫ出すと思う……。」

「マジか。」

やばい、本音が出てしまった。

「い、いや、別にそんなに触りたいわけじゃないぞ。生まれてこの方、女性の胸と言う物に触った事が無いから、興味がそそられるというか……。いや、それはもっと変態チックだ。だから、そう興味はないが試してみたいと言う……はやて？」

「すぅ、……すぅ…。」

なんかもう俺の腕の中で眠っていた。

やはり相当に眠かったんだろう。

……それでも、俺と話して居たかったって事かな？

……再確認した事がある。
俺は汚くて、残酷で、最悪の人間だけど、
それでも、この子を護りたい。
この温もりを……失いたくない。

俺には護りたい物がたくさんある。
はやてに、なのはに、フェイトに、ヴォルケンズもだ……。
それは贅沢だとも、傲慢だとも言われるのかもしれない。
それでも、俺はその全てを護りたいと、思っている。

「はやて……おやすみ。」

優しくはやての頭を一撫でした後、俺も睡魔に身を任せ眠りに落ちた……。

三十五話　最悪の男の護りたいもの（後書き）

ていうか、そろそろＡｓ編も終わりに近づいてきてるんだよね。

寂しいような、嬉しいような、複雑な気分ですわ。

三十六話　矛盾（前書き）

比較的に間を開けての更新。

いや、忙しい。

三十六話　矛盾

「ははは、あいつ、闇の書の依り代と同衾か……やるねぇ。」

闇の中で、エルが呟く。
発する一言一言が、この上なく……下品。

「どうだ?随分と近寄りすぎじゃないか。普段ならば、お前とアイツが会うことになるんだろうけどなぁ……ハハハ。」

エルはこちらに背を向け、顔を合わせようとしない管制人格へと話しかける。

「……。」

何も反応をしない。
まるで感情を無くしてしまったかのように。
元々、感情など芽生えるはずの無かった器。
それをみてエルは口で三日月を作り、嗤う。

「はっ！！これじゃ最初に元通りだな。そんなに絶望することかい。どちらにしろ、お前はエルという個体にはこうして遭遇しているんだ。俺と話せば良いだろう？」

「……。」

ここで初めて、視線のみが動いた。
射殺すような、鋭く冷たい視線。

万人を震え上がらせるその視線は、彼にとっては娯楽でしかないように高らかに笑い声を上げる。

「やぁっぱり俺は認めないって訳ね！！アイツが本物、俺はまがい物って事！！いや、お前のことだ、俺は狂気に溺れた獣だとも思ってるんだろうなぁ！！！」

笑い出す獣が不愉快で、また視線は元の位置に戻す。
感情を失った訳ではない。
ただ、彼の姿をした獣に振り回されるのがこの上なく不愉快で、何も感じないように思い込もうとしているだけ。

それでも、少し効果がある事だけが救いだった。

「ふふっ……ふぅ、まぁお前をいじるのはまた今度だ。

俺は『向こう』に挨拶に行ってくるよ。多分すぐに追い出されるだろうけどな。」

闇の書が、予期せぬ暴走を始める。

これは、夢だろうか？
そうだ、夢であって夢で無い場所。
それがこの世界だった。

そして、俺たち二人だけの世界。

だが、その二人だけの世界に…

「よぉ。」

イレギュラーが存在していた。

「お、まえ……は」

「ひひ、結構面と向かって会うのは久し振りじゃね～か？」

できれば一生向かい合いたくなかった。

こんな……。

「はぁ～、本当に進展が無いよな。俺は何も間違った事は言っちゃ居ないぞ？俺はお前で、お前は俺。お前が駄々こねて状態を混乱させてるだけだって。」

「俺の中に、そんな感情は無い！！」

「それはそうだったかもな。確かに無かった時期があったのかもしれないが、所詮は過去だ。今のお前は、必死に仮面にしがみ付いて本性を隠そうとしてる道化師だよ。」

「糞が！！誰のせいでこんな欠陥者になったと思ってやがる！！」

「もちろん、煉獄の書の蒐集記憶のせいだろうな。だがな、お前はその闇を受け入れて、一つになっちまった。……いい加減折り合いつけろや。この狂気、恍惚、憤怒、劣情、すべてがお前のものだってな。」

「認めない！！！そんな事を認めて堪るかぁ！！！」

声を張り上げる。
もう喉が張り裂けるほどに。

そんな見っとも無い俺の姿をみた俺が、溜息を吐く。

「大体お前は矛盾だらけだ。……昔からな。」
「……んだと。」

「護りたいって思っていても、お前の振る舞いはいつも護りたい物を犠牲にする。妹を養う為に、護るために働いて、妹を独りにした。」

「……。」

「失いたくないと思っていても、握ろうとする手を振り払い、新しい家族を切り捨てた。」

ああ、苛立たしい。
どうしてこんなにも苛立たしいのか。
……殺したい。

「妹を護りたい。妹を護りたい。こっちの妹を護るために、あっち

の妹を犠牲にしよう。
……今日のお前だろ？」

殺したい殺したい殺したい殺したい殺したい殺したい殺したい殺したい殺したい殺したい
コロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイコロシタイ

「そんなに苛立たしいのも、俺の言ってる事が間違ってなく、図星だからだろ？」

「てっ、てめぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

激情のままに、拳を振り上げ、殴りかかる。
しかし、それは簡単に捕まれ、腕を背中に回し地面に引き倒され、押さえつけられる。

「ダメダメ、そんな感情むき出し、無鉄砲、我武者羅な攻撃じゃ。
…俺はずる賢いお前だぞ？こんな攻撃を喰らわないのは自分が良くわかってるだろ？」

「黙れ！！」

俺は必死に首を、奴へと向け、睨みつける。
頭は冷やしたい。
だが、目の前のコイツの表情が俺にそうさせてくれない。

「ふぅ……わかってはいたが、やはり取り付く島も無い……か。いや、説得と言うのは本当に難しい。」

俺を押さえつけたまま、諦めたような表情で呟く。
何が説得だ、……お前さえ居なければ……！！

「わかったわかった、そう心の中で怒鳴るな。今回はお前の事は諦めるよ。だから……はやてを殺すわ。」

な…何を言って…る。

奴は嫌らしい笑顔をこちらの顔面に張り付けるように近づけ、嗤う。

「俺は今、ちょいと闇の書の中に出張中でね。それはそれは居心地が良い。……だがな、どうしても自由があと少し、利かない。何故だかわかるか？持ち主が闇の書に関して否定的だからさ。だから、闇の書にも孤独があるし、切り捨てられる奴らが存在する。俺達が自由になるためにも、その枷をぶっ壊す。枷をぶっ壊すと言う事は、

はやてに死んでもらいたいって事さ。」

「誰が、そんなこと……！！ぐっ！！」

「暴れると、俺も加減が利かなくなるぞ。俺はいつでもお前の肩を使い物に出来なくするくらいは出来るんだぞ。……ま、別に自由になるだけだったら、死んでもらう必要は無い、心が壊れてくれればそれでいい。……この姿を使ってな。」

「長話は終わりか？」

「ああ、終わりだ。……あ、そうそう、俺が闇の書に居るとは言っても、あくまで出張中。お前から分離した俺がここに居るだけ。本体はお前の中にあるから、安心しろ。」

安心など、誰がするか。

「おろ、俺はそろそろログアウトみたいだな。」

見ると、奴の体は透け始めている。

それに従い、俺の肩を極める力も弱っていくのがわかる。

「ははん、奴め、やりやがったな。……まぁいい、先に弾き出されると言う事は、先に動けると言う事と同義だからな。闇の書も大分完成に近いし、俺が動かせて貰おう。……ふむふむ、上質な魔導師があと四人も居れば完成するなぁ。」

最後の言葉が、やけに響く。
その言葉が意味するところは……。

「てめぇ、何しようとしてやがる。」
「わかってる癖に」

ニヤニヤとこちらに嗤う。

「くそっ、くそっ、くそぉぉぉ！！！」
「ふふ……ンヒヒヒヒヒヒヒィィィ！！！！！愉しいなぁ、愉しいなぁ！！！その表情、その声、聞きたかったんだよ！！」
「あああぁぁぁ！！！」

間接のことなど忘れ、強引に腕を振り払い、立ち上がる。
立ち上がってみた物は、腕を掻き消され、虚空の闇に浮かぶ上半身だけだった。

「お前なんかに、あいつらが負けるわけが無い！！」

「あの四人に勝ったお前が言うか。」
「お前なんかに騙されるあいつらなんかじゃない！！」
「あいつらはお前に絶対の信頼を置いている。おまえ自身、あいつらを裏切る気が無いから尚更な。」
「お前なんかに…………お前なんかに…………！」
「時間切れ、じゃあな。」
その言葉と共に、奴の気配は完全に消えうせる。
残ったのは俺一人。
「う、うう、うぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！」
頭をかき乱し、咆える。
それだけしか出来ない自分が本当に情けない。情けなさ過ぎる。
完全な負け犬の遠吠えだ。
「はぁ………はぁ、はぁ、はぁ、…………。」

叫びすぎで息切れする俺に近寄る気配。
もう慣れ親しんだ気配でもある。

「奴を引き入れたのは……お前か」
「いえ……。」
「それでも、アイツを止めなかった。」
「……はい。」
「てめぇっ！」

胸倉に掴みかかろうと振り返り、拳を握る。
だが、その拳が胸倉を掴む事は無かった。いや、掴めなかった。
目の前の少女の頬に伝う輝きを見たから。

「うっ……私は、どこまでもこの本の、管制人格だから……
主を、はやてを護りたい、けど、彼に任せれば、闇の書は完成する
……！！けっ、欠陥品のわ、私では、プログラムをどうすること
も、出来ない！！」

嗚咽に何度も乱されながらも、懸命に喋ろうとするその姿。
それは泣きじゃくる子供のようで。
先生に怒られ、必死に理由を泣きながら説明する小学生のようで。

……もっと、大人びて見えていた。
静かで、綺麗で。
物腰も落ち着いていたから、錯覚していた。

だけど、目の前の姿が、きっと彼女の本当の姿だ。

闇の中で救いを求めて……けど、なまじ賢い分それが無理だとわかって抗うこともしなくて……。
ただただ耐え続ける。

「……。」

一瞬ダブって見えたのは、妹の影。
フィオラは、そうだったのだろうか？

あの子は本当に賢い子だったからな。自分が助からないだろうと言う事もわかっていたに違いない。

それでも、俺の助けを待ち続けていた。

……目の前の少女に良く似た彼女がそう言っていた。

「大丈夫、大丈夫だ。」

堪えきれずに抱きしめる。

……他にどうやって感情を示せばいいってんだ。

彼女を安心させるため、俺がどうしても彼女を抱き絞めたくなった。

理由はあるけど、きっとそれだけじゃない。

気付けば俺の頬にも一筋の輝きが伝っていた。

「う……えぐっ、うっ……。」

「俺が、居る。お前の傍には俺が居る。俺が何とかしてみせる。」

……今更ながらに気付いちまった。

いや、気付きたくなかったから、気付こうとしなかったのか。

煉獄の書の管制人格の少女。

彼女もきっと独りだったに違いない。

そして、フィオラに向ける気持ちもまた……。

この欠陥だらけの感情でも、彼女を貫いた感触は今も残っている。

……馬鹿だ。俺は本当に馬鹿だった。

「今度は失ったりしない。全部を救って、全部を護ってみせる。」

「う……うっ、し、信じても良いですか？」

「ああ、信じてくれ。信じてくれれば、俺の力になる。」

名残惜しくも、彼女を体から離す。

それと同時に、拠り所を失ったかのように体が透け始める。

「待っててくれ、もしはやてが壊れてしまっても、お前が語り掛ける事を諦めちゃダメだ。はやてを護って……君を救ってみせる。」

「え？」

「……この闇から、孤独から。だから、待っててくれ。」

「……はい、待っています。」

そう応える彼女の表情は儚くも美しい笑顔で、今まで見たどの女性のどの笑顔よりも可憐だった。

今までに感じた事の無い感情。

なのはやはやて達とは違う、護りたいという想いではなく、彼女を

救いたい気持ち。

あれ……？

そういえば、

俺が誰かを護りたいと思った事はあれど、

俺が誰かを救いたいって思ったの、初めてじゃないか？

「どうした、こんな時間にわざわざ呼び出して。」

「寝て、寝坊する予定じゃなかったのかよ。」

二人の騎士を手で制する。

「事情が変わった。一刻さえ時間が惜しい。今から少しでも魔力を

集めに、俺が目をつけた場所に転移しよう。」

騎士達は無言で頷き、魔法陣に踏み込む。

誰も気付かなかった。いや、気付けなかった。
その魔法陣は、変換を使用していないのに、明確な純白を主張している事に……。

三十六話　矛盾（後書き）

坂本●綾さんの武道館ライブ蒼零を今更ながら買った。

いや、すばらしい。

心に染み渡るメロディと、歌詩。

皆さんも一度聞いてみる事をお勧めしますよ。

エル「語ってもらったところ悪いけど、ここはブログじゃねーから。」

三十七話　集約（前書き）

約週一ペースを保ちたい故に、一話を短くして投稿。

石油高騰のためのポテチの内容量的な措置。

エル「あの、値段そのままで量を減らすってやつか。」

三十七話　集約

「どうしてこんな所に……？」
シグナムはいぶかしむ様にエルに問う。

視界に広がるのは、秋のような茶色の草原。
天気は曇り。
見た目美しい草原に見えるはずなのだが、生気の感じられない空気から、なんとも荒涼な景色にも感じられる。

「第九管理外世界ナイン……管理外と言っても、コンタクト可能な知的生物が確認されない故に管理局からも見放された世界だ。表向きはな。……第九だからナインだなんて、なんとも適当な話だよな。」

嘲笑するようにクックと笑う。

「だったらこんな所で何をするってんだよ。」

「ん、ここならば誰にも邪魔が入らんと思ってな。」

ゆっくりと、騎士達に振り返る。
ここに来て、四人は違和感を覚え始める。

「……なんの、邪魔だ。」

ザフィーラは目を細めつつ、疑念の問い。

「無論、闇の書の完成についてだろ。」

指先で簡単な詠唱を済まし、魔法陣が地面に展開される。

そこに、何かが、転移されて来る。

……何かが。

「おい、これはどう言うことだ！！！」

ヴィータは目の前の出来事に怒り、エルを睨みつける。

目の前の出来事。

それは、主であるはやてが十字架の張り付けのような姿で、転移されてきたこと。

他の三人も、驚きと怒りが入り混じった視線でエルを睨みつけている。

その様子をみて、エルは口元を歪ませて応える。

「闇の書が完成すると言うのに、主が不在ではなんとも味気ないだろう？だからここに呼んだ、それだけだ。」

エルははやての頬に触れ、撫でる。
はやては気絶しているのか、眠っているのかわからないが、目を覚ましていない。

「だ、だからここに魔力を蒐集する物なんて……。」
「居ないか？俺の目の前には四つ、蒐集する素材が見えるがな。」

シャマルの言葉を遮り、決定的な言葉を言う。
今まで感じていた違和感という罅は、敵視という完全な亀裂となる。

「貴様……！！誰だ！！！」
「誰だ……だと？」

「私達が知っているエルは、そのような事を言ったりしない。私達を人間として見てくれて、家族として見てくれたからこそ、私たちは彼に惹かれたのだ。……それが素材などと、冗談にも程が過ぎる！！」

「そうか……そうか、お前達も俺を否定するのか……。」

シグナムの言葉に、一瞬悲しそうな表情を作ったと思えば、次の瞬間には狂気に歪んだ表情を作り出す。

「だから、俺は全てを壊したい。全てを壊していいように、自由になりたい。……俺を認めない俺は死ねばいい。」

最後の呟きは誰にも聞こえないほどに小さい呟きであった。
気付けば、騎士達はそれぞれにデバイスを起動し、エルに対し構えの体勢を取っている。

それを見て、エルは自らの深紅と漆黒に染め上げられたレオハルトを取り出す。

「俺は闇の書の主じゃないから、直接蒐集する事は出来ないし、はやてがそんな事をする訳が無い。だから、一回殺してから蒐集してやる。……幾度となく経験して、もはや慣れ親しんだ『死』だろう?待ってろ、すぐに逝かせてやる。」

「っ!!はぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!」

シグナムが、エルに向かって斬りかかる。

得てして、これが戦闘の発端になった。

クロノは自らの自室で、先ほど起こった戦闘の管理局の映像記録を見直していた。
一度一度の戦闘で、戦いをしっかりと見直して反省点を挙げる。
それが生き残る術だと、エルに教えられ、それ以来欠かさず行ってきた習慣だ。

しかし、今回はただ反省点を挙げる見直しとは、すこし意味が違った。

「……。」

真剣に見つめるモニタには、仮面の男が自分に襲い掛かる姿が映し出されている。

自分はその猛攻を必死に捌いている。

もっとも、捌ききれてなどいないが……。

この仮面の男の行動は、明らかに異質だ。

向こう側に組するわけでも無し、かといって管理局に組するわけでもない。

事実、なのはにフェイトが彼の手に掛かっている。

フェイトの容態は、なのはの時と比べると軽症で、持っていた分の魔力が取り出された程度であって、なのはのようにリンカーコアから根こそぎ奪っていくほどではなかった。

しっかりと休めば、魔力も元通りになる。

クロノはフェイトへの心配の念を振り払い、もう一度モニタに注視する。

救援に駆けつけたアルフ、敵が逃亡した事によってこちらに加勢したなのは。

そして仮面の男が三人に囲まれた場面だ。

（…ここ！！）

クロノは即座にスロー再生し、画面により一層顔を近づけ、男の一挙一動も見逃すまいとモニタを見つめる。

接近してくるアルフの先手を潰すように、剣から衝撃波が飛ばされる。
これはまだ問題ない。
この次だ。

男自身から、大きな魔力光が溢れ初め、それが充満したかと思えばその魔力光が弾けた。
モニタですらホワイトアウトするほどの閃光。
その閃光が収まる頃には、仮面の男がいた場所には何も居なかった。
もちろんその周辺にも、それらしい人影は見えない。

すばらしすぎる引き際。

……クロノはこれと同じような魔法を知っている。
エルとの模擬戦によって、彼が即席で使ってきた魔法だ。

クロノは彼以外にこの魔法を使っている魔導師を見た事が無い。
エル自身、自分が組み上げた魔法だとも言っていた。

よってこれより挙げられる仮説は……。

もちろん確証などない。
しかし、エルに連絡を取ってみても、音信不通である事がその仮説の信憑性に拍車を掛けていた。

（くそっ、どうやって確かめれば良いんだ……。）

簡単な話、実際に捕らえて真実を確かめれば良い。
だが、彼の強さはそういう次元の話ではない。

もし自分の仮説が正しかったら尚更だ。

彼と自分の間の実力差は、未だに天と地、月とスッポンほどの開きがある。

クロノが悩んでいると、突然の通信が入る。
画面に映ったのは慌てるエイミィ。
その顔は所謂仕事の顔だった。

「闇の書の反応を検知！！直ちに現場に向かってください！！！」
「何だって！！？その場所は？！」
「その地点は――――――――――。」

「……はっ！！」

驚くように、ベッドから身を起こす。
俺の隣には、温もりだけが残った違和感の残るベッドの隙間。
迅速にはやての部屋から抜け出て、家の中を見回す。

やはり、騎士達もはやても、誰も居ない！！

「レオハルト、みんながどこに居るかわかるか？」
『検索結果、この世界には存在していない。』
『……他界』

この世界の住人にとっては死を意味する言葉であっても、他世界を行き来する俺たちにとってはまた違った意味を持つ。
ここでのジャンの発言は、文字通り他の世界に彼らが存在していると言う事を意味する。
俺は自室に戻り、戦闘の準備の為に、体の各所にサポーターを付け始めながらデバイスに聞く。

「それじゃ……どこに？」
『今結果が出たぞ、第九管理外世界……ナイン』
「！！？……そこは」
『そうだな。記憶から言えばお前の……。』
『故郷』

それぞれの視点からの、それぞれの物語は、一つの故郷に集約される。

三十八話　覚悟の痛み

なぁ、レオハルト。

どうした？

俺は、どこで間違っちまったのかな？結局誰も、護れちゃ居ない。

間違ってなんかいないさ。それに、まだ遅くは無い。今から救う事だって出来る。

そうか、そうだな。お前の力、借りるぞ。

返す気など無いだろう？

……あぁ。

気にしないさ、私たちは主のデバイス。お前の力になれるのであれば本望だ。……だが一つ条件がある。

……なんだ？

私のデータを、無駄にするなよ。

ああ、しないさ、絶対に。もっと真面目で従順で、高性能な奴を作ってやるよ。

うん、それを聞けて安心した。ありがとう……親父。

親父は止めろ、馬鹿息子。

「みんな！！はやて！！」

「エル……！？」

転移された直後に見た物は、前進に無数の傷を受け、もう一人の俺の前で膝を付くシグナムの姿。
美しい輝きを誇っていた鎧は、自らの血によって赤く、汚く染め上げられ、それはまた彼女の美しい長髪もまた同様だ。

満身創痍、その様子で剣を地に突きたて、必死に体を支えていた。
もはやそうしなければ身を起こすことさえ叶わないのであろう。
見渡す限り、シグナム以外のヴォルケンズは見当たらない。

まさか……。

「やっと、来たのか。まぁ、メインディッシュは残ってるから良いか。」

「おまえ……他のみんなはどうした！！」
「ふふ、あの使い魔二人は絞れるだけ絞ったあとに、持ち主に返してやったよ。あそこまで絞っちまうと、果たして使い魔としての形を保って居られるのか、いやもう存在して無いかもなぁ。」
「ヴィータは…、ザフィーラは、シャマルは！！」
「はっ、結構頑張ったのかもな。だがもう……アレの中だよ。」
「そんなこと…！！」

咄嗟にシグナムへと視線を移すが、シグナムはこちらに視線を合わせようとはせず、ただ悔恨の表情で俯くのみだ。

それで奴の言っている事が、嘘偽りで無い事を悟る。

それを見て、こちらに心底面白そうな一瞥をくれ、奴は自分のデバイスを持ち上げる。
その目的はただ一つ。

「やらせるかっ！！」
「ゲイザー」
『ｙｅｓ　ｍｙ　ｓｉｒ』

奴を止めようと足を出しかけた直後、全方位からの魔力刺が俺の体に突き刺さる。
なんのタイムラグもなく、瞬時に展開され、即座に放たれていた。
その魔力刺は、俺の体を容易く貫通し、地面に空間に縫いつける。

「しまっ！！」

避けられたのは最初に向かってきた一、二本程度。
くっ、全方位なんて、どうやって避けろってんだ！！

痛みは無い。が、全方位からの縫い付けにより、ほんの一ミリ程度でさえ体が動かせないほどに拘束される。更に魔力刺には『返し』がついてあって、抜くことさえ叶わない。

「お前……、この魔法は！！！」
「そうお前が編み出した魔法だよな。バインドとはまた違った手法と観点で相手を捕縛する拘束魔法。無理に抜こうとすれば、例え非殺傷であっても魔力素が肉体を削っていく代物。ホント、とんでもない魔法を編み出した物だよな。……もっとも、お前の魔力ではあまりにこの魔法を扱うキャパシティが不足していたがな。」

元々この魔法は燃費が悪いんだけどな。と奴は付け足しつつ、薄く笑う。

「く……そっ！！」
「ダメだシグナム！！！」

こちらに向けて笑った隙を付いて、シグナムは渾身の力を振り絞り、剣を振るう。
しかし、その満身創痍から生み出された斬撃は、あまりに弱々しかった。

相手を捉えるどころか、奴のデバイスの柄頭によって、剣を握る手が地面に叩き付けられる。

「ぐぅぅぅ！！！！！」

「シグナム！！」

ゴキャというおおよそ人間が発するべきでない破砕音。
シグナムは顔を伏せ、必死に痛みに堪える。

「今の俺は、お前が考案した何十何百という魔法を使用可能な状態にある。もちろん闇の書から魔力を持ってくる必要があるがな。」

しかしそれは、闇の書さえあればその全てが使用可能を意味する。
奴は柄をグリグリと回しながら、更に説明を続ける。

「更に、その中に、感情を蒐集する煉獄の書の機関を持つ俺が内蔵された。……それがどう言う意味を持つか、わかるか？」

ついには奴は、全体重をデバイスにかけて佇む。

「ぐっ、ぐあああぁぁぁぁぁぁ！！」
「やめろぉ！！」
「やめてぇぇぇ！！！」

俺と同時に発せられた、聞き覚えのある少女の制止。
ここでやっと俺は現状を完全に把握する。

「はやて！！」
「どうしてこんなことするん！！お兄ちゃん！！！」

はやてに必死に呼びかけても、返事は無く、奴を絶望の浮かぶ視線で見据えるだけだ。

（お前には彼女の壊れる様子をとくと楽しんで欲しかったからな。
それにお前が出てくると色々と邪魔だから、暗示を掛けてもらった。
）
「何でもアリってかよ！！このクソヤロウ！！」
（ああ、アリだよ。なんせ今の俺は完璧なチートだからなぁ）

「シグナム、シグナム！！」
「主はやて……最後まで守護できず……本当に申し訳ない。」
「そ、そんな、嫌や！！」

奴がデバイスを振り上げる。

「皆と過ごしたこの平和な日々は……私達に夢と心を持たせて貰いました。……そしてエル。」

シグナムは磔になった俺を、笑顔で見つめる。
その笑顔は今にも散ってしまいそうな儚い花そのもの。

「シグナム……諦めんなよ……！」
「貴方が貴方のままで……よかった。」
「死ねよ。」

デバイスが振り下ろされた。
奴……いや、俺らしく、急所に一撃。
脳天から真っ直ぐに振り下ろし、頭蓋を真っ二つに切り裂く。

大量の血を噴き出す変わりに、体は大気に溶けて行き、白い燐光を放ちながらこの世からの完全な消滅を果たした。

「い、いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！」

少女の叫び声がこの地獄のような空間に木霊する。

なんだよ、よかったって。

何に対して、笑ったんだよ。

あんな死に方の癖に……。

何も、遺せちゃいないってのに！！

「い、いや、いやいやいやいやいやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！みんな、みんな居なくなって、シャマル！！ザフィーラ！！ヴィータ！！シグナムゥ！！誰か返事してぇぇぇぇ！！！！！」

はやてから、大きな闇が浮かび上がるのを感じる。

そう、この感触……初めてなどではない。

やはり同型と言うことか。

煉獄の闇と、その闇は何もかもが同じだった。

「こんな、こんな世界……！！」

はやてが、闇に呑まれていく。
ゆっくりとしかし確実に、じわりじわりと生物が食物を飲み込むように。

「！！！」

その様子を見て、稲妻のように走ったフラッシュバック。
いまや十年も前の、妹を失ったあの日。

今のように飲み込まれていく妹の姿。
守りたかった存在が、手のひらから失せるあの喪失感。

俺は……あの時、どうだった？

「いや……あんなじゃない。」

込み上げてくるのは、自分への怒り。
もう潰れそうなくらい俺の心を痛めつける。

俺はあの時現実を見据えなかった。

妹を救うためと言って、仕事をこなす事が救いだと思っていた。

あれこれと理由をつけて、俺は諦めていた。
彼女の生存と、俺の実力不足。
俺では、アレに対して敵うべきも無い。それを理解してしまった。
そうだ……あの時俺は、煉獄の書に恐怖していた。
その結果があの結末だ。

「もう……あんなじゃない。」

だが、今は違う。
今度は目を逸らさない。
泣き喚かない。

はやては、ここで闇に呑み込まれる。
その現実から目を逸らすな!!

「俺たちに必要なのは……これからだ!!」

ブチブチブチと、強引に魔力刺から腕を引き抜く。
高密度の魔力刺が俺の体を傷つける。
当然のような出血と、痛み。

腕の魔力刺から全て抜け出し、今度は足に魔力刺が突き刺さったまま立ち上がる。
その際にも、またブチブチと魔力が俺の筋繊維と骨繊維を破壊して

いく。

「お前……正気か？」

これには流石に驚いたのか、驚愕の声で俺へと訊ねる。

「何を……今更。俺は最初から壊れてる欠陥品だろ。」

ああ、超痛い。
今すぐにでも意識を手放してしまいそうだ。
しかし、際限ない痛みが俺の意識をまた覚醒させる。

なんだ、これなら絶対に気絶しないじゃないか。
最高だ。
これで痛みを気にせず戦える。

それに……この痛みは俺が受けてしかるべき物だ。

妹を見放し……妹を犠牲にし続ける俺が。

はやては完全に闇に飲み込まれ……次に出てきたのは、幾度と語り合ってきた、少女の姿をした……。

「人形が」
「ああ、その通り、人形のお目覚めとお披露目だ。」

もう一人の俺は、その人形の傍にまで飛行して行く。

「ふふん、やっと目覚めやがったな。イカレタ防衛機構。」
「北から、魔力反応。ここに集まられても面倒です。貴方が始末してください。」
「ああん？俺がかよ。」
「魔力を断ち切りましょうか。」
「ああ、悪かったよ。……ったく、目覚めた途端こき使いやがって。」

奴は人形からはなれ、北の方角へと飛行して行く。
その途中、一度振り返った。

「お前で、コイツを倒せるかな？まずコイツを倒せなきゃ、誰も救えないぜ。」

そう言い残して、飛び上がり完全に視界から消えた。
……レオハルトと同型のエナジーウイングを使用して。

言わずもがな。そんなことはわかっている。

……だが、その前に確かめる事がある。

「お前の望みはなんだ。」

「主の意思に従い……全てを消滅した後、私たちも消え去ることです。」

何の感情のブレもなく言い放った。

それを聞いて、安心して、覚悟も決まった。

「そうか、ならよかった。」

レオハルトを起動し、その矛先を突きつける。

憎い、憎すぎる。

こんな奴が……彼女と同じ姿をしている事が一番に許せない。

はやてを想って、自分の使命との軋轢に苦しんで涙した、彼女の意思を侮辱している。

ただひたすらに憎い。

「俺が知ってるお前は、そんな人形じゃねぇ。もっと泣いて、もっと苦しんでた。全部諦めて、ただ役割をこなすだけのお前を俺は認めねぇ。……機械であり続ける事を選んだ貴様は、俺が最も淘汰すべき存在だ。」

そして馴染み深き構えへと体勢を整える。

右足を前に、左足を後ろに。

足先を相手に向けて、槍先は下へ……下へ、深く。

「行くぞ。今からお前を、殺しに行く！！！変換開始！！」

『イエス、マイサー！！！』

時を同じくして、なのは、フェイト、クロノ達もこのナインへと転移して来ていた。

ただ、場所はエル達よりも五十キロほど北の位置ではあるが……。

五十キロ離れていたとしても、景色は変わらずもの悲しい草原が続いていて、三人はその草原の上空を飛んでいた。

「フェイトちゃん、大丈夫？」

「大丈夫だよ、なのは。……それに、確かめたい事が、あるから。」

「?なに、確かめたい事って?」
「とにかくフェイト、いき過ぎた無理は禁物だよ。」
「うん、ありがとう。」
「そ、それはなのはも同じことだけどね!!」
「え〜、私元気だよ?」

フェイトの笑顔に、気恥ずかしさからかクロノは顔を逸らし、話も逸らす。

執務官と言う多忙の身。
それであれば必然的に女性との関わりも少なくなると言う物。
その点であれば、クロノとエルは似た者同士であると言って良いが、エルは滅多な事では女性の笑顔で顔を逸らしたりはしない。
それがエルとクロノとの精神的な成熟の差であり、思春期かどうかの違いなのかもしれない。
ただ、エルの二十歳と言う年齢は、思春期であってもおかしくない年齢だと言うことだけは言っておこう。

「……例えそうであっても、この依頼に君たちは本来関わるべきではない民間人達なんだ。そんな人たちを危険に晒したくは無かったんだ。」

「私は大丈夫だよ。それに、エルさんや他の管理局のみんなが大変なのに、私だけ休んで居られないもの。」

「だから!!その考え自体がおかしいって気付いてくれ。」

思わずクロノは声を荒げてしまう。
別に彼女たちに憤りを感じたわけではない。
ただ、こんな少女たちの力さえ借りなければいけない自分達が悔しかっただけだ。

連れてきたくなど無かったが、人手不足は事実。
それに本人達が強く希望し、それをリンディ初め、多くの上官がOKを出してしまうのだから、結局連れてくる事になってしまった。

思えば、エルもクロノが任務に同行したいと言ってきたときは頑なに拒否していたものだ。
それは諭すかのようで、突き放すような口調だったのを覚えている。

こんな形でクロノはエルの心情を理解する。

（先輩も、きっとこんな気持ちだったのかな。）

そう心の中で呟くだけに留め、クロノは前方を見据える。

まだ目的地は見えてこない。

しかし、膨大な魔力を目的地周辺から感じる事も出来るし、デバイスを通して計測も出来る。

今回の一連の事件、その真の黒幕とはいったい……。

「前方から……何か来るよ！？」
「あれは……。」

前方から同じ高度で接近してくる魔力反応、それはエルだった。

「エルさん！！」
「エル……さん。」

反応の違いはあれ、それぞれに驚き、近づこうとするなのはとフェイトの二人を、クロノは二人の前に立ち、腕で制す。

「よぉ、クロノ。」
「お久し振りです。先輩。」

一応の挨拶を交わし、クロノは様子を窺う。
それを不審に思ったのか、フェイトを除く二人が首をかしげる。

「クロノ……くん？」
「クロノ、どうした？」
「先輩……ひとつ聞いて良いですか？」
「んぁ？なんだ。」

「どうして、貴方が飛んでいるんですか？」
クロノは手に持つデバイスを指差す。
純白のカラーリングであったはずのレオハルトは赤黒く染まり、そのレオハルトから彼のキャパシティを軽く上回る魔力量のエナジーウイングが展開されている。
これは明らかにおかしいことである。
「貴方は……誰だ。」
「ふぅ……もうその言葉には飽き飽きだ。俺は俺。それでいいじゃないか。」
「目的は……？」
「う～んと、大目標が俺達が自由になる事。現在の小目標が、お前達をここから先に進ませないことだ。……いや、殺すことかな？」
エルが少し悩んだ後に発した言葉に、驚愕する。
「自由に……何から？」
「心の牢獄……かな？さぁ行くぞ。」
エルがデバイスを構える。
クロノとフェイトは武器を構えるが、なのはは未だ驚愕から立ち直

れず、オドオドとしている。

「ど、どうしてなの、エルさん!!一体、何がどういう……?!」

「なのは、これから俺たちは殺しあうんだよ。闇の書を護る側と、闇の書を壊す側にね。……なのはには、この姿の方がわかりやすいか?」

エルは一瞬にして、仮面の男の姿に変身する。
闇の書事件の発端とも言うべき最初の戦闘。
そこで出会った、無面の狂戦士へと。

「…そんな!!?」

なのはは更に驚愕を深め、あとの二人は諦めるかのように視線を逸らす。

「だから、俺に妙な手心加えたりとか、躊躇したりとかしないほうが良いぞ?俺は最初からお前達を殺す気で行く。」

「だって、だってそんな理由……。」
「なのは!!」

普段では想像が付かないフェイトの叫び。

なのはの体はビクリと跳ね、ゆっくりと不安の表情でフェイトへと振り返る。
そこには、決意の表情でバルディッシュを構えるフェイトが居た。

「やるしかないんだ……戦って、勝って、ちゃんと理由を聞くの！！他でも無いエルさんから！！！だから、なのは、一緒に戦おう？」

「フェイトちゃん……うん！！！」

フェイトの激励に、なのはは迷いも恐れも捨て、自らの相棒を構える。

「ごめんねレイジングハート、取り乱しちゃって。エルさんに勝つために……力を貸して！！」

『ｙｅｓ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ』

「よし、用意は良いみたいだな……ヒヒッ、逝くぞ！！！」

「穿て、ブラッディダガー」

掛け声と共に、こちらに視認すら危うい速度で向かってくる血染めの短剣。
その総数は軽く二十を越している。

「くっ！！」

攻撃自体は直線的であり、予測も容易。
しかし、遠隔設置も可能な特性上回避が容易かと問われれば、答えはＮＯだ。
突然背後から現れたり、そのまま自分から射出されたりと、なかなかに反応性は高い。

速度と威力を重視した結果、ホーミング性能を失ったレーザーと言えばわかりやすいか。

その攻撃に俺は踊らされるように、草原を走り、伏せ、跳ねる。
俺が動くたびに、魔法で止血だけを施した傷跡から、血が滲んでくるのを体感する。
止血だけを施したのだから、当然と言えば当然だ。

シールドを張って防いでも良いのだろうが、俺にそれを何度も行使する余裕は無い。
魔力を消費する事と、俺の命を削る事は同じ事なのだから。

つまり、制限時間あり、行動回数に制限アリのデスマッチだ。

必勝の瞬間に、最大の力を打ち込む。
それが出来なければ、俺はここで死ぬ。

「レーザー！！」

特に牽制の意味も無く、レーザーを敵に向けて放つ。
それは目標の目前で当然のように打ち消え、俺の希少な魔力が消費されるだけに終わった。
やはり、牽制にも成りはしない。

それを見て、今度はブラッディダガーの攻撃に、先程俺が使ったレーザーが加わる。

「一瞬で物にしやがったか！！」

ブラッディダガーの鋭さに、レーザーの柔軟さが交じり合う。

今度は回避しきれずに、ダガーのナイフが左腕の下腕に刺さる。

「痛ってぇちくしょう！！」

回避運動を続けながらそれを抜き、投げ返す。
その結果も先ほどのレーザーと同様。

「……やはり、この程度では貴方を殺せませんね。」

いつまでもしぶとく回避し続ける俺に呆れたのか、
闇の書の意思が腕を上げると、今度は百を越えるダガーが空を埋め尽くし、俺を包囲する。

（マジかよ……レオハルト、エナジーウイングを使うぞ。）
（了解）

レオハルトを上に構え、ダガーを叩き落とす準備をする。
こうなったら覚悟を決めるしかない。

「刃以て、血に染めよ。」

その言葉を合図に、一斉に俺へと向かうダガーの群。

「エナジーウイング！！！オーバードォォォ！！！！」
『ブースト！！』

エナジーウイングの出力を臨界点の先へと設定。いわゆる限界突破。
暴発する魔力の加速が、規格外の速度を生み出し、俺は上空へと舞い上がる。

闇の書の意思よりもっと高く、遥か上空へと向けて。

それにより、ダガーの包囲を強引に突破。
突破する面のダガーは存分に喰らってしまうが、全発喰らうより遥かにマシだ。

胸と頭部を庇ったから、致命傷は無いはずだが、それでも十を超えるダガーが体に刺さっていると痛覚を頼りに判断する。

「ウイング、オフ！斥力発生。」

上空で足場を作り、そこに降り立つ。
バリアコートの裏のポケットから、六つの筒を取り出す。

「二本で俺の一月の給料が消える、インスタントカートリッジのお披露目！！レオハルト、ウイングブラスター！！」
『了解』

今まで翼を担った機関は、その羽先を敵へと向け、砲撃の機関へと切り替わる。

六枚のウイングそれぞれに、一本づつカートリッジを装填。
レオハルトの翼の先から、六つのスフィアが収斂を開始する。

「近づいてくるなよ、ボルテッカー！！」

未だかつて無い、ボルテッカー八つ展開。

ここに全力をかける、だから大盤振る舞いだ！！

それぞれのタイミングで稲妻を射出。

あちらが視認の困難な高速での攻撃ならば、こちらは文字通りの光速で迎え撃つ。

回避は不可能。

敵はシールドでそれを防ぐ。

それで十分。

果たして、レオハルトは完全な収斂を完了する。

「俺の給料三か月分の威力を喰らえ！！…セクステット・ブラスター！！！」

六つの光条が、一つの標的へと打ち下ろされる。

俺が三か月分の給料とを引き換えに、変換のリスク無しで放てる最高威力の砲撃魔法だ。

しかし、それは

「ディバイン、バスター。」

闇の書が放つ六つの砲撃とぶつかり合い、拮抗する。

ディバインバスターは術者が放ち続けるかぎり続く放出型。

それに対して俺のブラスターはカートリッジ分の魔力に細工し、その分だけを放つ射出型。

競り合ってどちらが長期戦に優位かはわかりきっている。

一時、拮抗したかに見えた砲撃のぶつかり合いは、更に魔力を込めたディバインバスターに軍配が上がり、俺のブラスターを掻き消しつつ貫通する。

「ぐわっ！！」

直撃を免れるため、足場を蹴り上げ、飛びずさる。

足場諸共に、砲撃が目の前を通過する。

また足場を作り出し、体勢を立て直すと、目の前に拳を振り上げる闇の書の意思。

咄嗟に左腕で防御するが、打ち付けられた拳の威力は凄まじく、斥力足場を砕き俺を地面へと叩き落とす。

「がああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

叫びながらどんどんと落下していく。

まるで地面へと向かう新幹線か何かに押されているかのようだ。

そんな比喩を考えているうちに、新幹線は地面という目的地へと到着し、俺に手荒い到着を轟音を立てて知らせる。

つまり簡単に言うと、俺は落下速度そのままに地面へと激突した。

『セカンダリープログラム。オートプロテクション発動。急速な魔力消費により、緊急冷却を開始。』

どうやらレオハルトが手を尽くしてくれたらしく、かなりの痛みが体を襲うが、どこにも致命傷を負っていなかった。

致命傷では無いだけで、全身打ち身や打撲だらけだ。
その全てを無視し、俺は立ち上がる。

レオハルトのマジックジェネレーターからは湯気らしき物がもうもうと吹き上がっている。
それほど無理をしている事がわかる。

俺達は既に限界を数度超えている。
それでもまだ止まれない。止まってなるものか。

「限界を超えてもまだ、届かないってかよ。……はは。」

膝に手をつき肩で息をする。
肉体ももう時間切れが近い。

純白だったバリアジャケットは、煤や塵だけでなく、裏から滲んだ血で斑点のように赤く汚れていた。

「だったらもう……肉体捨てるしか、ねぇじゃねーか。」

圧倒的な実力差。
誰が見てもわかる勝敗。

だが、そんな状況でこそ、俺は幾度と生き残ってきた。
最初は偶然だった生存も、いつしか計算された生存へと至る。

だが、今回は『生存』が目的などではない。
敵を倒さなければならない。
それは今までになく困難な任務。

死は俺のすぐ傍で出番は今か今かと待ち望んでいる。
常人ならばすぐにでも平静を失う状況。
だが、俺の思考は完全に狂ってる。

死が身近にあればあるほど、自分を捨て、冷静に、客観的になる。
いや、自分を捨てたから客観的思考しか持ち得ないのか。

……そんなことはどうでもいい。

そうして見つけた突破口。
自分を捨てた、完全な捨て身の攻撃。

後の事など知ったことか。俺の目的はあの人形を殺すことにある。
…今はただ、それだけだ！！

「…………変換、開始。」

肝臓を指定し、その箇所の生命力を魔力に変える。

自分を今一度包囲する血染めの短剣。

手に入れた魔力をすべて、注ぎ込みバリアを発生させる。

「これで防ぎきる…………。」

そして一斉に射出される短剣。

俺は足を止めて、その攻撃を…………。

「受け止めるとでも、思ったかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁああああああああああ！！！！！！」

バリアを暴発。

今ここに、幾度と使ってきた魔法が、大量の魔力により完成に至る。

アサルトアーマー

全方位から攻撃を、全方位への広域空間魔法で打ち消す。

今までと同じく、轟音と閃光を伴いながら。
しかしその威力は今までの比ではない。
こちらに向かってきていた短剣全てが、その爆発に晒され例外なく消滅する。

「クイックムーブ！！ダブルアクセル！！！！」

一気に上空へと飛びあがり、拳を握る。

「だぁぁぁぁぁぁりゃぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

何の魔力付与も施さない純粋な打撃。
効くわけが無い、しかし俺にはそれしかない。しかし、それだけで十分だとも思う。
そして始まる、クロスレンジでの拳の交差。
受け、流し、返し、打ち込む。
攻守が一瞬で裏返る、極限の小さな戦場で俺と闇の書の意思との決戦。

俺はあの拳をもろに受けるわけにはいかない。
受けずに流すことを念頭に置き、隙があれば瞬時に関節技へとスイッチして、動きを止めていく。
拳を流した瞬間に、相手の小指だけを引っ掛けて間接をはずすなど、些細な結果。
しかし、それでいい。
それを何回も続けて、繰り返し、最後の一撃へと繋げる。

拳を交えてわかる。
錬度ではこちらが上。
威力ではあちらが上。

ならば、距離さえ取らせなければ勝負にはなる。

あぁ、今も体から血が噴出している。
体が俺の動きに付いてこれていない。
だが、止まるわけには行かないのだ。

「だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああああああああああ！！！！」

もはや物を掴む感触すら怪しい左手で受け流し、右手で敵の左腕の肩を外しに掛かる。
ゴキンという音と共に、脱力する肩。

（やったか！！？）

咄嗟に、距離を離し確認する。
しかしそれが拙かった。

距離を離すといっても、一歩にも満たないクロスレンジ。
しかし、それは拳を振るうには最適な距離感でも合った。
闇の書の意思は、顔色一つ変えずに残った右手を振りかぶる。

（まったくの、ノーダメージ？！！）

そう気付いたときにはもう遅い。

力を込めた拳が俺の腹部を打ち据えた。

体はくの字に折れ曲がり、その反動で腰は後ろ、足と手は前に投げ出される。

前に投げ出された事で、左手が偶然にも闇の書の意思の右肩に当たる。

……いや、偶然などではない。

「つ　か　ま　え　た！！」

生命力を捨てた腹部と、先程の打撃により、血反吐を盛大に吐き出しながらもエルは笑う。

偶然に当たっただけの筈の左手は、彼女の肩をがっしりと掴み、体が吹き飛ばされるのを抑止する。

そう、すべてはブラフ。

エル自身関節技などで勝負を決めることなど不可能だとわかっている。

全ては、この距離でこの状況を作り出すため。

あとは必勝の手札を切るのみ。

「……っ！！！」

初めて、闇の書の意思は危機感により表情を歪める。
すぐに右腕で左手を払い距離を離そうとするが、

「つかまえたって言ったろ！！」

エルは右手で彼女の右腕をしっかりと抑えていた。
ならば左腕で……しかし、左腕はどうしても動かない。上がらない。
そう、間接が外れているから。

「！！！」

闇の書の意思は驚愕する。
すべて、計算され尽くされていたのだ。
間接が外れても、意に介せず攻勢に転じることも、腹部を殴ることも。
もしかしたら、それ以前の流れ……クロスレンジでの攻防全てが読みきられていたのかもしれない。

一瞬の停止、それだけだ。しかし、それだけの隙がエルには必要だったのだ。

「変換…開始。箇所指定……左腕！！！」

エルは必殺の詠唱（ワード）を唱える。

生命力変換には段階がある。
生命力のみを魔力に変換する事と、生命の形それ自体を犠牲にする方法。

液体の入った器を用い、中身の液体だけを使うか、器ごと変換に用いるか。

ここで初めて、エルはその後者を選ぶ。
今まで使う事が無かった。
それは恐怖と、先見から。

だが、今そのどちらも彼の勘定の中には含まれていない。

あるのは、全てを捨てた覚悟のみ。

そして、ありったけの魔力を零距離で解き放った。
「ペイン・レゾリュゥショォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォン！！！！」

生命力を変換した、純粋で濃密過ぎる魔力が彼女の右半身を襲う。
純粋な故に非殺傷などと加減もつかず、濃密故に威力も尋常ではない。

まさに破壊と消滅の具現と化した魔力の奔流が、体を瞬時に喰らい瞬く間に蹂躙していく。

体を貫通……などと生易しい話などではない。文字通り体を呑み込んだのだ。

奔流が収まった後には、右半身を失い、辛うじて首と左肩が繋がった闇の書の意思が残されていた。

「お前の敗因はたった一つ。覚悟だよ。」

パンという軽い炸裂音と共に、エルの左ひじから先が消滅する。
炸裂と共に血しぶきが散乱する……ということもなく、まるで血は透けるように大気に吸収されていった。
失った左ひじからは、機械のオイルのように血が流れ出している。
しかしそれは、彼がここに生きている列記とした証拠でもある。

「何も感じないお前には、何も覚悟する必要が無かった……そう言うことだ。」

エルは失った左腕の分のバリアジャケットで、片腕で器用にひじを縛り上げ止血する。

エルと闇の書の意思の目と目が合う。

「私は……。」
「聞く耳持たん。消えろ。」

表情を変えることなく、闇の書の意思は消えていく。
最初から最後まで、機械の様に目的だけをこなした彼女……。
戦う前は、あんなにも憎かったのに、実際にこうして倒しても、何

の感慨も浮かばない。
残ったのは、虚しさと、疲れ。

エルはその場に堪らず倒れ込む。

「やる事は……やった。後は……お前の仕事だぞ。」

闇の書の管制人格。
名前も無い愛しい少女に想いを馳せ、欠陥者は一時意識を手放した。

体はもはや死に体。
左腕を失っていて尚、彼の表情は満足げに薄く笑っていた……。

三十八話　覚悟の痛み（後書き）

次回もこれぐらいの文量を維持出来たらなぁ……

三十九話　凶獣発破（前書き）

グランツーリスモ5発売ですね。

ええぇ、すごく楽しそうです。

でも、出来ないなぁ……

三十九話　凶獣発破

何もかも忘れて眠りたい。
つらい、悲しい、あんな現実もう見たくない。
そうだ、この心地よい暗闇の中で眠ってしまおう。
そうすれば、もうあんなものを見る必要も、見る事も出来なくなる。
そうだ、それがいい。

「いけません！！」

……え？誰？

見渡すと、闇の中に一人、女性が立っている。
長く美しい銀髪を持つ、女性。

その女性が必死にこちらに訴えかけている。

「私も最初はそう思っていた！！見たくも無い現実、使命。そんな物を何もかも捨てて、忘れられたらと……！！けれど、そんな事をしても、得られる物なんて何も無い。例えそれを忘れられたとしても、そこからはもう何も生まれない。ただ、闇の中に無のままに埋もれて行くだけ。私もそうなる所だった！！……それは当然の事、だって全てを捨ててしまったら、何かが残る筈が無いのだから……！！」

だからって、ウチはもうあんな現実を受け入れて生きていくなんて……できない。
知ってしまった暖かい家族、いつまでも続いて欲しかった、ウチの夢……。それが全部壊されてしもうた。

「無様でもいい。かっこ良く無くたって良い。その現実と向き合う事こそに意味がある。……向き合えば、何かが残る。後悔でも、怒りでも、憎しみだって良い。それがまた自分を生かしてくれるということを……私はあなたの兄から教えられました!!」

お兄……ちゃん？

「ええ。それに……貴方の兄はまだ闘っている、向き合っている!!主はやて、貴方を救うためだけに!!!」

嘘……。だってお兄ちゃんがシグナム達を……。

「貴方が苦しんでいたように、兄も……エルも苦しんで、自分自身と今も独りで闘い続けている!!……そんなあの人の想いを、私は無駄になんてしたくない!!」

わからへん、わからへんよ!!
お兄ちゃんがどんな人なのかも、何を考えているのかも……。

「はやて……貴方が毎日触れ合ってきた兄の表情こそが、本

当の表情なのです。……なぜなら、貴方がエルの妹だから。」

！！！

「主を陥れたあの兄を、貴方の兄かと認めるかどうかは、貴方次第です。……けれど、どうかわかって欲しい。エルは貴方を一番に想っています。その為ならば、何だってしてきました。その気持ちを……わかって欲しい。」

思い出す。

シグナム達と、みんなと一緒に微笑む大切なお兄ちゃんの姿を。

シグナムが顔を赤く染めて顔を俯け、それを不思議そうな顔で下から覗くお兄ちゃんの姿。

……それはきっと、お兄ちゃんの何気ない一言に、シグナムが恥ずかしくなったから。シグナムは、きっと女性としてお兄ちゃんの事が気になってると思うんや。

ヴィータと一緒にゲームして、当然の如くヴィータをボロボロに負かして、そこから床を転がりながら喧嘩をするお兄ちゃん。

ヴィータは悔しがってお兄ちゃんを何度も叩く。それを面白そうにかわしながら、ヴィータをくすぐる。

なんだかんだで直ぐにまたゲームを始める二人。本当に、喧嘩するほど――――や。

暖かい日差しを浴びながら、居間で昼寝をするお兄ちゃん。

それに寄り添うように、慕うかのように傍で丸まり一緒に眠るザフィーラ。
言葉なんて無い、けれど、そこには部外者が見てもわかる安らぎがあった。

シャマルと一緒に家事をこなすお兄ちゃん。
テキパキと役割分担をこなし、お互いがお互いに気を配りながら仕事を片付ける二人の姿は……まるで夫婦みたいやな、と思ったのを覚えている。

……その全てが今までの日常の風景。
誰一人としてお兄ちゃんを嫌う者は無くて、みんながお兄ちゃんを慕っていた。
それはウチもそう。
そして、お兄ちゃんもみんなを愛していた。
父親のように。

そうや、こんなにもちゃんとした形があるのに、どうしてウチはお兄ちゃんを疑ってしまったんやろう。
……今ならはっきりと言える、お兄ちゃんはこんな事する人やない！！

「……そうや、そうやった、お兄ちゃんは私のお兄ちゃんや。
ありがとう、ウチの目を覚ましてくれて……。」

「いえ、私は本当の事をただ言っただけです。」

目の前の人は、優しく微笑む。
その笑顔で、ウチも少し心が軽くなった気がした。

「ウチはもう一度、お兄ちゃんに会いたい。会って話がしたい……
……やから、力を貸してくれへん？」

「こんな私で良いのなら、喜んで。」

そういう彼女の顔は、本当に救われたような表情をしていて……
……。
なぜだかウチは、この人になら命を預けても良いとさえ思ってしまった。

「それじゃ、そろそろ私達が話しに入っても良いかしら？」
「誰だ！？」

突然に闇から響く、少女の声。
歳は……成人していないけど、それでもウチから見れば大人に分類されるくらいの年上の声。十五、六くらいがしっくりくるのかもしれへん。
銀髪の女の人は、ウチを庇う様に寄り立つ。

「……あれ？私たち見えて無い見たいだよ？どう言う事なの、サラ。」
「ちょっと待ってて。……あぁもう！！外のエルが好き勝手さえしなければ……。」

どうやらもう一人女の子がおるみたいで、その子からの悪態が聞こえてくる。
そうこうしているうちに、二人の少女の姿が闇の中から浮かび上がってくる。
どちらも声の見立て通りで、十五、六ほどの少女だった。

「どう？これで見える？」

肩までに綺麗に切りそろえられた黒髪を持つ少女が、問いかけてくる。

「え……まぁ、はい。」

「そう、よかった。」

そう言って目の前の少女は笑う。
その人懐っこくも、誰にも依存しないような飄々とした笑顔は、一人の人物を想起させる
その人物は……きっとウチが良く知っている人。

「どうも初めまして、はやてちゃん。私の名前は、フィオラ。お兄ちゃんの妹やってました。……貴女から見れば、私はお姉ちゃんになるわね。」

「え？お姉ちゃんって……。」

「つまり、エルがお兄ちゃんって言う事。貴女と同じにね。」

悪戯っぽくフィオラさんは笑うけど、ウチはもう何がなんだかさっぱり……。

「え？お兄ちゃんの妹さんが、え？妹さんおったの？いや、それよりもどうしてこんな所……えぇ？！」

「落ち着いてください、はやて。」

そう落ち着かせてくれるこの人だって、正直驚きを隠せていないようで、一人の少女を見据えて動きが止まっている。

それはお互い良く似た少女で、いや、髪形を除いた以外まったく同一の少女。

「あなたは……。」

「どうも、闇の書の管制人格さん。私は元煉獄の書の管制人格のサラ。」

「元……？」

「ええ、今はフィオラと一緒に煉獄の記憶の片隅で自立機関をしているわ。」

「そんなことはあり得ないはず！ならば今、煉獄の書はどうやって活動していると……！！」

「あ～、ちょっと良い？サラ、それに闇の書さん。」

フィオラさんは間に入って一度、話に区切りをつける。

一堂で、フィオラさんを見つめる。

「あなた達が話したいのも良くわかるけど、今回ははやてちゃんが主役よ。はやてちゃんが一番状況がわかってないみたいだし、一から説明したいんだけど……良い？」

特に異論が出る事は無かった。

「はぁ……はぁ、はぁ……！！」
「ふぅ、ふぅ、ふぅ！……ぐぅ」
「はぁ、はぁ、はぁ！！」

三人の荒げる吐息が、このナインの荒涼な空に響いている。
急激な魔力消費と、激しい運動による酸素不足による呼吸困難である。

三人は今の今まで、休むことなく全力全開の戦闘を続けていた。
それこそ息つく間も無いほどに。

「あら～、みんな疲れてきてるねぇ」

しかしそれほどに力を振り絞っても尚、目前の戦士には届かない。
息も乱れず、汗一つかかずに、余裕の表情で三人を見つめる。

「最初の勢いは素晴らしかったんだけどな。やっぱり人間だよな。
どんなに意思を固く持とうとも、限界は訪れる。」

「まだ……まだ！！」
「そうだ、まだ負けてない！！」
「エルさん……私は！！」

「ん？」

限界はきている。しかしそれは体力の限界。
彼女たちの心の限界にはまだまだ遠い事が、未だ立ち上がってくる
体と視線でわかる。

その姿にエルは目を細める。

「もう休憩はいいのか？別に俺は今だけ時間ならやるぞ？」

それは勿論、もう一度戦闘が始まれば、遠慮も容赦もなく殺しにか
かる事を意味している。
しかし、それでも彼女たちの動きは止まらない。
デバイスを構え、こちらに少しづつ近づいて来ている。

一体何が、彼女達をそれほど戦いに向かわせるのか。

「はぁ～」

溜息を、一つ。

「わかったよ。もうおちょくるのは止めだ。出し惜しみしねーぞ。」

そう言って手を空にかざせば、十のスフィアが展開される。

「ボルテッカー！！」

「スラッシュ、ハーケン！！」
「ディバイン、バスター！」
「スティンガーレイ！！！」

それぞれがそれぞれにボルテッカーを相殺させ、散開する。
それは、お互いの意思疎通があっての事か……それとも自棄になっての暴走か……。

「まぁ、どちらにしたって同じか。」

エルはダブルアクセルを始動。
驚異的な速度で追いすがる。

もしこちらを陥れる策があったとしても、それを力押しで勝る力が今のエルには在る。

ダブルアクセルをダブルアクセルでキャンセルし、物理法則を無視

した軌道を空に描く。
直進したかと思えば、直角に右に移動し、その直後にはその真下に移動している。

まるで瞬間移動かテレポーテーション。

それにより、三人の魔法の全てが掠ることも無く回避される。
そして、回避されるたびに自らは彼から繰り出される魔法や拳をその身に受ける。

「スラッシュ……ハーケン！！」
「ハルバード！！！」

エルの巨槍が、フェイトを鎌ごと地面に叩きつける。

「ディバイン、バスター！！！」
「ルイン、クラスター」

エルの放った必滅の光球は、なのはの砲撃を相殺どころか、一方的に消滅させながらなのはに到達する。

「スティンガーレイ！！」
「遅い！！」

二人の後に続くように、エルの背後から放たれた魔法は、一瞬にしてエルがかき消えた事により命中せずに終わる。
エルが居たのは既にクロノの目前。

クロノはそれを見ても逃げようとはしない。出来ない。

既に四肢にゲイザーは貫通し、その空間に縫い付けられているから。

「今のは、隙じゃねーよ。残……念！！！」

零距離で、腹部に向けてガントレットを使用。
衝撃力のみに特化した魔法は、縫いつけられたクロノを、『縫い付けられた』まま地面へと落下させ、地面に激突する。

フェイト以上の速度を持ち
なのは以上の威力を持ち
クロノ以上の経験を持つ、エル。

……圧倒的過ぎる。
もうどうやったって勝てるわけがない。
もう、諦めてしまえ。

三人の心の中には一様に弱みが生まれ始める。
その弱みが自分に語りかけてくる。

それぞれが地面に屈し、項垂れる。

「なんだ……もう、諦めるのか？」

その三人へと向けられるエルの言葉。

「お前らはこれからの管理局を担う大切な翼だ……こんな事で諦めたら、これから誰も救うことなんて出来ねーぞ。まぁ、俺には関係ないか。」

エルはレオハルトを構える。
翼は向きを変え、翼から砲身へと姿を変える。

そうして生まれる、六つ……いや、中央のブレードディスペンサーも含めた七つのスフィアが展開される。

明らかな敵意を孕んだ言葉だと言うのに、含まれた意味は叱咤激励。
そのちぐはぐなエルの言葉は、彼女達を混乱させながらも、今までと違った昂揚感を与える。

「そう、貴方を倒さなければ……もっと多くの人が傷つく！！」

クロノは強引に左手に刺さったゲイザーから左手を引き抜く。
そして伴う強烈な痛みと、出血。
それに顔を歪めていても、エルを睨みつける視線に衰えはない。

「私は……エルさんがどういう気持ちで今も闘っているのかを……知りたい！！」

フェイトはバルディシュを支えにして今一度立ち上がる。

「どうして……どうしてこんなことするのか、お話聞かせて貰う

の！！！」

なのはも若干の闇を纏いつつ、不屈の闘志で立ち上がる。

「言っていろ！！お前らは、ここで……！！？」

完全にレオハルトの収束が終了し、今こそ魔砲は放たれんとしたその瞬間、エル自身が全ての支えを失ったかのように、ガクンと体勢を崩す。

「なっ！！」

その影響か、スフィアも存在を保てずに消滅し、エルは空から地面へと向けて落下していく。

五メートルと落下せずに、本来のエルと同じように斥力の足場を作り出し、そこに着地する。

そう、今まで飛行出来ていたのは、エナジーウイングのお陰である。それが突如として使用不可能となったのだ。

「まさか……あいつら、何しやがった！！」

エルは憎々しげに、南を睨みつける。そこには何が見えるわけではないが、その先に何かがあるのは事実だろう。

何も驚いているのはエルだけではない。なのは達もまた同じように驚いている。
しかし、理由はわからないが、長く待ち望みやっとやってきた好機、それをみすみす見逃すほど、彼らは未熟でもなかった。

「レイ！！」

「ええい、鬱陶しい！！」

光条をレオハルトで打ち払うと、今度は自らを包むように金の魔力光が現れる。

「サンダーレイジー！！！」

「がぁぁぁぁぁぁ！！！」

肉体の数箇所を雷に焼き切られながらも、その魔法から抜け出す。

「お前らなんか……魔力がなくたってなぁ！！」

距離を取り、体勢を整える。
しかし、膨大な魔力を感じ、上空を仰ぐ。
そこには、魔法陣を展開し、砲撃魔法を使用しようとするなのはの姿があった。

「いくよ、エルさん！！！これが私の全力全開！！！！」

なのはが陣取った場所。
それはエルがクイックムーブで幾度となく暴れ回った場所。
ということは、彼は魔力をその周辺に撒き散らしていた。

「お、おのれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！」

「スターライトォォ……ブレイカァァァァァァァァァァァ！！！！！！」

星光の魔砲が放たれ、一人の人間を蹂躙し、大気を裂き、大地を抉る。
砲撃が収まる後には、そこにクレーターのような穴がぽっかりと地面に生まれていた。

「はぁ、はぁ、はぁ……。」

なのはは極度の疲労により、高度をゆっくりと下ろし、地面に降り立つ。
しかし、極度の疲労に達した人間は、なのはだけではなかった。

「がぁ、がぁぁぁ……ひゅうぅ……。」

結果的に、エルはあの一撃を回避していた。
ＳＬＢが抉り取った地面の跡の、すぐ傍、一メートルと距離のない場所で膝に手を付きつつも立っていた。
だが、その代償は大きかった。
魔力不足により、ジャケットすら展開されず、彼が下に着るボディスーツがむき出しになっていた。

「ん、なぁぁ！！」

ブスリという肉を貫通する生々しい音。
エルがゆっくりと体を見下ろすと、自らの太股に水色のゲイザーが突き刺さっていた。

「クロノ……貴様ぁ…俺のゲイザーを真似たな。」
「まだまだ完成には程遠いけれど……今は拘束できる。」

クロノは未だ左手を除く四肢をゲイザーによって地面に縫い付けられていて、左手に持った杖だけをエルへと向ける。

「はっ、Ｓ２Ｕでは俺を消滅させるほどの魔法は……。」

撃てない。そう言おうとした時だった。
クロノの持つ杖をしっかりと視認する。
視認の直後、エルの顔は驚愕に染まる。

「その杖ぇ……まさかあのクソジジィかぁ！！」

「デュランダルなら……撃てる。」

グレアムから託されたデバイス、デュランダルへと全魔力を籠める。

「おのれ、おのれ、おのれ、おのれ、おのれおのれおのれおのれおのれおのれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

「先輩の魔法……借ります。ムーンライトォォォ……！！！」

「！！！……ハハッ！！そうかこれで終わりか。……まぁ、今回は勝ちを譲ってやる。最も、お前らと闘う事はもうないだろうけどな……。」

敗因は突如の魔力供給の強制カット。

それが第一の敗因ではあるが、それだけではエルはここまで追い詰められる事はなかった。

最後まで諦めず、不屈の闘志で立ち上がってきた彼らだったからこそ、あの時生まれたほんの僅かな隙を突き、エルを打倒せしめた。

言うなれば、彼らの闘志にこそ負けたのではないか。

それを悟ったエルは、無駄な抵抗を止め、敗北を認める。

「ブレイカァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！」

「まったく、真似るならもっと巧く真似ろよ。……じゃあな。」

本家に数段以上劣る拙い模倣。
しかしそれでも手負いの獣を狩るには十分すぎた威力。

煉獄の凶獣は、一度駄目出しの後、潔く現世からの消滅を果たした……。

三十九話　凶獣発破（後書き）

作者が衝動的に書く底品質（誤字にあらず）短編

グランツーリスモ発売記念編

エル「ウィ、ラァブ、カ～ズ♪　ウィ、ラァブ、カ～ズ♪！」

八神家「……」

エル「ほら、みんなも一緒に！！」

八神家「……（冷たい視線）」

リインフォース「ウィ、ｗｅ　ｌｏｖｅ　ｃａｒｓ、ｗｅ　ｌｏｖｅ　ｃａｒｓ／／／」

エル「恥ずかしがっていても歌ってくれるリイン可愛すぎ～！！（なでなで）」

リイン「あ、あう……／／／／／」

八神家「ウイ、ラブ、カーズ！！ウイ、ラブ、カーズ！！！（鬼気迫る表情）」

エル「変わり身はやっ！！！何、何で？？！」

リイン「罪な人……」

四十話　虚無の最強人形（前書き）

あはん、今年中にＡｓ編書き終える気がしない。

エル「あはん？」

四十話　虚無の最強人形

「お、お兄ちゃんに……そんな過去が……。」

「やっぱり、お兄ちゃんはそこの所は誰にも言って無かった見たいね。……まぁ、言ってどうなるって話だし、お兄ちゃんがそんな話をわざわざする人じゃないのはわかっていたけどね。」

驚愕するはやてを見て、フィオラは呆れたような諦めたような、複雑な表情で髪を掬う。

闇の書もまた、顔を俯け、彼の過去に驚愕している。

「これで……どうして、お兄ちゃんがあそこまでして貴女を救おうとしているかわかったでしょ？」

「で、でも、フィオラさんの事件の事はともかく、どうして後のアリシアちゃん達の事まで……。」

そう、彼女が話してくれた事柄には矛盾が生じている。

自分の身の上の過去だけでなく、自らが死んだ後の、エルの過去を今まで遡り説明した。

自分を失った後、テスタロッサ家の養子となり、その家からも飛び出したと言う事さえも。

それは既に死んでしまった彼女では知り得ない事ではなかろうか。

「……私たちはね、結局フィオラ、サラという確固たる個人では……ないのよ。私たちはただ、エルという人の記憶。

記憶をダビングする煉獄の書だからこその機能、執着する過去の再生。だから彼の記憶も知識も私達は共有している。……おかしいわよね、だからって私達は何が為せるわけでもないと言うのに。」

フィオラは自嘲的な笑みを溢し、体をふわりと一回転させる。

「私が死んだのは、七歳のときよ。しかし、それから十年、私がこの姿をしているのは、あの人が私がもし生きていて、変わらず成長していたら……と妄想するから。あの人は過去は乗り越えていたつもりでも、こうして心のどこかでは私たちの事を引きずっているの。……私たちの存在がその証明。」

フィオラは表情を引き締め、はやてに向き直り、今までのような飄々とした表情から一変、覚悟ある視線を向ける。

「だから、いい加減、あの人には私達の呪縛から開放されなければならない。……私たちの目的は、私達がこの煉獄の書の中から消え、お兄ちゃんが私たちの呪縛から完全に開放され、正しい記憶の中に戻る事。もう亡霊は、いらない。」

亡霊とは、自分たちの事を指しているのだろう……そうはやて達は思い、彼女たちのエルへの想いに心を締め付けられた。

「その為にも、貴女達はここで斃れちゃいけないの。そう思って手助けに来たんだけど……どうやら最初から大丈夫だったようね。特に貴女は……お兄ちゃんのお陰かしらね？」

フィオラは闇の書に向けて、母親のような穏やかな笑顔を向ける。
それに頬を染め、視線を逸らす。

「ええ、エルの、お陰です……。しかし、ここから抜け出すには、防衛プログラムを完全に切り離す必要があります。……その為には、表に出ている私をどうにかしないと……。」

「その心配はどうやら必要ないらしいよ？」

サラは闇の書の発言を遮り、皆に聞こえるように明快な声を響かせる。
その顔はどことなく勝ち誇ったような笑顔。

「そうね、お兄ちゃんは自分が出来る事を弁えているし、自分が今何をすべきかも良くわかっている筈。……ほら。」

フィオラが悪戯な笑みを闇の書に向けるのと、彼女がビクンと体をはねらせたのはほぼ同時であった。

「今……私が、消えた。」

「だから言ったでしょう。心配は要らないって。」

「まさか……彼が、あの状態の私を倒せるなんて……」

闇の中に閉じこもっていた彼女は、実際にエルの戦闘を見たことは

無い。しかし、聞こえて来る話だけで彼の強さはわかっていた。しかし、所詮は情報としてそれを理解していたのみ、今回の報告もまた情報のみではあるが、自分でも打倒不可能だと考えていた物を、またしても彼は倒してしまった。

彼女の蓄えられた情報では、彼には今までただの一度も敗北はない。

彼の強さは一体どこまで行くと言うのだ。

実際に見た者からしても、彼の戦闘力は底無しのようにも思われる。

「さて、貴女達がここから切り離せるチャンスは今しかないわ。早速始めましょう。……それと同時に煉獄の書の一部との切り離しも終わらせちゃいましょうか。いい加減、あのお兄ちゃんは好き放題しすぎだしね。」

フィオラの言葉にサラはそうだね、と笑って応え、彼女達の体が光に包まれ始める。

その言葉に、はやては思い出したかのように声を荒げる。

「や、やっぱり、外のお兄ちゃんはお兄ちゃんじゃないんやろ?!」

「……彼もまた、煉獄の書の自立機関の一つ。う～ん、私のお兄ちゃんで無い事は確かだけど……貴女の場合、貴女が話し、一緒に過ごしてきたお兄ちゃんそのものよ。」

「え??」

「それに関しては、乗り越えるのはお兄ちゃん自身。今回は貴方たちは本当に無関係、巻き込まれてしまっただけよ。煉獄の書の彼の宿命に。今回は……ね。」

フィオラはそこで一度息を吸う。
それは間を持たせるような、覚悟を決めるような、そんな深呼吸だった。

「ただこれだけ覚えておいて、私にとっては敵、けれど貴女にとっては兄という事に。……だって、私はあのお兄ちゃんとは一緒に過ごしてないもの。」

フィオラの小悪魔のような笑顔を向けられ、二人はただ顔を傾けるだけだ。

「フィオラ、準備出来たよ。」

「そう、じゃ早速始めましょう。……そうだ、その前に、二人にはして貰う事があるわ。」

「「？」」

「……いつまでも闇の書さんじゃ可哀相よ。名前、決めてあげて、はやてちゃん。」

エルは仰向けに倒れたまま、ピクリとも動かない。
まるでそれは死体のよう。

しかし、エルは突然バチリと目蓋を上げ、何者かが近づいてくる北を向く。
何者かと言えば……クロノ達。

「よぉ、クロノ。」
「エル……先輩。」

三人にはありありと警戒の気持ちが現れていた。
まぁ、ついさっきまで俺と闘っていたんだそれはしょうがないかと、エルは薄く笑う。

「俺は……ボコボコに打ちのめしてやったか？」
「あ……はい。」

この言葉で、警戒心を無くし、クロノ達は構えを解く。
それは他の二名もまた同様だ。

「エルさん！！！」
「お？」

そうすると直ぐにフェイトがエルに近づき、彼の体に回復魔法をかける。
もはやそこにエルへの敵意などなく、ただ大切な人を労わり、心配する優しさがあった。

「……すまないな。俺の魔力じゃ止血しか出来なくてな。」
「こんなに……ボロボロに、あ……左手……。」

フェイトは体の各所に回復魔法を次々とかけて行くうちに、何もない左腕に到達する。
肘から先が綺麗になくなった左腕。それはもはや回復魔法でどうにかなる代物ではない。
……左腕がそこらに転がっていたのなら、まだつなげる事も出来たのかもしれないが、もうその左腕は跡形もなく破裂した。……
……どうしようもない。

「気にするな。命がけの任務をこなしているんだ……こういう事もあるさ。むしろ、これだけで済んだことを喜ぶべきだ。」
「で、でも……！！」

何か言いたげなフェイトの頬に触れ、その言葉を封殺する。

「それに、これは俺が受けて当然のものだよ。……フェイトに、なのはに、もっと大勢の人たちの魔力を身勝手に奪い続けた、

罰だよ。」

「だから、ゴメン。なのは、フェイト。」

エルは頭を下げる。
それしか彼には出来る事がない。
何を言っても、ここではただの言い訳にしかならない。

「ううん、大丈夫だよ。それに、エルさんは事件解決を想って仕方なくしたんだよね？」
「うん、私も。だって、一番つらかったのはエルさん、貴方だろうから……。」

あれほどの暴行を受けても、許してくれる二人の優しさ。
それがなんだか恥ずかしくて下を向く。
そのまま地面を見ていると、地面の草地を濡らす水滴が零れ落ちていく。

な、なんだ柄にもない。

「あ、ありがとう……。」

エルはただひたすらに嬉しくて涙を流していた。

そのエルを包むように、なのはとフェイトの二人は彼に寄り添う。
大きな彼の体を包みきれてなどしていないが、それでも十分に温かく、彼の心に届いている。
その思いやり、優しさ、……全てだ。

クロノはその様子を微笑ましく見つめつつも、冷静に状況を判断する事を忘れない。
そうして冷静に状況を判断した結果、最初に現れたのは驚愕とも恐怖とも言えないくらい感情。

この辺りの様子を見る限り、エルは誰か、何かと闘っていた。
それは構わない。彼がここに存在していると言う事は、その何かを倒した……と受け取って構わないだろう。

しかし、そのエルの姿があまりにも痛々しい。

体中は血に染まり、純白であるはずだったジャケットは、もはや白より赤に染まった割合の方が遥かに高い。
何より、彼の跡形も無くなった左腕。

自分達はきっと、エルに束でかかっても敵わない。
それほどに最強の象徴でもあるエルですらこうなのだ。

どれほどの化け物と闘っていたのか……そう考えると身震いが止まらない。

「……？」

クロノは一人首を傾げる。

さて、これからどうなるのだと。

エルは何かを倒した。

では、闇の書は？

自分達は何をすれば良いのか。

依然として闇の書の反応は消える事はない。

それを確かめるべく、エルに問うよりも早く、エルがクロノの心情を察し先手を打つ。

「大丈夫。今は家族を信じて待っている所だ。少し休んでろ。」

待つ……？家族？

「ああ、運悪く闇の書に選ばれちまった可愛い妹と、孤独な闇の中でも主人の為に尽くし続けた、愛しい人をな。」

なにを悠長な事を！！

それが、闇の書の封印とどう関係があると言うのか。

はやく封印しなければ、もっと多くの人が犠牲になってしまうかも知れないと言うのに……！！

「悪いがこれは譲れんな。お前が執務官としてここに来ていても、俺個人としては妹を護る兄貴としてここにいるんでな。あいつらが戻ってくるまで、俺が手を出させない。邪魔したらぶん殴るぞゴラァ。」

冗談なのか、本気なのかわからない口調で自分を睨む執務官の先輩。

ゴラァなんて言葉今まで一度も聞いた事がない。

故に、それが本気なのか冗談で言っているのかの判断に困る。

しかし、目を見て確信した。

この人は本気で、全力で殴る気だ、と。

もしエルが本気で顎を殴ったら、自分の未成熟な顎などどこかに飛んでいってしまうのではないか、などと恐怖を感じる。

恐怖から追求を諦めようとしたとき、

「いや、もう待つ必要もないみたいだな。……クロノ、ここからまた忙しくなるぞ。」

闇がエルの背後で生まれた。

「な！？」

「落ち着け。……二人もな。」

寄り添いながらデバイスを構えるなのはとフェイトを、やんわりと手で制し、闇に向き直り前に出る。

緊張の時間。

ただ、緊張しているのはエルを除いた三人だ。

闇から飛び出してきたのは、一人の少女、一人の女性。

「よぉ、はやて。」

「お兄ちゃん！！！」

はやてがエルの腕の中に飛び込む。

エルははやてを、確かめるようにしっかり片腕で抱き止める。

どちらもこの上ない安堵の表情。

見ていて微笑ましい光景でもあるはずなのだが、しかし、その他の者に関しては、表情はまちまちだ。

ふたりの関係をしっている闇の書は、穏やかな笑顔で二人を見つめ、

状況の掴めないクロノはただひたすら頭上に？を生み出すばかり。

なのはとフェイトに至っては、何の躊躇も遠慮もなくエルの胸に飛び込んできたはやてを、ギョッとした……ジトッとした……なにか負の感情が混じる視線で凝視している。いわゆるガン見だ。

「お兄ちゃん……？待って、どう言う意味なのかな？」

「エルさんの胸板、胸板、胸板……。」

二人の呟きを無関係とし、話は進む。

「怪我は……無いようだな。」

「うん！そういうお兄ちゃんは……あ、」

抱きしめていてわからなかったのか、体を離し、体全体を見て、エルの重症に気付く。

無論、失くなった左腕にも……。

「こんなことはどうでも良い。……それよりも、闇の中で答えを見つけたか？」

「……うん、みつけたで。たった一つやけど、それで全部や。」

「聞いて良いか？」

「お兄ちゃんは、どこまでいってもお兄ちゃんってこと！！」

満面の笑顔で言い切る。そこに不安も陰りも何も無くて、それを見

ているエルの心を明るく照らす。

はやては一度ちらりと闇の書に視線をずらすと、それを見て彼女も優しく彼女に頷きを返した。

それに押されるように、はやてはもう一度エルに向き直り、言葉を紡ぐ。

「うちにはお兄ちゃんがいて、リインフォースも家族になった！けど、家族は助け合うものや。もううち一人だけ……他の皆に護られ救われるのは嫌や！！うちも闘う！！！」

「ガキが、あんまり背伸びして粋がるなよ。」

ピン、と優しくはやての額をデコピンする。

「あいたっ」

「だが……その決意は受け取った。今はその気持ちが聞ければ十分だよ。」

そっと、はやてから離れると、今度はリインフォースへと向き治る。

「リインフォース……祝福の風、か、良い名前を付けて貰ったな。」

「はい。」

「お前の決意は後で聞こう。長くなりそうだしな。けど、最後の戦い、付き合ってくれるな？」

「はい、私の命、尽きるまで……。」

穏やかな笑顔、しかしその笑顔の中には決意や覚悟もしっかりと含まれている。
そんな彼女の微笑みを、エルは最高に美しいなどと思ってしまった。

「うん、俺が救いたかったのは、やっぱりお前だよ。」

ワシワシと頭を乱暴に撫でる。
その後、闇に向かって一歩身を進める。

揺ぎ無い信念、身と命を繋ぐ希望にも似た決意。
その全てを込めて、眼前の闇を睨みつける。

「全員良く聞け！！！これが最後の戦い、最後の後始末！！！目標は闇の書の防衛プログラムそのもの。全力全開の力をもって奴を打倒する！！！……はやて！！！！」

「はい！！！」

「お前を守護する騎士達の名。もう一度呼べ。今のお前になら、どんな闇の中であろうとも奴らを呼び出せる。それほどの想いがお前にはある！！！」

「うん！……もう一度、頼りないうちに力を貸して。うち

にはやっぱり皆が必要や、今もそしてこれからも……ヴォルケンリッター！！！」

「聞こえているだろう、シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、シャマル！！こんな厄介事を今にまで持ち出してきた責任、自分の手で始末つけて見せろぉぉ！！！

「「「「承知！！！」」」」

はやての周りに奔る四つの閃光。

その光は人型を成し、夜天の主を守護する高貴な騎士達へと姿を変える。

エルは口を吊り上げて笑う。

「最後の敵は闇の書、煉獄の書の中で最強の記録。それを再現した、いやそのものになった偽者。さぁ……来るぞ。」

闇が膨らむ……中から真っ黒な何かが這いずりだしてくる、

徐々に姿を現すその姿は……！！

「エル……だと。」

「もはや時の移ろいを忘れるほどの時間を旅して尚、最強の存在として彼を選んだ……。」

表情も何も無く、ただ真っ黒の泥人形のような姿をしていても、その姿かたちはエルそのものであった。

左手もしっかりと存在する、完全なエルが現れる。

『奴』の周りには異様な雰囲気と魔力が垂れ流されている。
これは今までで一番に危険で、恐ろしく、強い敵かもしれない。
本能でそう感じ取り、全員が急いで構える。

ただ一人、エルを除いては……。

皆がエルの背中を見つめる。
ただ堂々と立ち続けるその背中は、どんな言葉よりも頼りがいがある。

「ふ、ふはははははははははははは！！！！！ひーっひーっ！！おかしいぃぃ！！」

しかし、そのエルが突然に笑い出したのだ。
それは、今までのような狂った笑いではなく、心底面白そうな笑い。
純粋に目の前の光景が可笑しくて笑ったというだけだろう。

「はは……はぁヤベ、ツボッた。だがまぁ、奴も闇の書か……
……フン。執務官エルンスト・アルカトラスが全員に作戦を通達する！！各員、全力の力を持って、闇の書の多重結界を突破及び拘束を完了せよ！！！止めは俺がする。」

一瞬で笑い顔から『将』の顔に切り替わり、指示を出す。

「そんな、それだけでいいんですか！！！」

咄嗟にクロノが食い下がる。

エルの言う作戦があまりにも具体性にかける内容で釈然としないからだ。
そんな内容で上手く行くほど楽な敵ではない。それがエルの模造品なら尚更だ。

そのクロノに、エルは呆れ、溜息を吐きながら答える。

「ああ、どうやったってあいつがお前達に敵うわけがないよ。ただ強さを測ることしかできない闇の書にはな。」

エルは内ポケットからコンビニエントカートリッジを取り出す。

「俺がどうしてお前達に負けないのか……そりゃ、経験、直感、その他諸々あるがな。けれどな、それだけじゃお前たちに勝つ絶対の手札にはならないんだよ。」

カートリッジをレオハルトに装填。

「俺が本当に強い理由……それは心が強いからだ。誰よりも、何よりも。」

エルは自分の胸に親指を突きたて、はっきりと言う。
それは決して過信ではない自信がある。
自惚れでは無い自覚がある。

「故に、心の無い『奴』はどう足掻いたってお前らには敵わない。理屈じゃない。それは証明済みだ。」

レオハルトを上空に向け、カートリッジを排出し、魔力が凝縮される。

「お前らは全力で挑めぇ！！！！！俺を倒せる機会は今回の事件だけだぞ！オーバードブースト！！！！」

唱えた直後、まさに音速でエルは上空へと舞い上がって行く。

おそらく止めの一撃の為の移動だろう。

「ふっ、やるしかないか。」
「けっ、自分勝手言ってくれるぜ……けど、」
「不思議と……力が漲る！！！」

ヴォルケンリッターの前衛三人が前に出る。
いや、それだけではない。

「先輩は本当に強い人だ……だからこそ、彼を超える！！！」
「行こう、フェイトちゃん。もちろん全力全開で……ね？」
「うん！！！」

管理局の三人も疲労困憊の体を前へと踏み出させる。
踏み出させる原動力……それは他でも無い、心。

「……シャマル。」
「え？何？」
「主はやてを……頼みます。」
「え、なんで？！」

突然のリインフォースの申しに、驚くはやてとシャマル。
リインフォースはエルが飛び立った空を見上げ、言う。

「すみません。勝手な事を言ってしまって……。それでも、私

は彼の傍で、彼の力になりたい。……その為の力も、彼の妹達から受け継ぎました。」

「うん…うん、そうやね。お願いリインフォース。お兄ちゃんを手助けして。」

「……ありがとう、ございます。」

リインフォースもエルの飛ぶ空へと向けて飛翔する。

「なんや、ちょっとリインフォースに嫉妬や。あれじゃ、二人は人生の相棒見たいやん。」

徐々に小さくなるリインフォースを見上げながら、はやては誰にも聞こえないように呟いていた。

四十話　虚無の最強人形（後書き）

はやて「モンハン発売やで！！！ちなみにうちはヘビボ使いや！！！」

エル「俺はランス一筋だぜ！！」

ヴィータ「あたしはやっぱりハンマーだよなぁ。」

シグナム「私はやはり太刀か大剣……弓も面白いかもしれないな。」

フェイト「私はスラッシュアクス……かな？」

なのは「私はライトボウガンを良く使うの！！」

エル「いやぁ～それぞれ自分の得物で楽しめているようで……ん？」

シャマル&ざふぃーら「……OTL」

全員「調子乗ってました、ごめんなさい」

四十一話　月空は宿命を断つ　（前書き）

モンハンのせいで明らかな執筆の遅延。

モンハン始めちゃうと長いぞ～。

四十一話　月空は宿命を断つ

リインフォースは、その黒き翼を羽ばたかせ空を翔ける。
ただ一人の戦士の元へと急ぐ。

「……。」

更に見上げれば、エルが遥か眼下の戦いの様子を見下ろす様が見える。

「……！！」

彼女の思考の内には、エルの妹達から告げられた言葉と想いが今も巡っている。
それによるかは定かではないが、リインフォースは知らず、上昇する速さを上げていた。

「さて、貴女を安全に切り離すから、ちょっと待っててね。」

フィオラははやて達から少し離れた位置へと移動し、何事か呟く。
それはあまりに小さく、聞き取る事は出来なかったが、それを合図に彼女が光に包まれる。

「サラ、はやてちゃんの相手お願いね。……私はリインフォースさんに話しがあるから。」
「オーケー。」

それを聞いたサラはポンとリインフォースの肩を叩き、耳元でサラが呼んでいると呟くと、笑顔で横をすり抜け、はやてへと向かっていった。

「私に……？」

訝しげに表情を歪めながら、リインフォースははやての元を離れ、フィオラへと向かった。

「なんですか？……話とは。」
「ん。貴女がなんとなく話に納得していないようだったのと、伝えたい事があるから。」

「ええ、最初に質問した、煉獄の管制人格についてです。」

「うん、やっぱりそれね。……どこから話そうかな、お兄ちゃんは元管制人格のサラを殺したときに、統制を失った煉獄の書に呑み込まれたわ。……いいえ、呑み込んだ。」

「それはどういう……。」

フィオラの言葉の使い回しに違和感を覚え、問いかける。

フィオラは目を瞑り、切り離しへの注意を払いながら、彼女の問いにゆっくりと応える。

「文字通り、煉獄の書を自分の中にしまい込んじゃったのよ。……きっとそれは偶然。別に自らの中に入ってきた煉獄の書の核を、溜め込んでおく必要なんて無いのに、お兄ちゃんはそれを飲み込み、体の一部にしてしまった。……それはきっと、私を失ったことによってできた、彼の心の穴にピッタリとはまり込んでしまったから。心に作用する煉獄の書だからこそ出来た芸当ね。」

「言っておくけど、煉獄の書はその感情を蒐集する特性上、人間の心に関する全てに作用可能よ。夜天の書のように魔法と魔力を保管も何も出来ないけれど、それが最も恐ろしい特性。」

その特性により巻き起こった事件、被害は今回の一連の事件だけでも少なくない。

本来エルの持ち得ない激情であったり、その激情が乖離人格として形を成したりである。

「そういった意味で、さっきまで外に存在していた闇の書は最凶だったわ。夜天の書に蒐集された全ての魔法を、はやてちゃんの絶望を鍵として煉獄の書が魔力を生成する。」

そう、それはわかっていた。
だから、エルでさえ、あれを打破する事は不可能だと考えていたのだ。

「お兄ちゃんはそんな危険な煉獄の書を呑み込み、管制人格の代わり……というよりももはや煉獄の書そのものとなってしまった。」

「!?そ、それは本当ですか?!」

フィオラがいった真実があまりに突拍子も無く、これには流石に驚愕し、声を荒げながら質問をする。

「ええ。けれど、あくまで煉獄の書を一部に持った人間…という事を忘れないでね。体は普通の人間だし、その心も……あくまで普通よ。ただ、その心と直結する機関が危険。」

「心が、煉獄の書……そのもの?」

「そういうこと。言ったでしょう?人間の心全てに作用するって。だから彼の心のしこりである私達がここに存在して、認めたくない

彼の激情が乖離した。これもさっき言ったことだけど、貴方達は撒き込まれただけなのよ。お兄ちゃんの煉獄の書の宿命に。」

「そう……ですか。」

リインフォースは取り敢えず相槌を打つが、思考が展開についていっていない事を自覚していた。

つまり、管制人格が本来受け持つ役割を、エルが感情のままに無意識にこなしているという事になってしまうのだ。

エルがもしも、全て死んでしまえ、全て無くなれば良い。なんて本気で考えてしまえば、それに作用し、煉獄の書は早々に暴走を開始する。

エルが底無しに前向きであった事と、感情と役割を完璧に割り切れる人間だったからこそ、この問題は発覚もされず、今の今まで野放しであった。

「どう、納得した?質問は他にある?」

フィオラはそう聞いてくるが、理解はしたが、納得はしていない。

そんな複雑で難解な状況。

正直、答えに困る。

「ま、あんまり時間も無いから、本題の私達の話に移るわね。……

……私達は、切り離しの完了と共に、貴女に私達の力を与えようと思ってるの。」

「え……？」

「貴女なら気付いてるでしょう？切り離しがただでは済まないって事。だから、力の使い道が無い私達がそれを補ってあげようと、ね。」

ポンと、今度は両肩を叩く手。
振り返ると、サラが満面の笑みをこちらに向けていた。

「私の魔法をあげるわ。あなたのと比べると、人間の感情が存在しなければ使えない不便な物だけど、決して無駄にはならないと思うわ。」

「私からは、強制切り離しの後でも、戦闘可能な体を。……完全な生身を作り出す事はちょっと難しいけど、闇の書からは独立して行動できるくらいのものなら作れるわ。いつまでも情報だけの存在なんて大変だろうし、どうせならばちゃんとした体を持った方がこれからの事が楽よ。……色々と、ね。」

「あの、これからって……？」

フィオラは瞳を閉じたまま悪戯な笑みを作り、
すこしリインフォースに近づき、はやてには聞こえないように呟く。

「愛したり、愛されたり、チョメチョメの営みってやつ？」
「なっ！！？なな、なにを言ってるんですか！！」

フィオラの笑みの理由と言葉の意味を悟り、顔を耳まで真っ赤に染め、慌てふためく。
その様子が可笑しかったのか、フィラオもサラも途端に笑い出す。
それを見て、リインフォースが自分がからかわれていたと言う事に気付く。

「あら、脈アリって事かな？」
「まぁ、エルが初めての男性だしねぇ～。」
「その言い方は、止めてください……。」

二人は笑い、一人は照れる。もう一人は三人を遠巻きに見つめ頭上に？マークを作る。

笑いも一段落つくと、フィオラは改めて真剣な面持ちを作り、リインフォースに語りかける。サラもまた同様だ。

「私達が貴女に力を託す理由。……それはお兄ちゃんを助けて欲しいから。別に止めろとは思ってはいないの。なんだかんだ言って、あの人のする事はいつも正しくて、最高の結果を導いてくれるから。今もそう。……本来であれば、はやてちゃんはここで死んで、貴女はまた次の主の元へと飛ばされていく筈だった。それを狂わせたのはやっぱり、お兄ちゃん。……だから助けて欲しい。目的の為に自分の命さえ省みないあの欠陥者を、死なないように助け続けて欲しい。」

フィオラは瞳を開け、ゆっくりと視線を上げて、リインフォースを見つめる。

「勿論勝手な事を言っているのはわかっている。できれば私達が自分でやりたい。けど、フィオラもサラも死んでいるのよ、彼の心の中では。明確に、はっきりと。だから、私達はここから出る事はどうしたって、できない。」

煉獄は人間の全ての心に作用する。
その特性を今ほど恨んだ事は無い。

こんなにも兄を想い、死した後にもその想いだけで存在し続ける彼女達を煉獄が否定するなんて……。

「それに、お兄ちゃんの事を真に理解できるのは、貴女だけだと私達は思っているのよ。闇の中で生まれたあなただからこそ、闇そのものとなったあの人の孤独が理解できる。」

「けれど、私は……あの人に必要とされる自信が無い。いや、あの人にこれから誰かが必要になるとしたら、主や周りの少女達の方が相応しい気がしてならない。」

「大丈夫よ。貴女が思っている以上に、お兄ちゃんは貴女に依存しているわ。嘘は言わないわよ？だって私は煉獄の書だからね。」

リインフォースは俯き、沈黙する。
なにも彼女達が嘘を言っているとか、エルが自分を拒絶していると思っているのではない。
もし、必要とされているとして、エルの隣に自分がいる事がどうも想像できないのだ。
むしろ、その隣にはやてやなのは達が居るほうが、しっくりきてしまうのだ。

だから、黙った。

「……ま、男なんだから、お兄ちゃんがリードしてあげろって事ね。さぁ、切り離しはもう完了するわ。そろそろお別れよ。」
「はやてちゃんの所に戻って。」

サラに言われ、リインフォースははやての隣に戻る。

「今は闇の書を倒すことだけに集中したらいいわ。お兄ちゃんと話し合うのはその後でも、十分よ。……行ってらっしゃい。」
「じゃあね!!はやてちゃん、リインフォース!!!」

その言葉を最後に、二人の姿は薄れていき、今度は自分達が、彼女達が纏っていた光を身に纏う。

「言ってきます。二人の願いは、忘れません。」
「…うん。」

リインフォースはそう呟き、光の中に身を埋め、光に包まれた……。

「だから、貴方は絶対に死なせません！！貴方は絶対に生きて、幸せにならなくちゃ……ならなくちゃ……！！」

彼女の目蓋に涙が溜まる。

今はただ、全力で彼の元に向かうこと。

彼を助けることも、想いを告げることも全てはその後だった。

「だから言っただろうが、俺の器だけじゃ勝てないって。」

エルは戦場を見下ろし、そう嘯く。
誰に問いかける物でもない。
しかし、デバイス達は彼の言葉に耳を傾けていた。

なのはが放ち、フェイトが切り裂き、ヴィータが打ち抜き、シグナムが貫く。
そんな全力全開のワンサイドゲームが眼下に広がっている。

「俺の戦い方は今も昔も変わらない、俺と言うハードウェアは最低品質。魔法もろくに使えない、ただ正しく人間としての機能をつき詰めただけの型遅れの高級品だ。……無理に魔法を使おうとすればオーバーフローしちまうような欠陥品。ただ、なのは達のような高性能機にも劣らない性能があるとしたら……ハードウェアを動かすソフトウェアだ。肉体では無く精神で勝利をもぎ取る。そう俺は闘ってきた。」

エルはレオハルトの穂先に、ジャンの柄を差し込む。
二つのデバイスはドッキングし、槍の刀身をジャンの刀身が担う槍が完成する。

「それが闇の書の意思には無い。そうさ、あの器であいつらと対等にやりあうには、それこそ俺の魂でもぶち込むしかないんだ。」

レオハルトを残った右腕で、闇の書に向け、柄を右脇にしっかりと挟み射出体勢に移る。

下の戦闘もそろそろ終わりが近い。

収束を開始しなければ、ベストタイミングで打ち出せなくなる。

「レオハルト……最後の一撃だ。奴にとっても、俺たちにとっても。」

『ｙｅｓ．』

「今までありがとう。……そして、俺の為に死ね。我が息子。」

『ｙｅｓ．Ｍｙ ｆａｔｈｅｒ．』

一つ、深呼吸。

深く深く息を吸い、深く深く息を吐き出す。

出し切った後、自らが倒し、乗り越えるべき宿命を見つめる。

この一撃で、……闇の書の運命を断ち切る。

「プライマリープログラム、排除。セカンダリープログラム、排除。サードリープログラム、排除。……ファイナリープログラム、起動。コード……『ノブリス・オブリージュ』」

『ａｓｔｒｉｎｇｅｎｃｙ』

最終コードの内容は、リミットブレイク。

ジェネレーター瞬間回転数制限解除と、放熱規定の削除。

つまり、次に止まった時は、すなわち死ぬとき。

高速を超えた回転をジェネレーターが生み出し、超音波の域にまで達した回転音が辺りに響き渡る。

それに伴い、周りの魔力を根こそぎ奪うかのごとく、魔力がかき集められ、ジャンの刀身を少しづつ生成していく。

「生命力変換……消化器官全て、変換。」

直後、盛大に吐血する。
もはや慣れ親しんだ感覚だ。今更気にも止めやしない。
二の腕だけになった左腕を上げ、肩口のジャケットで口を拭う。

それを代償にして手に入れた魔力全ても、この一撃に告ぎ込み、レオハルトは俺の魔力全てを、限界を超えていても余すことなく受け止める。

そして、徐々に明確な刀身を形成し、長く長く伸びていこうとする。
そして、それをせき止める魔法陣。

行き場の失った魔力は、魔法陣の上に下に押し出されていくが、それでも一つの剣を為そうとして離れない。

射出の機会まで、後僅か。
だが、まだだ。まだ足りない！！
もっと、もっと魔力を！！！

「ぐぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！」

穂先がブルブルと震える。
右腕だけではこの収束の圧力を支えきれない事はわかっていた。
脇を絞める力を更に込めるが、それでもしっかりと安定させる事は出来ず、振動と共に脇の皮肉を削っていくのがわかる。

「まだ、だぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「私が、支えます。」
「…！？」

右側から、レオハルトを支える手が現れ、俺の右手を包み込む。
俺の右手を包んだのは、リインフォースの右手。
リインフォースの左手は、俺の右脇の後ろの柄をしっかりと握っている。

「リイン、フォース……！！」
「更に私の魔力も注ぎます。……構いませんか？」

ちらり、とレオハルトを一瞥するリインフォース。
レオハルトは、限界を超えてそれでも収束を続ける事により、放熱部分が真っ赤に染まり今にも溶解をしかねない状況。
しかし、後悔はしない。
そうさせたのは、俺だ。
そう望んだのは、あいつだ。

「だが、お前が大丈夫なのか。」
「……大丈夫ですよ。魔力を注いで消えたりしません。……貴方の妹からの想いが、ありますから。」
「妹……？まぁいい。構わない、全部注いで、俺を支えてくれ！！」
「ええ……支えます、貴方を！！」

今度はしっかりと安定した姿で、敵を睨みつける。

想いは力。……とは良く言った物だ。

なのは、フェイト、はやての三人の砲撃が、闇の書のバリアを完全に破壊し、ザフィーラとクロノの魔法で、完全に拘束される。

今が、全てに片を付ける、最後のチャンス！！！

「よくやったおまえらぁ……！！ムゥゥゥン、ライトォォォォォォオオ……！！！」

レオハルトのコアの宝石に罅が入る。
それでも、収束は止まらない。発熱は止まらない。
最初から、最後まで、全力で！！！

「「ソォォォォォォォォォドオオオオオオオオオオオオオォォォォ！！！！！！！！！！」」

遂に魔法陣が二つに割れ、せき止められていた全ての魔力が飛び出す。
淡い青色の刀身は音速を超え伸び、目標の闇の書に直撃する。

やはりエルの器というべきか、一瞬刀身を掴まえ抵抗のそぶりを見せたが、掴んだ腕ごと吹き飛び、体は全てがかき消えた。

誰もがこれを砲撃魔法だと悟った。
しかし、そうではない。

その砲撃は、砲撃後も、『砲撃時の形を保って』いるのだ。

つまりこれは、巨大な巨大な、あまりに巨大な斬撃。
エルが構えた場所から、闇の書がいた場所まで伸びた剣。

それは闇の運命を断ち切る、夜天に浮かぶ月の聖剣であった。

「……」
「……」

そうして静寂がまたやってくる。

エルは静かにレオハルトから手を放す。
地面に突き刺さっているので、レオハルトはその宙に浮かぶ。

「…すごい、これほどの魔力を、これほどの質量に収束するなんて……。」

「だが、代償は決して安くはない。」

エルは、レオハルトのどんどんと罅の数を増していくコアを見つめる。

誰が見ても良くわかる、終焉。間際の時。

「ありがとう。さようなら。よくやった。……言いたい事はたくさんあるけど、これが俺達の別れだ。……眠れ、馬鹿息子。」

その言葉を聞き届けたかのように、レオハルトのコアは粉々に、それこそ砂のように砕け、月浮かぶ夜天に流れていく。
これは、レオハルトの事実上の死。

もう、戻ってこない。八年もの間、相棒でありは続けた息子は、ここで消えた。

また、この生地ナインに、悲しい記憶が堆積した。
だが、この記憶は新しい希望の記憶でもある。
ならば俺は……。

「悲しい記憶なんかに、しねぇよ。」

グラリ、体が揺れる。
レオハルトが失われた事による足場の消失。

はっ、レオハルトもいねぇ、魔法は使えない俺には何もできないよ。

そのまま落下していくかと思われたが、

「言ったでしょう？貴方を、支えますと。」

リインフォースが俺を抱きかかえてくれた。

そうか、それで落下の心配は無くなったか……だが、

「眠い、疲れた。もう休ませてくれ。」

「ええ、ゆっくりと眠ってください。」

俺の我侭を飛びきりの笑顔で受け入れてくれるものだから、俺の眠気は更に増してくる。

だが、眠気に身を任す前に、最後に、言わなきゃいけない事がある。

リインフォースの頬に手を伸ばし、その存在を確かめる。

俺が救いたかった、少女。それは俺の目の前に、ちゃんと在る。消えたりなんかしちゃいない。

「お前の決意……ちゃんと聞くよ。だから、先に待ってる。

俺たちだけのいつもの場所で……な。」

「はい……はい！！！」

もう何も言い残す事は無いはずだ。

俺は目蓋を瞑り、意識を手放す。

最後の視界には、リインフォースが涙を流していた気がした。

何の涙かなんて知らないけど、俺のための涙だったら最高だ、なんて考えた……。

四十一話　月空は宿命を断つ　（後書き）

今更ですけど、水城奈々さん、二度目の紅白ご出場おめでとうございます。

フェイト「ご丁寧にどうもありがとうございます。」

エル「これからも、ご活躍を期待しています。キリッ」

四十二話　夜天、終焉を告げる（前書き）

次回はクリスマスに投稿できたらいいなぁ。
時期的にもぴったりだしね。

四十二話　夜天、終焉を告げる

「俺の……家、か？」

薄ぼんやりと浮かんできた感覚。
それに手繰り寄せられるように、俺は意識を覚醒させる。
その覚醒は今までと感じてきた物と酷似しているが、今回は状況が少し……いや、かなり違う。

視界に広がるのは、今までのような底無しの闇ではない。
むしろそれとはかけ離れた、陽が照るうららかな平穏の風景。

これは、俺の記憶の中から消えかけるほどに磨耗した、幼児の記憶だ。
ナインが『無人の世界』になる前の……。

ミッドチルダでも見られるような一般家庭の居間、キッチン、中庭。
どれもこれも、俺の記憶の奥隅の懐古の念をくすぐる。

あの時は、果たして幾つのときだったか……。

「そう、六歳にも満たない時だったはずだ。」

俺は居間を通り、中庭に出る。

中庭はそう大きくなく、控えめな植木が控えめに並べられている程

度の物。
しかし、その全てが丁寧に手入れされていて、豪華ではないが美しかった。

「はてさて、どうしてこんな所に俺は来てしまったのか。」
「あなたが、ナインで生まれたからではないですか。」

草が擦れ、静かに地面を踏みしめる音。それはやはり背後から。

「いっつも背後から現るよな。」
「それは貴方もです。」

俺たちは向かい合う。
ただ見つめあうこと数秒、この二人の静かな空間を堪能した後、話しかける。

「さぁ、これでお前も、ヴォルケンリッター達も自由になった。なってしまった。……これから主を食い潰すこともないし、裏切られる事も無い。真に一人の人間として誕生した。……これからどうしたい？」

問いかけるように見つめると、リインフォースはくるりと方向を変え、俺に背を向ける。

「……闇の書の防衛プログラムは、確かに消えました。」
「うん。」

「確かに、これで騎士達は自由だ。主はやての元で静かに暮らす事だって、出来る。」
「……あぁ。」
彼女の声に影が差す。
「ただ、私は防衛プログラムを司る管制人格。……あなたと触れ合いすぎて、その事のその意味を、私は忘れていた。」
「……。」
「私が存在していては、矛盾が生じる。現に今もそれは発生し続けている。」
「その矛盾が、いつか次の防衛プログラムを生み出してしまうかもしれないと？」
「……はい。……だから、私は。」
彼女がどうしようとしているのか、そう気付いたころには俺の拳は強く握られていた。
無性に腹が立った。
「……私は、本当に感謝しています。貴方に、はやてに。私達のような者達に、人としての幸せを授けてくれたことを。貴方との語らいも、貴方が普段騎士達と交わしていた日常を思い出すだけで、こんなにも心が暖かくなる。……ただ、私はもう十分です。」
その最後の一言に、ぷつりと来た。
「私は元よりあのまま防衛プログラムと消えるべきだったのです。だから、私も消えて、せめて騎士達が幸せに主と共に在り続けられるように……。」

「は～、は～。」

右手で拳を作り、口元に持ってきて、息を吐きかける。

……要は拳を暖めているのだ。

「未練が無いと言えば嘘になります。けど、後悔は、しません。……私は世界で一番幸せな魔導書でしたから……。」

「ちょっとこっち向いて、歯ぁ喰いしばれ。」

「え？」

言うか速いか、彼女が疑問に思い振り返ってきた頬目掛けて、殴った。

結構本気で。

殴られた衝撃でリインフォースは後ろに仰け反り、地面に尻餅をつく。

女性に手を上げたとか、殴らなくてもいいじゃないかとか、そんなことはもう今はどうでもいい。

それぐらいに腹が立った。

拳一発じゃ全然足りない。

「今までみんながここまで闘ってきたのはな。別にはやての為だけじゃ、ねぇんだよ！！特に俺はな。俺ははやてを護りたくて、お前を孤独から救いたくてこれまで何でもしてきたんだよ。はぁ？それ

をわざわざ無駄にするのかい?!誰も望んでないお前の自己犠牲の結果のために?ふざけんなよ、だったら俺の左腕も返してくれよ!!!」

尻餅をつくリインフォースに詰め寄り、殴られていないほうの左頬に、肘から無くなった左腕をグリグリと押し付ける。

「だって、私が消えなければ皆をまた危険に晒してしまうかも知れない!!」

「うるせぇよ、人の顔見て話さない奴の言葉なんて信用しねぇ。」

更に左腕を押し付ける力を強くして話を続ける。

「お前はな、てか闇の書はな、これまで多くの人の命を奪ってきてんだよ。それに今回は、はやて達をあんなに苦しませて、挙句には俺の左手は無くなるし、レオハルトは死んだ。……もう取り返しなんてつかねぇんだよ。」

「……。」

「それを背負うのを怖がって、消えて逃げようなんざぁ許せない。それが何より許せない。結局、逃げて遺された人を悲しませるだけじゃねぇか。……とんだ遺し物だよなぁ!!お前は遺される事、遺す事の意味をわかってない!!わかってねぇよ!!俺は自分の始末を自分でつけない奴が一番嫌いなんだよ。色々理由つけてなんとか逃げようとして馬鹿じゃねーの?てか馬鹿だろ。」

言いたい事を言いたいように吐き出す。

レオハルトを犠牲は決して安くない。俺の左腕だって決して安くな

い。
それを無駄にしようとしやがって……！！

「生きろ！！生きて償え！！！ゴミの様に生きて、少しでも犠牲にした人のために生きてみろ！！！それができないなら、俺の左手治して、レオハルト蘇らせて、死ね！！さっさと死ね！！」

ありったけの暴言を吐き出して、俺は沈黙する。
レオハルトを蘇らせることも、俺の生身の左腕を元通りにする事も、どちらも実現不可能なことだ。それをわかっていて俺はそれを彼女に言い放つ。
リインフォースは俯き、苦しんでいるように顔を歪めている。
はっ、今更苦しんだって遅いんだよ。

……そう、言いたいんだけどな。

俺は左手を押し付けるのを止め、立ち上がる。

「もし、それすらできないようならな。……俺の傍にいろ、俺が失った左手になれ。そうしたらお前の罪も全部背負って、一緒に償ってやるよ。」

「……え？」

顔をあげたその表情は涙でグシャグシャになっていた。
まるでなきじゃくる直前の子供のようだ。

……はぁ、やっぱり俺は最後まで悪役を演じ切れない男だよなぁ。

「償うのが、生きるのが怖いなら、俺が一緒にいるさ。今までずっと独りだったんだ。これからそれを取り返すくらい……俺が傍にいるさ。」

途中で気持ちが切れたのか、自分が言っている言葉が急に恥ずかしくなった。

まるで愛の告白のような台詞が恥ずかしくて、顔を逸らしながら、そう言い放つ。……最後は羞恥心からか大分小さな声だった。

「……ふっ、私も、人の顔を見て話さない人の言葉なんて……信用しません。」

「……むぅ……。」

リインフォースは溢れる涙を払いながら、俺がさっき言った言葉をそのまま返してくる。

……悔しいが言い返せない。

「けど……信じます。貴方の言葉は信用できなくても、あなたと言う個人は、信頼できますから。」

「そりゃ、どーも。」

「……ありがとうございます。」

恥ずかしくて顔を逸らしていると、後ろから抱きしめられた。

抱きしめると言うよりも、寄り添うと言ったほうが正しいか……

…。

くそ、恥ずかしい。

「生きるのが、怖かった。全部貴方の言うとおりです。自分の今までの罪を背負っていく勇気が持てなかったから、こんな考えに至ってしまった。……私の本当の気持ちは、主と、騎士達と、あなたと一緒に……生きたい。」

「なら、その気持ちに素直になればいい。誰もお前の事なんか責めねーよ。いや、俺が責めさせない。俺がどんな手を使っても、責めさせない。」

「……貴方がそうだから、私達も苦しむのです。」

俺の腰を包む腕の力が、少し強くなる。

「貴方はいつもそうだ。自分をいつもないがしろにして、自分の事はいつも後回し。……過去にどんなことがあったかなんて、聞きません。けれど、その過去をいつまでも引きずって、今得られる幸せを捨てるなんて、貴方こそわかっていない。……貴方の幸せを望む人達の気持ちが……。」

「リインフォース……？」

「だから……約束してください！！私に生きろと言うのなら、自分は幸せになると！！過去を捨てて、悲しい記憶を開放してあげると！！！」

記憶の開放。……それは何を指し、どれを指すのか。
それはきっと俺では知り得ない事柄で、彼女こそが知り得た物なのかもしれない。
だから、俺は自分の思いを打ち明けるしか方法がない。

「……よくわからない部分もあるけど、リインフォース？俺は今、お前が思ってる以上に幸せだぞ？」

「その理由を、教えてください。」

「はやても、リインフォースも、消えてしまう運命だった。俺はそれをどんな形であれ阻止して、はやて達に俺が成した事を遺す事が出来たんだ。……例え俺がここで死んでしまっても、俺がここに存在して精一杯生きていたと言う事実は、はやて達によって証明されるんだ。誰かに何かを遺せる。これよりすばらしい事って、そうそうないんだぜ？」

青空を仰ぐ。
そう言えば、空をこんなにもじっくり眺めた事は、そうなかった気がする。
そんな事をする暇も余裕もなかったし、なにより無益だった。

だが、今の俺はそんな無益な事に時間をかける事も、そう悪くないことだと感じている。

「……フィオラは何も遺さなかったし、俺も何も遺してやれなかったからな。だから、どうしても俺が存在した形を遺したかった。……そう思えば、今までの人生、何か遺す物を探し続けてきた人生だったのかもしれない。」

目的を達成した途端、人間と言う物は余裕と虚しさが生まれてしまう生き物だ。

だから、この青空を仰ぐことを止めはしないし、それを愛しくさえ思っている。

今まで感じた事のない、怠慢な心境。

「それに、俺は過去を引きずってやいないさ。捨てる事なんて出来るわけがない。今までの過去を重ね続けてきたからこそ、今の俺がいるんだから。ただ、忘れるのがこの上なく嫌なだけだ。何も遺せなかった彼女達を、俺が忘れたら誰が覚えててあげられるんだ。」

「エル……。」

リインフォースは俺に寄り添ったまま、顔を少し伏せこちらの様子を窺う。

俺は笑顔で応え、頭に掌を乗せる。

「こっから俺の傲慢だけどな……俺の青春にあんだけ闇とトラウマと修羅場を残してくれたくせに、やすやすと俺の中から消えて貰っちゃ困るんだよ。せめて、俺をこんなに壊した責任で、いつまでも見守っていて欲しい。いや、見守るべきなんだよ。いくら妹と

は言え自分勝手すぎる。」

「確かに、自分勝手ですね。貴方も、彼女も。……けれど、どちらも、強い。なにより心が。」

「そうかな？」

「そうですよ。」

お互い目を合わせることなく会話を続ける。が、俺はリインフォースとの繋がりを今、確かに感じていた。
それはきっと向こうも同じ。
心を通わせる……とは少し違っても、お互いの気持ちを知り合うことは出来たと思って……。

「だから、今更この生き方は変えられないし、変える気もない。大丈夫さ……確かに今まで言われ続けてきたように、俺の生き方は歪なのかもしれない、けど遺す事は出来たんだ、いつ死んだってもはや後悔はない、さ。」

「本当ですか？」

確かめるようにこちらを覗き込む眼。
ここに来て初めて二人の眼が合う。
彼女の眼は、未だ少し涙によって赤く張れていた。

「いや、後悔はあっても未練は、あるな。今、気付いたことだけど。」
「それは？」
「うん……俺はお前を泣かせてばっかりだな、と思ってな。だから、お前を笑顔に、したい。」
けど、それは俺でなくても出来る事。
はやてでも、ヴォルケンズでも、これから出会うかもしれない新しい家族であっても。
だから、後悔では無く、未練。
自分で彼女に笑顔を与えられなかったと言う、未練。
だが、生憎と俺はまだ死んじゃいない。
だから、後悔も未練も不要だ。
俺には、まだまだ『これから』が在るらしい。
「……さぁ、帰ろう。もはや俺もお前も、ここには相応しくない『人間』になったんだ。これからの事はこれから出会う場所で語り合えばいい。……ほら。」
俺は手をリインフォースに差し出す。
彼女はおれの手を見つめた後、微笑と共にしっかりと握り返してくる。
「初めてです。これからの事をこんなにも楽しく思うのは……。」

「それが人生さ。何が起こるかわからない。不安もそりゃあるさ。けれど、漠然と自分が幸せになれる機会が転がっているのがわかるから、楽しく思えるんだ。」
「今なら、その言葉の意味が、わかります。」

俺たちは初めて、一緒にこの世界から飛び出す。
それは俺と彼女の闇からの脱却を意味する。
迫力のスタートを切った。
最高だと君が笑った。

……今は、それでいいさ。

それとまさに同時刻。
欠陥者の中の闇で語らう影が二つ。

「どう、振り出しに戻っちゃったんじゃない？」
「フフ……いいじゃない。」

自らの目的をリインフォースに託したが、その目的は結局達成されず、彼女達はエルが宣言した通りに、この闇に存在し続けることだろう。

しかし、それでもフィオラの顔は嘘偽りの無い笑顔のまま、どこまでも広がる闇を見つめる。

「私達がここに存在する理由。それがわかっただけでも十分な成果。……いや、私達にとっては最後の結果ね。だから、お兄ちゃんの言う通りにお兄ちゃんのこれからを見守って行こうかしら。」

「本当に……いいの？」

「構わないわ。私は丁度、お兄ちゃんがこれから見られなくなるのが寂しく思っていた所なの。……それってつまり、この生活にある程度は満足してるって事じゃない？」

「さぁ？けど、私はフィオラが良いなら、良いよ。私はいつまでもフィオラの傍にいる。」

「ありがとう、サラ。……お兄ちゃん、私達の事は良いから、とにかくリインフォースの責任を取ってあげてよね。彼女を幸せに出来るのは、貴方だけなんだから……。」

その言葉は、直接には届かない。

当たり前だ。それはエルの記憶が勝手に呟いた言葉だから。

だが、煉獄の書は人間の全ての心に作用する。

記憶と言えども、兄を想い、必死に闇で闘い続けた人間の心。

彼女の言葉は、煉獄の書を通し、エルに必ず届く。

別に意図してそうなったわけではない。だがしかし、
それが煉獄の書がこれまでの歴史の中で行った、唯一のプレゼント
になった……。

目覚めて最初に見た物は、白い天井。

テンプレ通りの病院での目覚めともいえる。

まぁ、こうなる事は予想していたから、別にパニックに陥る事も無
く、身を起こす。

「いでででででっ……！」

右腕が、右足が、左足が、腹が、というか体のほとんどから激痛が
走る。

痛みを感じなかったのは、軽い怪我が死に繋がる故に最後まで守り
続けた頭部と、もはや痛覚そのまま腕ごと捨てた左腕だけだった。

さらに、下半身に深刻な重みを感じる。

これは重症……か。

「すぅ……すぅ、お兄ちゃん……。」
「……すぅ。」
「なんだ……お前らか。」
かと思ったら、俺の足に倒れこみ寝息を立てる二人が。
はやてとリインフォース。
丁度いい感じに俺の右足左足両方を、枕のように使ってくれている。
「本当は貴方が目覚めるまでは、外出禁止、監視ありの謹慎の筈なんですけどね……。」
そういって病室に入ってきたのはリンディさんだった。
「俺はどれくらい眠っていましたか？」
「そう慌てずに。まだ二日も経っていません。一日と半日……といった所でしょうか。」
「そうですか……俺が目覚めたという事は。」
「はい、これから彼女達を交えての事件の処理。更には当事者達への裁判ですね。……その他にも色々と事件の事について、やらなければいけない事があります。」
それは、きっと反発してくるだろう闇の書事件の被害者の遺族への

説明であったり、この機会に闇の書を手に入れようとする下衆の奴らの後始末であったり……。
あ、そうだ。脅迫したあの老人達への説明もあったな。
軍法会議物にならなきゃいいが……。

「問題は山積み……ですか。こうしちゃいられませんね。」
「いけません。」

実際、こうしてはいられない。
他にする事は山積みなのだ。
それに向かうために、取り敢えず邪魔な点滴を外そうとしたところ、リンディさんに手で制されて、結構な眼力で睨まれた。

結構、怖い……。

「今回の事件で、一番の重症者は貴方ですよ。無理をしすぎです。何の犠牲かは知りませんが、貴方の左腕は綺麗に失われているし、消化器官の損傷が特に酷い。エル執務官、貴方はしばらくまともな病人食さえ食べられない。」

「げ、マジですか。」

毎日の生活に潤いをもたらしてくれる食事が摂れないというのは、深刻だ。
くそっ、変換の代償か……忌々しい。

「けれど、貴方が無事で本当に良かった……。」

「え？」

リンディさんは俺の隣まで来て、俺の頭を包み込む。
彼女が立っていて、俺がベッドに座っているから、当然と言えば当然の形だ。
まぁ、そうなれば当然胸で俺の頭を包み込む事になるわけで……。
……。

あれ？なんだこの展開。聞いてない。

「エル執務官……いや、エル。貴方がここまで傷ついた戦場で、クロノを含めて子供達の命の護りきってくれた事、本当に感謝しています。」

「いや、なにも護ってばかりじゃ、ありませんでしたから。」

変質者に変装しての、暴力。
そう。俺はただ結果的にあいつらを護ったってだけで、それに至る過程は傷つけてしかいない。

だから、その感謝を受け取るわけには、いかなかった。

ただ、その押し付けられる胸の感触は受け取ろう。

「だから、貴方はここでしっかりと、休んでいてください。彼女達

の弁護や、遺族への説明は私達が説明をもって引き受けますから。」

「いや、それ以外は任せても、それだけは任せるわけにはいきません。弁護にしたって現場にいて、一番状況を知っているのは俺ですし、遺族への説明だってそう一筋縄にはいきません。」

「しかし……。」

「ふふふ、安心してください。大抵の仕事は言われずとも任せざるを得ませんから。ただ、その時俺を使ってくれれば更に上手く流れを持ってこられるでしょう。……裁判にしろ、遺族にしろ、人間が相手の以上、これの使い道はありますから……。」

ポンポンと右腕で、左腕の二の腕を叩く。
その意味するところを知り、リンディさんは呆れたような表情を作り出す。

「貴方は……合理的と言うか、ただでは起きないと言うか……。」
「駄目ですか？」
「いいえ、私の負けです。裁判も後始末も、貴方を頼りにしますからね？」
「喜んで。」

「ただ……ひとつ条件があります。」

「はい？」

「もう一度、抱きしめても良いですか？」

「ぶっ！！」

俺はちらりと、俺の足に突っ伏す二人を一瞥する。
二人は規則正しい寝息を立てているが、こんなに近いのだ。いつ起きてもおかしくない。

もし抱きしめられてる様子を見られたら、なんか色々俺が終わる。
理性的にも、倫理的にも。

「いや、あの……今は、ちょっと……。」
「……ダメなんですか？」
「もちろん良いですとも。」

悲しそうな表情で確かめの一言。
たった一言。されど一言。

グッバイ倫理。カモン本能。

誰もエルを非難できない。
彼は二十歳のバリバリ青春まっしぐらなのだから。

むしろ、抱きしめられたままで理性を保ち続けた事を賞賛すべきなのだ。

リンディさんはその後持ち場に帰り、また俺と眠りの二人が残される。

俺は窓から空を眺める。
時刻は朝九時を回ろうとしている。

太陽は確実に真上へと昇り始め、それに伴い、暖かでまぶしい光が部屋を照らす。

毎日、同じようにこの光を浴びてきたと言うのに、今日の日光はいつもよりも美しく輝いているように感じる。

いや、きっとそれは気のせい。

ただ、それを眺める俺の気持ちに変化が現れただけ。

そうか、退屈だと感じる毎日は、気持ちが変わるだけで、こんなにも美しく変貌を遂げるのか。

「ほら、起きろ。」

俺は未だ眠る二人をゆすって起こす。
いい加減これでは俺が起きられないし、この美しい朝日に気付いて欲しかったから。

それと同時にコンコンと部屋をノックする音。

「ど～ぞ。」
「失礼するぞ。」

シグナムの凛々しい一言と共に、病室に入ってくるヴォルケンズ。
手にはそれぞれに花やら果物など、見舞いの品。

「ん……朝ぁ？」
「寝てしまいました……。」

それぞれに眠気と共に呟きながら身を起こす、はやてとリインフォース。

俺が護りたかった人。
俺が救いたかった人。
俺が保ち続けたかったこの平穏の日々。

犠牲になるはずだった、俺自身。

全員がここにいる。

全員が笑い合える。

誰一人欠けることなく、これからの未来に期待を持って向き合える。

ここまで来る代償は安くはなかったし、これからの事を考えると眉根に皺が生まれるばかり。

前途多難、だな。

だけど、後悔なんてしていないし、むしろ充実している。
今のこの世界は、俺にとても優しく、希望に満ち溢れている。

今は目の前の幸せを噛み締める。それがいいさ。

「みんな……ただいま。そんで、『これから』もよろしく。」

「はは……は……結局、俺は否定されたままさ。」

闇の中で蠢く、獣。
乾いた笑いを溢し、生気のない目で闇の中を見回す。
何も見つかるはずがない。……のだが。

「あ？」

闇の中でも、更に黒い輝きを放つ光が三つ浮かび上がり、闇の中をさまよう。
獣は体を使うのが酷く億劫なのか、腕だけで這いずるように近づいていく。

そして、その闇の塊は獣を認識すると同時に、彼の周りを漂い始める。
まるで仲間を見つけ、はしゃぐように。

「……そうか。お前達も、俺とおんなじか……。
ははっ、お互い不憫だよな……。」

獣が手を差し出すと、光が手に集まる。

「そうだな、悲しいよな、悔しいよな。……認めて、欲しいよな。」

獣は愛しそうに手のひらの光達を見つめる。
その視線に今までのような狂気はなく、同情と憂いを帯びた、優し

い表情だった。

「寂しいなら、俺が傍にいてやるよ。俺がお前達を認めてやる。」

その言葉と共に、闇の光は何かを形成し始める。
獣はその様子を今までと変わらぬ様子で見つめ続ける。

「そうか、その姿をするか。……いや、むしろぴったりだよ。
ならば、俺はお前達の……――――――――――。」

エルの活躍により、闇の書の事件は永遠の終焉を告げる。
これから闇の書の事件が起きる事はないのだろう。

そう、『闇の書』についてのみは……。

四十三話　聖夜（前書き）

なんかこれっぽっちもクリスマスの実感がない。
うん、非リア充の特徴だよね。

四十三話　聖夜

「ジングルベ～ル、ジングルベ～ル、鈴が鳴る～。」
「そんなに跳ねたら転んじゃうよ、なのは。」
「ごめんね、フェイトちゃん。でも、パーティーが楽しみで。」
「うん、私も一緒。」

私は今、フェイトちゃんと一緒に買い物の帰り道を歩いている。
今日は十二月二十四日。世間一般にクリスマスイヴと言われる日。

そう、あの闇の書事件からはもう二週間が経とうとしていた。

まだ、はやてちゃん達は完全に自由になった訳ではないけれど、リンディさんやエルさんの尽力で、裁判までは監視付きという条件で地球で生活ができるようになった。

でも、その監視役がエルさんだから、あんまり生活に変わりはなかったりするの。

そして今日は、はやてちゃん達やアリサとすずかちゃんも含めた、知り合いみんなではやてちゃんの家でクリスマスパーティーをしようって事になって、今はその持ち寄る物を買って、はやてちゃんの家に向かっているところ。

うぅ…、なんだかんだで忙しくて、事件が解決してからエルさんに会うの今日が初めてだよぅ……。

「やっぱり、なのはもエルさんに会いたい？」
「うん！！ってべ、別にエルさんだけじゃないからね！？はやてちゃんにも勿論会いたいし……、『も』って？」
「ふふっ、やっぱりなのは、わかりやすい。」
「む～っ！」
「うん、私もエルさんに会いたいよ。だから、今は落ち着いて安全に気をつけて帰ろう？」
「そうだね！！」

彼女二人の帰路の途中、エルの話題が尽きる事はなかった。

「ク～リスマスが今年もやってくる～♪さぁ、パジャマを脱いだら出かけよう～♪」
「はやて、飾りつけ、こんな感じで良いか？」
「おっ、ええやんええやん！！ヴィータ結構飾りつけうまいやん。」
「そ、そうか？」
「テーブルの増築の方も終わったぞ。あと皿を用意するだけだ。」
「むぅ、他に仕事はあるか？」

「いや、もう大丈夫や。あとはうちの方が料理を作り終えるだけや！！」
「ふふっ、おいしそうですね。」
「せやろ～？うちが腕によりをかけたんやから当然や！！」

一方、八神家でも着々とパーティーの準備が完了しつつあった。
みんなが笑顔で。
暗い表情で作業する者など、一人も居ない。

「はやくみんな、来ませんかねぇ？」

シャマルはカーテンを開け、粉雪舞う冬空を眺める。

「そうだなぁ。」
「……む？リインフォースは？」
「あれ？エルさんを呼びに言ったんやなかったの？」
「え？エル、今日来れんのか？病人なのに。」
「む？今日来れるかどうかを、リインフォースが聞きに言ったんじゃ……？」

「「え？あれ？」」

どうやら準備に追われ、二人の人物の動向が掴めていなかったようだ……。

全員が初めての経験のクリスマス。
故に、これはしょうがないとも、言えなくも……ない？

多分。

「きっと君はこない～、独りきりのクリスマスイヴ……サイレンナ～イ、うぅ～イェイ、ホ～リ～ナァイ～♪」

ミッドチルダの病室で、独り歌う俺。
なんてたって今日は地球ではクリスマス。
気分が昂ぶらないわけがない。

「……でも、この歌は歌うべきじゃなかったな。なんかリアルだ。」

どうせ俺一人だよチクショウ！！
誰も来ないサイレントナイトだよ馬鹿ヤロウ。

「エル、失礼しますね。」
「女神キタコレ！！！」

控えめなノックと共に入室してくるリインフォースが、まるで女神に見えた。

「め、女神……？」
「いや、なんでもない。一人が寂しかっただけだから。」

リインフォースに一応誤魔化しを入れ、元々行っていたベッド上の作業に戻る。

「また……義手作りですか？」

「あぁ、んだよ。だって左手ないとゲームできないもん。」

実は入院してから、「ゲーム一日中できるぜヒャッハー！！」と思っていた時期が僕にもありました。

まぁ、直ぐに左手がない事に気付いて絶望したんだけどね。

だから、ゲームするためにも義手が欲しかった。

……あくまでゲームするためだよ？

「この環境でよくそれほどの物が作れましたね。」

「う～ん、必要な物は適宜クロノとかに持ってきて貰ってるし。だけどちゃんとした設備がないから、そこらの趣味の範疇のレベルに留まっちまったけどな。」

この義手は、失った箇所に嵌めて、あくまで魔力遠隔操作型のリハビリ程度の代物だ。

腕の神経とつなげて完全に動きをトレースする精密義手とは、格が違う。無論悪い意味で。

「よっと、……うん。まぁ、悪くはない……かな？」

腕に嵌め、一通りの動きを試行する。

手を広げ、握り、振るい、手首を返す。
どの動きも、ある程度は人間らしい自然な動作をしてくれたが、いかんせん駆動音は無くせない。
俺が腕を動かすたびに、キュイキュイという人間には似つかわしくない音が、病室に響く。

「やっぱりまだ皆の前で使えるほどの代物ではないなぁ……。機械丸出しだし。……で、今日は何用で？」
「今日はわたし達の家でクリスマスパーティーを、するのは知ってましたか？」
「いいや、全然。」
思いっきり、初耳。

「あれ？はやてが知らせているはずじゃ……あれ？将が……？」
「え？なにこの疎外感。半端ないんですけど。」

なんかみんな、他人が俺に連絡してたと思って自分で連絡しなかった感じですか？
俺、いてもいなくても良いような幽霊部員な扱いジャン。
それは忘れるよりも酷いぞ。
……泣いてもいいかな？

「い、いや、別に貴方の事を蔑ろにしていた訳ではありませんよ？！みんながそうです。
ただ、クリスマスというのを過ごすのが皆、初めてで……。」
「あ～。」

そういうことか。

そうだよな。今までずっと、闘争の中に身を置いてきたみんなだもんな。
そりゃ無我夢中にもなるさ。
はやてだって、あんな大勢でクリスマスを過ごすのは初めてのはずだ。

「……すみません。」
「いやいや、気にしてないよ。けど、悪いな。見ての通り絶対安静の病人でね。……それに、行ったところで何も食べられないしな。」

俺の消化器官の、変換代償は治っていない。いや、これから先治る事があるのだろうか。
とにかくそんな状況だ。

「……ごめんなさい。」
「何を謝ってるんだ？」
「え？」
「何に謝ってるの？」
「何って……。」

わかってるさ。
彼女が、俺の何に負い目を感じ、謝っているのかぐらい。

だけど、その謝罪を受け取れば、つまりは彼女の負い目を認める事になってしまう。

違うんだ。誰も悪くない。俺が勝手にしたことだ。
お前が気に病む必要なんて……無い。
それを暗に伝えたかった。

「謝ってばかりだと、人生もそれ相応になっちまうぞ?笑ってこう、笑って。」
「笑う……。」
「ほら、こうだよ、こう。」
自分の頬を、早速義手も使って、両手で引き上げる。
「こ、こうですか?」
「違う、もっと引っ張れ。」
「……こう?」
「だーもう!!俺が引っ張ってける。」
リインフォースの頬を人差し指で押し上げる。
頬が押しあがる事で、唇が自然と笑みの形を作る。
ほっぺた、超柔らかい……。
「いはいれふ」
「ほ~ら、笑顔なら十倍は可愛いってのに、勿体ない。」
「か、かわいいれふか?」
「うん、可愛いよ。」
なんかリインフォースの時が止まった。
わからんけど、とりあえずほっぺたをグリグリ回してみた。
やべ、めっちゃやわらかい。
「知ってたか?ほっぺが柔らかい奴って、ド変態なんだぜ?」
「わ、わらひはへんらいれはないれふ!!」

「うん、何言ってるかわかんない。」

これでは会話がグダグダになってしまうので、とりあえず頬っぺたから指を離す。

「では、貴方の頬も触らせてください。」

「おおいいぞ。俺は変態じゃないからきっと柔らかく無いぞ。」

「では……。」

リインフォースは自分の頬を何度か触り、感触を確かめた後、改めて俺の頬に触れてくる。

「えぇ?!」

「んふ?」

「私より……何倍も柔らかいですよ?」

「嘘だろ!!」

俺とリインフォースの頬をどちらも掴み、同時に触って確かめる。

「あ、本当だ……。」

確かに俺の頬は、異常なまでに柔らかかった……。

ド変態かぁ……やっぱりあの変装が拙かったかなぁ。

仮面だし……。

いや、でもそれはあの時はしょうがなかったし。別に好きでしたわけじゃ……。

「ってなんで話がここまで脱線したし!!!」

「そ、それもそうですね。」

とりあえずお互い身を離す。
え～と、どこまで話を戻せばいいんだっけ……？

「あ、だからさ、パーティーはリインフォースも含めてみんなで思いっきり楽しみな。俺はこれを完成させたいし、大丈夫。」
「……そうですか、わかりました。では、その様にはやてには連絡しておきますね。」
「うん、そうしてくれ。」
「では……。」

リインフォースは俺のとなりにイスを移動させ、眼を瞑る。

きっと念話でもしているのだろう。
便利だな。さすが融合型デバイス。俺はレオハルトがいないと何もできやしない。

「連絡、終わりましたよ。」
「ん、さよか。」

俺は左腕から義手を外すと、また作業に戻る。
まだまだ改善するべき所はたくさんあるんだ、これで完成なんて言っていられない。

様々な工具を工具箱から次々と入れ替え、作業を進める。

その様子をただじっと見つめ続けるリインフォース。

「何してるん。早く帰らないとパーティーに間に合わないぞ。」

「えぇ、帰る気がありませんから。」
「おいおい……初めてのクリスマスなんだろ？こんな怪我人に付き合わずに、大事にするべきだと思うがな。」
「ふふっ、私にとっては、貴方はそれほどに大事な人ですから。クリスマスはまた来年も来ます。けれど今の貴方との時間は、今しか存在しない。」

それに、とリインフォースは付け足す。

「傍にいてくれるのでしょう？」
「……それを言うのは卑怯だろう……。」

一気に脱力して、作業する手が止まる。
なにも言い返せないし、どうしようもない。

「……好きにしろ。ただ、ここは料理も出ないしケーキもでないからな。話し相手ぐらいなら、なってやるけど。」
「ありがとうございます。」

嬉しそうに微笑む。
それはそれは嬉しそうに微笑むものだから、俺もなんだか嬉しくなって頬が緩んでしまう。

もう、何かしら魔法をかけられたに違いない。
そうでなければ納得がいかん！！

ま、どんな魔法にかけられたかなんて、わかりきってるけどな……

……。

「私は今……幸せです。」
「そうかぁ？」

わかっている、認めよう。
俺はもはや、彼女を救いたいという願望を超えた感情を生み出しつつある。

それがどんな感情になるのかはわからないが。

俺は今、彼女に惹かれている……。

こうしてそれぞれの聖夜は更けていく。
それぞれの幸福を生み出して……。

「「エルさん、パーティーに来ないのぉ～！！？」」

二人、不遇な少女達もいたが……。

四十四話　夢か現か、それとも未来か（前書き）

今回はちょっとグロあり。

いや、みんな頑張って読んでね。

四十四話　夢か現か、それとも未来か

「ふふっもう眠ってしまったんですね。」

ベッドには、義手を握ったまま、項垂れて眠りに落ちるエル。
日付はまだクリスマスを越して居ない。

思っていた以上に、義手を作る事に専念していたという事の表れだろうか……。

「ゆっくり、眠ってください。私は、傍にいますから。」

リインフォースはエルを起こさないようにベッドに横たわらせる。

エルは何の反応もせず、熟睡し続けていた……。

夢を……みた。
いや、夢？現実であろうか……。
それとも……未来？

『エルンスト中将、お疲れ様です。』
「中将はやめろ。俺は執務官だ。」

いつからだろう。
管理局、いや、この世界が憎いと思い始めたのは。

「大人しく逃亡を止め、投降しろ。さもなくば実力行使で、制止する。」
「ははっ！！出来るもんならやってみな！！！知ってるんだぜ、管理局では人は殺せないってなぁ！！！」
「少し、その汚い口を閉じろ。」
「えっ、がぁぁぁぁぁぁ！！！！」
デバイスで両足を切り落とし、宣言どおり実力で制止させる。

「警告はしたし、ここで止めなければ余計に被害が広がるだけだしな。」
「い、いてぇぇぇぇぇぇえええ！！！！あ、足がぁぁぁぁぁ！！！」
「ふむふむ、お前の過去を調べさせて貰ったが……犯罪まみれの人生だな。なまじ魔法の才能があったせいで、罪を免れたり、罪が軽減されたり……腐ってるな、お前も、管理局も。」
「や、や、やりすぎだろぉぉぉぉ！！！この人殺しぃ！！！」
「はぁ……反省の色無し。……ここで死ねよ、お前。」
「……え？」

いつからだろう。
人を殺すのがこんなにも楽しいと気付いたのは。
絶望を与えるこの快感。管理局の豚どもにも味あわせてやりたい。
そうだろう？……フィオラ？
人の首を刎ねた俺の顔は、たまらなく笑顔だった。

世の中は腐っている。
出世と自信の保身にしか興味のない豚。
仲間となかよしこよしで、なんでも乗り切れると思っている雌豚共。
その全てが、俺をイラつかせる。
俺が受けた屈辱。
フィオラが受けた絶望。
何一つ報われない世界。
ああ、胸糞悪い。
そうだ、すべて壊してしまえ。
殺して……しまえ。

「ほれほれ、逃げろ逃げろ。」
「ひぃ！！」
目の前にはバタバタと地面をのた打ち回る、不完全な肉体。
魔法により、体のいたる所を失っている。
満足に逃げる事も出来ず、地面を跳ねるその姿は、まるで釣り上げ

られた魚を連想させる。

「た、助けてくれぇ！！！」
「助けてください！！」

「ん？駄目に決まってるだろ、豚共。死ねよ。」

彼の砲撃魔法が、みなを呑み込む。
そこに戦闘員、非戦闘員の括りは存在しない。

「ん～？やはり、砲撃で一網打尽ってのは、殺した感触が薄いな～。なぁ？」
「ソノトオリデス。マイマスター。」

男性と女性、二つの声が重なった無機質な声が、響く。
得体の知れない、恐怖の声。

「だよなぁ？……みつけた。」
「ひっ」

陰に隠れていた管理局員をバインドで、両手両足を縛り潰す。
声にならない悲鳴を上げるのを無視し、首を持ち上げる。

「やっぱり、刃物だろ？」

ツ、と剣に変形したデバイスを首筋に付きたてる。

「ひぃ、た「五月蝿い。俺が許さんのにしゃべるな」

首に刀を突き立てた。
幾度か、ビクンビクンと痙攣し、口から血を流すのを終始、エルは恍惚の表情で眺めていた。

「ははは。やっぱり、刃物だよなぁ。いいね、お前のその眼。絶望に落ちていく、その眼。……最高だ。」

エルの殺戮の悦も、そろそろ落ち着きを見せ始めた頃、

「そこまでや」
「大量殺人の罪で逮捕します。」
「もう止めて!!エルさん!!」
「先輩!!あなたはどうしてしまったんだ。」

彼の前に立ちはだかったのは、はやて、フェイト、なのは、クロノ。
管理局で、これ以上ないレベルの高い部隊。

「よう、クロノ。お前、久し振りの実戦じゃないのか?大丈夫か?」
「大丈夫です。先輩を止めるのも、後輩の務めですから。」
「は……、おいおい。俺を止める?」

エルの全身が外部骨格に包まれていく。
これは彼が、自分自身の為だけに、殺戮のためだけに作り出した、デバイスという範疇を超えた、『死』の顕現そのもの。
頭部は、まるで骸骨のように不気味な、仮面。

「たった四人じゃ、足りないぞ?」

そう呟いた直後、正真正銘彼の体が消えた。

何が起こったのか理解する前に、四人は別々に吹き飛ばされる。
中央には、エル。
右腕の、手首からひじにかけてマウントされていた、剣を展開している。

「おいおい。わざわざ接近戦を挑んだのに、誰も反応できていないだぁ？……雑魚が。アヴェンジャー！！」

「リョウカイ。ハイジョカイシ。」

アヴェンジャーに装備された七つのイクシードがそれぞれに飛んでいく。
ミッドチルダの街を、それぞれに食い潰していく
「やめろぉぉぉぉぉ！！」
「遅いわ！！」

ソニックブームを使って、背後に回ってザンバーを振りかぶったフェイトを、エルは回し蹴りで腹を貫く。
エルの体術は、魔力皆無の彼が高位の魔導師とも渡り合えるほどに練磨されたもの。
体の端から端までただひたすらに突き詰められたその一連の流れは、人体の構造を超えた威力を弾き出す。
かくして、エルの蹴撃はバリアジャケット越しの細い少女の体を突き破り、空中に内臓を散布させる。

「ぐ…ふっ！！」

「ちんたらちんたらしやがって。それで、金の閃光？笑わせる！！」
突き破った足を、地面に振り下ろし、フェイトを地面に叩きつける。
「がはっ！！」
「はい、おしまい。残念だね、ザンバーフォームしか使えなくて。」
両手をフェイトに振りかざし、３２条という途方もない数のホーミングレーザーを、無慈悲に放つ。
打ち終わった後には、大きな、血のりの花が咲いているような跡が残っただけだった。
「フェイトォォォォ！！」
「フェイトちゃん！！」
そこに、やっと戻ってくる残りの三人。
確かに、この面子では、フェイトが一番速くて、反応がよかったんだろう。
しかし、それが命取りだった訳だ。
「どうした？たかが一人死んだだけじゃないか。さぁ、続きをしよう。」
「よくも……フェイトちゃんをぉぉぉぉぉぉ！！」
「フフ……いいね、その絶望、怒り。」
なのはがアクセルシューターを放つ。
しかし、エルのホーミングレーザーに質も量も適うはずが無く、押

し切られ、バリアジャケットを数箇所貫く。
それを援護するように、クロノの魔法が放たれる。
更にはやての後方からの援護も重なる。

完全な意思疎通が出来てこその連携。
だが、其れゆえに……。

「……鬱陶しい！」

それを右手のブレードでこともなげに切り払う。

「む、バインド？」

グっとなにか押さえつけられる感触。
右腕で切り払っているうちに、左腕にバインドをかけられたようだ。
なのはが、苦悶の表情を作りながらも必死に魔法を唱えていた。

「はやてちゃん！！」
「まかせとき！！！」

後方で支援に徹していたと思っていたが、はやてはどうやら広域魔法の詠唱もひそかに行っていたらしい。

すでに巨大な魔法陣が現れ、光球を作り出している。

「ヒヒ、考えたねぇ！！だが、」

エルが少し、左手を振るわせただけで、バインドは簡単に解かれた。

『ＳＨＩＦＴ－ＣＨＥＮＧ』

エルが短く呟く。その直後には、詠唱を唱えていたはやての背後に突如現れた。
二度目の、瞬間移動。
これは詠唱ではなく、ある機関を発動させるだけの記号。

「え？」
エルのブレードがはやての胸を貫通する。
貫通した切っ先には、べったりとはやての血が付いていた。
「これは、すこし反則技かなぁ？まぁ、おまえらが反則気味の才能だからいいか」
「エル……さん。……どうし、て？」

はやては気丈にも、痛みを歯を食いしばって耐え、エルに質問を投げかける。
はやての胸からは、大量の血が今も流れ続けている。

「言わんよ。」

淡白な口調で答え。淡々と、胸を貫いたブレードを切り上げた。
それで、はやての肉体だったものは、目的を失ったのか、地面へと堕ちていく。

「……まだ、やるか？」

今まで命が宿っていた体が、壊れた人形のように踊りながら落下し、べちゃ、とつぶれたトマトのような音を立てた。

「くっ！」

「はやてちゃぁぁぁぁぁん！！！」

目を逸らすクロノと、叫ぶなのは。
エルはそれを、仮面で隠された顔の下で嗤っていた。

「許さない……絶対に！！」
「駄目だ！！なのは。今は退こう！！僕達だけじゃ、勝てない。」
「そうそう、良い判断だクロノ。このままじゃ、二人が無駄死になっちゃうもんな。」
「…この！！」
「なのは！！！」

クロノは必死になのはを制止する。

「まぁ、好きなほうを選べ、俺は別に何も文句は言わないぞ。」

まぁ、

「どちらにしろ殺すけどな？」

声がしたのは二人の背後。

最初に反応したのは、クロノ。
やはり、エルが空間を跳ぶ事を予測していたのだろう。
なのはを突き飛ばし、プロテクションを張る。

しかし、エルの腕は、プロテクションを何の抵抗もなしにすり抜け、
クロノの頭を掴み上げる。

「良い動きだったぞ。クロノ。そして、生き残らせる人選の判断も

な。」
「クロノくん！！」
「逃げろぉぉ！！なのはぁぁぁぁ！！」
「さようなら。」

掴んでいた右手から、高密度に練り上げたデバイスの魔力を流し込む。
これは容易く人間のキャパシティを超え、魔力を溢れさせる。
一瞬クロノが膨らんだかと思えば、彼の体はバリアジャケットとデバイスを残し、破裂した。

大量の血が辺りにまき散る。

勿論、エルはその血を大量に被ることになるが、気にも止めはしない。
その姿は、まるで赤鬼。

「さぁ、最後だ。不屈のエースオブエース。不屈の闘志で道を切り開いて見せろよ。」

エルは大仰に手を広げ、なのはを見据える。
大量のクロノの血を浴びたその姿で、だ。

「……ひっ！」

「……なにが不屈だ。聞いて呆れる。所詮は本当の地獄を知らない甘ちゃんだったって事だ。」

エルは、優雅な動きで地面に降り立つ。
なのはが空中。エルが地面にいる状態だ。

「……くそっ！！ここで、あなたを殺す！！」

「ハハハハッハハハァァァ！！それだよ、その怒りだ！！墜ちたな、高町なのはぁぁぁぁ！！」

「いくよ、私の全力全開！！！」
「そうだ、言い忘れてたが」
「……なに？」
「俺が放ったイクシード、もうあらかた街を殺し尽したみたいだぞ？」
「！！？」

なのはは驚き、辺りを見回す。
エルの言う通り、街の被害は甚大、いや全滅であった。

「そん……な。」
「なのはが弱いからねぇ。こうなったんだよ？」
「！！！！」
目の前にには、エル。
先ほどから幾度も使用する、瞬間移動のようなもの。

「もっと、強くて、俺をみんなで足止めして、イクシードを各個で撃破できるぐらいに強かったらこんなことにはならなかったのになぁ？」

「そ、そんな……」

「ふふ……。そうだよ、その絶望する顔が見たかった。さぁて、チェックだ。」

なのはの回りには、七つのイクシード。
目の前にはエル。

確かに、何をしても生き残る事は出来ないだろう。
だから、戦うことを諦めた。
つい最近まで、楽しく会話していた親友達が、まるでゴミか何かのように、捨てられた。
不屈と謳われた管理局のエースは、死神に完膚無きほどに心を折られたのだ。

しかし、その折られた心でも、たったひとつ、確かめたい事があった。

「どうして？」

「何が？」

「どうして、こんな事を？」

「言う必要は無い。」
今まで軽い印象だったエルの声に、若干の影が差す。

「お願い。教えて？貴方の過去に何があったのかを……。」

「お前らは……いつもそうだ。」

「え？」

「簡単に、過去とか秘密とか、人の心の中に入ろうとするんじゃねぇ！！！」

ブレードを瞬時に二回振るう。
なのはの華奢な体は三分割された。

それに七つのイクシードが、肉片も残さんとばかりに射撃魔法を連射する。
その有様は、まるで獲物に喰らいつく、ピラニア。

「お前らには、わからんさ。……事実、誰も理解しようとせんかったろうに。俺は、欠陥者じゃ、ない。お前らが……お前らが……満ちたり過ぎるんだろうが……。」

なのはの、はやての、クロノの、フェイトの……、大切な四人の命を奪った自らの腕を見つめる。

「俺ならこうなった。お前の未来は……こうなるのかな？」

顔を上げて、空を見つめる。
それは誰に宛てた物か。

だが、その時、確かに……。

『俺』は『俺』と目が合っていた。
奴は、確かに俺を見て、俺に宛てた言葉を遺したのだ……。

「はぁっ！！！」

ベッドから跳ね起きる。
点滴も、痛みも全てを無視して。

額には、玉のような汗がびっしょりと張りついている。
いや、額だけではない。
腕も、足も、病人服の下、俺の体全てがそれほどの汗をかいている事がわかる。

「エ……エル！？どうしたのですか？！」
「い、いや……なんでも、ない。汗を、拭く物を……。」
「わ、わかりました。今すぐっ……！？」

知らず、部屋を出ようとするリインフォースの腕を掴んでいた。

「違う……やっぱり、いらない。だけど、少し……このままで居させてくれ。」
「は……はい。」

リインフォースの腕を引き寄せ、祈るようにその手を握る。
ただただ、怖かった。
あの自分が。あの結末が。

「あんな未来に……させないよ。チクショウ……。」

うわ言のように俺は呟き続ける。
リインフォースは、黙って俺のうわ言を聞いて居てくれる。

それだけが、救いと言えば、救いだったのかもしれない……。

俺は今日、最悪の夢を見た。

四十四話　夢か現か、それとも未来か（後書き）

今回の回は、実は展開を見越して、まだ無印を書いてた頃に執筆した物です。
それをちょちょいと修正。

エル「そう言われれば書き方に若干の違和感を感じなくも、ない？」

色々書き足した部分もあるけど、基本はそのままで。
今も未熟だけど、もっと未熟だった頃って事で、どうか堪忍くだせぇ。

四十五話　再演（前書き）

あけましておめでとう
←
あけおめことよろ
←
あかめことろ
←
アカムトルム
???

四十五話　再演

八神家では、はやて達八神家メンバーと、なのはやフェイト達や、その他大勢の人達で賑やかにクリスマスパーティーが催されていた。

その他大勢とは、ユーノやクロノ達アースラの面々や、なのはの同級生であるアリサ・バニングスと月村すずか達。

「今日はエルさんが来れないんだね。ジュエルシードの時のお礼も言いたかったんだけどな。」

「何だ淫獣。男にも手を出し始めたのか？」

「淫獣じゃねぇし！！！は？クロノ何言ってんだテメ！！むっつりが」

「むっつりじゃねえし！！言われないから言わないだけで基本オープンスケベじゃゴラァ！！」

「二人の仲の悪さがヒートアップしてるの。」

「ヒートアップってレベルじゃ……。」

「もはや別人やん。」

「そう言えばはやてちゃん、足の具合、大丈夫？」

「なんか徐々に良くなってるみたいや。これなら来年には車椅子も卒業や！！」

「良かったね、はやて。」

……とにかく豪勢であることは変わりなく、それぞれが思い思いに会話や遊戯を満喫し、聖夜を楽しんでいた。

「あれ？もう九時になるの！？」

その中で、なのははちらりと時計を一瞥し、その事実に驚愕したかのように凝視し、声を上げる。

「も、もう？」

「あらあら、子供たちもいるし、そろそろお開きかしらね。」

子供たちからは当然批判にも似た声が上がるが、いかんせんこれは仕様がない。

大人同士であれば、酔いつぶれて……であっても問題は自己責任かもしれないが、その大人達は参加者であると同時に、彼女たち子供の保護者でもあるのだ。

ここは子供たちの時間に合わせるしかないわけで……。

「そうか、いや楽しかった。クリスマスとはこんなにも……。」

「……ｚｚｚ。」

「起きて片付けるぞヴィータ！九時前に眠るとは子供か。」

「こ、こ、子供じゃねぇし！！」

ヴォルケンリッターなどは、実にテキパキと食事や会場の後片付けを始める。

大人達が片付けを始めれば、一方で子供たちはお別れを言い始める。

「今日は来てくれておおきに。ほんま楽しかったわ！！」

「はやても、こんなに料理を準備してくれてありがとう。」
「どういたしましてや。ほんなら、気ぃ付けてかえりぃや。」
「またね！！はやて。」
「お邪魔しました。」
「また来てな～。アリサにすずかも～！！」

はやては手を目いっぱいに振るい、見送りを済ます。
見送りが完了すると、いよいよ楽しい時間が終わってしまった実感が湧きあがってくる。

「本当に、楽しかったなぁ。」

呟けば、浮かび上がるのは時間を巻き戻したいという願望。
ただ、それも一瞬の感情。
また、次があると、来年のクリスマスが待っているぞという希望に気持ちが切り替わる。

「うん！！せやから、明日からまた、頑張ってこ～！！！」

はやては手を突き上げ、エイエイオーのポーズ。
今日の充実感をバネに、明日からまた頑張ろうと言う決意の姿勢。

「あ……お兄ちゃん……。」

ここまで来て、一人のこの充実感を得られなかった青年を思い出す。
きっと隣には……。

「お兄ちゃんと、リインフォースは……どんな聖夜を過ごしてるんやろね……。」

はやての胸には複雑な想い。
こんな楽しかったパーティーに参加できなかった二人に対しての、同情と後悔。
それと同時に、エルの隣に居るであろうリインフォースが、羨ましくも思っていた。

もちろんこのパーティーもかけがえのない思い出の一つとなった。
それでも、エルと二人の思い出を作ったリインフォースが羨ましくて仕様がない。

少女の呟きは、聖夜に降る粉雪に溶け込み、誰にも聞かれることなく……。

ただ、何をするでもなく、病室の白い天井を見つめ続ける。
チラ、と壁に掛けてある時計を見る。

時刻はちょうど21時。はやて達のパーティーもそろそろ終わりを告げた頃であろうか。

そうか、ただ一時間、こうしていたわけか。

……眠れる訳があるか。あんな夢を見て。

ドクン

一際大きく心音が跳ね上がった。

「がっ……！！」

その後にやってくるのは、胸を襲う形容しがたい激痛。

俺の隣にはイスに座りながら、すぅすぅと寝息を立てるリインフォース。

絶対に心配は掛けまいと、シーツをちぎってしまうのではないかというほどに握り込み、体を捻る事も声を出す事もせず、ただひたすらに耐える。

「……～っ！！！」

歯を砕かんばかりに歯を食いしばり、目蓋をきつく絞める。

どんなに体に力を込めようとも、胸の痛みを紛らわす事は叶わず、ひたすら地獄の時間は続く。

どれほどが立っただろうか、つっかえが取れたかのように突然と痛みは消え、全身が脱力する。

だらしなくベッドに身を落とし、息を静かに静かに整える。

必死に息を整えながら、今の痛みの出所を探る。
何かの病？変換の代償？……いや、きっとどれも違う。
今のは、俺の中から『何か』が抜け出す痛み。

その何か……なんて、考える必要もない。

きっと、あの悪夢。

「……行かなきゃ。」

リインフォースを起こさないように、静かにベッドから抜け出し、
ふらつく足で病室のテーブルに移動する。
テーブルの上には、ジャンのブレスレットと義手。

アイツは確実に俺から出て行ったんだ。証拠なんてない、けれど確信はあったんだ。あれ
では、一体どこに？……考えたって答えは出ない。

奴が向かった先で行う事はきっと……殺戮。

「うっ！！」

脳裏に蘇ってきた映像は先程の悪夢であり、無残に人間としての死すら迎えなかった少女たち。
分割されたなのは、消されたフェイト、潰れたはやて、弾けたクロノ。
その映像は俺の脳髄に嫌らしく焼きついている。

せり上がる嘔吐感を、必死に堪える。ここで吐き出してしまえば、背後の少女は確実に目覚めてしまう。そうするわけにはいかない。

「そうだ……なのは達に会いに行こう。無事を……確かめよう。」

白状してしまえば、怖かった。とんでもないくらいに。

彼女達の所についたら、既に彼女たちはバラバラで、そうさせた俺がニタニタ笑ってこちらを見ているんじゃないかと……。

最初に義手を取りつけ、今回は左腕の義手にジャンのリストバンドを取り付ける。

今は、義手の駆動音ですら音を出したくなかった。

リインフォースを見やる。

彼女は今も変わらず静かな寝息を立て、イスで眠っている。

（傍に、居てくれるのでしょう？）

「……ごめんな。俺が臆病なばっかりに、お前に相談もできなくて。いつも俺は独りで突っ走る。でも、それしかできないんだ。」

今まで独りで戦い、独りで生き残ってきたんだ。それを変えられたら、俺の存在意義が失われてしまう。

変われと言われるならば、変われるさ。

だが、それにはやはり、長い長い時間が必要なんだ。

リインフォース、お前のマイナス思考と一緒だよ。

俺のリストバンドが一瞬、振動する。

『……出撃？』
「ああ、カートリッジはある。……跳ぶぞ。」
『……』
「不服か？」
『相棒……。』
「今は、お前だけだ。お前の力を、今度は頂く。」
『……承知。』
「さぁ、行こう。ケジメは他の誰でもない、俺が付ける。」

俺はふら付く足を必死に心と体で支えながら、その病室を後にした……。

「……。」

何の闇とも言えぬ中、一匹の獣は胡坐をかいて目を瞑っている。
それは、瞑想か。

ゆっくりと目を開き、遠い目で闇を眺める。
目には入る物は、何もない、闇。
終焉であり、始まりでもある、闇。

「……永かった。」

ただ、ポツリと。

「遂にここまで来た。……後は、飛び出すだけ。この闇から、自分の殻から。」

そう言い終わると、自らの太ももを響かせるように叩き、立ち上がる。
そして、一歩踏み出す。

「俺は今夜。俺に、なる。」

更に一歩。
一歩一歩踏み出し続ける獣に追随するように、闇から現れ共に歩き出す人型。

「お前達も、な。」

その闇に向かってわしわしと頭と思われる箇所を撫でる。
いや、もはや人型は三人の少女を形作り、少女達の髪を撫で上げていた。

「お父様。」
「パパ……。」
「父上。」

呼び方に違いはあれど、含む意味はどれも同一。
ただ、父親、と闇の少女達は呼びかける。

三人の瞳は一匹の獣を見つめ。

獣は少女達を、父親の瞳で眺める。

「お前達はお前達だ。他の何物でもない。その想いをありったけぶつけてやればいいさ。……さぁ、聖者が生まれたこの聖夜に、俺たち影が、闇と煉獄の再演を催そう。」

獣は大仰に、尊大に手を拡げる。

「この世を闇に……堕とす。」

獣の決意が、全ての開幕となった。悪夢が現実を浸食する……。

四十六話　がらくたの戦士（前書き）

あぁ、正月特番も無くなると、正月は終わったという気がしていやだ。

はぁ……。

四十六話　がらくたの戦士

クリスマスの海鳴市。
それはどこにでもあるような街の、どこにでもあるようなクリスマスの光景だった。
皆が笑顔で家族や恋人と、この彩られた街を行き交う。

それを高い高いビルから見下ろす。
屋上の手すりに必死にしがみ付き、激しく息を乱しながら。

空は飛べないし、結界なんてもってのほか。
ここまで無理して階段で登ってきた。

「……馬鹿やっちまったな。」

考えてみれば、最近は馬鹿をしてばかりだと考え直し、薄く自嘲の笑みを漏らす。
煙と馬鹿はなんとやら……。
あながち間違ってないから恐ろしい。

そんな馬鹿をしてまでここに登った理由。

『奴』が現れるとしたら、やはり空。
街を見下ろす事ができる空間。

曲がりなりにも俺を騙るのだから、同じ馬鹿をして、高い所に上がってくるだろう。
だったら同じ高さにいるほうが見つけやすいだろう？
奴を最初に見つけて、潰すのは、俺なのだから。

「～～～っ！！！」

今度は強烈な腹痛に襲われ、身が崩れ落ちる。
明らかな稼動限界を超えた運動により、消化器官が悲鳴をあげている。
いや、それだけではない。俺の体と言う体全てが俺の意思に反し、強硬に休息を主張する。

階段登っただけでこれかよ……！！！

激痛に身を悶えていると、世界が変わる感覚を、ぼんやりとながら掴む。
面を上げる事は出来ないが、この感覚はきっと……。

「結界……か。」

倒すべき標的が、現れた。
そう考えると、不思議にも腹部からの激痛も消え、俺にあるのは奴に向ける殺気のみになった。
治ったわけではないだろう。ただ、それを感じなくなっただけで、今も神経は激痛を発信し続け、これ以上の稼動を続けると、より強大な激痛を発信する事になるのだ。

ゆっくりと、立ち上がり、海鳴の空を見上げる。
夜空に浮かぶ星達のなかに、紛い物の星がちらほらと見える。

「あぁ……良く知った魔力を感じるよ。胸糞悪くなるほどにな。」

どうやらコピーは俺だけではないらしい。
もっと多く、俺がよく知っている奴らがまた敵だ。
あぁ、胸糞悪い。

「レオハルト、一番大きな魔力は……あ。」

聞こうとして、諦めた。
レオハルトという相棒は、もう存在しないことに今更ながらに気付く。

いつも自分の胸ポケットに収まり、必要な情報があれば聞く前に提示してくれていた。
そんな便利なデバイスは、存在しない。
いや、ただ便利なだけというわけじゃない。
もっと、大切な繋がりが俺たちにはあったんだ。今となってはそれが何であったかは知る由もない。

ただ一つ言える事は、俺はアイツがいなければ、何もできない木偶

だということ。
空も飛べない。足場も作れない。敵の場所を見つける事も出来ない。

……木偶でいて、いいのか？

良い訳があるか。

震える腕で、左腕の義手を起動する。

大丈夫。お前の力は確かに俺に残ったのだから。
レオハルトというＡＩは死んだが、ノブリス・オブリージュというデバイスはまだ死んではいない。

俺の左腕の義手の中には、アイツが残してくれた最後のデータ収集記録がある。
そして、ジャンク寸前のレオハルトのマジックジェネレーター。

至る所が焼ききれたジェネレーターでは存分な魔力を生み出せないが、義手の動きを完璧にトレースすることと、俺の貧困な魔力を補助するくらいは、出来る。

データを、復元。
斥力発生機構。

「これで……。」

左手を空にかざし、その箇所に足場が生まれる。
何も見えない重力の足場。

「これで……いいか。」

もはや妥協するように足を踏み出し、次々足場を作り出していく。

「細かい事なんて、考えていてもしょうがない。次々、大きな魔力を辿っていけば、最終的には目的地にたどり着くさ。」

まずは近場……から。

一歩一歩、足場を確かめるように歩く。
言う事を利かない体を叱りつけ、真っ直ぐ歩き続ける。
今までのようにフラフラ歩いて、足場から落ちました、なんて笑い物にも成りはしない。ただ白けるだけだ。

一歩踏み出すに連れて、体の内側に響く痛みは増すばかり。
今すぐにでも倒れたい。手すりでもなんでもいいから、寄りかかりたい。
誰かに……支えて欲しい。

（言ったでしょう？貴方を支えますと。）

頭を振り、雑念を振り払う。
最近、俺の中に彼女がよく現れる。
それも、いつもとびきりの笑顔で、だ。

「まだ、だ。甘えるのは、まだなんだよ。」

俺はまだ彼女に甘えるわけにはいかない。甘える資格がない。
あの俺の影を倒したときこそ、本当に自分とのケジメをつけ、彼女と向き会えるとき。

彼女たちは……闇の書が、乗り越えたんだ。俺が……
煉獄の書が、乗り越えなくてどうするんだ。

「待て、そこの男。」

何かが俺に呼びかける。止まれ、と。
ポニーテールで、剣を持った女のコピー。

「邪魔だ。」

ただ、一言。
本当に邪魔だったから出てきた言葉。

「貴様……、ここは何処だ。」
「邪魔だと言った。」

あぁ、もう。俺はお前に何も求めちゃいないってのに、どうしてお前は俺に求めてくるんだ。
場所とか、目的とか、どうせお前らには関係ないことだろうが。

「ちっ……答えろ。」

「……邪魔だって、言ってんだろうがぁ！！！」

足場を蹴り出し、回転からの回し蹴りを放つ。

「っ！！」

相手は咄嗟に出したデバイスの剣で防ぎ、受け止めた衝撃で数メートル後退する。
俺の姿はただ病人の服から、私服に着替えただけの姿で、もし剣の刃で受けられていたら俺の足はきっと真っ二つだった。
しかし、そんな事考えていられない。そうこうしているうちにも俺の体は悲鳴をあげているんだから。

「ぐっ、がぁぁぁあああああ！！！！」

一歩足場踏みしめるたびに目まいがする、頭痛がする。
それすらも無視して、更に地面を深く踏みしめ、追い討ちの蹴撃へと繋げる。

一瞬でも向こうに暇を与えてしまえば、敗北するのは俺だと言うのは、俺が一番良くわかっている。

次の一撃は体勢の崩れた敵の胸を強打し、後ろに吹き飛ぶ。
ここで更に次の一手。それは最初の蹴りの段階から、左手の義手で凝縮させていた魔力。
それはほんの僅かの魔力。しかしそれは極度の凝縮により、パチンコ玉のような大きさと硬度を作り出した。
そしてその魔力玉を全力で投げ放つ。
ほんの小さな魔力。……それを侮るなかれ。
狙う箇所によっては危険すぎる一手にもなるのだから。

「っがぁああ！！！」

狙った箇所は、右の眼球。
それは人類共通の急所にして、最大価値の器官。
敵は痛みにもがき、その場に膝をつく。
その隙を逃すわけもなく、出せる限りの最高速で接近し、頭を掴み作り出した地面に引き倒す。

「ジャン！！！」
『終止』

止めに、短刀程度の刃を形成させたジャンで、その露わになっている細い首を掻っ切る。
それで終わり。
目の前のコピーはそれでこの無意味な人生を終えた。

「はぁ……はぁ！！」

戦闘時間は、一瞬と言っても差し支えないレベル。だが、その一瞬の時間であっても俺にかけた負担は半端ではなかったようだ。
頭痛、目まい、腹痛、嘔吐感。
これほどの症状が併発してしまえば、もはやどれがどの痛みなのかがわからなくなってしまう。
だが、それが今は幸いしているのかもしれない。
……まだ、歩ける

「まだ、まだ。死にゃ、しね～よ。」

目標はまだ遠い。
そこまではまだ一歩一歩進んでいくしかないんだ。
こんな所で倒れていられるか。

そうして俺はまた不毛な一歩を踏み出し始めた……。

『リインフォース！！』
「は、はいぃ！！」
リインフォースは何度目かのはやてからの念話での呼びかけに応え、イスから跳ねるように起きる。
「あ、あの、はやて、何用で？」
起きがけに、普段出さないような声を出してしまった事を恥じらい、顔を少し赤く染めながら疑問を投げかける。
『悪いけど、直ぐに戻ってきて欲しいんや！！海鳴市に大きい結界が突然張られて……なんや大きな魔力も観測されてるみたいやし。とにかく、早く帰ってきて！！』
「わかりました。」
リインフォースは念話を打ち切り、一度エルが眠っているベッドに身を翻す。
事の事情を話すため。しかし、ベッドを見て驚愕した。
「嘘……！」
誰も居ない。
先程まで誰かが入っていたと思われるシーツの皺、そして温もり。

いや、ただトイレに言っただけなのかもしれない。
そうに違いない。デバイスもない彼がどうやってこの事を知り得ると言うのか。

咄嗟に目を移した、彼のデバイスと義手が置かれていたテーブル。
確かに置かれていたはずのテーブルの上にも何も無く。

それを見て、一瞬の希望は打ち砕かれた。

「どうして……！！」

病室を飛び出し、病院の中を走る。走り回る。
たった一人の愛しい人を探し出すために。

夜の病院は酷く静かで、自分の足音と乱れた呼吸を整える音が嫌にも響く。
どんなに走っても、彼を見つける事は叶わず、行きついた先は入院時の私物をしまうロッカーの前。
病室の病人の名前が書かれた箇所には確かに「エルンスト・アルカトラス」と。

恐る恐る、手を伸ばす。

「……ふ～。」

どうしてたかがロッカーの扉を開けるのに、こんなにも緊張しなければいけないのか。
思い切って、扉を開ける。

（償うのが、生きるのが怖いなら、俺が一緒にいるさ。今までずっと独りだったんだ。これからそれを取り返すくらい……俺が傍にいるさ。）

「……傍に、居てくれると言ったのに。嘘つき。」

ロッカーの中にあった私物は、私服だけが取り除かれ、そのかわりと言わんばかりに病人服がグシャグシャに詰め込まれていた。

つまり、この病院には既にエルと言う男は存在しない。

リインフォースは服をロッカーから取り出し、そっと握り締める。その服は、持ち主の体温が残ってもおらず、まるで拒絶するように冷え切っていた……。

「……誰だよ、お前。」

見た目幼き鉄槌の少女が目の前に。

ちっ、はずれか。

「お前か……。悪いな、手加減できん。」

もはや相手に話させることも億劫。
どうせ言われる事はどれも同じ。言う事がわかっている会話に何の意味があると言うのか。

接近のために足場を疾駆するが、それを遮る打ち出された鉄球。
何の前触れも無く戦闘に移行したと言うのに、敵はそれに見事に反応して見せた。

「ぐっ！！」

咄嗟に体を捻らせ回避するが、普段なんの苦痛を感じない動きが、酷く苦痛だ。
攻撃から、瞬時に回避に。
その切り替えは、強烈な痛みを伴い、更に切り替えの速度を鈍化させる。

「おおりゃぁぁぁぁぁぁあ！！」

そんな事情も知らずに、その隙をついて一撃必殺の大振りを放つ敵。
受け止めるのは論外。回避は……無理だ。この体では攻撃を振り切れない。

ならば……前に出るしかない。ただ、体の切り替えが追いつくかどうか。
そんな憂いは捨てさり、全てをかけて攻勢にでる。

ジャンを逆手に、刃を形成。
震える体に鞭打ち、前に跳ぶ。

「このやろぉ！！」
「がぁぁぁあああああ！！！」

振り下ろすか、切り抜けるか。

振り下ろされれば、俺は死に。切り抜けられれば、奴が死ぬ。
他の結果など存在しない。
俺たち二人が、交差する。

「クソ……がっ！」

斃れたのは鉄槌。
武器が振るわれた瞬間はほぼ同時。違ったのは体の使い方、だけ。
俺が身を右に傾けていたからこその切り抜けであり、その身の傾けはまったくの偶然。

今回ばかりは、どちらが勝っていてもおかしくなく、もし間違えれば、俺は今頃頭が吹き飛んでいた。

しかし、見事にしてやられた。

「くそ……っ。動かねぇ。」

戦闘は一瞬。しかし苦痛は永く。
戦闘が終わってからずっしりとくる疲労と苦痛。これは回避と攻撃の切り替えの代償。
最初から最後まで攻め抜けなかった時点で俺の負けだ。
まだまだ、敵は数多くいる。まだ二体目だと言うのに、この負担は不味い。

体が言う事を聞かなくなり、徐々に身が沈んでいき、遂には足場に倒れ込む。

「はぁ……はぁ……。」

今はまだ動けない。一分だけでもいいから、体を休めなければ。
深くゆっくりと、息を整えながら耳を澄ます。

不思議なもので、人間と言う物は体の自由が利かなくなると、そのほかの感覚が鋭敏になってしまうのだ。それが幸か不幸かは関係無しに。

冷ややかな風に混じって聞こえてきたのは、遠くで起こっているであろう戦闘の音。
魔力が撃ち出される爆音。武器と武器とが交わる剣戟の音。
まるでそれが一つの多重奏のように、俺の耳に四方から届く。

「管理局も、動き出したか……？」

動いているのは、確実に、あいつら。
俺が巻き込んでしまった少年少女達。

「……あいつらに、始末つけさせるわけには、いかないでしょうよ。」

体を起こし、震える足を何度も叩いて叱咤させながら立ち上がる。
足は大きく震え、足元は覚束ない。

それでも、前に進まなくては。

（だから……約束してください！！私に生きろと言うのなら、自分は幸せになると！！）

「ははっ……結構、依存してるかもな。俺。」

彼女の声が聞こえると、不思議と前に踏み出す力になる。
こんな絶望的な状況でも、笑って前に進む事が出来る。

「そうさ、俺は幸せに、ならなくちゃ、な。」

この戦いが、終わったら……俺は。

「幸せに、なってやるさ。」

四十七話　己とまみえる時（前書き）

なんや本格的に忙しくなってきた。
まぁ、時期が時期だしね。

頑張れ、受験生。

俺も頑張るから。

四十七話　己とまみえる時

リインフォースは急ぎ地球に転移し、海鳴市のはやて達と合流する。
帰還場所はもちろん八神家の家。

飛行魔法を使用し、目的地に到着すると、玄関ではやてとシャマル、それと狼形態のザフィーラが待っていた。

「すみません。少し遅れました。」
「ううん、大丈夫や。……まず、事態を説明せなあかんな。」
「はい、よろしくお願いします。」

玄関の扉が開き、家の中からリンディが現れる。

「説明よろしくお願いします。リンディさん。」
「はぁ……大人の女性って説明役ばかり。私はどうせ便利に利用されて捨てられるのかしら。」
「あの……リンディ、さん？」
「あら、ごめんなさい。……それでは、説明しますね。今、海鳴市には大規模な、それこそ町全体を包み込むほどの結界が張られています。」
「はい、それは先程来る途中に実感しました。」

実際に、海鳴市に転移する予定だったのだが、結界により隣街にはじき出され、リインフォースはその結界の一部を破壊し、戻って来ていたのだ。
その破壊した部分も、直ぐに修復されてしまったが。

「ええ。そして、その中では闇の書の反応が数多く検出されている事。」

闇の書。その単語を聞き、リインフォースの表情がまた一段と暗く変質する。
しかしそれはリインフォースだけの話ではない。
はやても、ザフィーラ達も同じだ。

「ただ、それだけでもありません。数ある反応のうち一つだけ、闇の書の波形パターンと似て非なる反応が検出されていることがわかっています。そして、それを取り囲むように闇の書の反応が増幅していることも。」

「似て非なる……、同型？」

同型、と考えれば出てくるのはたった一つ。
煉獄の書。
そしてエルと同じ顔をもつ、あの獣。
リインフォースの体が人知れず震える。

「それは定かではありません。が、なのは、フェイト、クロノ、そしてヴォルケンリッター達には、その反応の出所を探してもらっています。」

「なっ、なのは達は大丈夫なのですか？！」

「今の所は……大丈夫です。ただ、敵はあまりにも多い。それに、黒幕や目的はまったくの不明。アースラのクルーには解析を急がせていますが……正直厳しい。それが現在の状況です。」

その報告に、全員が顔を顰める。

「……とりあえず、状況はわかったかしら？リインフォースさん。」

「あ……はい。」

「それじゃ、家の中に戻るわね。アースラクルー達と連絡を取り合わないといけないから……グスン。」

そうして、サッサとドアを開け、家の中に戻る。

その背中は酷く小さく、なぜか悲しく皆の目に写った。

「ほんまに説明だけして、戻っていったな……。」

はやての言葉に、全員が深く頷き、リンディが入っていった玄関の扉に向けて敬礼をしていた。

「……それでは、私も向かいます。この中では、私が一番身軽ですから。」

もし煉獄の書が、今回の件について暗躍しているというのなら、エルの異変にも説明がつく。エルが獣と共鳴したか、もしくは呼ばれたか。

最悪……呑まれてしまったか。

居ても立っても居られなくなる。

「ちょっと待ちや。」

リインフォースはスレイプニールを使用し、空に飛び立とうとするところをはやてに呼びとめられる。

振り向いて、すこし驚いた。

はやてがとても真剣な表情でこちらを見つめていたから。

自分が考えている事が、看破されてしまったのかと、エルに何かあったのを気付かれたのかと、一瞬の不安がよぎる。

「……闇の書の反応が出たからって、一人で背負い込む事ないんやからな。私たちがおるやん。それに、今回はリインフォースだけに戦わせたり、せぇへんよ。」

「まさか、はやても一緒に戦うつもりですか。」

「うん。この二週間、リインフォースとたくさん練習したやんか。うちだって夜天の書の主。ただ見ているだけなんて、嫌や。」

こちらを見つめる瞳には、一点の曇りも無く、強い意志が感じられる。

どうやら、自分の異変には気付いてはいても、その理由にまでは完全には気取られなかったようで、すこし安心した。

まぁ、もっともエルは煉獄の書については誰にも公言した事はないし、闇の書事件に現れたエルは闇の書が作り出したコピーと言い張っていた。

知っているのはエル本人と自分。更にはエルが言っていたグレアムという人物のみであろう。

この異変の原因はエルなのかもしれない。――そんな最悪の報告をせずにすむのは幸運だ。

もしかしたら、最愛の人を、自らの手で始末をつけなくなるかも知れないのだから。

それに、正直に言えば、彼女を実戦になんて出したくは、ない。相応に危険と言う事もあるが、なにより彼女は戦場に立てるほどの経験は皆無だ。

――――――――――それでも、戦いたいのだろう。

では、その意思を、汲まねばならない。

「……わかりました。では、一緒に行きましょう。」

「ありがとう、リインフォース。シャマル、ザフィーラも準備はええか？」

「はいっ！私は出来るだけ近くで辺りの警戒をしますから、先に進んでいてください。」

「わかった。ならば自分は前方の警戒を受け持つとしよう。」

人の姿になったザフィーラが先に飛び立ち、前方に向かう。

「はやて、飛べますか？」

「ほら、こうやろ？」

ふわりとはやての体が宙に浮く。

どうやら飛行に関しては問題が無いらしい。

「では、行きましょうか。」
「……なぁ、リインフォース？」
「？」
「お兄ちゃんの様子、どうやった？」

リインフォースの胸が高鳴り、心拍数が跳ね上がる。
感情が抑えられなくなりそうになる。
それでも、表情には出さず、変わりに仮面の笑顔。

「ぐっすり眠っていました。どうやら体調の方も良くなってきている、と。」
「ふうん……。」

ごめんなさい。主はやて。
私にはこんなことも言いだせないほどに勇気が無い。

エルが消えた。

この事を伝えて皆で探したほうが、絶対に効率的なのはわかっている。
けれど、そうしてしまえば、なんだか彼が遠くに……それこそ消えてしまいそうで。

――――いや、それは嘘。
真実を言いたくなかった理由。
それは、自分がエルに裏切られた事を知られたくなかっただけ。

傍にいてくれるといった。

でも、傍から消えてしまった。

所詮、自分では彼の役に立つことなどできないのだと。その事実を突きつけられた感覚。

それは、裏切られたと言うよりは、エルに捨てられたような気がして……。

――――――なんて、惨め。

ごめんなさい。私は、嘘を吐きました……。

冷たい風が吹く夜天。

その中に、まるで寒さなど感じさせぬような様子で、獣は佇む。

胡坐をかき、目を瞑り、まるで瞑想をするかのごとく。

「情報を形にする事は、簡単だ。夜天の書にはな。」

佇む彼以外に人影は無い。

けれど、まるで誰かに諭すように言葉を続ける。

「そして、想いを形にする……。これは、煉獄の書の専売特許だ。お前たちが強く想えば、それは現象となり、力となり、血肉と化す。さぁ、諦めんな。お前たちの想いを見せてみろ。」

数拍おいて、その閉じた目蓋を上げると、目前に三人の少女。

その存在をしっかりと確かめた後、もう一度目蓋を閉じ、溜息を残す。

「時間が掛かりすぎだ。ここまで至るのに何分かかってやがる。」

「パパが速すぎるんだよ！！私たちの事もすぐに置いてくし……。」

「やはり、それほどの想い……と言うことでしょう。流石です父様。」

「ふん、軟弱な事言ってるんじゃねぇよ。これからもっと厳しい中にぶち込まれるんだ。お前らの使命はただ一つ。……なんだ、言ってみろ。」

「「「砕け得ぬ闇を、作る事。」」」

三人の声が綺麗に重なる。

それほどの覚悟。それほどの想い。

その様子を確認し、口元を歪める。

「上出来。」

獣は嗤って先程と変わらぬ姿勢に戻る。

「なら、言ってこい。お前らが倒す敵。想いをぶつける奴らの元にな。」

その言葉と共に、三人の少女は掻き消え、残ったのは彼女達が残した僅かな魔力の残滓のみ。

「砕け得ぬ闇……か。ハッ、意地張りやがって。」

たった一度、ほんの一瞬、獣の表情は優しく穏やかなものに変容した。

ただ、すぐにその表情は瞑想の無表情へと切り替わり、音も無くその時を待ち続ける。

待つ者は、彼女達にも言った倒すべき敵。想いをぶつける敵。

彼女達と違う事は、迎えにいくか、お出迎えをするかのみ。

そう、自分たちは……。

「想いを伝えるために、闘っている。」

誰にも聞こえない。自分にも聞こえない。
海鳴の空を舞う風は、今も獣に冷たく吹きかかっている……。

「……来たな。待っていたよ。エルンスト・アルカトラス。」

「……あと、後少し、この拳が、届いていればぁぁぁ！！！」
「ごめんなさい、ザフィーラさん。」

高町なのはは目の前で消えていく、夜天の守護獣に黙祷をささげる。
黙祷と言っても、そんな大げさなものではなく、たとえコピーであろうとも手をかけてしまった自分に対しての懺悔。
所詮は自己満足。誰も浮かばれる事は無い。

「ちょっと疲れた……かな。」
『Ｉｓ　ｉｔ　ｓａｆｅ？　Ｍａｓｔｅｒ．』
「ありがとう、レイジングハート。でも、こんなことじゃ弱音を言っていられないよ。今もフェイトちゃん達も頑張ってるんだから。」

『Ｉｔ　ｔａｋｅｓ　ｃａｒｅ.』

気をつけて、という自らのデバイスの気遣いに、うなずきを返す。

闇の書のあの一連の事件から二週間。

クリスマスに起こった今日の事件。

関連性の根拠は未だ皆無。けれどなのははこの事件は、二週間前のあの事件の延長線上にある気がしてならない。

ヴォルケンリッターのコピーとはこれで二戦目。

先程交戦したのは、ヴィータであった。

先程のザフィーラもそうだったが、エルやはやて達と過ごした記憶は無く、はやて達と出会う前の、純粋な夜天の書の防衛機構であった頃の記憶らしい。

この二週間でも、ヴォルケンリッター達とは何度も出会い、お互い仲良く過ごしてきたのだ。

それなのに、たとえコピーであろうとも、自分の手で始末をつけるのは悲しい。

しかし、そんな事を言って居られない。

それは良くわかっている。

良くも悪くも、高町なのはという少女は、その年齢に見合わないほどに成熟した知性を有していた。

そういえば……と、なのははかつてエルに言われた言葉を思い出す。

（大人でも苦しい無理をしちゃ駄目だ。そんなの、小学三年生のなのはが耐えられる訳がない。）

（もっとバカになっていいんだ。）

あの時言われた言葉は今も胸の中に。
誰にも言わなかった辛さ。誰も包んでくれなかった痛み。

エルという男はその傷をあの短い時間で正確に見抜き、その全てから救ってくれる言葉を投げかけてくれた。

それがこんなにも彼に惹かれている理由。

この感情は恋と呼べる物なのであろうか？それはまだ断定は出来ないし、したくもない。
断言してしまえば、自分は彼との距離をどうにかしてしまおうとするから。その距離が離れるにしろ、近づくにしろ。

ただ、今はこのぬるま湯というか、お互いに特別意識もしない関係が気に入っている。
そういうことだ。

しかし、彼の周りの女性がそう思っているだろうか？

なのはは先程とは打って変わって、やけに緊迫した様子で腕を組み、思考に没頭する。

「あの様子では、フェイトちゃんは絶対にエルさんが好き。でも奥手だからそうそう進展は無いはずなの。それよりも危険なのははやてちゃん。兄妹とはいえ、血が繋がってはいないし、油断はできない。……シグナムさんは今まで一緒にいて進展も無いから、これからもない。それ以外も以下同文なの。」

自分の体調に関してはそれどころではないと言い切るのに対し、惹かれた男性の
身辺について深謀する事はそれどころな事態らしかった。

「一番危険なのは、あの最後に現れた、リインフォースさん。……
……今夜も病院で二人きりだったし……。」

なのはが生まれもった知性も相まってか、その独り言の内容はなかなかに高度な内容で、個人個人の危険性、対策や今後の方針などが実に的確に盛り込まれている。

だが、逆にそれが恐ろしい。
いや、なのは『らしい』とでも言うべきか。

『ｍａｓｔｅｒ』
「えっ、何?!」

突如、レイジングハートに名を呼ばれ、驚き顔を上げる。
自らの目前には、誰かが居た。
今までそこには何も無かったし、接近してきた様子もない。

その何かは、そこにいきなり生まれたのであった。

「そこまで考えているとは……、それほどまでに大きな存在なのですね。」

その何かが、聞き覚えのある声で呟く。
良く見ると、その何かは、見覚えのあるバリアジャケットを着て、見覚えのあるデバイスを携える少女だった。

「やはり、同じである以上、同じ存在に惹かれるものなのでしょうね。」

今も呟くその少女は、なのはだった。

確かにジャケットとデバイスの色も違うし、髪型も違う。
なのはのジャケットが白を基調としたものであるのに対し、目の前のなのはは黒や紺など、白とは正反対の色を基調としている。デバイスもまた同様だ。
しかしそれは誤差のようなものであって、髪型が変わろうとも、服装が変わろうとも、その顔立ちはそっくりという範疇を超え、同一。

ぐらり、となのはの視界は歪む。

「あなたは……私のコピーなの?!」
「コピー……違います。例え貴女を土台としていても、私は私

の意思がある。目的もあるし、それを成すための力もあります。」

少女は自らのデバイスを軽く持ち上げる。
それは今すぐにでも戦闘をおこせるという意思表示であり、なのはを倒すと言う宣言でもあった。

「それじゃあ、あなたの名前は……？」
「マテリアル。ただ、これは私の存在を意味するもの。貴女が人間と言われるのと同じ理由。私を特定する固有名詞はまだ、ありません。しかし、その名は必ず勝ち取ってみせる。」
「勝ち取る……本物の私、から？」
「偽者も本物もありません。私は私だ。……ただ、一つ言う事があるとすれば、私は貴女にありえた一つの姿です。」
「！！！」

なのはのめまいは最高潮に達する。
ありえた姿と言われ、なのはは無性に彼女を否定したくなった。
まるで悪夢を見せる鏡を見せられたような気がして。

「それでは、行きます。私の全力全開で、貴女を殺す。」
「私は……私は、違う！！そんなんじゃない！！」

「レイジングハート！！」
「ルシフェリオン！！」

十に未だ満たない少女の、憎しみと拒絶に染まった砲撃が、夜空を打ち抜く。

「見つけたよ。俺。」

俺は眼前の自分を、ありったけの殺意と共に睨みつける。
奴は飄々とした笑みでそれを受け流す。

「もう俺は、お前じゃない。」
「何……どう言う意味だ。」
「何、ただお前を追いかけるのを諦めただけだよ。ただ、起源はお前。故に邪魔。」
「ふん、コピーである事を意識しておきながら、本体から目を逸らしたか。……ならばお前は自分のない『無』そのものだな。」
「その通り。俺は『無』だった。つい先程までは。」

ならば、今は何かしらの存在である事。
それがなんなのかは、不明。

「……お前の話は難しいし、遠回りだ。」
「それはお前がそうだからだよ。自分で気付いていないだけで。」
こちらの嫌味も受け付けない。
奴はまるで宗教の教祖のように大仰に手を拡げ、言葉を紡ぎ始める。
その姿はやけに板についていると言うか、自然な姿であって、まるで自分がそういう姿がピッタリの人間のように思えて腹が立った。
「闇は消え、本来の夜空を取り戻した。だがしかし、夜空に残った人類救済の浄罪界は未だ消えず、その名残を残す。ならば催そうではないか、人類のありとあらゆる罪を浄化し、天界へと導く禊の儀式を！！」
「悪いな。宗教については詳しくないからなんとも言えないが、お前が人類を皆殺ししようというニュアンスは受け取った。」
「嘘をつけ！！お前が知っている知識だからこそ、俺がこうして喋る事が出来るのだから！！俺は煉獄と闇の書の写本（マニュスクリプト）だぞ！！！」
カカカ、と腹の立つ笑いを続けながら、演説を続ける。
「二週間前のは、その前段階だったと言うことか。」
「いや、あれも一つの儀式だったさ。しかも割りと本気のな。だが、お前がそこまでして闇の書の管制人格を主諸共に救うとは思っていなかった。故に失敗した。」
奴は俺の失った左腕を、実に陰湿な視線で睨みつける。
どうやら、リインフォースの姿をとった闇の書の意思を倒した事が

想定外であったらしい。

「それは当然の結果だ。それに、俺だけの力で成し得た事でもあるまい。」

「カカカッ！！確かに。俺は結局、あの若造三匹にやられちまったんだしなぁ！！ふふ、俺があの三人に負けたんだ、お前もあいつら三人とヤッたら負けちまうんではないか？」

「それは無いな。お前と一緒にするな。」

「だから……俺はお前だと言っているだろう！！！」

突如、それこそ刹那と言い表しても語弊が生まれないほどに一瞬、奴は拳を突き出す。

その放たれた拳から、目に見えるほどの衝撃が俺に向かって飛び出してくる。

「ガントレットっ！！」

咄嗟に腕を十字に絡め、衝撃に備えるが、まるで踏ん張ることも出来ずに吹き飛ばされ、地面に叩き落とされる。

「ちっ、レオハルト……その機能だけは未だ生きていやがったか。」

「く……そがっ！！」

特に防御障壁も張る事が出来ない俺ならば、地面に叩きつけられれば、内臓を撒き散らして死ぬところだ。

だが、左の義手に残るレオハルトの記録がそうはさせない。

セカンダリープログラム　自動防衛。
闇の書の意思との戦いの時でも、俺を助けてくれたレオハルトの機能だ。

プロテクションを張り、どうにかこうにかダメージを減らしてくれたらしい。
ただ、あくまでダメージを減らしただけ。防ぎきってはいない。
その証拠に、俺の額を伝う、生暖かい深紅の液体。

「我が名はマニュスクリプト。闇と煉獄の写本也。その傷ついたガラクタの体で我を倒せるとのたまうのならば、向かってくるが良い。完膚なきまでにすり潰す。」

奴の手に掴まれたのは、黒に染まったレオハルト。
それに対し、俺はジャンの刀身を形成し、奴に向かっていく。
体の痛みとか、体調不良とか、もはやそんな事を言っている場合でもないし、俺の体は痛みを完全にシャットダウンする事を決定したらしい。

不思議と、体は軽い。

それは力が溢れ、漲ったような軽さではなく、内臓や骨を取りこぼし、中身がなくなった器のような軽さ。

その違いがどのような意味を持っているにしろ、体が軽い事は事実。
戦闘行動に支障はない。俺は全力でアイツを殺す。

「はっ……上等じゃ、ゴラァ！！だったら俺はお前を噛

み砕く！！！」

そうさ、例え首だけになってしまったって、その残る顎で奴の喉元を引きちぎってやる。

ジャンを振り上げ斬りかかり、奴は槍で切り結ぶ。
お互い魔力で生み出された刃は、まるで硬質な金属がぶつかりあうような音を立てて弾き、幾重にも渡る剣戟の交差が始まる。

賭ける物はお互いに命。
譲れぬ物はお互いの想い。

「俺は……。」
「我は……。」

一際大きく金属音を立てて力がぶつかり合い、拮抗する。

「「負けねぇ！！」」

四十七話　己とまみえる時（後書き）

最近、欠陥者の示す道の序盤を書きなおしたい衝動に駆られて困っています。

ただ、今現在執筆している章を終わらせてからじゃないと、なんともスッキリしないし。

冒頭を見て、「いやぁん!!もう、何この駄文!!」という感情に襲われるし、どうしたらいいのよ。

助けて、みんな。

あ、それと、ツイッター始めました。

例の如く逆流王子で検索していただけると見つかるかと。

うむ、今日はこれぐらいかな。

解散

四十八話　自分と向き合え（前書き）

明らかに執筆が遅れていてすいません。

これからもっと執筆が遅れる事になるかもしれません。

ご容赦のほどお願いします。

四十八話　自分と向き合え

エル、なのはは自らと向き合い、それぞれの想いと共に戦闘を始めている。
しかし、この海鳴を包む結界の中で、自分と向き合っているのは、その二人だけではない。

「ハーケン、セイバー！！」

二人の少女が、闘っている。

一人はフェイト。
相棒、バルディッシュを振りかぶり、自らの魔力を振り放つ。

「光翼斬！！」

その斬撃を受け止めるのも、フェイト。
いや、やはり彼女に良く似た、他の何か。
容姿は同一。違うのは、美しい金色ではない、鮮やかな青い髪。

そんな二人が幾度も交差し、攻撃を交える。

その様はまるで金と蒼の閃光のぶつかり合い。
どちらも、スピードに特化した魔導師である故の戦闘展開。

息もつかせぬ戦闘の中で、蒼の閃光が嗤った。

「どう、僕の力は？」
「ち、ちからっ？」

フェイトは歯を食いしばり、更なる一撃へと力を込める。
正直、目の前の敵の話など、聞いている暇などなかった。
一度、ガキンとデバイス同士がぶつかり合い、お互いが吹き飛ばされる。
次いで、また突撃、交差。

ガキン！！

「僕の力は、ただ早いだけじゃない。こんな街を一瞬で壊せるくらいに、強い！！」
「さ、させないっ！！そんなこと！！」

ガキンッ！！！

「でも、気付いてる？」
「な、にをっ！！」

いい加減、無益な会話を続ける事に苛立ち始めていたのか、フェイトは今までよりも、深く、強く、力を込める。

「それと同じ力を、君が持っているって事。」

いざ、その言葉を聞いた時、

「……え？」

彼女の全てが止まった。
動きも、速度も、振りかぶりも、溜めも、思考も。
もしかしたら、心臓すらも止まってしまっているのかもしれなかった。

「ホーム、ラァン！！！」

金の閃光の時が止まるのを知っていたのか、蒼の閃光はまるで野球のスイングのようにデバイスを腹部に目掛けて振るう。

それを、なんの反応も無しに受け止め、背後のビルに埋まるほどに吹き飛ばされる。

「見たか！！これが僕の、君の、力だよっ！！」

デバイスを瓦礫舞うビルに突きつけ、宣言する。
数秒置いて、瓦礫の粉塵が晴れると、その中からビルに身を埋めた金が現れる。
下に俯き、その表情は窺い知れない。
だが、その辛うじて視認できる唇が、震え動いているのはわかった。

「……しは……んじゃない。」

「なに？聞こえない。」

「私は！！！そんなじゃない！！！」

金の閃光が弾け、蒼にぶつかり弾き飛ばす。
そこからまた、まるでパチンコ玉のピンボールのような戦闘が再開される。

「私は、自分の力を、そんな風に、使ったり、しない！！！」

必死に必死に、一撃一撃、全力で振りかぶる。
その表情は必死と言うよりは、憤怒。
認めたくない真実を、叩き折るかのような表情。

「そんな風にって、どんな風さ！！」

対する蒼も、全力で迎え撃つ。

「他人を、傷つける、為にっ！！」
「だったら、自分は何のために、力を使っているのさ！！」
「友達を、大切な人を守るためっ！！」
「僕達は、自分の、居場所が、欲しいだけだっ！！」
「それでこんな力を使うのっ？！！」
「自分は、どうだったのさ！！」
「！！！」

また、金の動きが鈍る。
その隙を逃さず、蒼はデバイスを振るい、その身を打ち据える。

「ぐっ！！」
「自分だって、母親から褒めてもらいたくて、居場所が欲しくて、
奪い続けていたくせにっ！！どうして僕達を今更、否定するんだ！
！！」

「だからって……だからって……。」
「自分は他人から奪って、その居場所に居るくせに、僕たちの居場所すらも奪おうとするのか！！自分の居場所は、僕の居場所はどこなのさ！！！」

ブスリ、そんな音を立てて、彼女の言葉はフェイトの胸に突き刺さる。それも、深く深く。

たった一人の母親を失い、家族と呼べる家族だけはアルフだけになってしまった自分。
行く宛ても無く、ただ泣きじゃくるだけだった自分。

『一緒に、住む？』

そんな自分に手を差し伸べてくれた、女性がいた。
彼女は血も繋がっていない自分を、本当に大切に世話をしてくれた。
その女性の子供で、彼女と本当に血の繋がった息子もそうだ。

『よかったら、私の娘に、ならない？』

どうして、そんなに泣きたくなる事まで言ってしまうのか。
自分にはまだ『はい、お母さん』なんて呼べる勇気も無くて、返事すらも返せずただただ迷っているばかり。

「けど、パパは僕の事を見つめてくれた。必要だって言ってくれた！！僕の居場所は、パパの傍だけなんだ！！！だから、パパの望みも、想いも、伝えてあげたい。」

……自分の居場所は何処なのか？
わからない。まったく。

『人間ってのは簡単に壊れるぞ。一人で生きて往こうとしてる奴ほどな。』

今なら、その言葉の意味が、わかる。
もう既に、自分は壊れてしまいそうだと言うのに、これから先どうやって生きていく事が出来るのだろうか。
その分、目の前の自分は、自分の力で迷わず居場所を作ろうとしている。自分が迷って手に取る事が出来なかった、差し伸べられる手を、取って。
こんなただ迷っているだけならば、むしろそうした方が正しいのかとも、思ってしまう。

しかしそれは、無差別の破壊を肯定してしまうという意味も持つ。

「あ、あ……。」

わからない、本当にわからない。
自分は誰なのか。何処にいるのか。
自分は本当にこの海鳴市に足を立てて存在しているのだろうか。

「やっぱり、パパの言う通りだったよ。」
「？？」
「僕は、君は……心が孤独で、一人きりだと『脆い』って。
僕の父親で……君の想い人の言葉だよっ！！！」

「あ、あああああああ！！！！！」

悲しき運命を背負った少女は、ただただ迷う。
道を探す事もせず、ただ迷う。

そんな迷子から、抜け出せる訳も無かった……。

更に、自分と向き合うもう一人。
いや、一組と言うべきか。

一丸となって闇の書の反応に向けて移動していたときに、突如として現れた反応。
その後に現れた人影。
はやてとそれを守護する二名の騎士は、驚きに目を見張り、呆然とする。
その後ろのリインフォースは悔しさと後悔から唇を噛むばかりである。

「……あれが、うち？」

「なんとも理解が鈍重だな、小烏。その程度だから書の主も務まらんのだ。貴様ら程度では我だけで相手は十分……だ！！！」

力んだ語尾と共に撃ち下ろされる砲撃。
ザフィーラは素早く反応し、はやてを抱えて射軸から抜け出し、そ

れ以外もそれに続く。

撃ち出された魔法は、純粋な魔力による単純な砲撃だったが、単純な故に規格外な砲撃だった。

結界内とはいえ、標的を失った魔力は地面をえぐり、砕き、一瞬にして悲惨なクレーターを生み出した。

「逃がさん！！！この、塵芥が！！！」

追い討ちをかけるように数々の魔法陣、スフィアが展開され、雨あられの如く振り下ろす。

直線の砲撃があれば、誘導型の魔法もある。数え切れないほどの種類の魔法が、それこそ無尽蔵に襲いかかる。

その数々の魔法の中には、エルのレーザーやボルテッカー、さらには燃費の悪さにおいても一級のゲイザーも含まれていた。

これほどの魔法を一挙に扱う魔力。怪物と言っても違いはない。

「ちっ！、主を頼む！！！」

回避し切れないと判断したのか、はやてをシャマルに預けザフィーラは自らの結界を張り、全員を護る。

「はっはっはぁ！！！卑しい獣が我の魔法を受け止めきれるかな？！！」

「受け止めて……みせるっ！！」

無数の魔法がザフィーラの障壁に当たっては弾け、掻き消える。

一つ一つの魔法を弾くたびに、ザフィーラの顔が歪むが、顔が歪むたびに四肢には力が更に込められ、堅く主を守護し続ける。
その姿は守護獣と言う名に相応しい姿。
まるで一つの岩と化したかのように、障壁は揺らがない。

「……フン。」

思い通りに倒れないのに興を削がれたのか、まるで呆れたように息をつくと、一時魔法の射出を止める。――――――――――スフィアや魔法陣はそのままでいつでも攻撃再開できるようにしたまま。

「……どうした、もう来ないのか？」
「ハッ、駄犬。その笑った膝でよく吠えるな。」

ザフィーラは精一杯に意気を張っても、それが虚勢である事を見抜く。
ザフィーラ本人も必死に隠しているが肩は上がらず、言う通りに膝は笑っている。次が来れば耐えられないことを、知っている。
シャマルが近づき、回復魔法を使用するが、それを見ていて手を出すことも敵はしない。
それほどの余裕ということか……。

「あまりにもつまらん。これでは父上が奴を殺す前に、我の目的が達成してしまう。」
「……父上？奴？」

リインフォースが、ポツリと呟く。

彼らの目的なんていう最重要項目よりもまずその言葉に、リインフォースは危険を感じた。
というより、それが元凶であり、全ての戦いの終着点だと直感している。
奴と言う意味はもしかしたら……。

「目的ってなんや！！」
「言う必要などないわ。子烏。それよりも、そこの人形。」
「なっ、私か。」
「いたく父上という言葉に反応していたが、どうした？」

リインフォースを指名し、ニヤニヤと笑いながら質問を投げかける。
あの笑みは、自分が考えている事とどういった質問を返してくるのかがわかっている笑みだ。
手のひらの上で転がされているような気がして酷く腹が立つが、自分は質問せずにはいられない。
例え、手のひらの上であろうとも。

お前の父親は、エルンスト・アルカトラスなのか、と。

「……あ…。」

ただ、言おうとして、踏みとどまる。
視界には、エルの動向など露も知らないはやてとヴォルケンリッター。

この質問をしてしまえば、すぐにもエルの事実が明らかになってしまう。
……それは拙い。

嘘をついたツケがこんなにも早く回ってくるとは……。
リインフォースは一人唇を噛み、結局質問など出来なくなった。

リインフォースの事情を知っているのか知らぬのか、はやてに良く似た少女は更に表情を歪ませる。

「聞かないのか？早くしなければ、父上が『自分』を殺してしまうぞ？」
「それはっ！！」

言うな。
そう言う前に言い切られた。

父上が自分を殺す。
それは、その父上が、また誰かのコピーであると言う事を宣言したようなものだ。

「っ！？アンタの父親も誰かのコピーなんか？！」
「さて、それはそこの人形にでも聞いてみたらどうだ？案外知っておるやもしれん。」
「本当か？……リインフォース。」
「それは……。」

ダメだ、言えそうにない。
本当の事も、真実を覆い隠す嘘も。
それだけではない、自分の動揺、表情を隠すことも……できない。

そんな進退窮まった状態のリインフォースに、あのコピーは最悪のヒントを告げる。

「まぁ、あの不完全な左腕と、使い物のならない臓腑ではそう保つはずも無いが。」

「左腕……まさか……！！」

「エル……なのか？！」

「くっ！！」

ついに、真実にたどり着いた仲間達。

リインフォースはついに堪えられなくなり、顔を俯け、手で表情を覆いながら膝をつく。

それは、仲間達の質問への、この上ない肯定でもあった。

「ふ、フハハハハハハ！！！やっと気付いたか！！その通り、我の父上と戦っているのはお前たち塵芥共の心の主！！名をエルンスト・アルカトラスという者だ！！」

「どうして、そんなところにお兄ちゃんがおるんや！！！」

「知れた事。抜け出したからに決まっているだろう。治療施設から、そこの人形からもな！！」

「！！……リインフォース、知ってたんか？」

はやての声が、静かに、今まで聞いた事がないほどに低くなる。

「……はい。」

「最低や。」

一言で、切り捨てられる。

それはリインフォースの心を、見えない刃となってズタズタに傷つける。

「うちより、お兄ちゃんの傍に居て、うちよりお兄ちゃんの心に居て、そないなくせにお兄ちゃんを守れないなんて！！！」

「それは……。」

「無いわけないやろう！！うち達『部外者』から見てればわかるんや。うち達では入れない所に、二人が、リインフォースが居るって言うことが！！それをリインフォースが一番理解しておらへん。それが最低って言ってるんや！！！」

「はやて……。」

はやては前を向いたまま叫び続けている。

はやてより後方にいるリインフォースでは、彼女の表情を見る事は出来ないが、彼女の頬に光るものが見えた気がした。

「……はよ行け。」

「え、……どこに？」

「お兄ちゃんの所に決まってるやろ！！」

「それでは、この影相手は……。」

「うちらで十分や、リインフォースの助けなんかいらへん。うちの始末はうちでつけたる。」

今のはやての言葉には、何者も寄せ付けない強制力がある。

「ただ一つ、いうことがあるねんけど。」

小さいけれど、とても強く、とても孤独な背中を見せたまま告げる。

「絶対にお兄ちゃんを連れて帰ってきてな。もし連れて帰ってこれへんかったら、一生許さへん。」

それは精一杯の彼女の強がりだったのかもしれない。
どうしてもどうしても兄を救いたい。自分を救ってくれた兄を、自分の手で助けたい。
しかし、それを為すべき存在が兄には、存在してしまっている。

どこまで行ったって、自分は『妹』なのだと理解してしまって……。
……。

自分で幸せにできなかったのだから、せめてお前が幸せにして見せろ。そうしなければお前の居場所が許せない。
兄を救うべき存在に向けられた嫉妬にも近い、強がり。

「わかり、ました……。絶対に、絶対に、救ってみせます!!守ってみせます!!……幸せに、してみせます!!!」

だから、自分もその強がりに、強がりで応えてみようと思う。
自分で本当に良いのか?自分が傍にいて本当に良いのか?
疑問は未だ晴れないが、ほんの少し、ほんの少しだけ、自信を持ってみようと思う。

そう、窮地の彼を救いに行く程度の自信ぐらいは、持ってみても良いはずだ。

自らの黒い翼をはためかせ、飛び上がる。
目的地は、もっとも闇の書の反応が強いところ。
正確に言うならば、闇の書とは似て非なる反応がもっとも強いとこ

ろ。

はやて達から離れるとき、ふとはやてのコピーと目が合う。
コピーは陰湿で尊大な笑みをこちらに向けている。
そんな笑みに、こちらも笑みを返した。
もう、騙されない。操られない。翻弄されない。

――――――――更に、前を行く速度を強める。

私を変えて良いのは、私を愛してくれる人だけだ。
同様に、私が変えて良いのは、私が愛した人だけだ。
それ以外には、誰にも変わらせない。変わってなるものか。

――――――――前方に、一つの人影が。

例えそれが……。

「止まれ、私。」

――――――――自分自身であったとしても。

四十八話　自分と向き合え（後書き）

二月

二月と言ったらバレンタイン。

バレンタインと言ったら、バレンタイン特別短編でしょうが。

期待している人がいるかどうかはさておき、乞うご期待！！

バレンタイン記念短編（前書き）

本編書けよとかツッコミなしな。

いいか、絶対するなよ！！絶対するなよ！！

エル「芸人？」

芸人じゃねぇし！！！

バレンタイン記念短編

二月十四日

ある者に幸せと甘い時間がもたらされ、またある者には虚無と絶望がもたらされる優しくも冷徹な日。

世間はバレンタイン一色である。

バレンタインにチョコを渡すと言う風習は、大手菓子企業の陰謀だと言う話はさておき、これは時空管理局において巻き起こったお話。

「よ～し、今日の稽古終わり！！！各自しっかりと体調管理して、風邪を引く事が無いように。」

エルンストの掛声と共に、一斉に敬礼を返す局員達。数にして二桁に達成するかどうかほどの人数。

三十を超えるであろう男性から、二十歳に満たないであろう女性まで、その年齢層は広い。

これは執務官志望の局員が参加し、共に練磨しあう自主的な訓練会。別に誰が言い出したわけでは無い。いつごろから始まったのかもわからない。

共に執務官を目指す者同士が、お互いを高めあう目的で始め、いつしかこれほどの規模にまでなっていた。

受験は戦争。僅かな席をめぐり潰しあうイス取りゲームであると言うのに、これは異常な事と言える。

だが、ここに一つの共同体として確かに存在していた。

誰が言い出したかはわからないが、その中心にエルがいる事は確かだった。

「よし、解散。」

全員の敬礼をしっかりと確認した後、エルが解散を告げると、それぞれが自分の支度を済ませ、訓練所から出て行く。

その中で一人、流れに逆らい、エルに近づく者が一人。

「ふん、こってり絞られグデグデって所だな。ティーダ？」

「たは～、師匠。俺、本当にこの訓練に参加してていいんですか？なんか明らかにレベル違うんですけど。」

「まぁ確かにレベルは違うよな。お前はまだまだ未熟だし。」

「ひどいっ！」

「でも、確実にお前の為になってるよ。例え動きについていけなくても、その動きを捉える眼力を鍛える訓練になるからな。……なりたいんだろう？執務官。」

「なりたいけど……何年先になるのやら。」

すこしおどけて答えてみせる青年の名前はティーダ・ランスター執務官志望の空士であり、未だ若く荒削りな部分も目立つが、将来有望な仕官だ。

歳も近いと言う事もあって、知り合ってすぐに意気投合した。

それにクロノが加わり、局内で共に行動する事が多くなり、管理局の三青年なんてからかわれる事もあるほどだ。

時に、二人がエルンストの腰巾着なんて呼ぶ者も居るが、当の本人たちは、エルの腰に居られるのなら本望だと言い切るほど。

エリート中のエリートで執務官であるクロノ。クロノよりも年上であるのに、執務官志望のティーダ。

お互いに隔たりがないわけではなかったが、その間にエルが挟まる事で、実に特異なトリオが完成したわけだ。

お互いに軽口を叩き合いながら、揃って訓練所を後にする。

二人が向かった先は、一応時空管理局本局へ。

一応報告書を提出するためである。

一応そこの食堂で昼食も済ますつもりで。

「ね、師匠。明日が何の日か、気付いてるでしょ？」

「明日？まず今日何日だっけ？」

「きょ、今日の日付くらいは覚えときましょうよ。」

「え～と、……あ、ああ？十三日…？」

「ちなみに、昨日の夕食、聞いていいですか？」

「牛フィレ肉のグリエ　赤ワインヴィネガー風味のソースで。あっ、

ソースでまでが名前な。」
「それが言えるのに、どうして日付が言えない……?!」
「あれは旨かった……。」

本局の廊下で、エルに立ち塞がるように横から身を乗り出してくるティーダ。
その目はいつになく真剣で、若干エルが気圧されていた。
というより、正体不明な気迫に引いていた、と言う言い方が正しい。

「明日はヴゥァレンタインドゥェイでしょう?!」
「あ〜、聖徳太子の誕生日だっけか?」
「なにそれこわい。」

まったく、とエルは呆れたように話を戻す。

「だからどうしたよ。俺たちには関係ない話じゃないか。くれる人なんていないし。」

「む?」
「ん?」

同時刻、八神家。

「どないしたん。リインフォース。」
「いや、なにか聞き捨てならない言葉を、誰かが言ったような気がして……。」
「あ、リインフォースもそう思う？うちもや。」
顎に手をあて、思案する二人。
「はやて、考えてないではやくチョコ作っちまおうぜ！！！」
「あ、ヴィータ。せ、せやな。お兄ちゃんが帰ってくる前に片付けなあかんしな。」
いきなりチョコをプレゼントして、エルをびっくりさせようとしている八神家一同であった。
完！！
「あれ、なんか鳥肌立ってる。」
腕を巻くって確かめて見る。
うん、確かに鳥肌が立っている。
さっき一瞬命の危険すら感じた、気がする。
「ま、まぁ恋人が居ないのは確かですけれど……べ、別に期待

していたっていいじゃないですか……。」
「お～い、ティーダ？」
なんか先程の言葉が深くにヒットしたらしく、ティーダは俺に背中を向けてブツブツ独りで言っている。
期待って……何をだ？
居ないもんは居ないだろう。
「だ～れだっ。」
失意のティーダが写っていた視界が暗闇に閉ざされる。
「リンディさん……悪戯好きですね。」
「あら、即答ですか？」
パッと手を放すと、年齢不相応の笑顔がティーダの替わりに写り込む。
まぁ……ティーダが写っているより、何倍も俺得だよな。
「昼食ですか？」
「はい。ティーダと一緒に、ってあんな状況ですけど。」
「本当に仲が良いようで安心するわ。いつもいつもクロノがお世話になって……。」
「え、いや、別にお世話ってほどの事は、何も。」

本当にしている意識は無いんだな、これが。
逆に俺のどんな行動がクロノの為になっている事やら。
ただ一緒に馬鹿やってる俺とティーダを見て、苦笑いしているだけなのに……。

「あ、リンディ提督、お疲れ様です！！」

ようやく復活したティーダが、リンディに軽く敬礼。
それを笑顔で返すリンディさん。
うむ、今日も美人だぜ。

「ティーダさんもご苦労様。とりあえず、明日が何の日か知ってますか？」
「はい、勿論！！！」

ティーダは目と鼻の位置にまでリンディに寄り付き、返事をする。
そんなティーダを強引に引き剥がす。

なんでそんなに近づいてんじゃ、うらやm……忌々しい。

「なんですか？その質問は最近のトレンドなんですか？」
「え？まぁ、トレンドと言えばトレンド、かしらねぇ？」
「そうなのか～。」

とりあえず、相槌を打っておく。

話に置いてかれるのは嫌だからな。

「ふふっ、お二人なら、私がプレゼントしなくても、引く手数多でしょうけどね。」
「いえ!!是非ともリンディさんからも欲しいです。」

今度は目と鼻の位置に到達する前に、頭を掴み、強引に元の位置に戻らせた。
なんだこの速さ。訓練の時に出して欲しいよ。この速さ。

それよりも、リンディさんの言葉が気になった。
プレゼント?引く手数多?まるで身に覚えがない。

「あの〜、何が明日貰えるんでしょうか?」

ピシッ!!!

あれ?なんかひび割れる音が聞こえた気がする。
気のせい?

「なにって、チョコレートでしょうがぁ!!!」

「あがががが」

ティーダが俺の襟首を掴み、前後に激しく揺さぶる。

なんだこの迫力、速さ。訓練の時に出して欲しいよ。この迫力、速さ。

「バレンタインといったら、女性が意中の男性にチョコを渡すのが、常識なんですけど……まさか、貰った事無いんですか？」

リンディさんからありえないといった表情のお言葉を頂く。

いや、だって……。

「バレンタインのチョコって、母親から貰うもんじゃないんですか？」

空気が、凍った……？

バレンタインのチョコ。
それは遠い記憶、もはや無いに等しい磨耗しきった記憶の中で、母親と思しき女性がこちらにチョコの包み紙を手渡す覚えしかない。

ティーダには母親は居ない。
俺にも母親は居ない。

だから、貰いたくても、貰えないもんだ。バレンタインのチョコレート。

そう思ってた時期が、僕にもありました……。

噂とは恐ろしい物である。
このエルの発言は、以前からエルへと意識を傾けていた女性局員たちの間を、瞬く間に駆け巡った。

どれほど瞬く間かと言うと、次の日に、全員がチョコの準備が整うくらいには瞬く間であった。

エルは幼い頃より、無限書庫で知識を蓄えていた。
故に、その知識の深さは計り知れない物であるのだが……
どうしてもバレンタインやクリスマスなどと言った世俗的な知識は、辞典や本で得られるような堅苦しい情報だけだ。

例えば、今年の流行語大賞であったり、今年のミッドレコード大賞であったり、果ては紅白歌合戦の出場歌手まで。

そういった知識はからっきしなのだ。

と、言うよりそんな情報と触れ合う機会が、そうそう無かったりする。

仕事と、出張と、ゲーム。
彼の生活サイクルはそんなところだ。
だから、世俗的な知識は、ゲームだけが発達している。と言うよりそれしか無い。

それがエルの恐ろしさでもある。

今までにも二月十四日は何度も巡ってきた。
しかし悲しいかな。
ロストロギアの特務や、一日ゲームで部屋に篭りっきりなど、今までのバレンタインは女性に遭うことすら無かった。
わざわざエルの個室に乗り込んで行くほどに、勇気のある女性も、居なかった。

結局エルに渡せず、廃棄処分や涙を流しながら自分で食し、始末されたチョコは数知れず。

そんな女性たちに駆け巡った、今回のエルの発言。

女性たちのエルへの気遣いと気まずさは、欲望と闘争心に姿を変えた。

「こりゃ、チョコをチョコで拭う、とてつもない戦争が巻き起こるぞ。」

とは、ティーダの談。

そして、それは現実となる。

朝。

「おはよう、お兄ちゃん！！早速やけど、はい！！」
「あ、バレンタインのチョコって奴だな？わざわざありがとう。」
「アタシからはこれだ！！」
「私は…」
「わ（以下略）

八神家での女性人からのチョコ。
ここまでは別に良かった。
彼女たちは大切な家族だし、純粋に嬉しかった。

リインフォースが見えないのが、ふと気になったが、朝の出勤の忙しさに飲み込まれ、そんな考えはすぐに吹き飛んだ。

しかし、やはりと言うべきか、管理局に到着してからが、酷かった。

「あの……。」
「あの、」
「これを……。」
「チョコを……。」

息をもつかせぬ、ハイスピードバレンタイン。

上司から、後輩から、一度会っただけの人から、名前も覚えていない人から、もはや顔すら見た事が無い女性まで。

……正直、恐ろしくなった。

「なんだ、これは。」

助けるように呟いたが、隣に居るティーダは死んだ魚のような虚空の瞳で「どうせ俺は義理だよ。師匠のついでだよ。布石だよ。」と呟くばかりである。

こちらはもう、両の手では抱えきれないほどのカカオの固形物質を抱えている。

みると、ティーダもそう見劣りしない数を抱えているようにも見えるが、どうやら本人は納得が行かないらしい。

「だって嫌じゃない?!お近づきの布石だよ!?ついでだよ!!」

「もしかしたら、お前が目的かも知れないだろ。」

「いいや、目を見ればわかります。あの熱い視線、頬まで染めた笑顔!!対して俺に向けられる、感情の無い目、事務的な笑顔!!」

遂には隣で力説しだす部下すら恐ろしくなり、自らの執務室に逃げ込む。
そして、恐ろしさから目を逸らすように、執務卓の引き出しに全てのチョコを押し込んだ。

「忘れよう、全てを忘れて今日は仕事に打ち込むんだ。」

そうしてデスクワークを開始する。
全てから逃げ出したい一心で。
いつもより仕事がはかどっているのが、とてつもなく悔しかったのを覚えている。

「……もう、昼時か。腹減ったなぁ。」

生憎と今日は弁当を持ってきていないし、食堂に行く気にもならない。
行けばまた恐怖に襲われることに違いなかったからだ。

ちらり、と引き出しに視線が行く。

この部屋にある食料はこれだけだ。

かといってこれだけで腹を満たすのは、嫌だ。生理的に無理だ。

もしそんな事をしてしまえば、一生カカオを受け付けない体になってしまいかねない。

それだけは勘弁だ。

ひとり卓上で唸っていると。

「エル、居ますか？」

女性の声が聞こえ、ビクリと体が跳ね、ドアに向かって身構える。

もはや女性恐怖症になりかねない勢いだが、先ほど聞こえてきた声を、しっかりと記憶と照合させる。

「……リインフォースか。いいぞ、入っても。」

「失礼します。」

リインフォースが部屋に入ってくる。

取り敢えず、手に持っている袋に目が行った。まさか……。

「あの、その袋は一体……。」

「あ、これを届けにきたんです。」

袋から取り出した物は、丁寧に布に包まれた箱のような物。

それを受け取り、眺める。

「……弁当？」

「はい。はやても皆も、チョコ作りで忙しそうだったから……

……私が自分で作って見ました。一人で作ったので、時間も掛かってしまいましたが。」

ああ、それで朝の時姿が見えなかったのか。

忙しくて、そうキッチンも見ずに家を出ちまったからな……

……。

いや、悪い事をしちまった。

「味の方はちょっと自信無いですけど……。」

「いや、頂こう。」

机の上に広げ、舌鼓を打つ。

見た目、味、どちらも完璧に近い。

肉だけでなく野菜も満遍なく入っていて、栄養バランスも考えられている。

「ああ、旨い……。」
「そんな、嘘を言っても…。」
「嘘じゃねぇよ。本当に旨いんだ。」

褒められた事が嬉しかったのか、恥ずかしそうに顔を俯ける。
なんだその仕草。破壊力、結構あるぞ。

可愛かったから、しばらく眺めていると、リインフォースの表情が暗くなる。

「……どした?」
「ごめんなさい。お弁当を完成させるのに夢中になってしまって…
……チョコを仕上げるのを忘れていました。」
「チョコ?」

はい……、と本当に申し訳なさそうな顔で沈むリインフォース。

「……はっ!!どうでもいいよ、そんなこと。」
「そ、そんなこと?」
「おう。お前が俺に気を利かせて、弁当を持って来てくれた。それがとんでもなく嬉しかった。少なくとも、今日貰ったどのチョコよりも嬉しかった。」
「本当……ですか?だって、普通のお弁当、ですよ?」

首を傾げながら、確かめるように問いかけてくるリインフォースが

可愛くて、つい手が彼女の頭に伸びる。

イカンな、この手癖。じきに矯正しなければなるまい。

俺はもう一度自分の席に座りなおし、箸に手を伸ばす。

弁当箱には、まだおかずとご飯が詰まっている。

まだまだ昼食は楽しめそうだった……。

欠陥者はやはり欠陥者。

どれだけ状況が変わろうと、その事実は変わらないらしい。

今も、バレンタインにチョコではなく、そう特別でもない弁当を貰って喜んでいる。

異常と呼ばれても仕方は無い。

ただ、彼女の愛情と気遣いを受け止められるのであれば、異常者でも、欠陥者のままでも良い。

そう実感するエルンスト・アルカトラスであった。

ところで、リイン？お前の昼飯は？

あ

ははっ！……ほら、イスならもう一つここにある。一緒に食おうぜ。

し、失礼します……

ほら、口開けろ。はい、あ～ん

バレンタイン記念短編（後書き）

リインフォースオチ乙

最初は、『バレンタインと思って、誰かと甘い展開になるとでも思ったか？
騙して悪いが、ノンスイーツなんでな』　がコンセプトだった

どうしてこうなった。

最後に

あくまで特別短編。
本編と違ってあんまり気にしないで……

四十九話　戦闘饗（前書き）

間を空けてしまって、本当に申し分けない。

今年度の用事はあらかた済ませたので、更新速度を復旧させます。

四十九話　戦闘衣

「やはり、私にもコピーが存在した、という事……か。」

「コピー？やはり、私はまがい物であったか。」

感情のない、抑揚のない返答を交わし、二人のリインフォースは拳を構える。

姿かたちがまったく同じがとった、まったく同じ構え。

それは二人のリインフォースが対峙しているというよりは、間に鏡が入り込み、一人のリインフォースが反射されているような錯覚に陥る。

「私が真偽か、ここがどこか、どうして生まれ出でてきたのか……その全てがわからないが……不思議と、自分の役割はわかっている。」

「押し通る。私はもう、自分に負けない。負けられない。」

その言葉を合図に、拳を交わす。

しかし、打ち合うたびに、一方の彼女の一撃のが、重みと鋭さを増

していく。
そうしてもう一方の彼女が追い詰められていく。
姿は同じ。自らの力と技量もまったく同一。まったく同じ存在であるはずの、彼女たち。
それであるのに、この徐々に差が開き始めるこの戦闘。
この二人の違いは……。

「どうして、一撃が、重くなっていく……？」

「もう、自分には負けないと、言った！！」

力を込めた一撃が、バリアを貫通し、吹き飛ばす。

「今も、自分と向き会ってそれを乗り越えようとしている家族がいる！！その家族の思い、家族への想いがあるかぎり……私は振り向かない！！」

今までで、最高速の一撃。
近づいて、ただ拳を突き出すのみ。
ただそれだけの動作であるはずなのに、異常なほどその拳は重かった。

バリアを弾き、防御をつきぬけ、その胸を貫いた。

胸を貫かれた彼女は、まるで他人事のようにその拳を見つめていた。

痛みに身を悶える事もせず、驚愕に顔を歪ませることもなく、ただ無表情で機械的に、その空けられた胸を見つめていた。

「わかった……この拳の重さは、想いの重さだったのか……。」

「はい。こんな所で止まれない。本当に救いたい、幸せにしたい人が、この先で待っているから……。あの人への想いなら、誰にも劣らない。」

「そうか。」

無表情のまま、確かめの言を残し、体が透けていく。
致命傷の胸の傷は、複製をこの現実世界から消し去るに相応しい一撃であった。
現実世界での死を、向かえている。

二人の、目と目が、合う。

「本物の私は……想いを、本当に伝えられる人と、出会ったのだな。」

「……たくさんの、家族だ。」

「よかった。……羨ましいよ、複製とは言え、私にもそんな人が……欲しかった。」

そうして、跡形もなく、消えた。

残ったのは、拳を突き出したままの、リインフォース。
瞳を閉じ、一度深く深呼吸。

「あなたの分まで……幸せになってみせる。」

リインフォースは、もう一度速く速く飛び始めた。
胸には、確固たる意思と決意を持って…。

冷たき夜風が吹きつける空に、硬質な剣戟音が響く。

同じ姿かたちを持つ男が、違う得物を持ち、剣舞を舞う。

そう、まさに剣舞。

まるで一つの演目。
まるで一つの芸術。

それほどに今繰り広げられる剣戟は、苛烈で、美しい。
しかしその剣舞の根底にある物は血を血で拭うかのような、醜く、
おぞましいまでの執念。

ただそこに堕ちて尚、自らの信念、想いを貫こうとするその覚悟は、
また美しい物なのかもしれなかった。

「ははっ、正直、驚いてるよっ！！」
「っ！！！」

額に薄っすらと汗を浮かべ、エルの写し身マニュスクリプトは嗤う。
それに対し、エルは額に玉のような汗をかき、彼の言葉などまった
く意に介せず、得物を振るい続ける。

リーチ差がある槍に対し、受け、返し、まるでバネのようにはねら
せながら、槍の懐に入るべく、肉薄する。

意に介せずと言うよりは、会話をする余裕すら、彼には無い。

もはや動いていること自体が奇跡か怪奇。
それをマニュスクリプトは驚いている、と言ったのだ。

「まさか、そのイカレタ体でここまでついてくるとは、な！！」

槍を振るい突き出された刃を掻い潜りながら、前進したエルを、今度は槍の長大な柄で横に薙ぐ。
エルは更に深く身を沈め、まるで蛇のように這い喰らいつく。

「わかってんだよ！！」

それを見越したマニュスクリプトからの膝蹴り。

それを顔面に直撃か…と思われたが、それすらも見越していたのか左腕の義手で受け流し、逆手に持ったデバイスで切りかかる。

やはりそれすらも見越すマニュスクリプト。
払われた右足でデバイスの柄を蹴り上げ、エルの刃を受け止める。

お互い同じ存在であるが故に、同じ思考同じ判断を下す。
ともすれば、戦闘が停滞するのは当然の事。

「やはりこのままじゃお前は負けだよ。何も出来ずにな。長期になって不利なのは……。」
「……がっ！！」

刃と柄が拮抗していた状態で、突然喉ものに向かって喰らいかかるエル。
顔も近く、この場で攻撃に転化できた箇所は口のみ。

戦闘判断的には申し分ないが、その攻撃手段はもはや人間の所業ではない。
獣か……手段を問わない戦闘機械。

「はっ！！まさか本当に噛みついてくるとはな！！」

マニュスクリプトは咄嗟に柄を押し込み距離を離す。
それにすらもエルは肉薄し、休む暇を与えない。

どんなに剣戟を交わしても、どんな攻め手を披露しても、結局結果は同じ。
時に引き分け、時に痛み分け、どちらにしろ展開がどちらかに有利に変動する事は無い。

……今は。

今でこそエルの体は辛うじて稼動しているが、ガラクタの体はいつ壊れてもおかしくは無い。
それこそ、今も敵の攻撃を凌ぐ一手の直後に倒れたとしても。

一向に、身を削りながらも変化の無い戦況の中で、エルの左腕が、正確には彼の左腕の義手が輝きだす。

「むっ？！」

マニュスクリプトが不審な表情を浮かべるが、すぐにその表情も消え去り、輝きながら切りかかってきた刃を受け止める。

もはや自分の体では無いと言い切るように、エルは輝く左腕を無視し剣を切り結ぶ。

真っ向からの斬りおとし。
まさかこんな一撃で仕留められるとは思っていまい。

槍で受け止めようとしたときだ。
まるで磁石の反発のように、ぶつかり合う直前に、エルは後方に剣を振り下げる。

拮抗するはずだった力が消えうせ、前につんのめる。
それは一瞬だ。次の瞬間には万事対応できる体勢に立て直す。

だが、その一瞬はエルの、己の前では圧倒的な隙だった。

エルは鋭く、一瞬で輝く左腕を額に向けて指差す。
マニュスクリプトに初めて悪寒と冷や汗が走り、理性ではなく本能が回避を指示する。

「あぶねっ！！！」

回避の命令が脊髄を通過した直後、エルの指先から槍の柄ほどの光条が飛び出す。
本能で咄嗟に首を右にずらして回避し、一息に後ろに飛びのく。
脳裏に、更に肉薄してくるエルが浮かび上がったが、流石に無理な体勢で先程の魔法を撃ち出したのか、反動で追い討ちは不可能だったようだ。

戦闘が開始して、初めてやってきた静寂。お互いの間合いと呼吸を読み合う、遠間での立ち回り。

かれこれ何分、動き続けていたのやら、そう自分に悪態をついた時だった。
ジク、と頬に痛みが走った。
触れて確かめてみると、頬が焼き鏝でも当てられたかのように、少しえぐれていた。いや、耳たぶに至っては完全に焼け落ちている。

コンディションで勝る自分が、最初に怪我を負った。

その理由は、あの時エルが『戦士』では無く、魔法も兼ね備えた『魔法戦士』になっていた事。

そうなれば、戦士としての役割しか持たぬ自分よりも、エルの方に戦況が傾くのは自明の理。

予想外……というほどでもないが、不意を突かれたのは事実。

「ははっ、俺たちは戦士の筈なんだがなぁ。いつからお前は魔導師になったよ。」

無論返事は、無い。
ただ、そのふらつく体とは反比例するかのような、鋭くギラギラと光る視線が返ってくるだけである。

「わかっているよ、お前の義手の力だろう？生身とは引き換えに手に入れた、魔導師らしい機関じゃないか。……だが、気付いてるか？」

何をだ、とでも言いたげな視線。

「お前が、体を、心を捨てるたびに、『魔導師』に近づくと言う事実。もし、その体全てを捨てたら、魔導師になれるんじゃねぇか？！」
「！？」

視線だけでわかる、動揺と迷い。
その隙を、見逃す理由など無い。

「この、人造人間、がっ！！！」

フラッシュの如く間合いを一瞬で詰めたマニュスクリプトから繰り出された蹴りは、エルの体を強かに打ち据え、莫大な衝撃を伴い吹き飛ばす。

後方には、ビル。

受身も何も取れるはずが無く、ビルにぶち当たり、轟音と噴煙を撒き散らす。

ただの一般人なら即死。

疑いようなど無いのだが、如何せん敵は人間離れした人間。
もしもがあってもおかしくない。

さて、死んだか？

マニュスクリプトは心で呟き、崩壊したビルを見つめ続ける。

そうして、そう待つ事も無く、煙の中から人影が浮かび上がる。
その人影が誰の物かなど、明白。

「まだ、死なないのかよ。本当に頑丈だな。」

カツ、カツとやけに空間に響く足音を立て、煙より標的が姿を現す。
その姿を見て、体を貫かんばかりの強大な違和感が奔った。

「……どうした、お前。」

返事は無い。
それは今までと同様。
だが、その姿が……というより纏う気、が明らかに先程より異質だった。

辛うじて足だけが体を支え、腕や腰はまるで砕けたかのようにフラフラと揺れている。
まるで動く屍。
それを証明するかのように、瞳は濁ったかのような、何も映さない死んだ目。

どんな姿でも、どんなガラクタの体でも、瞳だけはまるで獣のように輝いていたと言うのに、この変わりよう。
まさか、心までジャンクにでもなったか。
その思考が頭をよぎるが、すぐに否定した。

「最初から、お前は壊れていた。」

口に出してみて、気付いた。
自分は、圧されている。
この瀕死のガラクタに。

ただ次の一撃を放てば、仕留められるほどに弱っていると言うのに、本能が告げる、「奴は仕留められない」と。

むしろ『近づけば殺される』という、理性とは乖離した本能が、しきりに警報を鳴らし続けている。

殺せそうな奴に、殺される恐怖。
言うなれば、奴は死とか絶望とか憤怒とか、そんな汚い色全てを受け付けぬ、虚無。無色。
かといって透明でもない、理解しがたい色。

あまりにも異常で、未知数な恐怖を肌で感じた。

グラリ、と一際大きく体が傾けたように見えたときだった。

文字通り、奴は消えた。
亡霊のように、死神のように。

消えた、と認識した直後、自らの後頭部に奔った衝撃。

今度は自分がグラリと揺らぐ。

奴は背後にいる。
理屈はわからんが、一瞬で背後にいた。状況は不明瞭。
状況は不利。一旦距離を離さなければ。

そう結論付けるまでに、既に三回は後頭部、同じ所に衝撃が奔っていた。

「あああああぁぁぁぁぁぁぁああああ！！！」

槍を自分を中心にして、大きく回転させて振り回す。

今は距離がとりたい。状況を判断させたい。

しかし、首筋に奔る都合四度目の衝撃に、そんな希望は塗りつぶされた。

奴はまだ背後にいる。

一撃一撃積み重なっていくうちに、どんどんと視界が不安定でぐらついていく。

ああ、もうそんなこと考えているうちにまた三回は首を痛めつけられていると言うのに……！！

「いい加減に……しろやぁあああ！！！！」

魔力をかき集め、アサルトアーマーを詠唱する。

燃費は悪いが、今ばかりは致し方ない。

アサルトアーマー使用と共に振り返り、敵を探す。

今度は思いのほかすぐに見つかった。アサルトアーマーの範囲外の正面。

ビルの壁に身を寄りかけるように立っていた。

握っていたのは、剣ではあるが、刀身の形成されていない柄。
そしてもう片手には、きっとビルに埋まったときにでも拾ったのであろう、鉄パイプ。
あの後頭部を襲った衝撃は、あの二つの棒によって繰り出された物だと、視認してようやく理解する。

そして、やはり先程と変わらない、死んだ表情。

あんな一息吹けば飛び散りそうな顔をしていて、尚あの戦闘力。
いや、この際表情とか顔色とかは問題では無いのだ。

ただ、あの戦闘力だけが真実であり、全て。

表情も感情も無く、ただ持ち得る全ての殺戮技巧を駆使し、目標を噛み砕く。

本気だとか、不調だとか、手加減だとか、そういう次元に、今、奴はいない。

動き出したら常に１０あるうちの１０なのだ。

いや、違う。１か０なのだ。
動くか動かないか。動くときは敵を殺すとき。

その姿は……あの時と同じ。

奴はきっと、あの時の姿に戻ったのだ。

さて、どれほど前であろうか、あの絶望の闇の中の……本の中。

「そう、そうだよ！！！それがお前の本当の姿だろうがぁああ！！！」

ああ可笑しい。

本当に笑えてくる。俺が今まで何度も何度も言ってきた事を何度も何度も何度も否定してきた癖に、やっぱりお前は……。

「ぶっ壊れてんじゃねぇかぁぁぁああ！！！！」

本能の危険信号に従い、右に跳ぶ。

そして振り返り槍を振るう。

当然と言うべきか、自分の後頭部があった位置に振り下ろしたそれは、奴が放った棒とぶつかり合った。

「やっぱり俺は間違ってなどいなかった！！お前は壊れていて、殺し足りなくて、今も俺と言う標的だけを殺そうと襲いかかる、化け物！！！」

槍が弾かれたかと思った刹那に、迸る肉体への激痛。

今度は後頭部では無い。
右肘、右肩、右手首。一息に三撃。いずれも間接。
イカレた精密さと、人体破壊に合理的な打撃が体を襲い続けるが、
構わず叫び続ける。

「俺は、結局『人間の心』が作り出した『化け物の偽者』！！その
根底にあるのは、人間！！だがお前は、『化け物』が作り出した『
人間の心』だろう？俺がどんなに狂っていると言われようとも、狂
っていると理解していて狂えるうちは人間だ！！！だが、お前は、
お前の心は、人間じゃない！！！」

もはやこの台詞を言い切るのに、何度体の間接や急所を狙われたか
はわからない。
自分の目前で、攻撃を受け止めていたはずのその姿はまた消え、視
覚外からの攻撃がまた始まっている。

その動き、まさに光速というべきか、亡霊と言うべきか、それとも
化け物か。

どれにしろ、人間の範疇を超えているのは確かであり、化け物の体
を持つ自分であっても超えられないと理解していた。

ああ、可笑しい可笑しい。
化け物が、人間に蹂躙されるなんて、本当に可笑しくて笑えてくる。

その理由なんて明白。

「お前の心は、もはや人間の強度じゃねぇんだよ！！人間ってのは、どうしても本能で全てを決定する生き物なんだよ！！それに自己管理とか、修正とか存在しない、常に一方通行、絶対遵守！！だがお前は、敵をコロス。ただそのために、理性も本能もただそれのみに特化させやがって！！！もうエルンストという個人は、今のお前にはなく、ただの殺人マシーン！！それも最も性質の悪い、な。」

エルンストの戦いは今も昔も変わらない。
ハードウェアよりもソフトウェア。
そのソフトが他のどのソフトよりも一線を画す性能。故に、最強。

ただ、そのソフトウェアが、規格外。というより人外。

人間のハードに化け物のソフト。こんな可笑しい話なんてあるか。
もう既に、奴にスイッチは入ってしまった。
奴のソフトウェアはただ戦闘に特化した化け物へと切り替わった。

もうこうなってしまっては、誰も止められないし、もし止まったとしても、その時はハードが完膚なきまでに自壊して、スクラップに成り果てたとき。

だが、その時までは、この世界最凶の生物で君臨し続ける。

「っぎぃぁ！！」

どこから飛んできたのかわからない衝撃が左腕を襲う。
見てみれば、腕は肘よりかつてない方向に折れ曲がっていた。

もはや何とかしようとも思わなくなり始めているのを、自覚する。

目で追うとか、反応速度とか、そうゆうレヴェルじゃない。

まず、視界に入らない。

どう振り向いたって、どう動いたって、どう攻撃したって、奴は僅かな視界の死角に的確に滑り込み続ける。

一体どんな動きをしていると言うのか。
視界に入らないから、結局確かめようもない。

ただ速いだけでは成し得ない。直感、先読み、その他全ての技巧を最大限に駆使し、初めて可能な業。

世界最凶、決して過言では無い。

先程とは、比べ物にならない悪寒が、一瞬のうちに電撃の如く奔る。
叩きつけてくるのは、明確な死の映像。

無意識に、というか体が勝手に、誘われるように振り向いた。

見えた物は視界一杯の、なにか鉄のような無機質な、物。

あ、死んだ。
これは確実に。

本能が、奴の動きよりも速く告げた。はっきりと。

そうだ、これなのだ。

人間は結局、こうやって本能にいつも引っ張られ続ける。
悔しいが、俺はどんなに狂っていても、人間だった。

だが、その死の閃光よりも、もっと速く、鋭く脳髄に奔った、光があった。

その光の中に、三人の少女が、見えた。――――――――――――
――気がした。

「ぐっぁあ！！！」

一瞬の光が走ったせいか、俺の体はどんな無茶をしてでも、この必死の一撃を逃れていた。逃れてくれていた。

回避してから、気付く。なぜ避けられたのか。
どうして避けなければいけなかったのか。

「そう、俺はまだ、あいつら残して死ねねぇえんだよぉ！！」

皮肉かな、人間である事を辞めようとする俺を救ったのは、人間の父親の心だった……。

四十九話　戦闘糞（後書き）

キャサリン面白いお！！

三月十日には三国志９ＰＳＰ版が発売だお！！

とっても楽しみだお！！

五十話　独白

「エル！！！」

やっとたどり着いた、目的地。
嫌らしくも懐かしい気配を感じながら、リインフォースは一人の男の名前を呼ぶ。

それに気付き、ちらりと目配せをして反応する、エル。

「――――――――」
「……人形。」

だが、違う。
気付いて欲しいのは、そちらでは無い。

本当に反応して欲しいのは、煉獄の分身などではなく、自分を家族と呼んでくれたエル。

ただその背中を見つめ、もう一度叫ぶ。

「エル！！」

「――――――――――……、り、いん、ふぉース？」

まるで言語を、発声を思い出すかのように言葉を一つ一つ発し、彼女の名を呼ぶ。

「エル……！」

エルの無事に胸を撫で下ろす暇もなく、向かい合うエルは顔を苦く歪める。

「完全に堕ちたものだと思ったが――――――。人形……やるじゃねぇか、まさかＯＮＯＦＦを切り替えるとはな。」

「オン……オフ？」

「つまりは、こう言うこと、だ！！」

「っ！！」

マニュスクリプトは目にも止まらぬ速さで槍を振り下ろす。
エルは二つの鉄棒を交差させ、受け止めるが、簡単にリインフォースの元まで吹き飛ばされた。
慌ててエルの支えに回る、リインフォース。

「さっきまでそいつは、俺を圧倒していた。殺されるかと思ったほどの、まさしく化け物だったよ。……だが、お前が来た途端、人間に戻りやがった。」

リインフォースは驚きで目を見張る。
この、満身創痍の体で？完全な状態のエルを？

「……俺は、化け物、じゃねぇ。ただの人間だ……。」

「もうそんな問答はどうでもいいんだよ。結局俺たちは平行線。そう最初に言っただろ？」

「どうでもいい？なら……聞きます。」

リインフォースの問いに、聞いてみろ、とマニュスクリプトは表情も変えず続きを促す。

「どうして……こんなこと、を。」

「ああ、そうかそうか……わからないか。ヒヒッ、だからだよ。俺がお前らを殺したいのは。」

「どういう……。」

意味だ。そう言い切る前に、マニュスクリプトはエルとリインフォース二人を指差す。

「お前らのせいだからだよ。」

なに?二人の頭に同じ謎が生まれた。

「私たちは、何もしていない。そもそも結界が発声した時、まず海鳴市に居ない。」

「そういう事をいってんじゃねぇ。ぶっ殺すぞ。」

「なっ!!」

「お前らは、闇の書の主八神はやては、闇の書を否定し、切り捨てた。煉獄の書を否定したエルンスト・アルカトラスのようにな。……そんでその闇の中に、俺みたいな奴が居ただけだ。」

二人の表情が驚きで固まる。
マニュスクリプトはその表情を確かめることなく独白を続ける。

「自分自身に否定される。これ以上、苦しい事などない。ましてや、否定した自分自身が明るく暖かい生活を過ごしているとなれば、殺意なんて簡単に湧く物さ。……どうしてお前がそこに居る。【お前は俺と同じなのに】とな。」

「俺は今までずっと、お前に訴え続けてきた。お前がどうしても許せなくて、殺したくて、取って代わりたくて。だが、いつも俺だけが闇の中……。」

「けど、もう俺の事はいいんだ。ここまで続けてダメだったんだ。潮時ってもんだろう。だが、……だがな、そんな痛みを知っているから、俺は、俺はあいつらにそうなって欲しくないんだ！！！」

煉獄の慟哭が、空に、悲しく響く。

「砕け得ぬ闇?絶対の力?そんなもん、あいつらは本当は望んじゃ居ない!!ただただ自分を認めて欲しくて、一人の人間として、存在したいだけだ!!だから、今もなのは達に、自分にも自分だけの意思があると、訴え続けている。」

「あいつらでは、なのは達を倒す事なんて出来やしない。力量が同じであるのならば、後は心と……仲間で差がつく。」

ヴォルケンリッター達のコピーがどんなに現れても、それは確固たる意思を持つ三人の仲間にはなりえない。
仲間は、あの三人だけ。

「直にあいつらは、消える。打倒しようとした奴らに敗北してな。……だが、そんなことさせやしない。俺が――――、父親の俺があいつらを救ってやらなきゃ、誰が救ってやれるんだ。」

マニュスクリプトの周りに、黒く、瘴気漂う魔力が溢れだす。
ただ単な魔力では無い。あの魔力の中には……。

「人々の、怨嗟と、怨念……悪意。」

闇に人一倍敏感なリインフォースが、感じ取る。

「どうせ俺は中途半端な煉獄の欠片……いや、粉末といったほうが正しいな。そんな俺には、例えお前らを皆殺しにしたって、この一夜を乗り越える事は叶わん。朝には幻として、露と消える。……だから、俺の余力は全てあいつらのために捧げる。」

元々、これだけが狙いだったのだ。
自分の全てを賭けて、彼女たちの人生を支える。
支えるというより、人生その物を創る事が……目的。

「お前らに、彼女たちの人生を否定する資格も権利も無い！！闇の中で生まれようと、人間として意思を、感情を持っている限り、彼女たちは人で、女だ！！！お前らに、奪わせてたまるかぁあああ！！！！」

それは、かつてエルがリインフォースに言った言葉ではなかったか……。

遂に、煉獄が感情を爆発させた。
纏っていた瘴気は、吸い込まれていき、体を膨れ上がらせるように、別物の肉体を形成させていく。

背中が膨れ上がり、そこから規格外の大きさの腕。それも一本だけでは無い。

黒く恐ろしい肉塊が背中から膨れ上がり、顔のような髑髏が浮かび上がり、まるでマニュスクリプトが背負ったもう一体の化け物のような存在を創り出した。

「悲しいかな、俺は本能に引きずられてばかり。一時の感情に身を任せて、たった三人の娘を守るために、この身を投げ捨てようとしている。なんて、不合理的なことだ。……俺は、人間だった。この心はどうしようもなく人間だった。」

エルの心は、化け物だった。悪魔だった。

だったら、俺の体が化け物にならなければ、

「対等になんてなれやしない！！！」

マニュスクリプトが独白する様を、悪魔に変貌していく様を、リインフォースに支えられながら、エルはただ眺めていた。

そして、おもむろに立ち上がり、リインフォースを引き剥がし、一歩悪魔に向かって立ち向かう。

「い、いけません！！！」

一瞬呆けていたリインフォースだったが、エルが何をしているのかに気付き、またエルに張り付き、制止する。

「どけ。俺はアイツを、殺さなきゃ、ならない。」
「その体では、もう無理です！！」
「無理でも、するんだ。」
「……そこまでして彼を殺さなければならない理由は、彼を否定するためですか？」

踏み出そうとした、エルの体が停止する。
ただエルは黙る。
語りたくない、と突き放すかのように。

リインフォースは感じていた、マニュスクリプトの叫びを聞きながら。
大切な存在を守るために、立ち上がる姿。
大切な彼女らのために、自分の犠牲も厭わない姿。

そして、大切な存在のために、自分の感情すら殺す事が出来る、心。

マニュスクリプトは今まで狂っていた。自分もその姿がそのものなのだと思っていた。
だが、違った。
あれはただエルにその姿を理解して欲しくて、取っていた姿であって、彼に守るべき娘達が出来た途端、その在り方は変わった。

きっと……あの頃、狂っていると思っていたあの時でも、自分をわかって欲しくて、泣いていたんだ。

だから、リインフォースは目の前の悪魔の姿をとるエルが、もはや別人とは思えなくなってしまった。

そう言ってしまえば、エルは怒るだろうか？私を拒絶するだろうか？

「私には……彼が貴方と違う存在だとは……思えません。」

けど、口は勝手に喋ってしまっていた。
どうしても、伝えなければ、そう判っていたのだ。
ただ黙してリインフォースは、エルの言葉を待つ。

「リインフォースにそう言われちまったら……俺も否定できねぇよ。」

「エル……。」

振り返って呟いたエルの顔を、諦めたかのように薄く笑っていた。

「ああ、わかってた。俺と考えてる事が同じだとは。でも、やっぱり俺がどうしようもなく臆病だったから、肯定するのが怖かった。……でも、お前に言われたから、やっと勇気が持てた。あれは、俺だ。」

エルは自分を支えるリインフォースの手を優しく握る。

「でも、今のアイツは俺ではなく、マニュスクリプトと言う名の、闇の書の欠片の父親だ。……どっちみち、決着をつけなくちゃ、いけない。」

「！！」

「リインフォースだけでも、アイツは倒せない。無論俺だけでも、無理だ。可能性があるとしたら、また俺が闇に堕ちればいい。」

「そんなことはさせない。そのために私がここまで来たんです。」

リインフォースがエルの手を握り返す。なんの迷いも無い瞳で、エルの瞳を見つめ返す。

エルはその瞳を見て、なにかを感じ取る。

「なにか、方法があるのか？」

「私は、闇の書のなんであるか、覚えて居ますか？」

「融合騎……。待てよ、まさか。」

目を見開くエルに、ゆっくりと頷きを返すリインフォース。

「む、無茶言うな!!俺は闇の書の主じゃないし、知ってる通り魔法適正は最悪の体質だぞ!!」

「でも、同型の煉獄の書の、主です。」

「……お前に掛かる負荷も、俺に掛かる負荷も、きっと尋常じゃない。適正の合わない者同士が一つになるんだからな。どちらかが犠牲になってもおかしくないし、最悪二人の意識が混濁して一つになってしまうかも知れないんだぞ?」

「覚悟の上です。」

リインフォースは揺るがない。

エルはこれ以上の説得は無駄だと悟ったのか、視線を敵に戻す。

「わかった。確かにお前の判断は、今の手詰まりの状況では、合理的だ。……だがな。」

「はい。」

「お前とは、どうやっても一つになったりしないからな。一心同体、そう言えば聞こえは良いが、ようは二人から一人きりになるって事だ。……もう孤独は、嫌だ。」

エルはリインフォースをしっかりと抱きしめる。

今までになく、強く。存在を確かめるように。

リインフォースも最初は驚いたものの、抱擁に応え、抱きしめ返す。

「どっちかが生き残るのなんて、ＮＧだ。一緒に生きるか、一緒に死ぬか。そのどちらかだ。……そんな不器用な俺に、付いて来てくれるか？」

「貴方を支えるのは、私の役目です。今までも、これからも。」

そんな不器用な、貴方だから、私は好きなんです。

その思いは、胸に『今は』仕舞い込んで。

「……ありがとう。」

エルはマニュスクリプトに向き直る。

「……なにか策でも成ったのかい？」

「ああ。とびっきりの切り札を切るさ。……だが、その前に、お前に言う事がある。」

「何だ。」

「やっぱり、お前と俺は、少し違うよ。」

「……。」

「その違いを、これから教えてやる。」

「はっ、今更、何を……。」

エルが手を差し出し、その手に自らの手を重ねるリインフォース。
二人は、眼前の敵を見据えたまま、告げた。

「「ユニゾン・イン」」

光が、拡がった……。

五十一話　最終戦争（前書き）

このたびの「東北地方太平洋沖地震」に被災された方々
ならびにご家族、ご関係者の皆様に心よりお見舞いを申し上げると
共に
いち早い被災地の復興をお祈りして居ます

自分も軽いながらも被災者でした。
停電が続いたり、ガソリンなどの物資の不足
本当に大変な日々でした。
ある程度まで復帰したものの、未だ震源地近くの都市は復興の目処
が立って居ません

今、皆が苦しんでいます

こう言うときだからこそ、皆で協力して乗り越えて行きましょう

五十一話　最終戦争

海鳴市の空で起こった、一夜限りの戦闘饗。
自らと向き合い、信念をぶつけ合った懺悔の一夜。
三人の娘たちの行方は、父親の大方の予想通りとなっている。

フェイトにはクロノ。
はやてには、シグナム。
なのはにはヴィータが、救援に駆けつける。

クロノがエルから盗んだ魔法、未だ覚束ないムーンライトソードで腕を切り落とし、
シグナムが背後からのシュツルムファルケンで胸を貫き、
ヴィータの鉄槌がバリアを貫通し、逃げ遅れた足を押し潰した。

当然と言えば、当然の結果だ。
彼女達が孤立無援で奮闘するには、敵の数が多すぎた。
しかし、それは彼女たちもわかっていたであろう事。

「う、腕が……痛いよ……。」
「フェイト、大丈夫かい？」
「う、うん」

フェイトは、少し恐れた表情で目の前の光景を、眺めていた。
自分そっくりの人間が、腕がなくなった欠陥の姿で、蹲っている。
痛い、痛いとうわ言のように呟きながら。
……全ては、腕がなくなった激痛から来る、戦意の消失。

「あそこまですれば、もう立ち上がってこないよ。少し強引な手段だけど、どの道消える運命だからね。」

クロノは子供らしさを感じさせぬ、所謂『仕事の顔』でそう告げた。
戦いは、終わったのだ。
こんな不愉快な思いは、もうしなくて済むのだと……。

「僕達が……消える？」

そう、思っていたかった。

「そんな、わかりきった事……今更、言うなぁ！！！」

立ち上がる。どんな痛みが体を奔っているのかもわからない痛みを、抱えながら。
それは、彼女だけでは、無い。

「こ、の……塵芥がぁぁぁぁああ！！！！！」
「う、そ。」

数分違わぬ心の臓を、貫かれたと言うのに、立ち上がる。
さらに溢れんばかりの魔力を放ちながら。

「この程度……お父様の痛みに比べれば、痒くも無い。」

もはや立ち上がることなど不可能だと、誰が見てもわかるひしゃげた足で、デバイスを支えにしながら、立ち上がる。

どういった心理、どういった覚悟から、これほどの力が湧き出るのか。
三人とも既に死に体。
原動力は……なんだ？

彼女たちと相対する者は、皆一様に恐怖した。

負けられない、と彼女たちは叫びながら、もう一度向かってくる。

その死んだ体で。

「パパ……。」
「父上。」
「お父様。」

「「「自由になって」」」

全ては、父の為。
父が本当の幸せを得るために。
何の淀みの無い笑顔を、好きな誰かに見せられるように。

でも、もし出来たならば……その父の隣で、

「パパの」
「本当の笑みが」
「見たかった。」
結果など、見えている。
それでも勝ちを疑わず、自らの意思を貫き通したまま、彼女たちは
武器を手に取った。
まるで戦に生きた武人の如く戦い、
野垂れた名も無き兵士のように、死んだ。

無駄では無い。
無駄では無かったのだと、胸の内で呟いて……。

「そうか、死んだか。」

父には、わかっていた。
彼女たちの痛みが、彼女たちの想いが。

彼女たちの……最後が。

だからどうしたと言うのだ。

彼女たちが自分にどういった願いを持っていたのかなどもはや意味は無い。
自分は、自分の、意思を、目的を、貫く。

ふっと、瞳を開ける。
先程まで目を閉じていたのは、目の前で広がった光のせいか、それとも彼女達へと向けた黙祷の替わりか。
そんなことは些細なことだと切り捨て、ただ先ほどよりも穴の広がったような心で、前を見つめる。

「……ほう。」
感情を外に抜け出させるように、感嘆を挙げる。

目の前にあった姿、それはまるで天使か、騎士か。

白を基調としたバリアコートはそのままに、その下にまるでシグナム達のようなベルカの甲冑を彷彿とさせる胸当て。そして腰当。

もっともな異形は、その背中に生えている、白い、翼。
魔法で発生しているのではなく、そこに神経が根を張り、一つの肉体として『生えていた』

ただ、これらを見て、感嘆したわけでは無い。
確かに姿に変化はあれど、常識と言うか……予想の範疇。
ま、あの二人が混ざったらこうなるわな。といった程度。

感嘆させた物は、……髪だ。

脱色しきり、輝かしさというよりも老人の末期さをかもし出してい

た白髪は消え去り、彼が本来持っていた、美しく、生き生きとした艶の黒髪が、あった。

「まさか、俺との違いは、その髪だ、なんて言うんじゃなかろうな。」

「それこそ、まさかだ。俺もこうなるなんて思っているはずが無い。」

「だろうな。」

マニュスクリプトが呆れたように呟くと、また周囲は静寂に包まれた。

その静寂を強調するかのように、一時の強風が吹く。

この風は、俺たちの事など気になどしていないし、きっと自分自身、どこに向かう風なのかもわかっていないだろう。

どこ吹く風……とは、このことか。

そうさ、俺たちもそうだ。

これからどこに行くかなんてわからない。

何が良いのかなんてわからない。

ただ、だからってこれからの将来を否定するほど捨てたもんじゃないのは、わかる。

どちらも、覚悟は、十分。

手札も、切った。

あとは結果を示すだけだ。

お互い、深く、深く、外気を肺に充満させていく。
十分に肺を満たし、胸に広がった冷たさを噛み締め、次の瞬間、

「「阿っ！！！！！！」」

もはや叫び声とも言えぬ掛声を上げる。
掛声は、大気を裂き、空間を振動させ、それに伴うかのように、自らの鼓動を振るわせ、肉体に熱をもたらす。

更に、掛声と同時に発声したかのように、硬質な爆音が響く。

月の光を受けた聖剣と、悪魔を宿した赤黒い魔剣がぶつかり合う音だ。
それが何度も何度も、一切の間断がなく、継続する。

まるで一歩も退かんと主張するように、巨腕が地面をえぐり掴み、翼がはためき大気を捕らえ、超至近距離での斬撃戦が展開されていた。

その様子は、剣舞の域を超え、神話の再来。
目に追えているのは当の二人だけであろうし、まずこの現象が何なのか把握する事が出来る人物が居るのかも怪しい。

人外のソフトウェアが、人外のハードウェアを持つと、その戦いは人類の戦いでなくなると言うのは、自明の理。
神話の再来。

決して間違って居ない。

「我ぁっ！！！」
「疾ィっ！！！！！」

刹那の瞬間に、お互い引き際を見つけ、距離を取る。

エルは空中に翼を使って距離を取り、マニュスクリプトはその巨腕をビルに突き刺し、ビルを駆け上がることで追跡する。

「逃がすかよぉ！！！」
「らあああぁ！！」

エルは重力と体重も加えて急降下し、マニュスクリプトはその巨腕の握力を駆使し、ビルから飛び上がり、二人は激突する。

「はっ！！結局、さっきとあんまり変わらないんじゃ、ねぇのか！！」
「変わってる！！変わらせて、みせるさぁ！！！」

目にも止まらぬインファイトが、もう一度勃発する。
空中で、重力に引かれ、堕ちて行きながら。

「じゃあ、何が変わった!?お前は俺を倒す決定的な手札を、手に入れたかぁ!!!!!」
「おおらぁ!!」

エルが斬撃の最中、突然繰り出した、拳。
当然刃で受けて、地面に叩きつけられた。

「なっ!!」

一瞬痛みに顔を歪めるが、すぐに持ち直し、睨みつける。

「その拳……あの、人形の業か!!」

リインフォースが自らの拳に付与する魔法。
それをエルは行使し、マニュスクリプトを地面に叩きつけた。
お互い地に足のついていない戦いであったが、……なるほど、

確かに奴は翼を持ち、自分は腕だと自覚した。
相手を吹き飛ばす程度の力は、奴は空中で簡単に整えられるのだった。

「そうか、つまりは、俺たちの力ではなく……俺たちが手に入れた力の差で、勝負がつくと。」
「それもあるが……それだけでもない。……シュベルトクロイツ。」

エルの手に握られた、闇の書の主が持つ金の杖。
しかしそれは、本来の主が持っている物と、少し違った。

彼の身長に合わせた長さは当然の事として、本家の物よりも先端の意匠、鋭利な棘が長く鋭く変異していた。

「使える物は、なんでも使う……ヒヒッ、いいねぇ、その考え方は好きだ。大好きだ。なんせ俺は、お前だからなぁ！！！」
「俺は、お前と違う。それを教えると、言ったはずだ。」

右手に槍、左手に剣を持ち、エルは突撃し、マニュスクリプトはその巨腕を拡げ迎え撃つ。

その様子は、神話となんら変わらない。
悪魔と天使の最終戦争――――――――だった。

「なん……や、これ、は。」

闇の書の欠片を打倒した後、はやて達はもっとも闇の書の反応が強い場所にすぐに向かった。
一直線に向かってきたはずだったが、どうやらそれが共通の最短路だったらしく、なのは達と偶然的にも合流し、この一夜の事件に関与したほぼ全員がこの場に集結した。

ただ、到着して、愕然とした。

見慣れた海鳴の街は、完膚無きほどに破壊されていたからだ。

例え結界の中とは言え、住みなれた街の破壊された姿など、見ていて気持ちのいい物では無い。

「あ、あれを見て！！」

何かに気づいたなのはが、空の一角を指し示す。
そこに一瞬で輝いては消え、また次の瞬間には違う場所で輝く星が見えた。
あまりにも速く瞬くため、その数は数え切れないが……。

「流れ星？いや……違う、この魔力、戦場の空気は……。」
「エル……だと、言うのか？」
「いや、はっきりとは。」

数多の戦場を渡り、そしてエルと共に何度も戦ってきたヴォルケンリッター達は、戦場の空気でこの戦場にエルが居ることを、なんとなくではあるが察知した。
ただ、それでもあの瞬く星がエルであるとは言えなかった。

「エルが、あんなにも魔力を垂れ流す事が、出来るはずがない。――――いや、待て。」
「もしかして、あの体で……！？」

ヴォルケンリッター達に、最悪の事態が描き出された。
以前彼らに見せた、あの魔力を生み出す特殊能力。
あれほどの対価を支払う特殊能力を、あの体で行使してしまえば……！！

「せやけど、魔力が違う。」

はやての一言に、一様に顔を複雑に歪める。
魔力は確かに違うかもしれないが、かといってその事実を否定できる物でもなく、その逆もまた然り。

結局、場のつかめない彼らは、遠巻きに見つめるしかなかったが、

「あっ、ぶつかった！！」

戦闘を凝視していたなのはの一言で、殊更目を凝らす。

二つの瞬きはぶつかったかと思うと、浮力を失い、地に堕ち止まった。

このときにようやく、全員は星の正体を知る。

「エル！！！！」

「お兄ちゃん？！」

二人のエル。

悪魔の腕を持つ悪魔のエルと、翼を生やした天使の黒い髪のエル。

どちらのエルを本物と仮定するとしても、異変は残る。

翼を生やして、悪魔を背負って……我が目を疑うほどに、その戦いは――――――――常軌を逸していた

「お兄ちゃんは、自分の中の悪魔と戦って居るんや」

はやてが呟いた一言で、皆が押し黙る。

「だから、うち達は、見守ることしか、しちゃいかんのや。それに……相棒が一緒見たいやし。」

天使の翼……あの翼は、白くなったリインフォースの羽に見えなくも、無い。

「まさか……ユニゾン？」

「そんな！？闇の書の主でも、ないのに……。」

闇の書の同型の主であることや、融合騎であるリインフォースの肉体が煉獄の書に作られた事など、理由は様々あるが……。

「さぁ？理由なんてわからへんけど……『愛』って言うのが、一番綺麗な理由やない？」

はやての言葉に、またも押し黙る。

何が怖くてか、ここに居る全員が彼女の顔を窺い知る事は、出来なかった……。

頭が痛い
脳みそが内側から圧縮されて吹き飛んでしまいそうな錯覚。
所詮錯覚。
だけど、それぐらい痛いってのは、真実だ。

「レーザー！！」
「ルイン、クラスタァァァ！！」
「ちっ、ムーンライトォォ……！！」
「ダークソウルゥ……！！」

「「ソォォォォォォォォォォオオド！！！！！！」」

チクショウ、頭が痛ぇし、内臓が痛ぇし、どうしてこんなことしてんだ。
こんな頭痛を伴ってまで、俺はどうして今も魔法式を組み立てているんだ。

「アヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャ！！！」

いてぇなチクショウ。
痛くてムカツクから、殴られた分、殴り返す。

でも、殴っても殴っても、殴ったとこから回復して行く。
それは斬っても斬っても同じ事だ。
……なんて再生力だよ。

「それが、悪魔の力ってわけか。」
「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ぁ！！！」

あぁ、痛い。
痛すぎて、自分が誰なのかもわからなくなってきた

……あれ？俺って、誰だっけ？

「……俺は、俺はぁ！！！」
「ハハハハハハハハ、ヒャハハハハハ！！！！！」

もう体が勝手に動いてる風にしか、思えなくなってきた。

あぁ、俺と闘ってる。
目の前の俺は、心まで悪魔に取り込まれたかのように、叫び続けている。
……自分がわからなくなっているのは、俺だけじゃないって事か。
貴方の――――――――――名前は、
「そうだ、そうだ、俺はエルンスト・アルカトラスだぁぁあああああ！！！！！」
「ヒヒッ」
口が裂かんばかりに叫び、頭を何度も叩く。
「……すまない、リインフォース。お前が助けてくれなきゃ、危なかった。」
いえ、私も……あまり大差ありません。
今貴方に呼びかけられて、やっと思い出せた。

「そんな状態で、俺の名前は憶えていてくれたか……良い女だよお前は。」
「あひゃひゃひゃひゃひゃ！！！殺し！！！殺害！！！絞殺！！！抹殺！！！シネェェェェ！！！」

そうさ、これが、俺とお前の違いだ

「俺は、リインフォースのお陰で戻ってこれた。だがお前に帰る場所は、戻らせてくれる人は、いるか？」
「居ない居ないいないイナイイナイ！！ダカラスベテシンデシマエェェ！！！」

もう、見て居られない。
それは、俺の姿の奴が狂ってしまっているからか、それとも――――――。

「今、救ってやるから。覚悟しろ。」

俺の末路を見ているようで、嫌なのか。

ガチリ、と頭痛がやむ。
そう、すべてはこのときの為に。

自分を忘れかけていたときも、殴られていたときも、ただひたすらに計算し続けてきた。
勝つために。

「リインフォース、最後だ。魔力、頼むぞ。」

はい

「ガアアアアアアアアアアア！！！」
「レーザー。」

奴を囲む、十八の空間の歪みから発射されるレーザー。
マニュスクリプトはこの攻撃は効かないと本能的に察知し、防御体勢を取らず、構わず襲いかかってくる。
だが、これは、

「スパイラルシフト、ファイヤ！！！」

俺の号令と共に、三つのレーザーが螺旋を作り出すように捻れ巻き取りあいながら合体し、うねりながら命中する。
三発が一発を作り出し、都合八発が命中する。

「ガァッ！！」

螺旋を作り、ドリルのような形にする事で、単純に三発命中する以上の貫通力を生み出し、体の各所に穴を空ける。
痛みによってか、身を悶えた。その隙を、突く。

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ、らぁあ！！！」

拳にも先程と同じような螺旋を作り出し、顔面目掛け、殴る。
しかし、その拳は二本の巨腕によって遮られる。が、それでもその二本の拳を貫いたからよしとする。四本のうち、残り二本。

「伸刃！！！ムーンライト、ソード！！！」
『伸展』

突き出した右拳を引き抜き、空いた左腕に持っていた剣を伸ばし、もう一つの拳を切り捨てる。残り、一本。

「ガアアアアアァァァァァァァァァア！！！」

「お前が、本能だけの悪魔で無かったならば、もしくは最初の一手で回避していただろうにな。」
「スクウ、スクウ、ムスメタチヲ、スクウ！！！」
「なんだ、お前にもあるじゃねぇか、帰る場所が。……戻らせてくれる人は、居ないけどな。」

そう言っている間にも、傷は再生してきている。
なに、最初からわかっていたことだ。
悪魔を潰しても、核が再生させ、核を潰しても、悪魔が再生させる。
そう言う仕組みでこの悪魔は成り立っている。
ならば、そのどちらも一度に殺さなければならない。

「違うところ、一つ目、お前は結局俺の知識と人格を詰め込んだだけであって、経験や感性を取り入れた個人では無いと言うこと！！」

だから、俺が『今編み出した』魔法の攻撃に反応できなかった。
その情報が知識に入っていないから。

「そして二つ目！！！」

俺はジャンを構え、前に駆け出す。
俺だ持ちうる最高速で助走をかけ、翼で飛び上がる。

「おまえは一人ですべてを背負い込んだ!!願いも、想いも、果ては悪魔でさえも!!」

悪魔が、最後の一本の拳を振り上げる。
飛び上がってきた俺を砕くために。

「だが、俺は――!」

私たちは――!!

拳がエルを打ち抜き、上下半身にぶち分けた。ように見えた。

「「二人だぁあああ!!!!!!」」

上半身が背負った悪魔の頭部を打ち抜き、下半身がマニュスクリプトの心臓を剣で貫いた。

上半身は、リインフォース。
下半身は、エル。

一瞬でユニゾンを解除し、二人で上下に避け、それぞれの敵を貫いていた。

「あ、ッが」
「終わりだ。それで、俺の勝ちだ。」
「ああ、そう、みたいだな。ほとんど、憶えてねーけど。」

スルリ、と剣を引き抜くと、マニュスクリプトは力無く倒れこむ。
背中から現れていた悪魔は、いつの間にやら幻のように消えていた。

「願いも、娘も、自分すら捨てて、このザマだよ。チクショウ。」

拳をゆっくりと上げ、下ろし、地面を叩く。
それは、今までの姿が嘘の如く弱々しかった。

「悔しいな。悔しいなぁ。お父さんは、お前たちを幸せには、出来

無かったよ。」

エルはその姿を見て、マニュスクリプトに近寄り、抱き起こす。

「さっき言った通り、お前とは、俺と違う。」
「お前が勝ったんだ。もう、それでいいよ。」
「けど……、やっぱりお前は俺だったよ。」

エルはマニュスクリプトを抱きしめる。
マニュスクリプトは驚いたように、抱きしめられながら目を見開く。

「お前が嫌いな理由が、やっとわかった。お前は、一人だったんだ。一人で孤立しているお前を見て、そうなってしまうであろう自分が怖かったんだ。……俺がどうしようもなく臆病だったから、お前を見つめられなかったし、リインフォース達の想いにも応えられなかった。」

「けど、もうお前は、独りじゃない。本当に大切な、傍に置くべき人を見つけたんだ。」

マニュスクリプトは肩口から、リインフォースを見つめる。

当人のリインフォースは恥らうように俯いた。
このバカップルめ、なんて心のうちで呟いた。

「ああ。だから、もう怖くない。お前は……俺だ。」

マニュスクリプトは、救われたように目を閉じる。
それは安心しきった、眠るような笑顔。

「あぁ、俺は、その言葉だけを……聞きたかった。……あとは、思い残す事は、一つだけだ。」
「……なんだ。」

言わなくてもわかってるくせに、とマニュスクリプトは力無く、笑う。

「娘たちの事、頼めるか？彼女達を認め、一人の少女たちとして接し、父親として生きていく事を、頼めるか？」

「俺が父親だった娘たちだ。何があろうと守りきってみせる。……
……お前ほど父親らしく振舞えるかは、わかんないけどな。」
「ははっ、俺だってらしいことなんざしてねぇよ。ただ、言いたい
事言って、突き放してただけだ。……そんな俺でも出来たんだ。
お前なら出来るさ。」
「信じよう。」

他の誰でもない。自分が言ったことだ。

マニュスクリプトは笑い、手を中空にかざす。
彼が大切に思い、守り続けてきた娘たちへの想いが、再生される。
煉獄の書は、人間すべての心に作用する。

「お父様」
「父上」
「パパ」

「おう、この通りだ。俺は、負けちまったよ。」

彼女達が再生されているのは、その頭部だけだ。
そして、再生する父親の足元から、娘たちと割合を同じにするかの
ように消えていく。

「俺はな、自分の目的は果たしたよ。最高に気分が良い。俺の我侭に付きあわせちまったお前たちは……もういいんだ。」

「もういいってどう言う意味だよぅ！！」

フェイトの姿の子が泣きながら叫ぶ。
きっと彼女たちは今にも抱き付きたいのだろう。
だが、再生中の体がそうはさせない。

マニュスクリプトも、文字通り身を削って彼女達を再生させているのだろう。

彼女達が抱きしめられるほどに再生されているときには、既にもう……。

「俺は消えちまうが、居なくなるわけじゃない。父親は、目の前に居る。俺はエルでエルは俺だ。甘えたかったら、エルに甘えてくれ。」

「父上は、一人だけだ！！」

今度ははやてに良く似た少女が。

「だから、俺は居なくならないって。俺がエルになるだけだ。……俺の願いは、お前たちが闇の書の欠片なんて名前は捨てて、一人の少女として生きてくことだ。そのためなら何だってする。」

「本当に、お別れなのですね。」

最後に、なのはの姿を持つ子。

「ああ、最後にお前達を抱き締められなかったのが残念だが……ま、それも人生さ。」

彼女たちは足の脛辺りまで再生され、マニュスクリプトは首まで消去された。

もはや、抱きしめることも、抱きしめられることも、叶わない。

「それじゃ、な。俺。」

笑顔で語りかけてくる俺に、俺も笑顔を返す。

「ただいま、だろ？」

「ヒヒッ、そうだな。……ただいま。」

「……お帰り。」

こうして、俺は消えた。

俺の中に戻ってきたのかもしれないし、本当に消えてしまったのかもしれない。

そんなことはどうでも良い。

そんな事を考えるよりも、するべき事が、俺にはある。

俺が遺してくれた彼女達を、強く強く、抱きしめた。

「今、俺はこれぐらいしかできないから。アイツの代わりになるのかも、まだわかんないけどさ。それでも、アイツが抱きしめられなかった分だけ、俺が抱きしめてやらないと。」

彼女たちは、俺の腕の中で、泣いた。

いつまでもいつまでも泣き続けた。

――――――――ああ、お前は本当に愛されていたんだな。

やべ、俺もなんだか、意識が遠のいてきやがった。

ははっ、無理しすぎた、しな。

この眠気は、ただの休息を求める眠気か、それとも死への誘いか。

煉獄の書とのケリ。

自分自身との、ケリ。

それも決着をつけた。

「……もう、良いかな。」

どっちでもいいや、と俺は眠気に身を任せ、闇の中へと堕ちていった……。

聖夜のうちにおこった、天使と悪魔の最終戦争
この時、すべてが終わりを告げた。

五十二話　終わりはいつも突然　でもそれってなにかが突然始まるってことだ

俺は、歩いてるんだ。

どこを？　知るか。
とにかく暗くて、何も見えなくて、怖い所だと思う。

今までこの暗闇の中、ずっと歩いてきた。
どれくらいかなんて聞かないでくれ。わかんないから。

ただ、いい加減疲れてきた。うん。

「おっ、とと」

何か、右足につまづいた。
咄嗟に、左腕で地面を支えて立て直そうとしたけど、いつの間にか
左腕はひじから先が無くなっていて、そのまま転げるように倒れた。

「いちち、立たない、と？」

でも、もう体が動かなくなった。ぴくりとも。
立たなきゃいけない。そう思っていても、なんだか体は眠りを欲しているみたいで。

「なんか、もうどうでも良いかな。……疲れたし、寝よう。」

その感覚を良い事に、身を任せて俺は眠ろうとした。
もう立ち上がる必要も、歩き続ける必要も無いんだと、思いながら。

「こらっ。」
「いたっ。」

寝転がる俺の頭が、何かに小突かれた。
鬱陶しくも目を開けると、それが足だとわかった。素足。

「こんな所で寝てて良いの？」
「……だって、他にすること無いし。」

頬を膨らませ、俺を見下ろしていた少女が話しかけてくる。

「する事が無い？本当に？」

「う～ん……？ああ、用事はあらかた片付けてきた、つもりだが。」

ん？なんで俺はそう思うんだ？……考えてもわからん。よって放棄。

「は～、本人がこの有様じゃねぇ～。あの子も苦労するわね。」
「あの子って？」
「貴方が幸せにしなきゃいけない人のことよ。」
「……別に俺が幸せにしなくても、幸せになれるだろ。」
「無理ね」

きっぱり一刀両断。
手厳しいね、こりゃ。
でも、そう言われることで、逆に腹が決まった気がする。
そうか、俺でなければ幸せにできない……か。
なら、これからは、もっと欲望に忠実に、自分に嘘を吐かずに生きていける……かな？

「子供たちだって待ってる。……それに、生きたく、無いの？幸せになりたく、無いの？」
「責任かぁ。そう言われれば、弱いな。責任放棄は俺が一番嫌いなことだし。……でもな。」
「なに？」
「俺は生きて、いいのか？お前は、寂しく無いか？」

それを聞いて、少女は笑った。

「全然。」

「ふ～ん、さよか。そう言われてなんだか俄然やる気が出てきたよ。」

先程まで鉛のように重く、不動だった体が、突然軽くなる。
俺は迷わず立ち上がった。

「もう二度とこんなとこ来ないでね。世話する私が大変だから。」
「善処する。」
「政治家みたいな言い方止めて。ここで、はっきりと、約束して。」
「わかったわかった。これから自分で死にたがったりしないよ。」
「よろしい。」

また歩き出す。どこへ？そんなもん聞くな。俺だってわからん。

「じゃ、最後の質問。生きたい？死にたい？」

「そりゃ生きたいさ。まだまだ楽しんでない事が山のようにあるんだ。」

俺はガッツポーズを一人して、歩き続ける。

「まったく、いつの間にか姉気取りみたいなこと言うようになりやがって……じゃあな、フィオラ。」
「……じゃあね、お兄ちゃん」

「この終わり方で、よかったのか？」
「勿論。モチのロン。お兄ちゃんは今度こそ幸せになれる。」
「だと良いがな。」
「心配しなくても、大丈夫よ。お兄ちゃん。」

お兄ちゃん、そう呼ばれた男は目を見開き、少女を信じられないといった表情で見つめる。

「俺を……兄と？」
「自分で言ってたじゃない。俺はお前、お前は俺って。だから、もうあなたもお兄ちゃん。そうしたほうが、貴方も寂しくないでしょ

？」

「そう、だな。そうしてくれれば、俺もマシで居られる、な。」

「そうそう、兄妹の偽者同士なかよく兄妹してましょ。」

「ハハッ、その言い方……身も蓋もないな。」

そう言って兄妹は笑い合い、共に消えていった。

何もない、ただただ空虚な深淵の闇の中へと――――――

ただ、彼らがそれを嘆く事は無かった

「お兄ちゃん！！お兄ちゃん！！死んじゃ嫌や！！！」

「エルさん！！」

「パパ……パパ！」

子供達が、エルの名を呼ぶ。

その中には、彼の娘たちも含まれている。

子供達を、リンディが手で制す。

「もう、エルさんは……。」

リンディ達の目の前には、病室のベッドで、様々な医療器具に繋がれたエル。
その心拍数は、既に0を指していた。
無機質な電子音が病室に、響き渡る。

「午前4時3分……ご臨終です。」

医者は死亡を確認すると、心拍機の電源を切り、病室から退室する。
彼なりの気遣いと言って良いだろう。

「うそ……嘘やぁ！！！」
「父上……！！」

一斉に泣き始めるのを、ヴォルケンリッターやリンディは悲しく見守っていた。

何も、言えない。
何も、出来なかった。

だからせめて、彼の死をしっかりと見届ける事が……。

「ぶらぁあ！！！！」

見届ける事……が……？

「死んでたまるかぁああ！！俺は幸せになるんだぁ！！！」

ベッドに立ち上がり、咆哮。
見つめていた全員が、この病室が、止まった。
まるで魔法にかけられたかのように、ピクリとも動かず、止まり続ける。

そんな魔法の中で、一人動き出す男。

「……あれ？もしかして、俺、一回死んでた？」

静かに、全員が、頷いた。

三ヵ月後

エルは飛行機から降りてくる。もちろん民間機だ。
場所は、地球、イギリス。

一人どことなく気取り、サングラスなどをかけて降り立ったは良いが、天気はあいにくの曇天。
エルはしかめ面で空を仰いだ後、サングラスを外した。

「せっかくお気に入りを選んだのに、無駄になってしまいましたね。」
「うるせい。」

すぐ後ろについてた銀髪の女性にぶっきらぼうに返すと、女性は苦笑を浮かべた。

「ま、長居する必要も無い。さっさと用件を済ましたら、帰るぞ。」
「はい。」

エルはポケットから紙を取り出し、歩き出す。

どれほど歩いたかは知らないが、一軒の家に到着する。
ここに来るまで、エルは紙と景色を何度も見返しながら、独特の伝統風景を楽しむこともなく歩いてきた。
精一杯なんだな、と銀の女性はその様子をみて心の内だけで微笑する。

「……間違い、ない。ココガモクテキチデスヨ？」
「……本当ですか？」
「ばか、本当だよ。行くぞ、リインフォース。」

二人は、静かに門の扉に手をかけた……。

「待っていたよ。いつ来るのかと、心待ちにしていたよ。」

家に入って最初に出会ったのが、目的の人物、ギル・グレアムだっ

た。

「それはどうも。隠居するにしても、いささか田舎すぎやしませんか？来るのに結構苦労したんだが。」
「君が都会に慣れすぎただけだよ。」
「さて？俺は海鳴に住んでいますが？」
「ここに比べたら十分に都会さ。」

出身のイギリスで隠居するにあたって、身の回りの世話もしていたのであろう使い魔のロッテとアリアに応接間に通された。

そこのイスにどっかりと座る。

「まぁ、こんな田舎も悪くない。そう思いますが。」
「ふむ、そう思って貰えると、ありがたい。それで、今回はどんなようだい？わざわざ会いに着てまで話すことなのだろう？」
「まぁ、まずは貴方のその後が気になったのでね。田舎で干からび切ってるもんだと思っていたが、思ったよりも瑞々しかった。」
「君に希望辞職させられる前に比べたら、随分と干からびたと思っているが？」
「気のせいですよ。そう、病は気から。」

開き直ったような態度のエルに、グレアムは軽く笑った。

「で、他には？」
「それと、報告。貴方が気に病んでいた案件に、すべて片がついた

とな。」
「ほう。」

目を細め、エルを見つめる。

「それは、君自身の問題も解決した、と受け取って良いかい？」
「もちろん。これから先、闇の書も、煉獄も、人に害を成すことなどなくなった。どちらも消えたからな。」

闇の書は、夜天の書へと本来の姿を取り戻し、煉獄の書は、エルの中に積もった知識の層ととして消え去った。
今でも、煉獄に込められた怨念はエルの心に語りかけてくる。
だが、それはもう苦痛などではなくなっていた。

「そうか……それは本当に良かった。」

グレアムは全身の力を抜き、イスにもたれかかる。それは、涙ぐみ、堪えているようにも見えた。

「ところで……隣の女性は？」
「ん？付き添い。でも、無関係でも無いな。こちら、元夜天の書の管制人格にして融合騎。リインフォースです。」

エルの紹介に、小さくお辞儀を返す。

「元？今は違うのかね。」
「まあね。完全にブツと切り離しちゃったし、しばらく管制人格無しでもどうにかなるし。」

次の管制人格もいずれは作るけどね。とエルは付けたし、アリアに出された紅茶に口を付ける。

尤もな理由にも聞こえるが、グレアムにはそれが、彼女を元に戻したくないと言っている様に感じた。

「どうしても切り離さなければならない理由でも？」
「うん？ま、いずれは嫁にするつもりだしね。」
「エル！！」

しれっととんでもない事をエルは口にして、リインフォースは耳まで真っ赤にして、驚きと共に立ち上がる。

その様子があまりにも微笑ましくて、グレアムは年甲斐もなく大声で笑った。

「そうか、お似合いだと、私は思うぞ？」
「あまり本気にしないでください……！！」
「カカカッ！！俺はハナから本気のつもりだけどな。」
「エルゥ！！」

エルは立ち上がり、入ってきた入り口へと向かって行く。

「もう、行くのかい？」
「他に話す事なんてあります？」
「そうだな、無いな。……ありがとう、エル。」
「どういたしまして。」

その後は一言も発さず、家を出て行った。
いずれは嫁になるであろう女性と共に。

ちらりと時計を見て見れば、ここに居た時間は十分も無い。
本当に用件だけを言って出て行ったな。
と、グレアムは苦笑しながら、出された紅茶を口にする。

まだ熱く、風味を損なっていない。
グレアムが咀嚼するには、些か時間が掛かった。

エルのティーカップを見ると、それが綺麗に呑み干されていた。

「茶はもう少し、味わって呑むべきだぞ。」

グレアムは苦笑のまま呟いた。

家を出ると、先程の曇天が嘘のように晴れ渡っていた。
俺は得意げにサングラスを取り出し、掛けなおす。
ちょっと嬉しい。

「ふふっ、似合ってますよ？」
「黙らっしゃい。……さて、帰るか。」
「本当に……これだけで帰るんですか？」

リインフォースが聞いてくるが、その様子はどことなく悲しそう。

例えるなら……ほら、あれだ。聞き分けの良い子供の楽しみにしていた外食が、親の都合でキャンセルになってしまった感じの表情。

分かりづらいか。

「観光、したい？」
「い、いえ、エルの用事に差し支えるならば。」
「観光。」

（ぴくっ）

二、三歩歩き直して、

「観光！！」

（ぴくぴくっ！！）

おーおー、体が反応してる。顔は変わらないのに。

リインフォースの頭に手を乗せる。

「わかった。一泊してから、帰ろう。まだ日が登ったばかり。この小さな街ぐらいなら観光できるだろ。」
「あ、ありがとうございます！」

それで一日中、街を歩き回った。
他愛ないものから、観光名所まで、歩き回った。

別に特別な事をしたわけではなかったが、時間を忘れるほどに楽しかったらしい。
気付いたら日が傾き、街には少しづつ人工の光が灯るようになって

いた。

「よし、ホテルに泊まるぞ。」

「今から、部屋なんて取れるんですか？私が我侭言ったせいで……。」

「気にスンナ。こんな自体は予測済み、それなりの所を見繕ってある。」

「私が、我侭を言うと？」

「まあね。」

それを聞くと、リインフォースは恥ずかしそうに黙ってしまった。

それで、部屋をリインフォースの事も慮って二部屋取ろうとしたけれど、リインフォースが強引にも一部屋だけにして、なんか店員が微笑ましそうに鍵を渡してきたり、なんかそんな事が色々あって……。

今に至る。

「結構疲れたな。」

ぼふっ、なんて質のいいベッドを演出させる音を立てて、俺はベッドに横になった。

リインフォースもベッドに座っている。

食事はとうに済ませ、あとはシャワーなりなんなり寝る支度をして寝るだけだ。

「で？楽しかったか？」
「はい、とても。」
「そかそか、それは良かった。」
「あの……その、」

「うん？」

リインフォースがおずおずと言った様子で、話しかけてくる。
明らかに頬を染めて。……なんだよ。

「嫁にすると言う話……本気ですか？」
「勿論。モチのロン。」
「だって私は……デバイスですよ？世間から…。」
「世間なんて知るか。俺はお前が欲しいし、俺はお前を幸せにしたい。この役目を他の奴に渡したくないだけだ。だから今のうちに唾付けとこうって話だ。」
「つ、唾って……。よく、そんな恥ずかしい事が言えますね。」
「嫌か？俺が夫。」
「そんなことはありません。」

即答の上に、ここ一番の力答。
ぐっと握りこぶしも添えて。

「じゃ、そういうことで。」
「……もっと、婚約って違った雰囲気でする物だと思っていました。」
「世間一般はな。だが、俺たちに限って言えば、そんな領域とっくに超えてると思ってる。」
「そう、ですね。」

どうやら向こうも納得したみたいで、この話は終わり。
おたがい話を切り出す物もなく、ひたすら静かな時間が過ぎる。

だが、思い返せばこの三ヶ月間、気の休まる日が今の今まで無かったのかもな。
だから今日のこの休みにどっとそのすべてが圧し掛かってきたのだと思う。

聖夜のあの事件の後、奇跡的？いや、奇怪的にも一命を取り留めた俺は絶対安静の一ヶ月間を送っていた。
死ぬ直前まで弱っていた（事実死んでいたらしい）俺の体は、奇怪的な復活の後、異常なまでの速度で体調を持ち直していた。
これも、俺の生きたいという感情に煉獄が作用でもしたか……
……まぁ、煉獄なんてそんな万能なわけが無いし、結局真実は闇の中。わからないが。

その後は巻き込んでしまった人たちに謝罪しに回っていた。
巻き込んだ人々。
それは聖夜の事件に関わった、俺以外の人物すべてだ。

はやて達も、なのはもフェイトも、その家族も。みんなだ。

謝罪の際に、なのはの兄と一悶着あったり、娘達を養う話や、フェイトから養子についての告白など色んな事があったが、それはまた別の話。話す機会があったら話すとしよう。

とりあえず、あの三人娘はリンディさんに任せたと言っておこう。
決して育児放棄じゃないぞ。

…決して育児放棄じゃないぞ。
大事だから（以下略

それで、今日がその謝罪の最後の一人。

（……一言も謝っちゃいないが。）
グレアムとの会話を思い出し、可笑しくて心だけで笑う。

とにもかくにも、この何かと気を使った三ヶ月間も、今日で最後。
これからは事件が起こる前の、平穏で静かな日々がまた戻ってくる

といいのだが。

戻ってきた平穏。
戻らなくなった……大切な物。

ギシリ、と噛みあわせの悪くなった左腕の義手が音を立て、鈍い痛みが奔る。

「そうだ、リインフォース。」
「はい？」
「じきに……子供を作ろう。」
「こっ！！子供なんて……そんな、早すぎます！！」
「？……あ～。」

そうか、今のは俺が悪かった。

「で、でも、どうしてもと言うなら……わ、私は……。」
「ごめん。今この場において、勘違いされるような事を言っちまったのは謝ろう。……管制人格のことだ。」
「はい？」
「夜天の書の、管制人格。いつまでも無しじゃ駄目だろう。……
……将来的には夜天の書の力をはやては使って生きてくことになる

んだろうしな。……俺はアイツには戦って欲しくないんだが……言っても無駄だろうし、悔しいが管理局のこれからには、はやてとヴォルケンリッター達の力が必要だ。」

「……そうですね。」

「だから、俺たちでせめて管制人格を作ってやろうって話だ。それを比喩した言い方が、誤解を招いちまったな。」

「い、いえ、私が早とちりしただけで……。」

そう、じきにレオハルトが遺したデータを元に、息子をまた作らなくちゃならないんだ。

約束したんだ。馬鹿息子に。より高性能で、従順なやつを作るって。

さて、色々と先の話をしちまったが……。

「で、ですよね……子供ってそっちですよね……はぁ。」

こっからは『これから』の話だろう？

俺はリインフォースに詰め寄り、顎に指を掛け、持ち上げる。

「なんだ？子供ってどっちを想像したんだ？」

「い、いや……それは！！……いじわる、ですね。」

「安心しろ、お前は俺のもんだ。これから……そう言うことになるかもしれないぞ？」

「これからって……？」
「さて？一秒先も、これからって言うんじゃないか？」

俺は迷いなく、リインフォースの唇に、キスをした。
初めてのキスは、何故だろう、懐かしい味がした。

欠陥者は取り戻した　大切な物を
それは決して欠陥を埋める物ではなく、ましてや欠陥を忘れさせる物でもない
それは、欠陥すらも包みこんでしまう大きな物

欠陥者は取り戻した　懐かしい物を
取り戻した物は……――――――――――――

了

五十二話　終わりはいつも突然　でもそれってなにかが突然始まるってことだよね

第三部A′　s編　終了です。

これでエルの物語は終わりです

この煉獄を通しての一件がエルにとって自分を救うたった一つの方法だったわけです。

勿論自分の二次創作で生まれちまったどうしようもないキャラですが、どうしてもこの話だけは書かなければならなかった。

とりあえずはこの話を書ききる事ができて嬉しいです。

これから二人がどうなったかは……ご想像にお任せしますw

積もる話はこのへんで。

いつかそんな話をするどうしようもない回でも設けましょう。

実は、この話を書き終えて、悩みました。

続けるべきか、完結させるべきか。

作者も今年からガチ受験生になるわけで、正直今までのペースで作品を続ける事は出来そうも無い。

それにここで終わればそれはそれで綺麗なんじゃないか？とも

続きを期待してる読者などいるのか？とも。

悩みに悩んで……駄目で元々、例えゆっくりでも書き続けようかな、と。

自分が書きたくて始めた投稿ですし、エルの物語が終わっても、エルが存在する魔法少女の物語は終わっていません。

（ぶっちゃけた話、ＳＴＳ用に張っといた伏線が回収できないのが悔しいだけだったり。）

今までどおり、あまり期待せずに待っててください。

それでは最後に、次章予告。

「エル執務官、今回の特務を言い渡します。」

「はいよ。」

「……地球の教師に、なってきなさい。」

「は？」

忌まわしい事件から早六年近く。

欠陥者は未だ走り続けていた。

「スーツ姿、お似合いよ。エル。」
「リン、ネクタイ頼む。」
「はいっ。」

ただ、些か走る道は曲がっているらしい

「どうもよろしく。私立聖祥大学付属中学校に赴任してきた荒洲(あらす)得流(うりゅう)です。」

「エル……さん？」

「お前もそろそろ本格的にすべてを託す『弟子』を育てるべきでは無いか？」
「俺は生涯現役！！」
「真面目に応えろ……エル。」
「はは、すいません。……でも、弟子なんて俺の柄じゃないですよ、教官。」

元々欠陥者。絶頂が長続きするはずも無い。

そんなとき

「僕は……、どうしてこんな世界に、こんな有様で、生まれてしまったと言うんだ！！」

「……お前の本当の名前を、教えてみろ。あるいは少し、楽になるかも知れんぞ。」

「僕は……、私の名前は……――――――――――――――――――――。」

欠陥者は、転生者に出会う――――――――――――――――――――。

それではまた次回。

五十三話　日常と忍び寄る非日常と…（前書き）

執筆中にまた大きな余震が来て一帯が停電。

あらかじめ保存しておいたからよかった物の危うくアボンするところだった。

五十三話　日常と忍び寄る非日常と…

どんな幸せを得たとしても、その永遠は続かない。

幸せな夫婦が、いつかは年老いて、死んでいくように。
世界一の天才が、後から現れた天才に淘汰されていくように。

いつかは壊れ、また新しい何かが現れるのだ。

それは、悲しいと言えば、悲しい。
だが、当然と言えば当然の事だ。

ただ、逆もまた、然り。

どんな不幸だとしても、それもまた壊れていく。

それは嬉しいと言えば、嬉しいのかもしれない。
ただ、また新しくやってくる何かに、恐怖を持たないかと言えば、
それは無いわけで。

……つまり、何が言いたいって事かって言うと

俺は、今、幸せだ。

この幸せも、いつかまた壊れてしまって、また不幸がやってきてしまうと言うのか、と考える。

ブチリ、と体のどこかが千切れる音を聞いた気がした。

「ああ、朝が来てしまった。」

カーテンから指す光が嫌いで嫌いで、ふとんを被りなおす。

今日一日、ずっとこうして惰眠をむさぼりたい。

ほら、目蓋を閉じれば、また睡魔が……。

「パパーー！！！」

「うぼぉっ！！」

ダイビング！！

ダイビングクラッシュ！！マイボディ！！

「朝だよ！！起きて！！」

ギュー、と熱く抱擁を布団の上からしてくれる、青い髪を持つ我が娘、レヴィ。

「父様、そろそろ起きなければ仕事に間に合いませんよ。」

そして、俺にきっちりと起床の連絡をくれる、茶の髪を持つシュテル。

「わかった、……から、レヴィを、どかしてくれ、シュテル。」

俺は呼吸困難になりそうな状況を必死に堪えて、シュテルに応える。

「わかりました。ほら、苦しがってますよ。」

「やだ！！パパと一緒に居る！！」

ギュー

説明しよう！！。

元闇の書の欠片の娘達は、魔法の肉体強化を使用せずとも、かなりの肉体能力を有しているのだ！！

無論人間の範疇で、だ。

「あ、とぶ、意識とぶ。」

パンパンとギブアップのようにレヴィの手を叩きたいところだが、その腕ごと布団の上から抱きしめられている。

あれ？手詰まりじゃね？

「困りましたね。どうしましょうか。」
「お前たちは、姿に似合わない筋力あるんだから、力づくでどうにかしろぉおおお！！」
「わかりました、では力ずくで引き剥がします。」
「わかったよパパ！！」

あれ、藪蛇。
ていうか想像以上にレヴィが馬鹿だった。
さようなら、みんな。

ミキミキミキ、ミシミシ。

「あ、あぁ、ああ……。」

俺の体が、悲鳴をあげてる。
ごめんなさいお母さん。
思ったより早くそちらに行く事になりそうです。

「なかなかしぶといですね。」
「ふん、僕は絶対離れないからねっ！！」
「では、本気を出しましょうか。」
「望むところ！！」

あれ、まだ本気じゃなかったよ、この娘たち。

「あ……や、やめて……。」

じょ、冗談じゃ……！！
夢なら醒め――――。

「「ふん！！」」

「ぐひっ――――。」

「この芥共、父上に何しとるんじゃぁあああああ！！！」

エルを犠牲に取っ組み合っていた少女たちは、吹き飛んだ。
彼女たちの長女を自称する、金紗の髪をもつ少女によって。

「ア、アーシェ……。」
「父上、父上！！大丈夫か！！人間の可動域を超えた角度で背中が折れ曲がっていたが……ち、父上？」
「――――――――」

その体はピクリとも動かない。
反応が無い、ただの――――――――――。

「ち、父上ぇえええええええ！！！」

「もう時間だから、お前たちは学校に行きなさい。」
「「「はいはい」」」
「返事は一回。」
「「「は～い」」」
「返事は短く！！」
「「「は！！い！！」」」
「みじけぇ！！」

そんなくだらない問答をひとしきり終えた後、三人の娘たちは学校に走っていく。
そんな様子を見送る。

……あいつらと親子になって、もう六年。
意外と早く感じるのだな、と思いながら、彼女たちの成長も感じていた。

元になったなのは達が当時九歳。六年後の今は十五歳。
娘たちもなんの理屈かなのは達と同じようにすくすくと育ち、年相応の成長をみせている。
……本当に早いもんだ。

「どうかしましたか？」
「ああ、いや、なんでもない。すぐに朝飯を片付ける。」

「はい、では洗濯物を干してきますね。」

そう言って、笑顔で二階に上がっていく、リインフォース・アインス改めリン。

夜天の書の『後継（ツヴァイ）』の管制人格を作った結果、彼女は『最初（アインス）』の名を冠するようになった。

リン、というのは『一番（アインス）』と呼ばれるのが可哀相だと、俺が別に付けた名前。

リイン、その名をただ縮めただけの安直な名前なのだが、俺たち二人の間の名前、と言い換えたらやけに嬉しそうだったのを憶えている。

（……そうか、リンともこれで六年の付き合いになる、のか）

この六年を振り返ってみても、特に関係が進展したような憶えは無い。

リンディさんと本人たちの意向で、三人の娘たちを改めて引き取って、一緒に暮らすようになり。

夢の一戸建て（笑）を建てたりとかして。

……まぁ、それなりに？色んな事を確かめ合ったりもしたし。

なに言ってんだ俺は。死ね俺。死んでしまえ俺。

そこで一旦思考を止め、後悔した。

目の前には、すぐに片付けると言っていたリインフォースお手製の朝食の皿。

考え事をしたまま食事を終えてしまって、ろくに味わっていない事に今更ながら気付いてしまったのだ。

「しまった。毎朝の楽しみだったのに。」

嘆いても仕方が無いので、皿を流しに入れ、皿洗いを済ませる。

リインフォースが洗濯物を干しているから、こっちは片付けておかないとな。

別に明確に役割分担したわけではなかったが、いつの間にかお互いの日課のようになり、第三者からの役割分担に位置づけられた。

「こっちは終わりました。」

「ああ、こっちも終わった。……ほらよ、インスタントだが。」

「ありがとう、頂きます。」

インスタントコーヒーを手渡し、一息つく。

「はやく起きないから、今日のように痛い目に遭ってしまうんですよ。」
「むぅ、すまん。」

痛い目、当然三人娘のやんちゃの事だ。というかあれぐらいの事は日常茶飯事でもあるのだが。

どんなに驚異的な肉体を持っていても、所詮は子供のやんちゃ、俺の苦になったりはしない。

だが、同時に彼女を心配させているのも事実な訳で、それに対して素直に謝ったのだ。

素直に謝ったのだが、それが逆に彼女に気を使わせてしまったらしい。

「……特務で疲れているのは良くわかりますけど。」
「いや、そう言うわけでは無いけども！」

気遣いは嬉しいんだが……なんか、重いと言うか、他人行儀と言うか。
かれこれ六年、リンは俺への口調を変えてくれていない。
元々礼儀正しい性格ではあるのだろうけども、未だに負い目でも感

じているのか、口調に関しては頑として受け付けなかった。
一緒に暮らしているのに六年間変化無し。

夫婦は似る。という言葉がこの国にはあるらしいが、俺に似てへんなところで頑固になっちまったよ。
いや、別にまだ夫婦じゃねぇけど。

――――――ま、人生は長い、これからゆっくりゆっくりどうにかして行けば、良いさ。

「よっしゃ！！今日からまた特務だ……っ！？」

立ち上がろうとして力の抜けた体を、テーブルを支えにして持ち直す。
太股に激痛が走ったのだ。
その様子を、訝しげにリンが眺めていた。

「どう、しました？どこか、体の調子でも……。」
「いや、ちょっと足がスケートリンク」
「？どう言うことです？」
「滑ったって意味。……馬鹿、笑うところだよ。」

それはすみません、とリンが苦笑を返す。
こんな泣きたくなるギャグに頼るのはアレだが……どうやら、

誤魔化せたらしい。

……今の激痛で、俺の人生の残り時間を改めて考え直していた。

六年前から、断続的にこのような痛みは度々起こっていた。
あるときは膝だったり、腕だったり、首だったり……場所は問題では無い。
今はその頻度は確実に多くなってきている。

もちろん考えすぎなのかもしれない。
いきなり体のどこかに痛みが走る事なんて、健康な人でも良くあることだ。
ましてや人間の感覚神経はただでさえ誤作動がしやすいのだ。

俺の死が迫っている。
それは、なにか確証があるわけでもなし。
ましてやただ一瞬の激痛が体に走るだけの物。

しかしそれは、いやに現実味を帯びていた。
それがなんとも悔しいし、月並みな予兆ではあるが……俺にはそれほど時間が残っていないのだろう。

（俺はもっともっと生きていたいんだけどな。）

そんな他人事のように考えながら、俺は自分の身支度を用意し始める。
リンもそれにならう。
俺の調子はどうであろうと、日常は続いていく。
今日の日常は、特務が始まる日なのだ。

今はそれにだけ集中していよう。

「あらよっと。」

いつものように、いつものイスへ。
目の前にはいつもの三人の老人。
三提督。
なんかこの三人、いつのまにかそれぞれ昇進していたような気がしないでもない。

興味がないので、調べた事は無いが。

やだね、どうしても高官になると役職名が無駄に長くなってしまっ

て。

『執務官』いいじゃない三文字で。短くてわかりやすい。

「前回の特務から休暇は二日。もう体調の方は万全ですか？エルンスト特務執政官」

なんか知らぬ間に俺の役職名も長くなってた。
いつ変わった。

いつもの穏やかな調子で話しかけてくるミゼット。
こういった話を最初に切り出すのは、いつもミゼットだ。

「さて、前回は結構長丁場でしたからね……、体が本調子かどうかは怪しいですね。それはさておき、俺がこの前提出した陸士練兵案はどうでした？」
「ああ、それはとても効果が上々だったよ。……ただ、いささか魔導師らしからぬ実戦的な面もあるがね……。」

ラルゴ・キール……なんちゃら元帥が手を挙げて応える。
いいよもう、ラルゴ爺で。
いつもそう呼んでるし。

「それはしょうがないでしょうね。元々陸士には空士になれないような魔法的に上等でない士官が多くいますからね。別に陸士すべてをそうとは言いませんが……魔法で適わない敵に、わざわ

ざ魔法だけで対応する必要も無いでしょう。」
「経験から、ですか？」
「勿論、俺の経験ですよ。」

今更だが、俺という言葉は敬語では無い。
だから上官に対しては『私』や『自分』が妥当ではあるのだが……、俺たちの間では今更って感じだ。

「もしかしたら、じきに貴方に陸士部隊を預ける事になるかもしれませんので、一応心積もりを。……さて、それでは次の特命を言い渡しましょうか。」
「はいよ。」

それなりに姿勢を正す。
何度経験しても、この瞬間はなかなかに緊張が生まれてしまうからな。

今までなんだかんだ言ってきたが、別にこの三人に対して敬意が無いわけじゃない。
ただ付き合いすぎてお互い馴れ合ってしまったと言うか。役職差と年齢差を越えた一種の友情を持っちまっただけだ。うん、付き合いは知り合いの中でもダントツに長いしな。
忘年の交わり……そんな感じかな。

「では、言い渡します。……地球の教師になってきなさい。」

「は？」

一つ、咳払い。

「ごめん、もう一回言って。」

「ではもうすこし詳しく。私立聖祥大学付属中学校に赴任して、しばらく教師としてある人物達の護衛に付いてもらいます。」

「もう誰を護衛するのかほとんどわかっちゃったんだけど。」

てか、他に思い当たらない。

だが、疑問は残る。

どうしてあいつらを護衛しなくちゃいけないのか。

護衛なんてしなくとも、十分に強いのだが……。

「……貴方が特務でミッドを離れていたしばらくの間、ある事件が起こっています。それは、将来有望な未成年の魔導師ばかりが襲われる事件です。」

「……そりゃ、なんでまた。」

なんだか穏やかじゃない。相当に。

「理由は今の所不明ですね。性別も関係なし、死者は出て居ませんが……酷い人では骨折もありましたね。」

「将来有望……この点になんかありそうだが……。」

管理局に恨み？しかしなぜ子供。

長期的な戦争？……なんだか話がぶっ飛ぶな、それは。非現実的だ。

だめだ、憶測は所詮憶測の域を出ないな。

「だから、貴方に教師として常に傍につき、護衛をお願いしたいのです。貴方なら彼女たちと知り合いですし、いざという時に、彼女達を守るに値する実力を持っている。」

「あら、そう。はい、わかりましたよ。」

静かに差し出された資料を手に取る。

どうやら既に手はずは整えてあるらしい。

――――――お解りだろうか、これは逆に拒否権が無い事を意味している。

今までの特務に比べると……まだ危険は少なそうではあるが……。

「な～んか、腑に落ちね～。」

手で顔を覆い、天井を仰ぎ、指の隙間から天井の灯りを覗き見る。

「事件の内容がかね？それとも特務の内容がかね？」
「ん、全部。」
レオーネに返事を返し、納得の行かないまま瞳を閉じる。
「……護衛だけか？」
「可能ならば、逮捕まで。ただし、彼女たちの安全が最優先です。」
「だろうな。」
俺は立ち上がり、出口に向かう。
なんだか気が進まんが……なのは達をひいては娘達を守ると思って、我慢するか。
「気をつけてください。未だ同一犯かは確定していませんが、相当の手練れですよ。貴方の教え子のシルビア・ルーが負傷したほどですからね。」
「よろしい、戦争だ。」
俺の教え子の…しかも女の子のシルビアに手を出すたぁいい度胸だ。
「ぶっ殺す！！」
「ぶっ殺さないでください。逮捕です、逮捕。――――彼女は偶然その場に居合わせたティーダ・ランスターによって助けられたらしいですけれど。」
「ティーダも、ぶっ殺す！！」
「「「何故！！」」」

シルビアだって、俺の教え子だ、（といっても何度か一緒に演習した程度ではあるが）
彼女の実力は良く知っているし、そこらの魔導師には到底劣らない。
伸びしろはなのは達とも同等……少なくとも俺はそう思っている。

どうやらその犯人とやら、それなりの実力はあるらしい。
意気込みも込めて、手を突き合わせたが、ふとその手を下ろす。

「ティーダ……か。あいつ、最近どうなんだ？」
「どう、と言うと？」
「今まで通り、前線に居られるか、という意味だよ。」
「もう少しリハビリが必要ですが、将来的には復帰は問題ないようですね。」

「ははっ、エル、君も、大切な後輩であり親友の彼が居ないと寂しいだろうな。」

苦笑を三提督に返しながらも、すこし安堵する。

「まぁ、それなりに。面倒見てきた教え子と共に現場に立つ……
……俺は、それをなんとなくだが楽しみにしてるからな。――――
――て、なんか年寄り臭いか？」

「よくわかりますよ～。」
「わかるなぁ。」

「わかるとも。」

「やめて！！あんた達に同意されたくない！！」

とりあえず、近いうちにティーダに会う、という根拠の無い予感を胸にして、部屋を出た。

「リン、帰るぞ。」

「あ、はい。……どうでしたか？」

「うん、これ。」

休憩室で待っていたリンに、先程三人に渡された任務内容の書類を手渡す。

「データ送信でもいいのに、わざわざ紙を使う所が年寄りだよな。」

「は、はぁ……読ませて貰いますね。」

必死に書類を読み込むリンを伴い、帰路につく。
特命初日は大抵こんなもんだ。
依頼を聞いて、その日は帰って、次の日からよろしくバッチコイ。
つまりは、いきなり明日から学校に行ってクラスで挨拶するって事だ。

心の準備なんてあったもんじゃないな。

（あ、アーシェ達にも任務を聞かせて騒ぐ事が無いようにしないとな。）

なのは達とはやはり同じ学校なのだから、説明しておかないとレヴィあたりが、「パパ」を連呼してしまいそうだ。

「それは拙い。」

考えて、ぞっとした。

「まずいですよ、これは。」
「え？」

ふと、リンに振り向くと、青ざめて書類を読んでいた。
ただでさえ白い肌が更に白く、真っ白とかまっさらとかそんなレベルにまでに血の気が引いている。

「まずいって、何が？」
「エル、申し訳ありませんが、今回の特務は付き添いを拒否します。」
「だが断る。」
「しかｓ」
「断る。」

なぜ、ここまで拒否するのか。

その理由は、資料の最後の項に書かれている。

『尚、エルンスト特命執政官及びリインフォース・アインス補佐官の、目的の学校での役職は下記の通りとする』

エルンスト・アルカトラス　非常勤講師及び臨時副担任　担当教科　歴史
リインフォース・アインス　臨時事務員及び保健室教諭

「なぜ私まで、学校に新任しているんですかぁ！！」
「しかも保健室の先生！！見てみた～い！」
「見てみたいじゃ、ありません！！」
「三提督……グッジョブ！！」
「グッジョブじゃありません！」
「ナース！！ナース！！」
「ナース姿もしません！！」
「白衣！！白衣！！」
「白衣はっ……、着ますね、きっと。」
「よっしゃぁぁあああ！！！」

今年で２６の大人がするべき振る舞いでは無いとは思う。
バカ騒ぎしてるが、別に俺自身の欲望に従っての反応だけでは無い。
保健室でも、事務室だろうと、また新たな人との交流が出てくる。
リンにはそれがちと足りないから、今回の一件で少しでも経験が増えたら……そう思う。

面と向かってそう言ってしまえば、彼女は一生懸命それに取り組んでしまう。

それは、一生懸命すぎるのだ。

人と人との交流なんてそんな気負ってする物じゃない。自然体で触れ合うのが一番なのだ。

リンは、俺に似て、不器用なのだから。

「こんなところで、いつまでバカップルやってるんですか。」

突然かけられてた言葉に振り返る。
つい先程感じていた予感が、あまりにも早く的中する。

「ん、久し振りだな。ティーダ。」
「ども。」

憎めない笑顔を向けてくる男に、こちらも笑顔を返しつつ、帰路につく。
ティーダは半ば強引に、今夜連れて帰る事にした。
積もる話もあるし、このまま別れると言う発想が既に俺の中には無かった。

様々な他愛ない話、馬鹿馬鹿しい話をしながら、俺は二年前のティーダに関するある事件を思い出していた……。

五十三話　日常と忍び寄る非日常と…（後書き）

第四部開始です。

ちょっといままでシリアスが多すぎたような気がしないでもないので、今までよりは軽く行きたいです。

コメント、感想、死ぬほど待ってます。

死ぬほど。

五十四話　三つのサイカイ（前書き）

今回は結構早く投稿できた

頑張った俺

これからも頑張れ、俺

五十四話　三つのサイカイ

「ティーダが犯人を追跡中……か。」
「はい、もうまもなくこちらのルートに、誘い込むと思われます。」
「そうか。」

俺は腕組みをしながら、隣の淡い青色の長髪を持つ少女に応える。
透き通り、明度の高い蒼髪。クリアブルーと言ったほうがしっくりくる色、そして腰を超え、ふくらはぎまで伸ばした髪がゆらりと揺れる。

その容貌はどこからどう見たって美少女だ。十人に聞けば、全員がそう答えるだろう。
俺だってそれくらいの感性は持ち合わせていると思っている。

「俺が偶然この場を通りかかって助かったな。シルビア・ルー？」
「エル執務官が居られなくても、私たちが問題なく事件を解決させます。」
「ハッ、そうかい。」

口をへの字に引き結んだ、未だ幼さが残る整った顔立ちの少女を見て、薄く笑う。

「ま、偶然であっても、この場に俺がいたんなら、お前たちにわざわざ危険を冒させないよ。それに、まだシルビアは実戦を経験するには、演習が足りん。」
「う、エル教官が、そういうならば……そうなのでしょうね。

」

俺が肩に軽く手を乗せながら言った言葉に、シルビアは目を伏し目がちにして返事をする。

彼女は本当に素直で、教えた事をしっかりと実践してくれる優等生だ。

反面、俺の言う事を聞き過ぎる機械的な所もあるが、それも良し悪しだ。

そんな彼女を眺めているのも楽しいが、眺め続けるわけにもいかない。

俺は前方を――――――ティーダが現れる道を眺める。

「さて、もう十分に一人前とはいえ……怪我だけはするなよ、ティーダ。」

祈るように呟いた。

その直後に、曲がり角から、犯人とティーダが現れた。

「……まずいな。」

「拙いですね。」

明らかに焦っている。ティーダが。

それもそのはず、その犯人は人質の少女を攫っていた。

ティーダの実力はともかく、経験はまだまだ不足。
こんな環境下での演習などした事が無い。

「教官、出撃は……。」
「今は、動けん。人質を犠牲にしてしまう。それに、向こうはこちらにまだ気付いていない。」
「……はい。」

余計に出て行って、犯人を刺激するわけにはいかない。
シルビアを伴い、犯人に気付かれないように二人を追跡する。

ティーダの後方を調べて見ても、他に局員は見当たらない。
くそっ、すこしは現場を考えろ……指揮官……！！

「今、貴方が偶然にもここにいて良かったと思っています。正直、私だけでは、どうにも……。」
「言うな。とりあえず、俺の行動を後学の為、見ておけ。」
「了解」

シルビアは今年で１４の女の子だ。未だ少女と呼ばざるを得ない。
だがしかし、時折このように年不相応な表情をみせることも、度々だが、ある。

その度に、俺は彼女に秘められた感情や、過去を、深読みしてしまう。悪い癖だ、とは思っている。

「ティーダッ……！！」

その時、状況が動いた。
焦りに焦ったのだろう。
ティーダは追いかける速度を上げ、強引に犯人に接近しようとする。
射撃では誤射してしまうと判断したのだろうが、それは犯人にとっては待ち望んだ悪手だ。

犯人が、人質の少女を投げつけたのだ。他でも無い、ティーダに。
慌てて、その少女をキャッチしようとする。

「馬鹿！！誘いだ！！」

そう叫んだって、もう遅い。
投げつけられた時点で、ティーダには彼女を捉えることしかできないのだから。

犯人が、少女を抱え込んだティーダの腹部を、ナイフ型のデバイスで刺した。

「ティーダ先輩！！」
「こんの、クソ外道がぁあ！！！」

もう犯人を守るものは何も無い。
人質は、しっかりとティーダが抱えているのだから。

俺は犯人にクイックムーブで接敵し、一撃の元、犯人を沈め、シルビアのバインドで縛り上げた。

「先輩！！先輩！！！」
「シルビア、ティーダを揺らすな。安静に寝かせろ。」
「しかし、」
「寝かせろ。」
「――――はい。」

シルビアがティーダを、地面にゆっくりと、寝かせる。
腹部から大量に流れ出る血で、地面を汚し、シルビアも汚している。
その紅く、生々しい液体が流れ出るほど、ティーダの顔の生気が失われていく。

とりあえず、シルビアに少女の護送と、衛生班を呼ばせにいった。

これで、この場には、二人だけだ。

「……そうか、死ぬのか、ティーダ。」
「ははっ、すいません。焦ってました、俺。」
「その通りだ。俺の教えを守らなかったからだよ……。」
「体はホットに、頭はクールに……でしたっけ？」
「――――――――ごめん、そんなこと言ってない。」

ティーダが吐息のような笑いを零す。

「冗談っすよ。……最後に、一つ、お願いしてもいいですか？」

「なんだよ、言うだけ言ってみろ。」

「妹の、ティアナのこと、ヨロシクお願いします。あいつ、俺とエルさんが憧れみたいですから……きっと、管理局に入りますよ。」

「あの子の兄貴はお前だけで、両親もまたお前の両親だけだ。俺はそのどちらにもなれない。」

「別に……世話しろって、言うんじゃ、無いんですよ。ただ、見かけたらアイツの妹か、どれ、どれくらいの実力か見てやろうっていう目をかける程度で良いんです。……できれば、指導もしてあげてほしいッス。」

「死に行く奴の頼みを断るほど、俺は薄情じゃない。わかってて言ってるだろ？」

「まぁ……ね……あ、とは……。」

瞳の光が、消えていく。

「わかった。任せとけ。」

「――――――」

俺は黙祷するように、瞳を閉じた……。

「で、なんで生きてんだよ、お前。」
「いでぇっ」

ベッドで寝ていたティーダを思いっきり殴りつける。
感動を返せ、後悔を返せ、涙を返せ!!

「なんで生きてるってあんまりじゃ、ないですか!?」
「いえ、教官は妥当な言葉を用いました。先輩は死んで然るべき人間ですよ。」
「シルビアのが一番痛い!!」

イスを二人分持ってきて、イスの傍に並べて座る。
シルビアは持って来ていた花を花瓶に挿した後、礼を述べつつイスに座る。

「あの～、シルビアちゃん?」
「はい?なんでしょうか、先輩。」

ティーダが恐る恐るといった感じで花を指差す。

「あの花、菊、なんだけど。しかも食用じゃなくて献花用の。」
「何か間違ってますか？」
「なんか間違ってるか？」
「俺、死んでねぇし！！やめて、そんなさも当然そうな顔してボクを見ないで！！」
白い菊は、葬式の時によく献花として用いられる。
「シルビアはよくわかってるなぁ～。ほれ、頭をナデナデしてやろう。」
「にゃ～」
「師匠！！アンタのせいでシルビアがキャラ崩壊してんぞ！！」
「「五月蠅い、黙れ！！」」
とりあえず、これ以上いじるのは流石に不憫に思われたので、止めてやる事にした。
「正直言うと、俺も死ぬかと思ったんですよね。意識薄くなって、眠くなってきたし。」
「……しんどけば良かったのに（ボソッ）」
「聞こえてるぞ～、シルビアちゃ～ん。」
「で、どうして死ななかったと思う？」
ティーダが顎に手を当てて考える。
その表情は今までになく、真剣だった。

「やっぱり、刺さるのが、ちょっと浅かったからじゃないですか？」
「つまりは犯人の不手際のせいだと？」
「いや、ほとんど無意識っていうか……実際そうだったかも怪しいんですけど……、あ、死ぬって思った時、勝手に体が下がってくれてました。」
「まぁ、見てた限り、下がってても数センチとかだけどな。」
「内臓で数センチって、生死の境界じゃないですか？」
「……そう、だな。」

一センチ深く入っただけで内臓に到達し、死んでしまった人だっているんだ。
素直に同意しておいた。

「エル師匠には、死の感覚を嫌って言うほど教えられてましたからね。その教えが出たのかも。」
「まぁ、そう言うことにしておいてやるか。」
「生き残れたのも、つまりは師匠のお陰って事で。」

……。
ま、元気そうだし、もう見舞いは良いか。

「でも師匠、俺があの時言った言葉は、死んで無くても忘れないでくださいね。」
「ティアナの……事か。」

「あの言葉に、嘘なんて、それこそその場のノリなんて、一切無いですから。」
「――――わかったよ。目をかけてやれば良いんだろ。」

ティーダの妹、今やティーダの唯一の肉親……か。

「でも、死人に口無しって言うしなぁ……！！」
「無かった事にしないで！！」
「クチナシも用意してありますよ。」
「シルビアは黙っててて！！」

シルビアが袋からクチナシの花を取り出した時は、流石に、笑った。
見舞いを終え、病院の廊下を歩く。
背後にはシルビアが付き添っている。

ふと、俺たち二人が周りからどんな風に見られているか、気になった。
都市の離れた兄弟……親子には……流石に見えないか。

「あの事、言わなくて良かったんですか。」
「俺が上官殴って謹慎になってた事か？言ってどうする。アイツが気に病むだけじゃねぇか。」

あの後、駆けつけたティーダの上官が、あろう事かティーダを、更にはシルビアさえも貶したもんだから、流石に俺は切れた。
顎の骨砕くまで殴ってやった。

拳一発で顎が砕けたのには驚いたけどな。

「でも、ティーダにはそれぐらいに気を病んで貰わないと、エルの痛みと釣り合いがとれません。……そんなの、私が納得できません。」

その言葉は、やけに大人びていた。

「ティーダ先輩。先輩を付けろ。それに、アイツは死にかけたんだ、十分だろ。……それと、俺も一応上官な。」

「申し訳ありません、エル教官。」

それから二人は無言で歩き、一言二言、形式的な別れの言葉をいって別れた――――。

その晩ずっと、俺の頭の中はシルビアの事で頭がいっぱいだった。彼女の振る舞い、突如として性格が入れ替わったかのように大人びる態度。

それは気取った物や背伸びしたような物ではなく、まるでそれが本当の姿かのように、自然な口調だ。

不自然を通り越して……不気味と思われても仕方が無い。１４歳の少女が、だ。

だが、俺にはどうしても彼女が不気味には思えなかった。

それが、また俺の思考を悩ませる。

「不思議な子って事なのかなぁ……。」

俺は布団で寝返りを打ちながら、呟いた。

その場は、とりあえずそう無理やり結論付け、俺は眠った。

あれからもう二年。

シルビアともそう言えばここ一年近く会っていないな。

ティーダと再会したのも、実に一年ぶりぐらいかもしれない。

どれほど強くなったのかもわからん。それはそれで楽しみではあるが。

俺の前にはリンが作った料理が並びつつある。

今日作った物、昨日作った物を暖めなおした物、その数は豊富で家庭の料理にしては豪華にも思えた。

「リインフォースさん、料理上手いんですね！！」

「リイン、もしくはアインスで結構ですよ。」

俺の対面に座るティーダがはしゃぐように騒ぎ出す。

「料理は全部俺が教えた。そしたら想像以上に才能があってビックリした。」

「え！！師匠料理できるんですか！！てっきり野性のヘビでも捕まえて喰らっているのかと。」

「馬鹿ヤロウ、俺の過去を舐めんな。本当に食材に困ったときしかしない。」

「やったことはあるんですね……。」

料理を揃え終えたらしく、リンが隣の席に座る。
では準備は整った物として、手を揃える。

「「「いただきます。」」」

時刻は午後二時、時間にしてはなかなか遅い昼食が始まった。

「で、どうなんだ、体調の方は。」

「もうほとんど全快っすよ。でも、あんな刺し傷でこんなに回復に時間が掛かるとは思って無かったですよ。」

「そりゃ、お前……重体に陥ったんだから、それぐらいは当然だろ。話に聞けば、生きているのも奇跡に近い類の傷だったらしいんだろ？」

「いやぁ、俺もそれを聞いたときはビックリしましたよ～。」

この話を聞いて、あの時のティーダの後退が無かったら……と考えてぞっとするようになった。
生死を分けた数センチ……、そんなことは何度も起きては欲しくない。切実にそう思う。

「死に掛けるような傷を何度も負って行けば……自然と回復力が高まるが、嫌だろ？」
「はい、もう死にかけたくないです。そう言う師匠は、修羅場くぐってきてますからね、回復力も半端無いんだろうなぁ。」
「この前転んで出来た擦り傷が、二時間後にはカサブタ剥がれてきた。」
「もう完治してますよ、それ。恐ろしすぎるでしょう。」

その後も、他愛ない話は続き、俺とティーダは終止話し続けた。
リンはその様子をにこやかに聞いているだけで、話に無理やり入ってこようとはしないし、自分だけ喋っていない事で、気を悪くすることも無かった。

「あ～、と？あれ、これソースだ。」
「醤油はこっちですよ。」
「ありがと、リイン。」

何度も言うかもしれないが、リンというのは俺たち二人だけの間の

名前だ。
公共の場や、他に誰かいるときはリインもしくは区別をつけるためにアインスと呼ぶ。
ティーダはその俺たちの様子を凝視するように見つめていた。

「……なんだ？」
「いや、なんか老夫婦みたいだなぁって。」
「何、俺たちが老けてるってか。」
「あ、や、そうじゃなくてですね！！『アレとってくれ』『ああ、コレかい』って感じですかね。」
「なんだそりゃ」
「いや……なんて言ったらいいのかな、阿吽の呼吸っていうか……年齢の割りに二人の動きが通じ合っているっていうか……、すいません良く説明できないッス。」

なんだかティーダの説明は的を得ないが、なんとなく察しはついた。

「いや、とりあえず仲の良い夫婦だなぁって思ったって事で、お願いします。」
「いや、まぁ別に良いけどな。」
「……夫婦。」

俺の隣で何故だか赤くなっているリンが居た。

「それじゃ、ご馳走様でした。」
「ああ、悪いな。わざわざ地球に連れてこさせちまって。出来れば泊まっていけばいいんだが。」
「はは、俺もそうしたいんですけどね。現場にはまだ立てなくてもデスクワークはあるんで。」

そのせいでもう体は鈍りっきりです。とティーダは笑っているが、あいつは自らの鍛錬を一切怠っては居ない。
動きを見ていればわかるし、服の上からだって、ある程度は筋肉の配置や量は判断できる。

今のティーダの筋肉は、絞られた基礎の塊だ。
確かに現場にて学ぶ応用的な動きは体得していないが、それを吸収する下地はできている。

「それじゃ、お互いまた会う日までお元気で。」
「おう、そっちもな。」
「あ、そうだった。俺、仕事上シルビアと顔を合わす機会が多いんですけど、シルビアも凄く会いたがってましたよ。それに、かなり強くなってます。一度見てやってください。」
「おう、それは楽しみだ。……じゃ、そのついでに質問だ。」

ティーダが訝しげな表情を浮かべる。

「お前がシルビアを助けたらしいが……アイツの傷は？」
「最初に怪我の容体ですか。ぶっちゃけ安心しました。他の奴らは犯人の質問しかしてこないから。」
「そんな事はどうでもいい。どうなんだ。」
「大怪我……なんてことはありませんよ。ちょっと腕を浅く斬られた程度で、勤務には支障も無いみたいで。――――そもそも辻斬り的犯行みたいですから、奇襲みたいなもんです。真っ向から際会していればシルビアが不覚を取ることもなかったかと。……俺の所見ですけど。」

ティーダの瞳を窺うように覗きこむが、どうやらは嘘はついて居ないようだ。

「そうか、なら安心した。」
「犯人の事は……聞かないんですか？」

リインが耳元で囁くように呟くが、それを手で制す。

「知りたかったら、本人に聞きに行くさ。それが一番確実でわかりやすい。今は、シルビアの無事がわかった、それだけで良い。」
「では、師匠も明日からの特務頑張ってください。」
「じゃぁな。」

ティーダを笑顔で見送るが、心は晴れやかとは言えなかった。

ティーダはシルビアが強くなったと言った。
それは事実なのだろう。
その証拠に、シルビアは去年執務官試験に合格している。若干１５歳でだ。

クロノの記録を上回ってはいないものの、その合格年齢はあまりに若い。

傷を負った事は兎に角として、その彼女がなんの成果も無しに相手を逃がす事はそうそう無いはずなのだ。
彼女の性格は良く知っているし、恐ろしいところも知っている。

彼女とティーダの両名から逃げおおせる時点で、敵は相当の手練れという事になる。

（思ってたより……大きな事件になりそうだな。）

そうさせないために、俺がいる。
なのは達を守る盾となり、犯人を捕まえる矛となる。

そのスタンスは六年前から一度も曲げた事は無い。
ここいらでそのスタンス、再開させようか。

「よし、リン、明日の支度するぞ。俺、スーツなんてあったっけか。」
「あ、クローゼットにそれらしき物がありましたよ。」
「色は？」
「白でした。」
「んじゃ無理だろ……。」

まずは教師らしいスーツを買いに行かないと。
今回の特務への意気込みを改めたのは良かったが、溜息を零す事は抑えられなかった俺であった……。

五十四話　三つのサイカイ（後書き）

この章
結構オリキャラ増えちゃうよ～

五十五話　いざ、学園という名の戦場へ（前書き）

日曜に、出来れば日曜に投稿したかった……！！

五十五話　いざ、学園という名の戦場へ

学校教師らしいスーツ。
そんなもの探せばすぐに見つかる。
近所の、服を売っている店にいけばどこにだって。

それに、この特務の間だけ着るような物であるし、管理局での仕事では管理局の制服があるわけだから、別にこれ以外に使い道があるわけでも無い。

だが、そんなスーツを選ぶのに、悩んでいた。

「う～ん。」

主にリインフォースが。

「どうでございましょうか。今回のスーツは。」
「ちょっと足の丈が足りませんね。色は良いのですが……。」
「いや、別に俺、なんでも良いんだけど。」
「出来る事ならば採寸を合わせて作っていただきたかったのですが……勤務が明日である以上、ここの物で決めなければ……。仕様が無い。一歩妥協してこちらのスーツにしてみましょうか。試着、どうぞ。」

あ、もう完全に自分の世界に入ってる。
俺の話聞いて無いよ、コレ。
俺のためを思って、俺をないがしろにしてたら本末転倒だよ……。

「早く！！」
「すいません！！ただいま着ます！！！」

心中、溜息が止まりませんでした……。

「で、なんであんなに俺のスーツに執着したよ。」
「いや、あの……エルの無様な姿を他人に見せたくなくて……
……でも、エルは自分に関してはズボラなところもあるから……
……私が、どうにかしなくては、と。」

なんだ、このヤロウ、可愛いなっ！！
グッと拳を握り、緩んでくる頬を必死に引き締める。

「迷惑、でしたか？」

上目遣いの涙声。

誰がこんな攻撃を耐えられる事ができようか。いや、出来ない。

ああ、無性に頭撫でてぇ……！！

「いや、迷惑なんかじゃなかったが……お前の分のスーツは選んできたのかなぁ……と。」

保健室の先生なら、大人しめの私服に白衣を着るだけでもＯＫだろうが、あいにくと言うか、彼女は兼臨時事務員なのだ。

事務室ならばそれなりにスーツも必要になるかもしれない。

ま、どちらにしろ出勤初日だ。スーツが一番無難で安全だろうよ。

頭撫でてぇ。

「あ」

そんな事をやっぱりリンは忘れていたわけで。

頭撫でてぇ。

「ほらよ、お前の分。採寸は把握済みだ。あんまりお前に似合うようなの、わかんないから選べなかったけどな。」
「い、いえ、本当に……嬉しいです。」
「ん、それはよかった。」

ついに堪えられなくなり、俺はリンの頭に手を伸ばす。
恥ずかしくて、ぶっきらぼうに撫で続けたが、リンはそれを目を細めながら撫でられ続けていた……。

「やったー！！パパと一緒に学校に行く！！」

レヴィ、シュテル、アーシェ、の三人に今回の特務を説明した時の、レヴィの第一声である。
はつらつとした笑顔が跳躍と共に跳ねとび、それに呼応するように深蒼の髪が揺れる。

「それが出来たら苦労はしないよ」

「そうですよ、レヴィ。お父様にもお父様の都合があるんです。」

シュテルは俺の意見に肯定し、レヴィを窘めるが、本人も決して納得はしていないだろう。

一応理解はしているだろうが、どこか不満があるようにも見える。

同じ場所に居ても、共にいられない歯がゆさを感じている、そう言う風に見えた。

「あと、くれぐれも学校で会っても、今の呼び方はしないように。色々と波風が立っちまう。」

「パパとも呼べないなんて……嫌だよぅ。」

「あ～、もう。家に帰ってくれれば呼べるであろう。一々騒ぐな。」

本来、特務の内容を彼女たちに話す事は、決して無い。

かと言って彼女達を残して家を空ける事も出来ず、大抵はアインスを家に残す。

どうしてもアインスが必要な時は、はやて達、もしくはリンディさん所に三人を預けている。

そのお陰かどうかは不明ではあるが、彼女たちとなのは達、言うなれば陰と陽、対極に位置する彼女達の仲は良好だ。

最初はそれなりに衝突もあったらしいが、――――時間は時に残酷で、時に優しく慈悲深い物だ。つまりは時間が解決してくれた。

何度もぶつかりあい、傷つけあい、そして近づき、強固な何かを彼

女たちの間で作り出したらしかった。

「それじゃ、明日に備えてもう寝るかな。ほら、良い子は寝る時間だ。」

「まだ九時ですよ?」

「父上、遊ぼう!!」

「遊んで遊んで~。」

「あのね、今あんたたちは幾つなのよ。十六にもなって父親に遊び相手を請うんじゃないの。」

「生まれてからは、六歳だよ?」

「うっ……。」

確かに、六歳なら妥当な行動ではある。俺も困ったように体を捻る。しまった、このままでは圧し負ける。

だが、結局はアインスが娘たちを諭し、俺は早めに寝られるようになった。

母親の力は偉大である。そう感じた一件だった。

朝、日が頭を僅かに出し始めた早朝。
俺は自らの剣を握り、庭を疾走していた。

敵の剣が迫り、咄嗟に払う。息をつかずに一歩退く。

咄嗟に右に跳躍した。鞭のようにしなやかに伸びた刀身が迫っていたからだ。
どんなに避けても、振り切れない。剣が絡み取られる。

そのムチを腕にさえしっかりと巻きこんだ。これでこちらの力も伝導され、相手は逃げられない。
思いっきりそのムチを引っ張ると、引き負け、敵は倒れる。
その敵の首にひたりと剣を押し当てた。

「はい、俺の勝ち。」
「流石、だな。」

お互いにデバイスを解除し、俺は手を差し伸べ、立たせる。
長く、美しい桃色の髪が、立たせるときに指に絡まった。

「あ、すまない。シグナム、痛くなかったか？」
「いや、特には。」
「そうか。」

お互い汗でグッショリだったので、近くに用意していたタオルを取り、シグナムにも手渡す。

「まさか、同じ剣で勝負しても、勝てないとはな。本来の得物を抜かせたかった。」
「おいおい、剣じゃ俺が弱いみたいな言い方だな。」
「弱くは無い。だが、槍……と言うよりは長物を持っているときよりは、付け入る隙がある。」

「あら、やっぱり、わかる？」
「だが、それは未熟と言うよりは、熟練の深さの違いだな。槍のほうがもっともっと深く、底が見えない。」

お互いに今日の反省を指摘し合う。
組み手をすればいつもすることだ。
シグナムは良い所を指摘してくれるので、こっちとしても訓練しがいがある。

「どうする？ここでシャワーでも浴びてくか？」
「いや、遠慮しよう。帰ってから家で済ませる。」
「そうか、んじゃお別れだな。わざわざ来てもらって、悪いな。」
「いや、私もエルとの訓練で得られるものはあるからな。気にする事では無い。」

シグナムが、深く顎を引いた。

「そう言えば、今日から特務だったな。……内容は聞いても、良いのか？」
「知りたいか？」
「無論、強請はしないが。」

別に口止めされているわけでもないし、はやて達本人に明かさないことを約束させて、説明した。
どうやら若手が襲われる事件については知っていたようで、素直に任務には納得してくれた。

「私も、少し気にはなっていた事だったが……エルが居るならば、心強い。」
「何も起きないのが一番だが……出来る範囲で、守らせて貰うよ。」

シグナムは静かに頷きを返すと、何かを思い出したかのようにハッと顔を上げ、続いて顔を赤くしながら話を続けた。

「その……学校が次の仕事という事は……またしばらくここに居るのだろう？」
「うん、まあな。ここから学校にも近いし、不便はしない。」
「ならば……次の土日、どちらか空いているか？」
「どちらかは、必ず空く日が出来るとは思うが。」
「では、その時、服を……買うのを手伝ってくれないか？」
「服を？」

なんだっていきなり。
その理由が気になったが、それを聞くのも無粋のように思われたので、敢えて聞かないことにした。
だが、

「はやてとか、他にもセンスのある奴はたくさんいると思うぞ？俺、そんなファッションには執着してないし。」
「男性からの、アドバイスも欲しい。生憎だが、私には他に頼めそうな異性はいない。」
「ふ～ん、さよか。メンツは？」
「ふ、二人で、だ。」
「二人？」

「二人で、だ。」

服を選ぶのなら、みんなで意見を出し合って考えたほうが良いとは思うが……。

「うん、まぁ、シグナムと二人で話すのも滅多に無いしな。いいぜ、行こう。」

「そ、そうか、すまない。」

「そう言うわけだから、今度の土日どちらか、シグナムと出かけるから、アインス。」

「っ！！？」

縁側から様子を窺っていたアインスにそう伝えると、シグナムの体が跳ね、驚きで振り返る。

なんだ、気づいてなかったのか？

「あ、あの……その……。」

「はい、わかりました。二人で楽しんできてください。」

アインスは笑顔で了承と応えると、サンダルに履き替え、庭に降りてくる。

「エル、シャワーの用意ができました。あの三人が起きて、騒がしくなる前に入ったほうが良いと思いますよ？」

「そうだな、では早速。んじゃな、シグナム。約束、確かに憶えとくからな。」

俺はシグナムに言い残し、浴室に向かった。

「あの、アインス、本当にすまない。誤解はしないでくれ。」

「わかっているよ、私には。シグナム、貴女はエルを愛しているだろう？」

「なっ、何を!!」

「将だけではない、ヴィータもそうだし、シャマルも、そう。それに、兄と呼び慕っている主でさえ。みんな……女として、エルを愛している。」

守護獣であり、唯一男であるザフィーラも、エルに対して兄、もしくは父のような意識をもっている。

確かにアインスの言っている事は間違っていない、が。

シグナムは息を、呑んだ。

そう語る彼女が嬉しげだったから、理解に苦しんでいた。

「別にそれで将と争う気はまったく無い。そもそも、彼は独占できるような人間ではないのは良く知っている。……だから、むしろ今日の将の行動は、喜ばしい。」

「喜ばしい……？」

「私は、常に思う。どうしてこんなにもエルを愛している者達が居るのに、私だけが傍に居るのだ、と。」

「それは、当然アインスとエルがそう通じ合ったからで……。」

シグナムが言いかけた言葉を、アインスは静かに首を振った。

「ただ、それが私が最初だっただけだ。他の誰でも、エルと想いを通じ合わせる事は出来る。私だけが、愛されているのが、酷く悲しい。」

アインスが問いかけた、エルと一緒に居たくないか？、という問いに、もちろん傍に居たい、とシグナムは即答した。

ヴォルケンリッター全員が、そう答えるだろうという確信はあった。

勿論、夜天の書の主は八神はやてであるし、彼女の事も、主、という一言で片付けて良いような存在では無い、本当に大切な家族だ。

だが、エルは、言うなれば心で決めた主。人生の師。

彼が死ねと言えば、死ねる。シグナムにはその自信があった。

元々エルに救われた心と体だ、彼の為に使うのは当然の事であるし、

彼ならばきっと自分の死も無駄にはしない。絶対にだ。

はやてやフェイト達は泣いてくれるだろう。
どうして死んでしまったのか、帰ってきて欲しい。そうしてその死を惜しんでくれるだろう。

だが、エルはきっと、泣かない。
ただ黙って、感情を押し殺して、自分たちの死を認めていてくれる。

そんな彼の存在も、嬉しかった。

出来るならば、自分の命が尽きるその瞬間まで傍らに居たい。
彼の一挙一動すら見逃さず、彼のその生きる道を見つめ続けたい。

その想いは、誰にも負けないと思っているが、同じように想っている者が傍に多く居ることも、知っている。

「アインス、何を望んでいるんだ?私達に、そしてエルに。」

知らず、口が動いていた。聞かずには居られなかった。

「エルを、愛して欲しい。エルを愛している人すべてが。そして、エルはその人たちに応えて欲しい。その想いに、少しでも振り向いて欲しい。……私個人の幸せなんて、その後で良い。」

怒っても、憤激を飛ばしても良かったのだと思う。
そんな私達を押しのけて、エルの傍にいるお前が何を言うのか、と。

だが、そんな気はまったく起きなかった。
そしてそれは、これを聞いた他の皆もそうであろう。

「傲慢、かな？」
「ああ、傲慢だな。」

どうしようもなく不器用で、そしてどうしようもなくお人好しな言葉に、苦笑を漏らしていた。

あまりにもその姿が、想い人と瓜二つだったから。ただ、それだけだ。

スーツに腕を通し、ネクタイを締める。
一瞬、視界の端にネクタイを締めたそうにしていたリンが写ったが、無視した。

別にね、惚気たいわけじゃないんだよ。

「荷物は……良いな。どうだ？服装に変なところは？」
「見当たりません。とても似合って居ますよ。」
「そりゃ、リンがわざわざ選んでくれた物だからな。」

俺は一通り身なりを確かめると、テーブルの上に置かれた二つの装飾品を手に取った。
装飾品、確かに間違っては居ないが、それだけでもない。

「ジャン、調子はどうだ？」
『好調』
「よし。」

無機質でいて、どこか深みのある声を聞いて、すっかり馴染みになった二代目の相棒を腕に取り付ける。左腕にだ。

そして、もう一つ、ネックレスを掲げる。

「お前の調子はどうだ？ガウェイン。」

『ｓｙｓｔｅｍ　ａｌｌ　ｇｒｅｅｎ．　――いつでも行けます。』

「そうか。」

出された声は、最初の相棒と同じ声。レオハルトの声だ。

だがそれは、レオハルトの少し明るさと調子良さが浮かんでいるような口調ではなく、いかにも堅苦しく、それでいて誠実な口調。

たったこれだけで、まるで人が変わったようにも聞こえる。

返事をしっかりと聞いた上で、俺はそのネックレスを首に回し、スーツの下にねじ込む。

流石にスーツの上に銀物をぶら下げて置くわけにはいかなかったからだ。

ガウェイン

俺の三機目の相棒にして、二代目『ノブリス・オブリージュ』

性能は最先端にして、規格外。デバイスの性能に関しては管理局でも確実に十本……いや、五本の指に入る、とは言っておこう。

別に親馬鹿じゃねぇよ。

さて、相棒たちも身につけた事だし、最後の仕上げと行こうか。

「ガウェイン、迷彩機能、起動。」
『ｙｅｓ，　ｓｉｒ』

俺の色素の抜けた白い髪が、いかにも日本人らしい、すこし茶色がかった黒髪に変色する。
それを鏡で確認する。

「よし、上出来だ。褒めて遣わす。」
『有難き、幸せ』

中世の騎士らしい、いや騎士『らしすぎる』相棒にすこし笑みが零れた。

『何か、私が問題でも……？』
「なに、俺が作ったとはいえ、堅苦しいな、と思ってな。」
『申し訳ありません。……善処いたします。』
「いや、お前はそのままで良いよ。それがお前だ。」

いざ学校と言う名の戦場へと向かう。
今までに無い体験が待っているし、若干の恐怖もある。
だから、戦場という表現は間違っていない。そう思うことで、自分を奮い立たせた。

いつも軽口を叩き合っていた馬鹿息子を思い出しながら、玄関の戸を開けた――――。

五十五話　いざ、学園という名の戦場へ（後書き）

今更ですけど、わかりにくい所とか、ここはどうなってんの？という質問があったらどんどん質問ください。

読者視点で読む事を考えずに、色々飛ばして書いてしまったところもあるかもしれないので……

たとえば、闇の欠片三人娘の名前がイマイチ一致しない、と言われたら、次の投稿時にでも補則を書こうと思いますので

そんな感じです

五十六話　転生者（前書き）

輪廻転生

貴方は信じますか？

私は……信じません。

「空気読めよ！！」

五十六話　転生者

自分の居場所は、ここに無い。
汗を流しながら、思う。

槍を何度も突き、引き、返す。
その一挙一動に、体から噴き出している汗が飛び散った。

槍、とは言っても、家の自在箒の箒の部分を固定させただけの、棒だ。
本物の槍など、今の時代、この国では手に入らない。

どんなに強大な敵を想定して、打ちかかったとしても、後に残るのは空虚な虚しさのみ。
どんなにこの武芸を極めても、生かす場面など、この世代には無い。

ふと、槍を動かす手を止め、空を仰ぎ見る。
空には、小さいながらもしっかりと輝きを放ち、自分の存在を証明している、星がある。
そんな星達が、とても羨ましく思う。

母の、自分を呼ぶ声がする。
どうせ言い出す事は、今日の宿題は終えたのか、といった意味の無い言葉。

恥にならない程度の成績をとっていると思っているが、部活には入

っていない。趣味と言っても特には無い。
挙げるとすれば、今のように自分の武芸を、磨く事。
きっとあの母は、自分の事を、こんな歳になっても槍遊びをする幼稚な子供だと思っていることだろう。
だが、違う。
悔しさに胸をかき乱した。

自分にとっては、すべてなのだ。自分にとっては、この武芸がすべてであり、この武芸を生かし、知恵を振り絞った戦場が、帰るべき場所。
決してこの家では無い。
まったく違うのだ、と叫びたくなる。

だが、叫んで、どうする？
胸をかき乱した手が、重力に引かれ、滑り落ちた。

誰に、どう言った所で、信じてはくれないのだ。
どうして信じる事ができようか、自分が前世の記憶を受け継いだ、転生者だ、などと。

子供のように泣き叫んで主張できれば、どんなに楽なことか。
だが、前世を生きた、理性が、否定する。

最初は、夢のような心地であった。
自分の体の自由が聞かず、目に見えたのは明らかに巨大な世界と、人間。

死後の世界とは、こんなものなのか？

そう考えた時、おや、と疑問が胸に生まれた。

時を重ねても疑問が解決するどころか、膨らんでいくばかり。
母親と自称する母親は、自分の母親では無い。その自称母親が呼ぶ名前も、自分の名前では無い。

わかった事は、この世界に対する、偽物のような感情。

転生を体験した自分ですら、信じがたい話を、他人が聞いて信じられるか。
そんなこと信じられる訳も無い。

母の、怒気が篭った呼び声を聞いた。
流石にここにいてはまずいと、槍を立てかけ、苦笑しながら家に入った。
とりあえず、今の済ますべき課題を片付けよう。明日も、学校だ。

これは、翌日、新任の先生がやってくる日でもあった。

朝、母親に出された分の朝食を腹に詰め、学校に向かう。

生まれてすぐに死別したとかで、父親は、いない。

よく女手一つで育て上げたものである。

そういう意味では、育てて貰った恩義はあるが、未だそれを返す事はできそうも無い。

どうもこの世界の子供と大人の境界は、あやふやだ。無駄に間延びした教育のプロセスだ、とも思う。

自分の時代であれば、既に一人前の男として扱われる年齢だ。

その前世があるから、歯がゆくて、いけない。

いつの間にか、校門まで来ていた。

いつもの下駄箱に靴を入れ、履き替え、自分の教室へ。

そしていつもの席に腰を下ろす。

席は、一番左の、窓際最後列。

ここから教室を眺めるのが、日々の日課。

この世界にだって、良いところは、ある。笑顔だ。

子供たちの、無邪気な笑顔。これは元いた世界では、滅多に見られ

ない。
子供の笑顔は良いものだ……、そう思って、さきほど自分の年齢を、前世では大人として扱われる年齢だ、と考えていた事を思い出して、笑った。

「何？何か面白い事でもあったの？」

クラスの女子に、話しかけられた。
茶色の髪をサイドポニーで纏めた可愛らしい少女だ。そう、名前を

「いや、なんでもないよ、高町さん。それと、宿題のプリントだよね？はい、これ。」
「はい、どうもね。」

笑顔でプリントを受け取り、他の生徒に回っていくその後姿を見送る。
彼女は宿題を集める係りだ。毎朝、集めて回っている。
他にも数名担当の子もいるが、今日は彼女だったらしい。

「おはよう、今日の調子は、どう？」
「うん、まぁまぁかな。おはよう。」

前の席の女子が席につく。
鮮やかな金色の髪が特徴の少女、フェイト・Ｔ・ハラオウン。

肌が、ピリピリと電流が奔ったかのように粟を作る。
そう、さきほどの高町なのは、そしてフェイト。この二人の少女に近づくと、いつも体が反応する。

彼女達は相当な美形だ、とは思う。
だから最初は、恋などと言った物か、という思考が少しはあった。

しかし、考えるたびにその思考は否定された。

美形ではあるが、いかんせんまだ幼い。
肉体的には同い年だが、その精神は二度目の生を受けた、所謂おっさんだ。
そういう性癖を持ち合わせてもいないので、欲情すらしない。

体が、危険を感じているのだと思う。本能的に。
前世で数々の武人を見てきたが、武人が放つ気とは、違う。
だが、この身を焦がすような何かを持っている事は、わかった。

クラスは違うが、これと同じような雰囲気を持つ少女は、他にも数名いる。廊下で何度かすれ違っただけだが。そしてまだ登校してきてはいないが、このクラスにはもう一人そういう少女がいる。八神、はやて。
なのは、フェイトと仲良く話しているのを何度も見かけている。

あの三人は、特に親しい。一目瞭然と言ったほどに。
その三人とも、この体が反応するほどの、何かを放つ。

あの、三人には、何かがある。
だが、正体を突き止めようという、興味もまだ無かった。

「少し、眠るかな。」

HRまではまだ少し余裕がある。
宿題も予習も終わらせてある。ならばすこしここで眠っても悪くは無いだろう。

机に突っ伏し、瞳を閉じた。

寝ようとは思っていたが、耳が自然と二人の少女の話を聞きとっているのを感じ、この臆病者と心の中で叫んだ。

「どうも、今日から臨時の先生として、このクラスの副担任と歴史を受け持つ事になりました、荒洲（あらす）　得流（うりゅう）です。」

とりあえず、考えておいた偽名を伝え、自己紹介する。
出来るだけ、目立たないように、なのは達の場所を確認する。

自己紹介を続けながら、それとなく表情を窺うが、三人ともガン見だった。俺の顔を。
咄嗟に視線を逸らし、目を合わせるのを避ける。

髪の色を変えて、偽名を使って、果てにはメガネまでかけて。
それなりに手を尽くした試みだったが、このままではバレるのは時間の問題だった。
隠す必要なんて無いが、関係を晒す必要も無いだろう。
そんな中途半端な考えが、この中途半端な変装になってしまった。

「この時間が最初の私の授業なんですけど……ちょっとみんなに自己紹介して貰おうかな？」

うん、新任教師としては無難な質問だろう。

俺から見て左から一人づつ立って、自己紹介していく。
最初に順番が回ってきたのは、なのはだ。

「高町、なのはです。好きな食べ物はマーボー豆腐です。」
（俺の好物！！）

なのはの好物は何だったか。とりあえずマーボーでは無い事は確かなのだ。
揺さぶりをかけてきている、これは。

絶対に表情は変えずに、適当に相槌を打ち、次の生徒を指名する。
次に順番が回ってきたのは、はやてだ。

「八神はやてです。好きな言葉はノブリスオブリージュですっ！！」
（俺のデバイスの名前！！）

クラスメイトも聞きなれぬ言葉がはやてから飛び出し、疑問に思っているが、本人は至って気にしていないようだ。

……これは露骨過ぎるだろう。絶対に異変なんて返してやるものか！！

「へぇ、難しい言葉を知ってるんだな。では、次の子、お願いします。」

最後に当てられたのは、フェイトだった。

「あ、あのフェイト・T・ハラオウンです。よろしくお願いします。」
「はい、よろしく。」

とりあえず揺さぶりをかけてこなかったフェイトに安心と感謝をしつつ、名簿を見る。
まだ、後ろの席が一つ、あったようだ。

「あ、それじゃ、最後だね、お願いしま～……す。」

最後のクラスメイト、男子。
その少年を見た時、俺の体に急速に血が流れた。
本能が戦闘体勢に入り、筋肉が膨張していくのを感じた。はっきりと。

「なんだ……だ、おまえは。」

誰にも、聞こえることなく、呟いた。

はっきりと、見えるのだ、気が。
数多の修羅場と死地を乗り越えてきた事を裏付けるかのような、膨大な気。
それが、その少年の体を中心に膨れ上がっているのがはっきりとわかる。

手練、なんてレベルじゃない。
あれが発しているのは、確実に武人、戦人の類のものだ。
神将、そういうクラスの人間だ。

少年の唇が動いた。
その唇は確実に言葉を発している。

お前は、何だ。と。

「君の……名前は？」
「檜山、岳斗、です。」

その揺れる瞳とは裏腹に、透き通るようなはっきりした声で、名前を呼んだ。
まるで、他人の名前を読みあげるように――――――。

新任教師が、そういえば今日来るのだった、と、ホームルームになってから思い出していた。

確かに滅多に起こる事でもないが、取り立てて騒ぐことでもない。
少なくとも、自分はそう思う。

気にせず外を眺め続けた。

事実、小学校から中学の今まで、そういうことは何度かあった。

誰かが、教室に入ってくる音が聞こえ、次いでクラスメイト達の囁き声が響き渡り始める。
ま、目当ての教師がやってきたのだろう。

ピリ、と肌が張り詰めるような気がしたが、どうせいつもの反応だろう、と目の前の揺れる金髪を見ながらそう考え、無視した。

自分の、名前が当てられた。
自己紹介、をしているらしい。

とりあえず、自分の役割をこなさなければなるまい、立ち上がって、絶句した。

目の前に広がったのは、戦場だった。

新任の教師を見た瞬間、汗が噴き出し、体が無意識に跳ね上がりそうになる。

見えたものは、気。

なのは達のような感じる程度の甘いものじゃない。
明らかに視覚化し、自分にその存在を叩きつけてくる。目まいに似たものを感じていた。

寄れば四肢を完膚無きほどに断ち切られそうな、修羅の覇気。
そして、その覇気を放つ、底知れぬ、闇。

この男は、闇から生まれた男だ。

本能でそう結論付けた。

「お前は……何だ……。」

決して他に聞こえない声で、呟いた。

「君の……名前は？」
「檜山　岳斗、です。」

返事として、ひねり出すように出した名前は、自分の名前だとは思えなかった。

「はい、そして北漢が滅ぼされ、中国に宋が建国されるようになったのです。」

お兄ちゃんにそっくりな先生が、授業を進める。
髪の色とか、メガネとか違うところはあるけれど、あの顔はどこからどうみたってお兄ちゃんやった。

「ねぇねぇ、はやてちゃん、どう思う?」

右側に座っていたなのはちゃんが、身をこちらに寄せてきながら、こっそり話しかけてきた。

「あれ、明らかにお兄ちゃんやろ。」
「うん、わたしもそう思うの。」

とりあえず、お兄ちゃん疑惑の先生を観察してみる事にした。
みればみるほど、あの先生がお兄ちゃんと一致していく。
動きや振る舞いを見れば、一発でわかるんや！！妹舐めんなや！！

「でも、どうして来たと思う？」
「遊び……な、訳がないしなぁ……。」

一体どんな理由があって、地球に、しかも学校の先生なんてやってるんやろう。しかも歴史の先生とか……。

「ん？歴史？」
「？どうしたの、はやてちゃん？」
「もしあれがエル兄ちゃんだったとして、歴史なんてわかるんかな？」
「あっ、」

フェイトちゃんかて、国語には相当苦労してるんや。
ミッドの人が地球の歴史を教えるなんて……、

「中国四千年の歴史なんて言う通りに、中国の歴史はとても深く、その中で形成された文化や風土はとても個性的で（中略）」
「普通に歴史教えてるの。」
「何処の世界の人やねん……。」

フェイトちゃんに目配せしてみると、フェイトちゃんはその視線に気付き、困ったように笑い、肩を持ち上げるだけやった。

フェイトちゃんも、事情はわからんらしいな。

でも、お兄ちゃんもやっぱりミッドチルダの人間。
授業を続けていれば、どこかでぼろを出すはずや。

「それで、この宋国ですけれど、やはり宋建国の最大の立役者といえば、楊業の名が上がりますね。彼は北の異民族「遼」を大いにその武勇で打ち破り（中略）」
「教科書に載ってない深い所まで教えてるの。」
「何処の国の人やねん……。」

何？誰、ようぎょうて。
もう教科書に載ってないなら教えへんでええやん。

「そもそも中国の全ての文化、風習、文字に至るまで、一人の帝が生み出したという風潮がありまして、まぁ中国神話とも言いますが、その帝の名前が「黄帝」。故に、中国では黄色が最も高貴な色とされているようです。」
「なんかもう中国起源の話をしてるの。」
「何処の研究員の人やねん……。」

なんかもう呆れたわ。
フェイトちゃんの様子を窺っても、さっきと同じように苦笑を返すだけ。
ま、しょうがあらへんよな。

「……？」
「どうしたの、はやてちゃん？」
「いや、フェイトちゃんの後ろ、岳斗くんがやけに楽しそうやなぁ……と、思って。」
「あれ、確かに。珍しいね。」

フェイトちゃんの後ろの席、岳斗くんがいつもの二割増し以上で瞳を輝かせながら黒板を見つめていた。

岳斗くんは、いつも冷静でクールというか、……どっちかというと達観してるような男子なんやけど。
口はいつも通りにへの字に引き結んでるし、頬も変わらず引き締まってるんやけど、とても今は楽しそうに見える。

「好きなんかな？中国。」
「さぁ？」

なんや、珍しい事もあるもんやなぁ……。
岳斗くんの手には、まるで心をあらわすかのようにペンが高速で回されていた。

岳斗君がペン回しなんて、初めて見た。

本当に、珍しい事も、あるもんやなぁ。

懐かしい名前を聞いていた。

名前だけでない。土地、国、自らの起源を思い出させるすべて、だ。

荒洲とかいう教師が発する気は、決して受け入れられない。
だが、長くこの異国ともいえる日本で暮らしてきたからであろうか、彼の言葉一つ一つは、まるで母親の子守唄のように懐かしく、そして暖かく心の隙間に入り込んでくる。

彼の授業を、真剣に聞き、理解しているものはどれだけいるだろうか。
いや、もしかしたら一人も居ないのかもしれない。

ただ、自分は一語も逃さず聞いている。堪能している、と言っても良い。

そうして気付けば、授業の五十分がまるで一瞬のように、過ぎ去っていた。

各々の生徒が席を立ち、立ち話、世間話に没頭し始める。
まるで先程の授業が何の事も無い通過儀礼のように。

事実、彼らにとってはそうなのだろう。

だが、自分にとっては、違う。
詰め込んだものを、一旦整理するように、息を吐き出した。深く、深くだ。

整理する事で、今まで記憶の奥底に仕舞い込んでいた物が、溢れた。

母親の顔。師の声。兄弟たちの勇姿。そして、自らの名。
体に潜む、熱き液体が流れ始めた。そう思った。
不覚にも、次の歴史の授業が、待ち遠しくなった――――――――――

五十六話　転生者（後書き）

なんて叩かれるかわかりませんが、転生者は実在の歴史上の人物です
話を読めばなんとなくそれはわかるでしょうが、今の時点で誰かが
わかった人は、本当に凄いと思う。

もしくは、相当の歴史好きですね

詳しい人も、詳しくない人も、考えてみれば面白いと思います（笑）

感想、コメントも二十四時間体勢で切望しております
では、また次回

五十七話　魔導師は見た（前書き）

ＧＷを皆様いかがお過ごしでしょうか。

自分は、ゴールデンではありません。
むしろウランか水銀ぐらいの一週間です。

更新遅れて、本当に申し訳ないです。

五十七話　魔導師は見た

「ねぇ、はやてちゃん？」
「ん？どうしたよ、なのは殿。」

なのはは呆れたように溜息を一つ吐く。
無論、目の前のはやてに対してだ。

エルが教師に扮して学校に新任してから最初の休日。
はやては、海鳴市の駅前の、広場の花壇に身を隠していた。

その様子は何の疑いもなく変質者である。
はやてに誘われたなのは、フェイト達だが、流石に一緒に居たいとは思えなかった。

「グラサンまでかけて、ここで何してるの？」
「それは……あっ！！ここに、隠れろや！！」
「なんかさっきから口調が……。」
「いいから！！」

もう一度、今度は諦めの溜息を吐き出し、なのは達ははやての隣に隠れる。
これで周りからは共犯者と見られるだろう。

悲しくて涙が出そうだった。

はやてが、駅前で待ち合わせでもしているのだろう女性を指差す。

「ほら、あれ、見てみい。」

「あれ？シグナム、がどうしてここに？」

「わからん。なんかこの前からカレンダー見てそわそわしたり、しきりに鏡の前で服装をチェックしたりしててな。これは怪しいと思って……。」

「待って、もしかしてシグナムを監視するために私達を誘ったの？」

フェイトがあからさまに表情を歪め問いかける。

「もちろんや。ええやん、暇やろ？」

「はぁ……はやてちゃん、流石に私は今回は遠慮するね。悪趣味なの。」

「私もそう思う。」

「なっ！！二人とも！！」

「それじゃ、ね。」

帰ろうとした二人の袖を掴み、はやてが泣きつく。

「頼むぅぅぅぅう！！ウチを独りにしないでぇえええ！！」

「大丈夫。岳斗くんがいるの。」

「え、僕？」

三人から一歩引いた位置に、クラスメイトの檜山岳斗が立っていて、突然の問いかけに目を白くする。

彼は本当に偶然に通りがかっただけの第三者だ。

見知った顔を三つも、しかもその三つが花壇に不審者よろしく隠れているのだから、様子を見ないわけが無い。

多少なりとも、無視したい気持ちが無かったわけではなかった。

だが、彼女たちとの付き合いも、中学一年よりこれで三年目。勇気と優しさを振り絞っていまこそ声をかけようとしていたのだ。

ただ、そのせいで巻き込まれた。それは不運と言うほか無かった。

「というか、何故僕を巻き込む。」

「ああ、岳斗くん、ええところに!!一緒に見張ってや!!」

「話を聞いてくれ。」

「それじゃ、今度こそさよならなの。お二人さん。」

「じゃあね、岳斗くん。」

「待てそこの二人。僕になすりつけたまま帰るんじゃない。」

「そうやで。せめて相手が誰かぐらい見ていってもええやん。だってシグナムやで?」

「いや、そういう意味では無い。」

はやて達に背を向けていた二人の歩みが、止まった。

その様子を見て、岳斗は内心まさか、と舌打ちした。

「ま……相手が誰か見るぐらいなら……いいかな？」
「うん……正直、それは気になるんだよね。」
「ああ、やっぱりか。」

結局四人全員が、花壇に隠れ、シグナムの様子を窺っている。

岳斗にしてみれば、シグナムと呼ばれた彼女はまったく知らない女性なので、なんともいたたまれない気持ちになってくる。

ただですら隠れているだけで変質者なのだ。
変質者扱いされてまでしている事とすれば、一人の女性を監視すること。

岳斗の心が背徳感に苛まれる。

「うおぉ……。」
「どうしたん？岳斗くん。」
「いや……別に何も……どうして、僕がこんな事を。」
「あ、そういえばどうして岳斗くんは駅前を歩いてたの？」
「なんでって……散歩」

なのはの問いに即答した。
三人の少女たちの頭上に、一斉に疑問符が浮かび上がった。

「へ？家、この近くなん？」

「別に。ここから歩いて三十分くらいかな。」
「往復一時間だよ?!どうしてまた。」
「天気が良いなぁ……と、思って。」

少女たちは表情を驚愕に染める。

「いやいやいや、可笑しいやん。」
「おじいちゃんの発想なの。」
「人生やりきった感がする。」

上からはやて、なのは、フェイト。蛇足。
とにかく、酷い言われようだった。

流石に岳斗も表情を苦く歪めた。

年寄りの発想、人生やりきった。酷い言われようではあるが、どちらも否定できないのであえて否定もしなかった。

悔しいぜ。と心で呟く。

「ん?待ち合わせの相手って、あの人じゃないか?」
「え、どこどこ!!」

岳斗が指差すと、三人が一斉にそちらに向き直る。
最初、乗気でなく、悪趣味と言っていたなのは、フェイトの両名も、実は興味津々だったらしい。

「……は、はは。」
「ふ、ふふふ。」
「ひ、ひひっ。」
「？？」

岳斗が指差した男を、三人が見た途端、三人が笑い始めた。それも、かなり邪悪に。
今、はっきりと岳斗の目には、黒いような、赤いような……
とにかく精神的に痛めつけてくるオーラが見えていた。
生存本能に従って、一歩身を引いた。

「ふ、ふふぅ……そういうことかい、エル兄ェェ……」
「抜け駆けなのぉ……。」
「シグナムェ……。」

とにかく、逃げ出さなければ、今すぐに、ここから。
もう頭の中には逃げることしか、無い。
他の事なんて、二の次以下だ。

兵は神速を尊ぶ、はちょっと違うな。
兵法とは機を見て敏なり、も違う。

そう、三十六計逃げるにしかず、だ。

「はやてちゃん、お相手を見たけど……まだまだついてくの。」
「私もそうしたいな……？」
「ええで、大歓迎や。」

えぇ～、と岳斗は漏らしたかった。
君達、見るだけで終わるんじゃなかったのか、と言いたかった。
でも、いえなかった。言うべきでは無い、それはわかった。

「はは、相手も見たことだし、僕はそろそろ散歩に戻ろうかなぁ……なんて。」
「「「一緒に来なさい。」」」
「はい、ついていきます。」

よりによって、どうしてこの日に。
どうして自分は、今日が良い天気だなどと思ってしまったのか。

よりによって、どうして彼女たちは自分なんかを一緒に連れて行こうと思ってしまったのか。

静かに、そして深く、自らの不遇を嘆いた。

駅前につくと、先にシグナムが待っていた。
女性を待たせるとは、紳士失格だな。

「悪い、待たせたな。」
「い、いや、私が早く来すぎただけだ。」

そう言われて、思い出して時計を見ると、確かに待ち合わせの予定の時間よりも三十分近く早かった。

「そんじゃ、ちょっと早いが、行くか。腕と手、どっちが良い？」
「え？」
「今日はエスコートする側だろ、俺は。手をつなぐか、腕を組むか、お好きなほうを。」
「い、いや！！そんな恥ずかしい……！！」
「遠慮するなよ」
「じゃあ、手を……。」
「ほらよ。」

手を差し出し、おずおずといった様子で握るシグナム。

普段凛としている彼女も綺麗だが、今日はどちらかと言うと女の子みたいで可愛らしかった。

しっかりと手を握った事を確かめた後、歩き出そうとして、

「?!、殺気!!」

「どうかしたか?」

「い、いや、あれ?なんか背筋に……?」

辺りを見回しても、別にコレといった顔を見受けられない。

だが、なんとも死を感じたんだ。

……なんか、嫌な予感がするなぁ……。

最初に、第一目標である服だ。

シグナムが前もって決めていたと言う店に入り、店内を歩きながら、様々な服を見て行く。

俺はシグナムが提示してきた服に関して、感想なんかをちらほら返すだけだ。

本当にこんな程度で良いのか聞いて見たが、笑顔で充分だ、と返されてしまった。

ま、当人が満足してるなら、良いか。

それで、今日シグナムを人目見てわかったが、彼女の今日の服装はよく似合っているし、服選びのセンスも申し分ないと思う。

本当に彼女が自分で選んだのかどうかは不明ではあるが、それは聞くのはご法度。

ただ、似合っていると伝えて、後はただアドバイザーとしての役割を果たすだけだ。

「これは、どうかな？」

やはり、シグナムが選ぶ服はセンスが良い。と実感する。

今日の私服、自分で選んできたのだろうな。

「シグナムは何着たって大抵は似合うさ。だが、その服だとどっちかと言うと、俺はヴィータの方が似合うと思う。」

「そ、そうか……、なら、コレは？」

「大人しすぎるんじゃないか？それはシャマル向けだな。」

「むぅ……。」

「シグナムには……ほら、これなんか似合うと思うな。露出は少なくても、シグナムの体のラインがすっきりと見える。」

「私の体のライン……見せるほどのものか？」

「それはもう。世の男共はお前の露出を望んでいると言っても良い。」

「エルも……そう思っているのか？」

む

「いや、まぁ、そりゃぁな。俺も男だし。ただ……あんま進んで露出しく欲しくは無い、かな？」
「どうして？」
「シグナムが不特定多数の男子にじろじろ見られるのが……嫌だな。」
「そうか……そうなのか。……安心した。」

何が安心したんだ？そう聞いたら、うるさい、と逆に睨まれてしまった。
いやもう、本当に女心は不可解です。

「本当にここまでで良いのか？」
「ああ、ここが別れるのに一番都合が良いだろう？これ以上私を見送ったら遠回りになるしな。」

夕暮れ時、俺たち二人は買い物も済ませ、最初に待ち合わせた駅前に戻ってきていた。

服を買ったその後も、雑貨を見回って過ごしていたが、服以外のめぼしい買い物といえば、昼食とアクセサリーショップでシグナムに買ったネックレスぐらいのものだ。
今、そのネックレスは彼女の胸の前で光っている。

「別に遠回りなんて気にしないんだがな。」
「明日も学校なのだからゆっくり休んで。」
「ん？お、おう。」

一瞬、シグナムらしくない口調に戸惑った。
騎士と言うよりは……女性、母親、……とにかく母性を感じた。
ぞくり、と恐怖とは違った悪寒が奔った。
だが、当のシグナムは伏し目がちに、黙り込み始めていた。

「……どうしたよ？」
「ああ、アインスが言っていたことだが……。」
「リンが？」
「エル、お前は私たちの事を……」
「？」
「……いや、やはり何でも無い。」
「やべ、すげー胸がモワモワする。」

言って！！言いきってよ！！と、本来ならツッコミ所だが、彼女の様子からそんな雰囲気で無い事を感じた。
やけに、寂しそうに、感じた。

「すまないな。今日は本当にありがとう。楽しかった。」
「ああ、俺も久々に二人きりで話せて楽しかったよ、シグナム。」

シグナムが背を向けて、歩き始めた。
その背中が、やけに寂しそうで、物欲しそうで、俺は声をかけていた。

「シグナム、何を考えてるかしらねーけど、お前らを今も昔も信じ続けてるからな。つらいときは、俺が守ってやる。」
「その言葉、帰って全員に聞かせよう。」
「ああ、頼むな。」

シグナムが見えなくなるまで、見送り続けた。
彼女は、一度も振り返らなかった。

「さて……あと、することは……。」

最初から、気になってたんだよなぁ……。

「くっ、本当に一日中デートやったで！！」
「イチャイチャしすぎなの！！もう、許さない……。」
「シグナムェ……。」
「君達……本当に元気だね。」

どうも皆さん巻き込まれ系男子、岳斗です。
正直、僕はもうヘトヘトです。
花壇に隠れたまま、痛みを訴えてくる背骨と膝をさする。

ずっと隠れるために、中腰、もしくは伏せの姿勢だったのだ。下手な戦よりも疲れてしまった。

しかし、目の前の彼女たちは未だピンピンとしている。

恐ろしい……というより、底知れないよ。

「ん？」
「あれ、なんか。」
「エルさんが」
「追っかけて来てますよ！？」

最初から、はやて、なのは、フェイト、僕の順番です。蛇足。
四人全員が、回れ右、そして全力で走りだす。

「悪いごはいねぇぇがぁあああああ！！！」
「「「ぎゃあああああああああああああああ！！！！！」」」
「なんで俺までぇぇぇえええええええ！！！！！」

どうして、本当に散歩なんてしてしまったんだろう。
一日中あの男を観察して、得られるものは確かに多くあった。
はやて達の話によると、あの荒洲という教師と、あの男は同一人物だと言う。
あの男について語りたい事は多くあるのだが……。

「マデェェェエエエエエエエ！！！」
「「「「ぎぃやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」」」」

すいません、今は出来ません。

ああ、生きて帰れるかな、俺。

五十八話　闇閃の斧（前書き）

お待たせして、本当に申し訳ない

出来る限り早目の投稿、頑張るので、見放さないで

切実に

五十八話　闇閃の斧

「おら、お前ら、反省してんのか？」

少女三人を腕にぶら下げながら、歩く。

そして、俺の後ろを歩く少年がもう一人。

「あ～。」
「う～。」

持ち上げている少女たちからは、枯れたようなうめき声が響いてくる。

結局不審者を全員捕縛し、げんこつと説教を見舞わせ、あまりに精根尽き果てた少女たちを、家まで送ろうという事になった。

少女たちの頭の上には、綺麗なタンコブが膨れている。

「特にはやて、お前が他の三人も扇動したみたいだし、罪は重いぞ。」
「しょ、しょうがないやん！！あまりにもシグナムの様子がおかしかったんやから！！！夜天の書の主として、当然や！！」
「都合いいな、夜天の書の主は。」

背後に無関係の少年がいる事を思い出し、振り向いた。
その少年は、はやて達のクラスメイトにして、俺が一目置く威風の持ち主。

「ごめんな、俺の妹が迷惑かけちゃって。」

今の自分は、変装していないエルンスト・アルカトラスなのだ。
故に初見の人間を装ったのだが……。

「いえ、別に用件もなく暇だったので、そう迷惑ではありませんでしたよ、荒洲先生。」

ちょっとまて

とんでもない精密射撃が飛んできた。
腕にぶら下げた三人娘を引き寄せ、顔面に揃わせる。

「おい、お前ら。」

俺が殺気を込めて問い詰めると、三人は一様に顔を白く染め、首を振る。

「いや、ウチは何も言ってないで！」

「私だって……！」
「え、うそ、なのは……！」
「もしかして、私、言ってた……！？」

「あーもう、誰がばらしたとか、メンドクセ。全員、ここで堕ちろ。」
「いや、墜ちるのはお兄ちゃんの拳じゃ……。」
「ふんっ。」

ギャー

とりあえず、彼女たちの頭のタンコブに、もう一段タンコブが出来た事は言うまでも無い。

「とりあえず、岳斗くん、この事は絶対に秘密の方向で、ね。」
「はぁ……わかりました。でも、そんなに隠すことですかね？」
「そう思うかもしれないけど、俺たちには大切な事なんだ。」

岳斗本人に直接問いただしてみたが、どうやら俺とはやてとの関係を明かした程度で、管理世界や魔法に抵触するような内容は話していなかった。

ただ、時折岳斗から注がれる視線が、疑念も混ざっているものにな

ったと、俺は感じていた。

「それじゃ、僕の家はこっちなので……、さようなら。」
「うん、それじゃ、また学校で。」

綺麗に背筋を伸ばした少年を見送り、俺は未だ、腕に死んだようにぶら下っている少女達の家に、一つづつ向かうことにした。
どんな状況であれ、俺の任務は、彼女たちの護衛なのだから……。

「でも、三人全員は、ちと重いな」
「「「私（ウチ）は重くないよ！！！」」」
「お前らが重いんだよ！！！」

「そうですか、そんな事が……ふふっ、可愛らしいではありませんか。」
「そんな風に言うな、リン。ストーカーされるこっちの身にもなってくれ。」
「良いなぁ、フェイト達はパパとそんな楽しい事してたのか～。」

家に帰り、食後、家族の団欒の時間で、今日の話を伝えた。
俺はソファーに座り、リンもその隣に座っている。

話を聞きつけたのか、レヴィが近づいてきて、俺の膝の上によじ登ってくる。

容姿が九歳程度の六年前ならともかく、年とともに成長した彼女の体を膝の上に乗せるのは、結構厳しい。

「レヴィ、ちと重い。」
「僕は重くないよ！！！」
「あれ、なんかデジャヴ。」

とりあえず、シュテルとアーシェの視線が厳しくなる前に、降ろした。

「今度は私たちとデートしてくださいね、父様。」

シュテルが呟いた言葉に、少し呆れたが、すこし微笑ましかった。

「父親とはデートとは言わねぇよ。だが、時間ができたらまたお前達とも一緒に遊んでやるから安心しろ。なんたって可愛い娘だからな。」
「その点は問題ないぞ、父上。我の将来の婿は父上だからな。」
「黙らっしゃい。俺の嫁はリンだけじゃ。」
「もう……エル。」

リンが恥ずかしそうに俯くのを感じながら、俺はテレビのニュースに耳を傾ける。
一応、ではあるが、辻斬り的犯行が起こっていないかの、確認だ。
まさか魔導師がメディアに取り上げられるようなミスをするとは思えないが、念のためだ。

「主にはシグナム達ヴォルケンリッターが控えているから、そうそう心配はないかと。」

俺の雰囲気を汲んだのか、耳打ちするように、リンが話しかける。

「フェイトにもアルフがいるから大丈夫かな、とも思ってる。アルフの奴、自分の危険よりもフェイトの危険の方が敏感だからな。」
「……なのはは？」
「あの三人の中ではアイツが一番心配だよな。……だが、彼女にも強かな所はある。用心に越した事は無いが。」
「そうですね……。」

はやての思惑はどうあれ、今日一日、彼女たちが俺を追跡していてくれた事は俺としても都合がよかった。
俺が一々全員の安全を確かめながら護衛するよりも、全員が固まっていて楽だったからだ。
だから、彼女達を最後まで、泳がせた。

「ヴォルケンズにも、はやての護衛は夜も気を抜くな、と伝えてくれ。こっちもリンディさんに伝えておく。」
「はい。」

俺はソファーから立ち上がり、二階に上がる。
今夜に備えて、少し仮眠を採ろうと思ったからだ。

だが、階段の手すりに手をかけたところで、リンに呼びとめられた。

「今夜から、夜の見回りですか？」
「ああ、用心に越した事は無い。そう言ったからな。」
「私も、手伝いましょう。」

静かに、首を振った。

「お前たちは、娘たちを頼む。彼女たちも、将来有望な若者の部類

だ。」

「……わかりました。くれぐれも、お気をつけて。犯人の狙いが、本当に子供だけとは限らないのですから……。」

「……そうだな。気をつけるよ。」

お前も、気をつけろ。

そうリンに言い残し、俺は二階の自室に向かった。

日課の、槍の鍛錬を始めた。

一通りの槍の型を通した後で、敵を、戦場を想定し槍を振るう。

槍、とは言っても自在箒なのだが。

一刻を争う状況では無い故に、そう問題視もしていないが、この自在箒にも不満がある。

まず、短い。

未だ発展途上の少年の体とはいえ、もう少し丈が欲しいところ、そう思っている。

第二に、強度。

こんな木の棒では、せいぜいが素振り。

それ以上の事をしてしまうと、容易く折れてしまう。

木という事もあるが、あまり重さが無い事も不満のうちの一つだ。

実際に物を突いてみないと、感触的に槍術を会得することなど、不可能であるのに、何もつく事が出来ない歯がゆい感触。

難儀な世の中だ、中空に箒を突き出しながら、呟いた。

「本当に、難儀だな。それほどの武技を、持っていて生かす場所が、無いとは。」

どこからか発せられた、声。自分の声では無い。
咄嗟に声の出所に向けて、構える。

「その反応は、やはり只者では無い事はわかるな。だが悲しいかな、その棒では何の意味も無い。」

三歩ほど踏み込んでやっと届く位置、距離にすれば……１０ｍほどか。
そこに、男がいた。

浅黒い肌、筋骨隆々の肉体、そして得物を貫くかのような重く、鋭い、視線。
その逞しい筋肉を隠そうともしない、小さなベストを着込んでいた。

「何だ、お前。」
「何、通りすがりの異世界人よ。目を見張るほどの気を放つ武人を見かけたので、わざわざ来てしまっただけのこと。」
「そういうお前も、相当な武人のようにも、見えるが。」

男の視線が、一層重くなった。

「感じるのか？素晴らしいな。その若さでその領域にまで達してい

るのか。是非とも欲しいな。」

男が、まるで熊手のような手を差し出す。

「どうだ？一緒に来んか？」
「断る。意味が理解できん。」

有無を言わせぬ拒絶に、男は豪快な笑いを返す。

「だろうな！！いやなに、少し説明やら何やら飛ばしすぎたわ！！……まぁ、説明の前に、すこし遊んでも罰はあたらんだろう？」

どんな手品なのか、はたまた魔法なのか、男の手にはいつの間にか双斧が握られていた。
だが、殺気は感じない。

その殺気よりも先に、世界すべてが自分一人に視線を向けてきたかのような閉塞感が体を襲う。
まるで、この世界に今ここにいる二人だけのような……。

「何を、した？」

知らず、問いていた。

聞けば、答えてくれる。そんな確信があった。

「ふふ、貴様のそれはもはや勘ではないな。結界すら、気配で感じるか。益々楽しみになたわ。さぁ、行くぞ。」

殺気が体全体を稲妻のように駆け巡る。

疾い、そう思ったときには既に、目の前で斧が振り下ろされていた。

「ッ！！！？」

遮二無二、といった様子で斧を掻い潜る。

左右から、まるで嵐のように襲ってくる斧の攻撃を回避し続ける。

一つ回避するたびに、耳元で強烈な風きり音が通過する。

こんな一撃、たまったものではない……！！

斧を振り上げたその柄に、自在箒の柄を突き出し、相手の出鼻を挫くことと後方への急速退避を同時にすます。

「む、まさかこの柄に当ててくるとはな……！！失敗すれば頭が吹き飛ぶだろうに！！良い技量、良い胆力だ！！！」

男は感嘆のような呻きを上げるが、気にしている暇なんて無い。
状況は圧倒的に不利。
まず武器が酷い。
こんな木の棒では何が出来ると……！受ける事すらできやしない……！！

「そう、貴様には凌ぎ続ける事しか、出来ない。どこまで耐えられるか、私はそれが楽しみだと、言ったのだ。」

こんな所で、負けない。負けられない。
命の危険を感じ、逃げ場すらない。
そんな絶望的な状況下であっても、不思議にも体が怯え竦む事はまったく無い。

むしろ、待ち望んでいたとでも言うかのように、高揚している。

「自分が一方的な狩る側だと、勘違いするな。お前など、こんな木の棒で充分だ。」
「ほざいたな。やってみろ。小童。」

お互い、にやりと笑っていた。
体が、疾駆する

何度もすれ違い、幾度と棒を突き出す。

一体、何合打ちあったであろうか、体は熱を帯び、自らの呼吸も確実に荒くなってきている。

だが、まだこの精神は、削れてなどいない。
敵の斧も見えるし、棒も思い通りに使いこなせる。

むしろ、こうして何度もしのぎを削りあうことで、鋭く、練磨されてきているとさえ感じる。

遂に、棒が敵の肩を掠める。

「凄まじい……な。益々速くなっていくぞ、その槍術。」
「ふっ！！」

この木の棒でまともに痛手を与える事は、出来ない。

狙うは、急所中の、急所。
身を今までになく深く深く沈め、全身のバネを弾くかのように、槍を眼球に向けて突き放つ。

獲った
そう確信したときだ。
そう確信したはずなのに、槍から伝わった感触は、肉を潰すような感触ではなく、硬質を虚しく叩くような、弾かれた感触。

「すまんな。本当にすまん。まさか一般人に、プロテクションを使うことになろうとはな。だが……確信した。貴様は生かしておけば危険なだけだ。私は、武人としてではなく、魔導師として、貴様を殺す。」

言っている事は理解出来なかったが、本能に従い、後退する。
あのままその場に留まっていたら、きっと死んでいた。
そう思う。

きっと、もうこの棒ではどうしたって痛手は通らない。
理屈ではなく、本能でそう感じ取る。
それに、事実先程の突きは意味を成さなかった。

どうする？額に汗が流れる。冷や汗だ。

「貴様が魔導師ならば、俺は戦士として、お前に挑もう。」

また違う男の声が聞こえた。自分の声では無い。
だが、聞いた事は、あった。

「何、本当に魔導師ならば、戦士など取るに足らない相手だろうよ。」

「ほう、貴殿は……白餓鬼、エルンスト・アルカトラスか。」

男の顔は、今日つい先程まで、見つめ続けていた顔。
格好は、白く外套のような物を纏った、些か特徴的な姿であるが、決して無駄な物だとは、思えなかった。

「白餓鬼（はくがき）……随分と嫌らしい名前で俺の名前を呼ぶな。どうしてその名になった。」

「貴殿の武芸は一極に達している。この俺が挑むのが躊躇うほどに。だが、それでも貴殿は止まらない。未だに極武を目指し、挑む。その姿、餓鬼と呼ばずして、何と呼ぼう。貴殿は、俺の仲間内でも有名だぞ。手合わせに適う逸材だと、な。」

「ふん、犯罪者にそう言われてもな……。だが、こうして会っちまった以上、どうなるか、わかるな？」

「無論。俺が持ちうる全てで貴殿のお相手を致そう。武人としては劣っていても、魔導師としては、貴殿にも負ける気はせん。」

「言うな。魔導師としては、俺も勝てる気がしない。」

白餓鬼、もといエルンストと呼ばれた男がこちらにちらり、と視線を向ける。

顔と手に持つ箒を見比べた。

「……これを使え、岳斗。」

エルンストが構えていた棒を自分に投げ渡す。

白く、杖術用にはすこし長すぎる鉄棒だ。

むしろ、刃を取り除いた槍や戟、と言ったほうがしっくりくる尺だ。

「ガウェイン、ランスアタッチメント、コネクト。」

『ｙｅｓ，ｓｉｒ』

突如、棒から声が発せられた。

驚く暇もなく、棒だと思っていた物に、刺突用の刃が取り付けられ、槍となる。

だが、見ていて、取り付けるよりは、発生した、と言ったほうが正しい。

先程の双斧と同じようにも、見える。

「これは……。」

「お前はそっちの方が得手だろ？しばらく貸してやる。」

そう言いながら、エルンストの手には淡蒼色の刃の剣が握られていた。

「加勢……という所ですか？」

「まあな。細かい話は、後でしっかりとしてやる。」

だが今は……。

その先は言わなくても充分だった。

頷きを返し、槍を構える。

箒とは違う、硬質で重厚な感触に、鳥肌が立つ。

そうだ、これだ。この感触なのだ。

ここが、この瞬間こそが、私の帰る場所……、戦場。

五十九話　尽忠報国（前書き）

今回は、遅れるに遅れて、本当に申し訳ありません

間が長かった割には、いつもよりちょっと多い程度です

これからも鋭意執筆していこうと思いますので、どうか気長に、そして寛容に見ていてください

五十九話　尽忠報国

リインフォースは二階の自室の窓から、夜の海鳴の様子を眺めていた。
結界が、発生した。
場所を特定してはいないが、それは感じた。
それと、あまり規模も大きくない。
魔導師において、結界を展開すると言うことは、ほとんど意味が限定されている。

「どうせそんな様子だろうとは思っていたが、な」

入り口の戸を開け、アーシェが呟いた。

「私は、そんなに心配そうに見えるか？」
「ああ、今にもここから消えてしまいそうだぞ。いや、飛び出しそう……かな？」
「……確かに、今すぐにでも飛び出していきたいが」
「そう心配は要らないだろう？我らの父にして貴様の伴侶だぞ。」

アーシェの、伴侶、という発言に苦笑いを返す。
アーシェはアインスの隣に座り、同じく窓から街を眺め始めた。
街に変化は、無い。だが、この中のどこかで、エルが闘っているのかもしれない。

そう考えると、居ても立ってもいられなくなる感情を、アインスはひしひしと感じていた。

「……他の二人は？」
「レヴィは眠っているよ。まぁ、起きていても騒がしくて叶わん」
「シュテルは？」
「いつでも戦えるように、とデバイスの整備を始めた。殊勝な心がけではあるが、些か物騒では無いか？」
「確かに、そうだな」
「……それで、助けには行かないのか？」

首を、横に静かに振る。

「頻発している事件を憶えているだろう？貴方達を見守るように、言われたよ。」
「はん、自分の身など自分で……と言いたいところだがな。父上がそう言うのであれば、従うしかあるまい」

アインスが頷きを返すと、また最初のような静寂が戻ってきた。
やはり、街に変化は無い。

アインスは首を傾げた。

「……それを聞きに、ここへ？」
「う、五月蝿いぞ。どうせこうして話していればひょいと帰ってくるんだ。独り無言で鬱々と街を眺めているよりは、良いだろう？」
「……ふ、ふふっ、……そうだな。独りよりは、ずっと良い」
「だろう？」

優しい娘だ、アインスはそう心の中で呟き、エルの無事を願った。

双斧が振り下ろされ、それから逃れるように、また男から距離を離す。二人共だ。

あの斧が魔力を込め、振り下ろされるたびに、地面に穴が空く。
振り下ろされたところだけに穴が空くと言うのなら、別に大した問題では無い。
その周囲がまるで隕石が落ちたかのように、新しい地形が出来上がるのだ。

穴が空く、と言うよりは地面をえぐる、というほうがしっくり来る。

「ちっ、その斧、本当に厄介だな。」
「まったく。」

先程から、岳斗と二人で挟み撃ちの形をとり続けているが、一向に攻めあぐねていた。

「厄介、そう言いたいのはこちらのほうだ。こう何度も豪砲を使わなくてはいけないとは……都合八発は使用したぞ。」

小さく舌打ちする。
男の無尽蔵さながらの魔力に対して、だ。

あの豪砲とかいう一撃に込められた魔力は、なのはの砲撃にも匹敵している。
それをあの斧が振り下ろされた局所に、ぶち込む。

俺の薄っぺらい魔力じゃ防ぎようなど無いし、一般人の岳斗には言うまでも無い。

防げぬから避ける。
避けるには、距離を取る。

つまりは、そう言うことだ。

戦局を停滞させる理由の一つに、奴の絶妙な選技にもある。
距離を詰められ、本当に危ういその瞬間にあの技を使う。
そうして戦闘を仕切りなおし、また一から攻めなおす。
あんな脳筋みたいな顔の癖に、やることは結構繊細なのだ。

「む、今、少し琴線に触れる事を考えなかったか？」

やっぱり、繊細だ。

岳斗を盗み見ると、明らかに疲れが滲み出ていた。
もう体ではなく、心で闘っている、という様子だ。

だが、その心に翳りは、見えない。故に、体を余計に痛めつける。

無理をするなって言っても、無駄だろうしなぁ。

頭の中に、魔力変換の単語がよぎり始める。

同等の魔力があれば……勝てるか？

そう結論付けようとし始めた時、不意に、岳斗と目が合った。
いや、岳斗の方が目を合わせてきたのだ。

決して言葉を発さなかったし、顔を微動だにもしなかったが、その自信に満ち溢れた瞳は次の一撃での決着を予感させた。

簡単に言ってしまえば、目で『俺が倒す』と言っていた。

一緒に戦って居たんだ。

アイツもきっとこの状況を理解しているだろうし、敵の闘い方も把握している。

それで、あの目をしたんだ。

ならば、信じてみても、良いかな？

今一度、握る金の柄に、力を込めた。

何、俺にも現状を打開する手はある。

岳斗がしくじったら、今度は俺が体を張れば良いだけよ。

岳斗、お前の力、見定めさせて貰おうか？

やはり、所詮は子供の体だったと言うことか。
肉体の限界が近い。
そのことは他でも無い自分が良くわかった。

争いの無い社会に甘え、自らの限界に挑戦することを忘れた結果がこれだ。

膝は笑い、腕は今にも槍を取り落としそう。

情けない。本当に情けない。

『重量配分　最適化完了』

また、槍が語りだす。

最初は五月蝿い槍だと思った。
槍を持ち、何かをする度に最適化だの修正だのと、発する。

だが変化は確実に現れていた。

槍の重さ、長さ、重心の位置から槍のしなり具合まで、変わっていくのだ。
自分好み……というよりは、生前使っていた槍と同化していくようだった。

斧をかいくぐり、もう一度槍を大きく突き出し、横に振るう。
当たる事など考えていない。

横に振るったとき、自分の望みどおりに槍がたわみ、跳ねるように横に飛んだ。

これならば……できる。
倒せなくとも、一矢報いる事は、可能だ。

その事を何かしらの方法で共に戦う男に伝えるつもりだったが、視線を合わせただけで、向こうはある程度把握したらしい。

こちらに向けて口の端を持ち上げた。

あの男、息を弾ませているが、疲れたという様子でもなく、戦いはまだまだこれから……とでも言うような様子だった。

認めることも悔しいことだったが……、今の自分ではまだあの男には届かない。
少なくとも体力では向こうが上らしい。

「っ！！ぁぁああ！！！」

その事実が悔しくて、声を腹の底からえぐるように出し、自分を奮い立たせる。
そうしなければ今にも膝をついてしまいそうだった。

「どうした？苦しそうだの。」

斧の男が、嗤う。
嫌らしい笑い方ではなかったが、妙に癇に障った。

「この程度で苦しいなどと、……言ってられるか！！」

そこからは、まるで一瞬の出来事のように感じた。

話しかけた事によって、気を数瞬持っていかれた敵に向かって、剣の男が迫る。

「ふっ！！」
「何の！！」

下から切り上げられた剣を、右の斧で受け、左で反撃する。
首を一刀で断たんとする、必殺の一撃。

「お、？」
「らあああぁ！！」

決して剣を手放すことなく、剣の男がその場で一回転する事で、右から迫っていた斧を避けた。
理解不能な常識外の動きだった。
白い男がまるで亡霊のように、見えた。

すかさず、蹴りが放たれ、斧の男の腹部を強かに打つ。

自らも、遅れまいと、駆けた。

「ええい、離れんか！！」
「離れるわけねぇだろ！！」

二人の男は、剣と斧が競り合ったそのままの状態でいた。

必死に斧を振るい、奇怪な動きでその攻撃を巧みに避け、ささやかな反撃をしている。

そう、あの豪砲は、両の手が空いていなければ使えない。
それは自分もあの男も気付いていたのだろう。

ならば後はこちらが、この戦いに終止符を打つ。

「ほぅら、もう一人の奴が来たぞ」
「ちっ！ええい、どうしたら離れる？！」
「離れないって言ったも～ん。」

斧の速度が上がり、それを避ける動きが一層の奇怪さを増す。
もう、間合いは充分。

「流石にもう無理！！後は任せたぞ、岳斗！！」
「あああああああぁ！！」

地を蹴り上げ、槍を大上段に振り上げる。

そう、踏み込みすぎてはいけない。

「むっ！？」

敵は敏感にそれを察知し、自分の踏み込みが浅い事を把握する。
この一撃は、半歩でも下がれば届かない。

だがそれは、踏み込みが浅いのでは、ない。

「残念！！」

男が退がり、槍が虚しく地面を叩いた。

「はあぁっ！！！」

この攻撃は、ここから、伸びる。

地面を打ちすえた瞬間に、腰を低く落とし、足を踏ん張り、片腕で跳ね上がる槍を押す。
そうすれば、地面を打ち、上に跳ね返るだけの槍が、まるで生き物のように敵に追いすがる。

「ッ？！！跳槍！？」

気付いたときには、もう遅い。
槍は男の腹部を突きぬく筈。

「まだ、まだよぉお！！」

しかし、斧が受け止めていた。
斧が自らの体に食い込んではいたが、それでも、斧で受け止めていた事に変わりはなく、槍は腹を貫く事はできずに男を吹き飛ばす。

「ぐうぅ。効いたわ」
「じゃ、もう一発いっとく？」

「！？」

敵が吹き飛ばされたその背後には、白い亡霊がいつの間にか、居た。
まさに亡霊。
体が一瞬恐怖で震えたのをしっかりと感じた。

亡霊が亡霊らしく、ふわりと手を拡げたかと思うと、敵の手はまるで魔法のように絡め取られ、腕があらぬほうに折れ曲がる。

「ぐ、おおおおぉ！！！」

男がその体躯に見合う、熊のような声を上げるが、そこで止まるような事も無い。

折れ曲がった腕がだらりと垂れたかと思うと、強烈な拳が顔面を襲う。
更に男は吹き飛ばされるが、その勢いのまま立ち上がった。

「もう諦めろ。腕の筋も、壊した。」
「その、ようだな。まさかあの一瞬で腕と肩、二つを潰されるとは思わなんだ。」
「お前だからこそ、二つだった。普通の奴であれば、両手両足を持っていく。」
「はは、この、化け物め！！どうしてくれる、この腕、半年は使え

んぞ……」

男が悪態をつくと、その場に胡坐を組む。

「ほら、捕まえい。もう俺には何もできんわ」

「……そうだな、聞きたい事は山ほどあるが、その後に聞いても良いか」

「良いのか？お前などが聞く機会など、この場にしかないかも知れんぞ？」

「……。」

目を細め、考えていた。

疑っていた。目の前の男も、この男を捕まえる機関にも。

「……管理局ならば、あり得るか。ならば、聞こうか。どうして、こんな事を」

「月並みな質問だの」

「悪かったな」

「なに、理由は単純明快。同志を探しておる」

「同志？」

「同志であり、友。なんの同志かは言えんな。同志達にこれ以上迷惑をかけるわけにはいかんからな。だがはっきり言っておこう。お前たちが考えているような集団では無い事を」

「それと、若手ばかり襲われることに関係は？」

「戦闘に至ってしまうのが若手ばかりだと言う事よ。特に年齢を意識してはいない。想いさえ同じであればな。……若干、若者を選り好みしている気はあるが」

言い終わると同時に、男が魔法陣に包まれる。

「なっ、おい！！」

「すまんのぅ。ウチの同志には転移特化の魔導師が居てな。どこからでも転移が可能なのよ。いやはや、こうして転送される身でありながら、実に都合の良い魔法だとも思うよ」

「あぁしまった！！あまりにも武人らしい武人なんで、本当に観念した物とばかり……！！」

頭に手をあて、身悶えするように体を捻っている。

止めようとしない様子から、きっともう手遅れなのだろう。

「……お前、名前は？」

「オヅマ。姓は無い」

「姓が無い？そういう文化か？それとも訳ありか？」

「……」

「はん……どっちでも良いか。またあった時は、腕ごと持っていくからな。」

「憶えておこう。エルンスト・アルカトラス」

その言葉を最後に、消えた。

残ったのは、元通りの自分の家の、庭。

家を見ると、電気が消えている。
母はきっと先に寝たのだろう。

「良い槍だっただろ？」

男が呟く。

「まぁ、それなりに。」

こちらも呟くように返す。

「あげないぞ。俺の物だからな」
「わかっている」

槍を手に取り、槍に向かって二、三話しかけている。
だが、今起こった事があまりにも突然で吹っ飛んでいて、そんなことなど気にならない。
ただただ呆然とするばかり、だ。

「お前の槍術、みせてもらった。見事、と言うほか無い」
「そうか」
「……、ちょっと良いか？」

エルンスト、という男が人差し指で軽く手前に引く動作を、二回繰り返した。

どうやら、ついて来い、という事らしい。

「ああ、ついていこう」

ここにいては、満足に会話もできない。母親が起きてくれば、面倒な事になる。
故にここは素直に従っておくことにした。

そうしてついていった先は、十分と歩かずに着く公園だった。

その間、言葉は無い。

「その若さでよくもそれほど……と、言ってやりたい所だがな。お前、何者だ？」
「普通の中学生……では通らんか」
「勿論。お前の発する気、立ち振舞い、どれも歳不相応だ。むしろ肉体が不相応のようにも思える」
「転生者、そう言って信じるか？」
「信じよう」

挑むように投げかけた言葉が、実にあっさりと肯定された。

「なぜ、信じられる？」
「そうでなければ、納得がいかない。たかだか１５，６のガキに、それほどに武術に精通されてたまるか。……それに、自分自身、転生者であることに、疑問を持っているようだしな」
「自分に疑問を持っている奴を、信用できるのか」

「自信満々で言う奴よりは、信用できるさ」

ことごとく心を突かれ、押し黙った。
だが、不思議とそれを不快とは思わなかった。

「それで、前世では、どんな人生を……？」
「生前は、国を守るため闘い続けたよ。時には山賊、時には湖賊。安寧を脅かすすべての物と、闘っていた。信頼できる義兄弟達も、共にな」

エルンストは黙って話を聞いている。
表情を変えることなど、まったく無いが、その瞳はすべてを飲み込んでしまうような深さを持っていた。

「だが……だが、今のこの世はなんだ。私は何をすればいい！！自分が自分である事を見失うような毎日で、活かすものも無い武術！守るものは何だ？！守るものは何処だ！！生前の私は、こんなにも抜け殻ではなかった！！」

その瞳がすべてを飲み込んでくれると思い、今まで溜まりに溜まった膿を吐き出す。
その膿の勢いは、止まりそうも無い。

「私は……、どうしてこんな世界で、こんな有様で、生まれて

しまったと言うんだ!!こんな世界に来るのであれば、すべてを忘れてしまいたかった!!生前の私のまま、死んでしまいたかった!!」

「とりあえず、その『生前』って言葉は、止めろ」

「……何？」

男の瞳が、より深く光った。

「お前は、生きている。今この時間、この世界を、生きている。そこに一切の間違いはなく、それを生前生前と、自分が死んでいるものとして見る事は……卑怯だ」

「卑怯だと？」

「お前がどうして転生したのか、どうして前世の記憶があるのかなんて知りはしない。あるいは意味なんて無いのかもな。絶対に起こりえない事が、奇跡に等しい確立で、お前に命中しちまった。そうなってしまったら、諦めるしかねぇよ」

「諦める？!そんな単純な理由で前世の自分を殺せと!?」

「今も昔も、偶然で人は死んでいく。誰でも良いのに、運悪く自分の番が来て、死ぬ。俺はその事を良く知ってる。割り切るぐらいしかやる事がないのさ……それに、別に殺せなんて言ってねぇよ。お前の前世での記憶は消し難く、そして消すにはもったいない記憶だ。そうして前世の自分を認識した上で、今の現実を見て、今の人生を送れって事だ。岳斗」

「岳斗……私は、岳斗……」

エルンストは、ゆっくりと近づき、肩に手を置いた。
見上げると、今度は優しい光に満ちた瞳が、そこにあった。

「お前も、運が無いな。俺と同じで。俺の周りにはまったく、運の無いやつばかりが集まってしまう。お前が負ったその宿命も、他の誰でも良かっただろうに」
「運が、無い？」

そうか、運が、無かったのか。
ただ、運が悪くて、こうなってしまっただけ。

そう考えた途端、胸の引っかかりがすべて吹き飛んだように感じた。

「……お前の本当の名前、教えてみろ。あるいは少し、楽になるかも知れんぞ」

自然と、唾を飲み込んでいた。
今までずっと、伝えたかった名前。叫びたかった名前。
そうであるはずなのに、いざこうして口に出そうとすると、不思議と詰まる。
それはこの男が目の前に居るからなのか。
それとも、知らぬ間に、今の名に愛着でも湧いてしまったとでも言うのか。

この際、どちらでも良かった。

この男には、自分のすべてを伝えなければならない気がした。

そして、それを受け入れてくれるだろう。

「私は……、私の名は、岳飛。性を岳、名は飛。字は鵬挙。」
「そうか。良くわかった、岳飛。これからお前に、俺の事を説明しようと思う。……信じてくれるか？」
「是！！」

無意識のうちに、右拳を左てのひらに打ちつけ、拝手していた。

エルンストは笑って、拝手を返した。

この時、彼は何者にも変えがたい、大切な存在となった

我岳飛　尽忠報国　精忠岳飛也

五十九話　尽忠報国（後書き）

岳飛は実在の中国の将軍です。

彼の生き様、そして死に様がどういうものだったのか気になった方は、ググってみてください

多少、子供の我侭が通っていたいままでの『なのは』しかし、これからの『なのは』は、管理局と言う大きな社会の連環に組み込まれ、時に理不尽、不合理な指示や命令の中に身を置く事になります。

それが成人であり、大人となった証拠なのかもしれません

ただ、今はまだそのモラトリアム

大人と子供の境界の、複雑な感情をなのは達、岳飛共々表現していけたらな、と思います。

ただ、エルと岳飛は事実上完全なオッサンに分類されてしまうのですが……（汗

とりあえず、また次回

六十話　死亡フラグ（前書き）

それとなくこの作品も一周年を迎えました。

まさか自分も一年も続く事になるとはまったく思っていませんでした。

まぁ、最も最近はめっきり更新も停滞してしまっていたのですが……（汗）

（それに今回はかなり短い）

この章に入る前にも言った通り、できるだけ自分のペースで、ゆっくりでも書いていこうと思うので、皆様どうか長い目で応援いただけると大変恐縮です。

六十話　死亡フラグ

「シグナム、どうやら外の結界、なくなったみたいだぜ。」
「そうか。」

ヴィータは外から玄関を開け中に入り、居間にてデバイスの手入れをするシグナムに声をかけた。

手入れする手を休めずに応える。
返事は思ったよりもそっけない。
他でも無いエルが闘っていたのであろうに。

ヴィータは顔を僅かに、不機嫌そうに歪めた。

「なんだよ、エルのこと、心配じゃねーのかよ？」
「エルならば負けん。絶対だ。」

断言するように答えるが、足は僅かに震えている事に、気付いた。
そうか、とヴィータも納得する。
シグナムも相当に心配していたのだ。ただ、それを悟らせようとはしていなかっただけで。

「ま、確かにエルは負けねーよな。」

二階に上がり、はやての部屋の戸を開ける。
その室内には、はやてとシャマル、そしてリインフォース・ツヴァイが居た。

誰一人として、寝ていない。

「あ、ヴィータ。」
「はやて、外の結界が無くなったみたいだから、外の様子見てこようと思う。」
「そうか。お兄ちゃんを見かけたら、頼むで。」
「ああ、エルの魔力は感じるし、きっと無事だよ。」

部屋を出るとき、シャマルに目配せをする。
シャマルはしっかりと頷きを返す。

一階に降り、先程と変わらない姿勢のシグナムに声をかける。

「それじゃ、あたしはエルの様子を見てくるからな。」
「……！」

微動だにしていなかった体が、僅かに震えた。
外の様子を見にいくはずなのだが、わざわざエルの様子を見にいくと言い換えたのは、彼女の悪戯心からだった。

案の定彼女の悪戯を真に受けて、動揺しているシグナムが見られた。
それだけである程度満足はした。

「……好きにしろ。」
「素直になれよ。」
「まさかヴィータ、お前に言われるとはな。」
「ホントだぜ。」

玄関の戸を開け、外に踏み出す。
今、シグナムは悔しさに歯噛みしている事だろう。
「エルと自分だけ勝手にデートした罰だと思いな。」
ヴィータは笑って玄関の戸を閉めた。
「……高町、なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやて。やはり三人は、ただの少女では無かったか。」
「気付いていたのか？」
「なんとなく、雰囲気でだけでは。むしろ、直感でそう感じていた。」
「お前の場合は、その直感、もはやセンサーだろうしな。」
「まぁ、それなりに。」

どのくらい、この公園で喋っていただろうか。
自分の素性、今までの経緯、俺たちの住む世界、……そして、魔法。

岳斗が聞きたいと言った事柄はすべて話した。

そしてつい先程まで、なのは達の事について話していた。

岳斗はなるほどといった様子で何度も相槌を返しながら話を聞いている。

……部外者に、ましてや異世界の一般人なんかに、ミッドチルダのことや魔法の事を話すなど言語道断。
状況によっては軍事裁判物だ。

だが、今の状況では確実に説明不可避。

岳斗、彼自身がこの事件に巻き込まれたのは……他でも無い自分自身の力のせいなのだから。

「さて、他に、聞きたい事は？」
「いえ……特には、いや、もう一つあった。」
「なんだ？」
「あなたは、何者だ？」

こりゃまた、なんとも具体性のない質問だな。

「さっきも言っただろ？ミッドチルダ、管理局特務執行官、エルン

スト・アルカトラスだと。」
「その役職がどれほどのものかは知らない。だが、それ以上の物を、ずっと感じてきた。」
「――――――どんな風に感じてきた？」
「肌を炙るような……底のない、闇。」

なんだそりゃ。
キチガイと思われてもおかしくないような発言だが……――――――、

俺には、大正解か。

「お前のセンサーも、良し悪しだな。」
「それはどうも。それで、返答は？」
「体は、人間だよ。何の変哲も無い。ただ、心は……どうかな？自分でもわからん。」

岳斗は何も応えずこちらを見つめ続ける。
嘘は一つも見逃すまいとしているかのように。

俺もその視線に静かに見つめ返す。

「ただ、一つ言う事があるとすれば、」
「？」
「世の中、人が善いだけじゃ、生きてこれないって事。悪に浸かって、悪と一つにならなければ、護れない物もあった。それはお前の時代でもそうではなかったか？」

「……そう、なのでしょうね。あなたがそうなのだから。」
「それで納得するのか。」
「ん？」
「いや、なんでも。」

別に誤魔化した訳ではなかったが、いつかは本当の事を話さなくては、そう思った。
ただ、この男になら、そう遠くない未来に打ち明けられる気がする。

「それでは最後の質問で。」
「なんだ？」
「自分の背後、先程からなのは達と同じような圧力を感じるのですが。」
「はは、流石だな。その直感力なら、言うことも無いな。出て来い、ヴィータ。」
「エル……そいつは、誰だ。」

公園の外縁の塀から出てきたヴィータは、目に見えて警戒していた。

「お前を襲った犯人か？共犯者か？……どちらにしたって、そいつの気配は、只者じゃねぇ。」
「確かにどちらにしたって、只者ではないよな。……安心しろヴィータ。こいつも俺と同じ襲われた側だからな。」
「襲われた側？犯人は？」
「悪い、逃した。」

ヴィータが顔を歪める。

「そんなに、強かったのか？」

「ああ、めちゃくちゃ強かった。ちょっと相性の問題もあったけどな。いや、決して言い訳ではありません。」

「わかってるよ。」

呆れたように、大きく息を吐き出しながらヴィータは相槌を返すと、岳斗に歩み寄った。

「それでお前、名前は？」

「岳斗。檜山、岳斗です。」

「ガクト……？どっかで聞いた名前だな、ん？気のせいか？」

「そんなことは今はどうでも良いだろ。俺は岳斗を連れてまた管理局に戻る。お前達は気を抜かずにいてくれ。ガウェイン。」

『ｙｅｓ，ｍｙ ｓｉｒ』

「ってちょっと待てよ。このまま行くのかよ。別に一晩明けてからでもいいだろ。」

ガウェインが魔法陣を起動し、転移魔法を用意したのに気付き驚く。

いや、まぁ俺もそうしたいんだけどね。

「明日も学校。俺もコイツもその学校の関係者。今から行って夜の内に片付けなければ今後の活動に支障が出るしなぁ？」

そうなのだ。

俺は今現在しがない教職者（仮）なのだ。

教職者（仮）としてやっていくには、まず生徒と生活を同じにしな

くてはならない、なんて綺麗事を言うつもりは無いが、いつの世も仕事に対する姿勢は世人に否応無しに評価されるものなのだ。

そりゃ俺だって睡眠時間削ってまでねぇ？そんなことしたか無いさ。

まったく、教職者（笑）はつらいよ。

「ああ。それに、母にはまだ事情を話すわけにはいかない。」
「という訳だから。後の事、お願いしますよ。ヴィータ様。」
「ちょ、おま……。」

ヴィータが言い切るのを待たずに、俺たちはミッドチルダに向けて、跳んだ。
ああ、眠い。

これからさっき話した似たような話を、三人のご老人に対してする事になるのだろう。
しかももっと長くなりそうな予感。
老人は、話が、長くて、いかん。
老人は、話が、長くて、いかん。
大事すぎる。

「一つ、聞いても？」
「なんだ？」
「その、これからの話は、長くなりますか？」
「夜は越さないと思うが……いや、もしかしたら有り得るかも。」
「明日、死にましたかね。」
「死ぬだろうなぁ。主に眠気で。」

授業オワタ

六十話　死亡フラグ（後書き）

一周年記念に一つ思い出話をば

最初の段階では、実はＡｓ編で終わる予定でした。
それこそ連載期間は三ヶ月。長くても半年ぐらいで。

そんで主人公を変えて、ｓｔｓからの新しい連載を考えていました。
今となっては、そのために考えていた設定や資料はすべてボツコーナー行きに……

更に言えばエルは死ぬ予定でした。もう完膚なきまでのエル主観のバッドエンドにする予定でした。

それがどう言うわけか一年経ってもまともに完結もせず、グダグダと連載を続け、エルさんもグダグダと生きながらえてます。

作中同様、本当にエルさんはしぶとい奴だ（笑）
いつになったら死ぬんだろうね

それをこれからまた考えていこうと思います。

思い出話終わり。
それではまた次回。

六十一話　フラグ回収　色々回収（前書き）

本っっっっ当に申し訳ありませんでした！！！！（スライディング土下座）

約三ヶ月も放置しておきながら、今回もいつも通りの長さです（汗

ただ、ＺＹＵ☆ＫＥＮも目処がついたので、更新を開始したいと思います。

心機一転、これからもまたよろしくお願いします

六十一話　フラグ回収　色々回収

「それでは、今日の、授業を始めます。……テストも、近いことだし、うん自習。」

それだけを言って、荒洲先生、つまりはエルさんは教卓に突っ伏し寝息を立て始めた。
有無を言わさず……と言うよりは有無を言う前に、既に意識を手放した感じだったの。

「エルお兄ちゃん、昨日は何かあったみたいやし、疲れてるんやろ。」

はやてちゃんにエルさんの様子を聞くと、苦笑交じりにそう返ってきた。

昨日は話に聞くと、相当大変な事件が起こったみたいなの。
勿論詳しくはわからない。はやてちゃんにそう聞かされただけ。

とりあえずは疲労困憊でも、五体満足で帰ってきたエルさんに胸をなでおろした。

「でも、疲れてるのはエルさんだけやないみたいやで？」
「え？」

はやてちゃんが指差すほうを見ると、窓際。
フェイトちゃんを指差していた。

「違う。その後ろや。」
「えっと……、あれ？岳斗くん？」

見ると、岳斗くんまでもが机に突っ伏し、授業中であるのに眠っていた。

「珍しいね。岳斗くんが居眠りなんて。」
「せやろ。」

本当に珍しい事もあるけど、とりあえず今はテスト勉強。
胸のどこかに突っかかりを憶えながらも、私は歴史の教材を出して、テスト範囲の復習を始めた。

――――――テスト範囲、まだ終わって無いけど、間に合うのかなぁ？

「という夢を見たんだ。」
「夢では無いでしょう。現実です。」

保健室でリンにぼやくが、突き放すような言葉で一刀両断された。
実はさっきのあの授業がテスト前最後の授業だったのだ。

つまり、間に合わなかったテスト範囲のために、テストまでの残り数日で何かの教科から授業枠をお一つ頂かなくてはならなくなった。

新任してきてすぐにこの失敗は怖いよ。ドキドキ。
なんて気楽に言っている場合でもないのだが。

とりあえず、次の時間は授業も無いので、保健室のベッドで休ませて貰うことにした。
この恐ろしいまでの睡魔をどうにかせねばならんし、リンの様子を見ることも出来るしと、一石二鳥だ。

「それで、あの三人とはどの様なお話を?」
「あ〜、岳斗についてと、まぁそれに伴う問題について、かな?」
「犯人については?」
「どのような男だったか、その程度だ。」

結局、想像通りに話は驚異的に長引き―（主に老人共の無駄話のせい）――、帰って家に着いたのが、日の出も見れるかといった時

間だった。

リンは相当に不安だったようで、帰りつくなり抱きしめられた。

そりゃもう役得だったのですが、同時に罪悪感も少し。

ってかそんな話はどうでもいいか。

閑話休題。

「よし、寝させて貰うわ。授業終了の五分前くらいに起こしてくれ。」

「わかりました。」

「それとな、リン。」

「？、どうしました？」

「やっぱり、養護教諭、超似合ってるぞ。」

「あ、ありがとう、ございます……。」

恥らう姿が可愛いなこのヤロウ。

と、眠りについたは良いものの、流石は保健室とでも言うべきか。

ちょこちょこと人が入退室を繰り返すのを感じる。

「先生、コウキがサッカーで怪我しちゃって！！」
「そう、大丈夫？」
「ちょっと膝を擦りむいて……」

どうやら生徒がサッカーで怪我をしたらしい。
あら、意外とリインの奴、仕事をそつなくこなしているようで。
コミュニケーションも取れてるみたいだし。

「大丈夫だ。すぐに私の魔法……、」
「魔法？」
「いやいやいや！！何でも無い。とりあえず消毒だな。」

今あの子絶対魔法使いかけた。
そんなミスマジかよワロエナイ。

「よし、こんな感じか。」
「ねぇ、先生って何歳なの？」
「私か？」

とりあえず、文字通り桁違いと言っておこうか。

「あ～、コウキの奴、年上好きだもんなぁ。」
「えへへ。」
「そ、そうなのか。」

……

「先生は彼氏とかいるの？」

「か、彼氏か？い、いないの……かな？」

「やった！！」

よし、殺そう。

「ねぇ、先生、今度デートしてよ！！」

「あ、あんまり無理を言うな。」

「無理じゃないって！！」

ねぇ、もういいだろ？ぶっ殺して。

起動しろガウェイン、起動してアイツをぶっ殺すんだ。

今なら残った右腕も犠牲に出来る気がする。

「なぁ、コウキ。早くサッカーに戻ろうぜ。」

「ちっ、そうだな。んじゃね！先生。」

「ああ、今度は気をつけてな。」

アイツイツカマジデコラシメル

あまりへの憎さから毛布を歯噛みしていると、カーテンの向こうか

らひょこりとリンが顔を出す。
「どうです？良く眠れましたか？」
「む、もうそんな時間か？」
「はい、言われた通りの五分前です。」
「よっしゃ、起きなきゃな。」

ベッドから身を起こし、脱ぎ捨てた服に袖を通す。
一応ネクタイも絞めなおす。

おい、だからリン、ネクタイを絞めたそうにするな。

「少しはマシになった。うん、ありがとうな、リン。」
「別に私は何もしてませんよ。……あ」
「ん？」
「やはり、もう行ってしまうんですか？」
「そりゃな。だって次の授業の準備もしなきゃいかんしな。」
「そう、ですよね……。」

とても寂しそうなリン。
目を伏せ、肩を落とすリンは、俺を引き止めるには十分すぎるほどの光景だった。

「どうしたんだよ。そんな寂しそうにして。」
「寂しそうになんてしてません……でも、エルがそう言うならばそうなのでしょうね。」
「……？お前、本当にどうした？」

「いや、なんでもありません。今言った事は忘れてください。」

迷いを振り捨てるように、いや、想いを閉じ込めるように頭を振るリン。

ちょうどその時、チャイムが鳴る。

授業終了の合図だ。そのチャイムに呼応するかのように、保健室の扉越しから生徒達の賑やかな声が響いてくる。

「何か言いたい事があるなら、言えよな？」

「……はい。」

「って言って、素直に告白するお前でも無いか。」

「……。」

「よし、決めた。」

「？」

「今日、仕事が終わったら、二人だけの時間を作ろう。」

「え……。」

「家の事なんざ、一日ぐらいあの三人がなんとか出来るだろ。とにかく、お前の満足した顔を見るまで今日は帰らないからな？」

リンを返事を聞かずに保健室を出る。

暗に、お前に拒否権は無いと示したということだ。

さぁ、今日の夜はどう過ごそうか？

「と、言うわけだから岳斗、お前との今後の話は即行で終わらせたいと思う。もう放課後だし。」
「なんですと。」
誰もいない空き教室に岳斗を引っ張ってきて、そう告げる。
「とりあえず、お前は今後どうするか考えたか？それともまだ考える時間が必要か？」
「私は貴方の元で、闘ってみたい。」
「家の事、母の事はどうする？今はまだ誤魔化せるとしても、そう長くは無いぞ。」
「事によっては、すべてを伝えたい。」
「ふむ……。」
家族にすべての事情を伝える。
なのはとその家族の事もあるし、別に前例がないわけでは無い。
それに、やはり岳斗が気兼ねなくこっちの世界に来るには正直に話してしまったほうが一番手っ取り早い。
どちらにしろ……。
「今日はこれくらいで十分だな。また明日までに色々考えておけ。今日はお前の意思が聞けてよかった。」

「いや、そんな丸投げされても。」
「急ぐ事でもないしな。」
「女に会いに行きたくて急いでるだけでしょう。」
「グハッ！！」
「図星ですね。」

胸に丸太でも刺さったかのような衝撃が奔る。
咄嗟に膝をつきそうになるが、死力を尽くして膝を支える。

「やるじゃねぇか、岳斗。」
「いや、別に何も。」
「とにかく、また明日だからな。」
「あ、はい。」
「それとくれぐれも……話がはっきりと決まるまで、あいつらには感づかれないようにしろよ。」
「なのは、フェイト、はやて、あの三人ですか？」
「勿論。」
「御衣に。」

とりあえず、今日やるべき事は終わらせた筈だ。
リンとの今夜のデートの内容を、じっくりと推敲しつつ、俺は岳斗に背を向け、荷物のある職員室に急いだ。

「本当に、嵐のような人だな。」
岳斗は溜息を零しながら、自分の教室に足を向ける。
確かに簡単に整理がつく話では無いとは言え、ここまであっさりと話を区切られては納得がいかない。
確かに、望んでいた。この武を活かせる世界を。
その世界は確実に、近づいてきている。
しかし、今の世界の枷（母）がその世界を遠ざける。
思い切って断ち切る事ができたらどんなに楽か。
しかし、自分の中途半端な義理がそれを許さない。
あの母親には、今まで育てて貰った恩義がある。それがある限り、彼女に無碍なことなど出来よう筈もない。
板ばさみ、葛藤。様々な渦が、非実体の刃となって、自らの心を傷つけていく。

「どうしたもんか……。」
「何を？」
「！？」

しまった、と思ったときにはもう遅い。
目の前には先程話に上がった三人の少女。
咄嗟に身構えてしまった。

話かけてきたのは、亜麻色の髪の少女、高町なのは。

「？？どうしたの、なんかへんな格好して。」

「あ、あはは。ちょっとびっくりしただけさ。」

自分ができる限りで、自然に構えを解く。
もうなんだって、迷ってるときに限ってこうも悩みの種は近寄ってくるかな……！！
自らの不運を嘆きながら、表情は仮初の笑顔を作る。

「あ、来週のテストの事。だよ？」
「あ、やっぱり？」

にぱ、といった風になのはの表情に笑顔が開く。
それに続き、はやてが声を上げる。

「でもいつも岳斗くん成績いいやん。今回だけどうしたん？」
「いや、いつも良くても、毎回不安にはなるよ。調子が良いと、次が怖いじゃん。」
「あ～、確かに。」

今自分は誰と話しているのか、そもそも口からちゃんとした言葉が出ているのか不安になっている。
頭はぐあんぐあんと揺れ、ただただ早く帰ってほしいと願うばかり。

「じゃーね、岳斗クン！！」
「じゃ、」

三人はこちらに手を振りながら、仲良く廊下の角を曲がった。

「は～、ビビッた……。」

気付かれる筈が無いのだが、どうにも緊張してしまう。
それこそ彼女たちの大きな魔力にあてられているのかもしれない。
確証は無いが。

彼女たちの活躍はエルと三提督達から、聞き及んでいる。

もった感想は、恐怖だ。

エルが言うには（多分にエルの主観が含まれている）

高町なのはは
「動けないように縛り上げて、抵抗しなくなってから、真正面から、全力で、砲撃ブチかまして来るよ。」
ひどい介錯だ。首を切られるほうがまだ心地よい。
俗に、このことをＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＩと言う事も教えられた。
大魔王とか、呟いていたのを憶えている。

フェイトは
「目にも止まらぬ早さで露出したと思ったら、目にも止まらぬ速さで、肉を削るような、軽い攻撃を見舞ってくる露出狂。」
目にも止まらぬ早さの露出とはなんなのか。そんなに脱ぐのが早いのか。
そんなに早いのなら、もう少し攻撃には力を入れて欲しい。
早すぎるだけで軽いのなら、もう拷問と一緒だ。
というかその速さを露出以外に使うべきでは無いのか？
（露出する事で速くなる事には、未だ気付いていない。）

八神はやてに至っては
「セクハラ」

の一言だった。
もう何も言うまい。

彼女のセクハラは凄いらしい。とてつもなく凄いらしい。
うん……うん。

なんか、ゴッドハンドスマッシュとか、ゴッドフィンガーとかエルは呟いていた。
どちらにしろ彼女の手は神の領域らしい。八神だけに。

「はぁ……不幸だ。」

周りを見渡したって、変人ばかり
自分に注意を促したエルンスト・アルカトラスだって、相当な変人だ。
昨日はどこからか切り出してきたのか石で作られた仮面を片手に、「俺は人間をやめるぞぉおお」と叫びながら、学校の中庭の排水溝に挟まっていた。

なぜかは、わからない。何か本当に大切な事情があったのかも知れないし、無かったのかもしれない。どちらにしろ、知りたくなかったので、聞く事はこれから無いだろうし、語ることもないだろう。

変人に変人の注意を促されても、説得力はＺＥＲＯ

考えるだけで頭が痛くなるのは、きっと自分だけでは無いはずだ。

「くそ、不幸だ。」

先行きの見えない不安に追し潰されそうになりながら、彼は二度目の大切な言葉を呟いていた……。

六十一話　フラグ回収　色々回収（後書き）

もしかしたら、貯めておいた小ネタを放出するかも知れません。

時系列無視の。

ま、自分の文才も併せて、あまり期待せずに待って居てください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7066m/

魔法少女リリカルなのは　～欠陥者の示す道～

2011年11月27日02時51分発行